中世東濃窯の研究

195H04
山本　智子

中世東濃窯の研究

山本　智子

中世東濃窯の研究（目次）

はじめに・・1
第１章　中世東濃窯の編年研究史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第１節　田口昭二氏の研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第２節　若尾氏・山内氏・藤澤氏による研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第３節　2000 年代の研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第４節　中世東濃窯の年代観と編年研究史上の問題点・・・・・・・・・・・・・・14
第２章　中世東濃窯の編年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第１節　山茶碗類の編年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第２節　小形壺瓶類の編年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
第３節　専用蓋の編年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
第３章　中世東濃窯の窯体構造・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
第１節　窯体構造についての研究史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
第２節　窯体構造の分類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
第３節　窯体構造の変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
第４章　中世東濃窯の分布と群構造・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
第１節　窯跡分布についての研究史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
第２節　中世東濃窯の分布範囲と地区設定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
第３節　中世東濃窯の分布と群構造・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
第４節　工人集団についての予察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・81
第５章　中世東濃窯製品の流通・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87
第１節　山茶碗類の流通研究史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87
第２節　東濃型山茶碗の分布と流通状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
第３節　東濃型山茶碗の流通圏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101
第４節　東濃型山茶碗の流通経路・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107
第５節　小形壺瓶類の出土分布と流通経路・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・115
第６節　流通の担い手について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・117
第６章　中世東濃窯の成立と展開・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・119
第１節　生産と流通の諸段階・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・119
第２節　中世東濃窯の成立・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・121
第３節　中世東濃窯と瀬戸美濃大窯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・126
第４節　中世東濃窯の経営形態・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・127
第５節　東海の中世窯における東濃窯の性格・・・・・・・・・・・・・・・・・・・131
おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・134

はじめに

現在の多治見市・土岐市・瑞浪市・可児市を中心とした東濃西部地域は、古代から現代へ続く窯業地として知られている。1976 年に発行された『美濃の古陶』では、楢崎彰一氏が「美濃古陶の流れ」として美濃国内の窯業生産のについて、田口昭二氏が「白瓷と白瓷系陶器」として東濃窯の灰釉陶器・山茶碗生産について考古学的調査成果を紹介している[註1]（楢崎 1976・田口 1976）。楢崎氏は当時の認識として、美濃国内の南西に位置する美濃須衛窯で須恵器生産が確立すると同地が一貫して須恵器生産の中心地となるが、11 世紀中葉代に多治見市長瀬町の光ヶ丘 1 号窯で灰釉陶器生産が開始されると 12 世紀後半代には急速に東濃諸地域に拡散、美濃国内の陶器生産の中心地は当該地域に移るとした。また、これらは 12 世紀に入ると相次いで山茶碗窯に転換するが、14 世紀末から 15 世紀初頭に瀬戸窯からの工人移動によって古瀬戸系施釉陶器窯が登場し、これを美濃施釉陶器生産の起源としている。

そして、1500 年前後には瀬戸窯で先んじて大窯が成立し、これにやや遅れる形で多治見市小名田町でも大窯が成立するが、前者は 16 世紀末を境に衰退するのと対照的に、後者は 16 世紀に入ると急激に窯数が増加し桃山陶の生産、及び江戸時代の登窯生産へと繋がっていくという（楢崎 1976）。なお、山茶碗生産の終末期については古瀬戸系施釉陶器の生産に押されて消滅を余儀なくされたと結論付けられており（田口 1976）、彼らの見解はこれ以降地元の研究者の共通認識となっていった。

その後の開発ブームにより数々の窯跡が調査されるが、田口氏の研究成果に要所要所で修正が加えられて山茶碗編年が確立していく一方で、窯体構造や窯跡分布についての研究はあまり進んでいない状況である。また、『美濃の古陶』は生産地における編年を確立する段階であったため、当然だが流通を述べるまでに至っていない。山茶碗の流通研究は、東海地方の主要な窯業地における編年研究がある程度確立されてくる 1990 年代になって盛んに行われるようになる。この流れの中で東濃型山茶碗の流通状況も明らかにされていくが、残念ながら東濃窯の研究者の手によるものではなく、中世東濃窯は生産面の研究と流通面の研究が別個に行われているような状況で、それぞれの動向については明らかにされつつあるが、生産と流通の状況が具体的にどう連動するのか、それらの変化と関連するであろう瀬戸窯など周辺の窯業地との関係ついてはほとんど言及されていない。

こうしたなか、東濃窯とともに中世を通じて窯業生産を行う瀬戸窯や常滑窯をはじめ、猿投窯や渥美・湖西窯など主要な中世窯の研究が進められ、近年では東海地方全体における窯業生産の動向を把握する段階に到達している（藤澤 2018）。このような状況から、瀬戸窯・常滑窯とともに中世の窯業生産の一翼を担った東濃窯についても生産面・流通面を総合的に研究し、その位置付けを明らかにすることが求められている。

第 1 章　中世東濃窯の編年研究史

瀬戸窯に隣接する東濃窯は、可児市東部、多治見市 (笠原町含む)、土岐市を中心に、愛知県瀬戸市北部、犬山市及び春日井市の一部と広範囲にわたっている。主要製品は東濃型山茶碗で、これは東濃窯のほかにも恵那中津川窯、瀬戸窯、兼山窯、才坂窯、大久手窯、尾北窯、東栄窯などでその生産が確認されている。第 3 型式後半（ほうの木期）から第 11 型式（生田期）まで継続して山茶碗生産が行われる東濃窯は、現在 500 基以上が確認されており、隣接する瀬戸窯でも第 3 型式から第 5 型式にかけては東濃型山茶碗が生産され、幡山地区では第 5 型式に前期の古瀬戸製品が併焼される。

楢崎氏は東濃地方に所在する古窯跡群を「東濃系諸窯」として一括して捉え、田口氏は華立山地以東、木曽川以南、槇ヶ根以西、三国山山地以北の範囲に分布する古窯跡群について「美濃窯」として呼称している。しかし、本論で採り上げる「中世東濃窯」を示すには、「東濃系諸窯」では範囲が広すぎるためもっ

と限定した名称を使用する必要があり、「美濃窯」では恵那中津川窯など東濃地域の窯業地や南西部の美濃須衛窯など中世美濃国に属する窯業地すべてを含んだ意味に取られることで混乱を招きかねず、名称としては相応しくないものと考える。したがって、本論で扱う現多治見市・土岐市・可児市・瀬戸市北部・犬山市及び春日井市の一部に分布する窯跡群についてを「中世東濃窯」と呼称する。

当該地での窯業生産の初現は７世紀代の須恵器窯であるが、これは８世紀までに姿を消し、９世紀後半代からの灰釉陶器生産が本格的な操業とみられている。その後、11 世紀中葉に灰釉陶器生産が廃絶し、11 世紀後葉に空白期間をもつが、遅くとも 11 世紀末には山茶碗生産が開始される。15 世紀には瀬戸窯から施釉陶器生産の技術が伝わり、現代まで窯業生産が行われている。東濃窯で生産される山茶碗類の編年研究については、先学諸氏によってすでに精力的に行われてきている。本章では、まずこれらの編年研究を紹介し、現在残されている課題について整理する。

第１節　田口氏の研究

東濃型山茶碗についての研究は、1970 年代以降田口氏をはじめとする地元の研究者らを中心に本格的に進められていく（註2・3）。田口氏は、1973 年に東濃窯の山茶碗生産を５期に分けた編年を行い、各型式の標式窯として西坂１号窯・丸石３号窯・窯洞１号窯・白土原１号窯・大洞東１号窯をそれぞれ設定した（第１表、田口 1973）。田口氏はこの時点で、美濃型式（東濃型）は猿投窯・知多窯の山茶碗類と胎土は異なるが形状自体は大差ないものと認識している。

1976 年には灰釉陶器から山茶碗へと生産が転換する要因を中国からの輸入陶磁に求めている（田口 1976）。このほか、西坂１号窯期と丸石３号窯期の間に浅間窯下１号窯期を設定しており、形状などについては詳述されていないが、編年表には山茶碗と小碗の組み合わせで掲載されている（第２表）。

1980 年代は開発に伴い窯跡の発掘調査が盛んに行われたことで、各窯業地で資料が充実し編年研究も盛んに進められていく。こうしたなか、田口氏は 1983 年に谷迫間２号窯・明和１号窯・大畑大洞４号窯・脇之島３号窯・生田２号窯を標式窯として新たに設定し、現行の東濃型山茶碗編年の大枠である西坂期、谷迫間期、浅間窯下期、丸石期、窯洞期、白土原期、明和期、大畑大洞期、大洞東期、脇之島期、生田期から成る計 11 窯式（白瓷系Ⅺ型式）の編年が発表される（第３表、田口 1983a・b）。なお、この段階で浅間窯下期は山茶碗と小皿の組み合わせに修正されている。

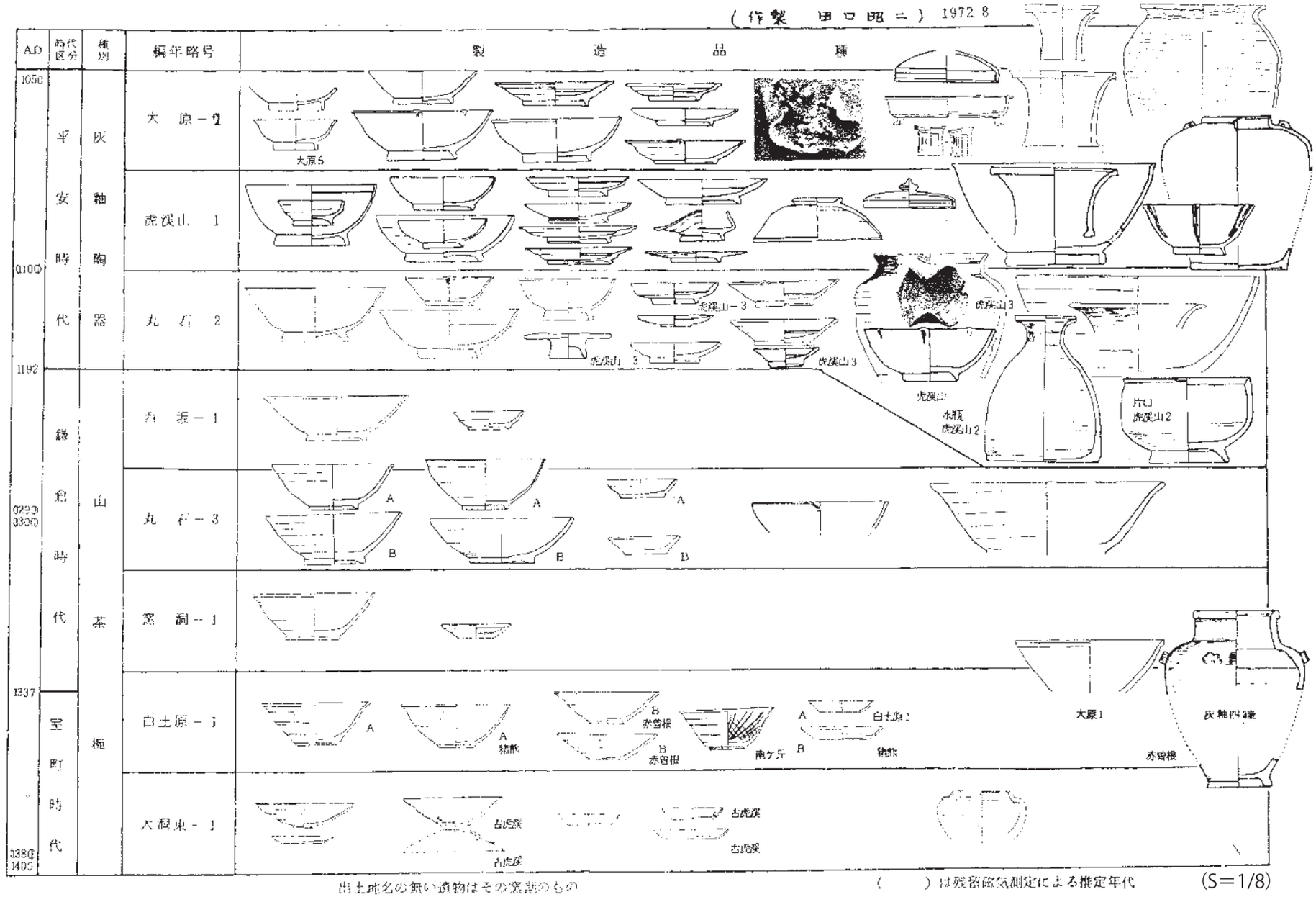
また、谷迫間期をⅠ期、浅間窯下期・丸石期・窯洞期をⅡ期、白土原期・明和期・大畑大洞期をⅢ期、大洞東期・脇之島期・生田期をⅣ期とする四つの段階を設定し、山茶碗生産のなかに３回の画期を見出した（田口 1983 b）。１回目は碗の腰の張りがなくなりハの字状に開く形状に変化し、皿の高台が無くなるというⅠ期からⅡ期への変化である。２回目は碗がⅡ期と同じ作りのまま全体に薄く、底部内面に指圧痕と輪状の窪みをもつようになり、皿も同様の変化をみせて器高が低くなるⅡ期からⅢ期への変化である。３回目は碗の器壁がさらに薄く全体に小さくなり、脇之島期からは高台を失い皿化し、小皿はさらに器高が低くなり底部内面の指圧痕は弱くなるというⅢ期からⅣ期への変化である。

第２節　若尾氏・山内氏・藤澤氏による研究

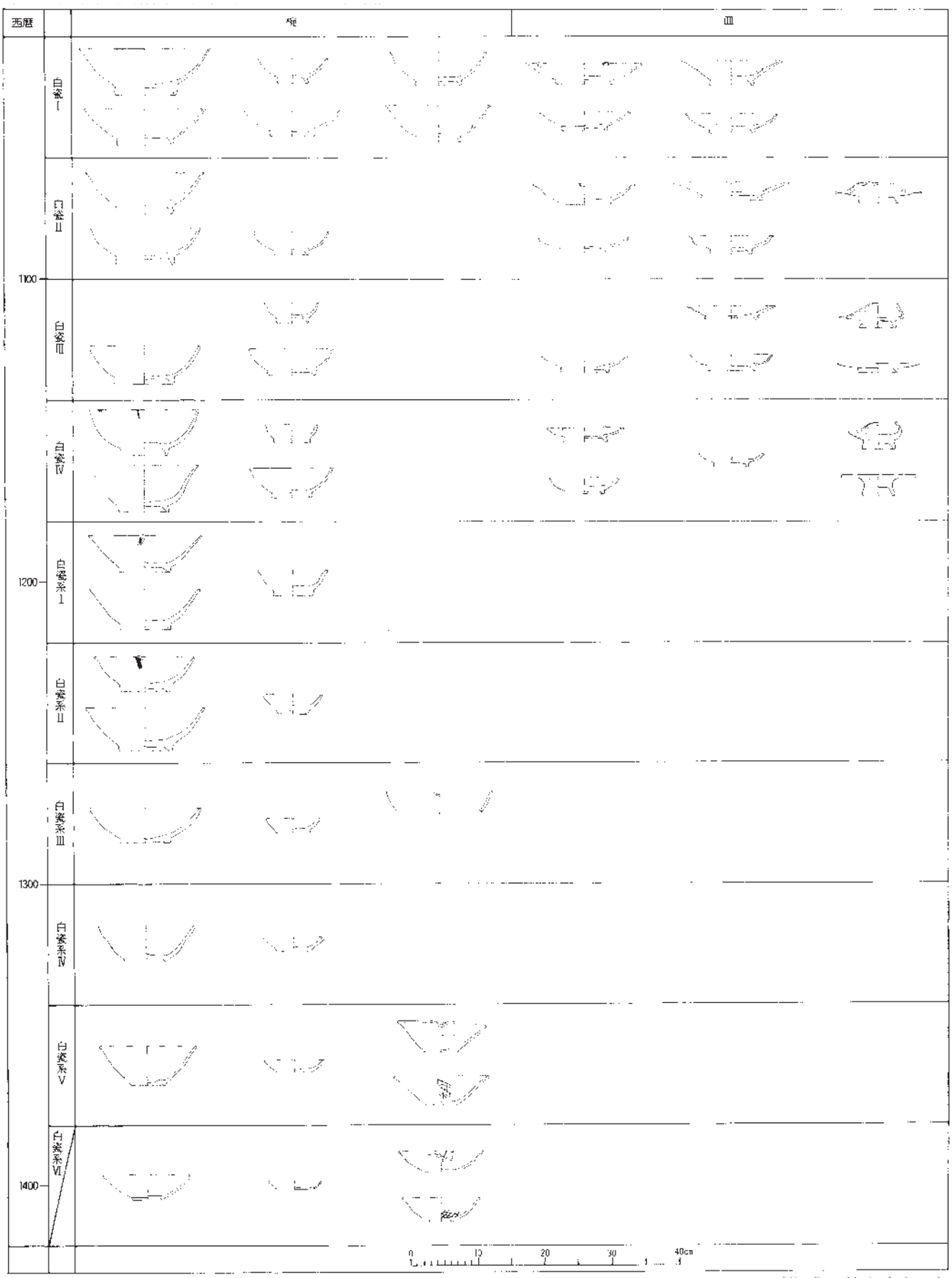
1983 年の田口論文によっておおよそ完成された山茶碗編年は、若尾正成氏や山内伸浩氏によって 1990 年代にかけて部分的に修正が行われていく。若尾氏は、大畑大洞期と大洞東期との間にみられる碗の形態差が大きいことについて触れ、大畑大洞窯跡の工房跡で出土した碗で両者の中間形態を示すものをとりあえずの指標として設定した（若尾 1987a）。

さらに、若尾氏は灰釉陶器生産から山茶碗生産への転換期に関しても検討を加え、西坂１号窯式に先行する大原 10 号窯式（仮称）を設定し、これらを灰釉陶器の終末期に編入している（第５表、若尾

第１表　東濃窯における灰釉陶器と山茶碗の編年表（田口 1973 より転載）



第２表　美濃窯編年表（田口 1976 より転載）



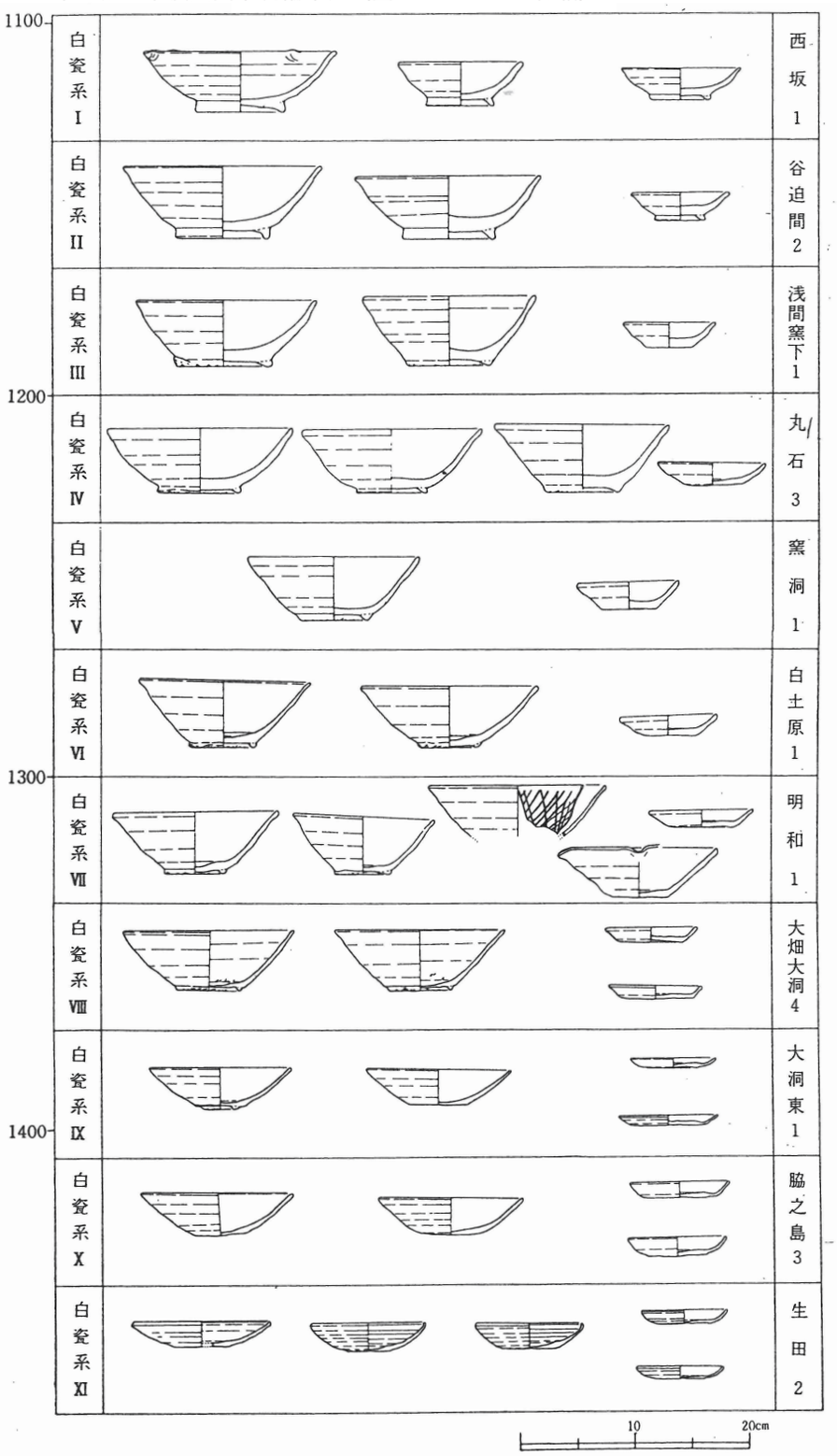
（作成：井上喜久男）

1987a)。また、型式変化については灰釉陶器の椀Ａがそのまま山茶碗に変化するのではなく、椀Ａが小碗に、中国陶磁器の輸入を背景に発生した椀Ｃが山茶碗に変化すると推察している。この椀Ｃを、これまでの伝統的な技術で製作された椀Ａと性質の異なる器種であるとし、灰釉陶器の椀から山茶碗へ連続する瀬戸窯に対して異なる変化を辿るとした。

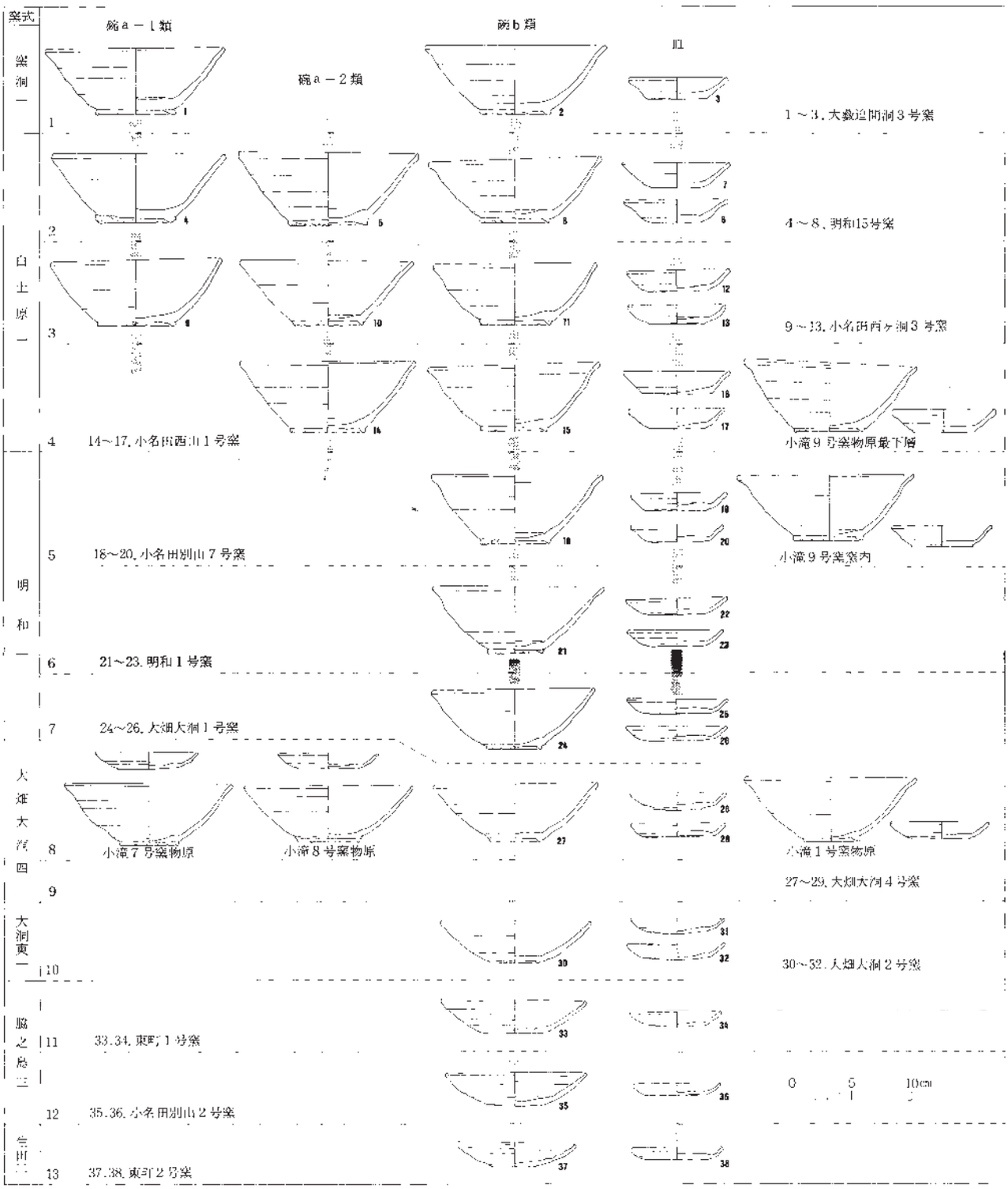
1990 年には明和窯跡群の調査が行われ、西坂期に先行する型式として大原 10 号窯期に代わり明和 27 号窯期が正式に設定された（若尾 1990)。灰釉陶器は椀が皿とセットになると定義付けた場合、明和 27 号窯では皿が激減し、大小の碗がセット関係になることから、若尾氏はこれを初期山茶碗として位置付けている。

一方、瀬戸窯の穴田南地区と半ノ木地区でも東濃型山茶碗が生産されていることから、藤澤氏は前者を３時期、後者を７時期に分類・編年し、形態的に前者から後者へ生産が連続するとして合わせて４段階 10 小期の編年を提示した（藤澤 1990b)。また、この編年では半ノ木古窯跡群出土の遺物をもとに大畑大洞期が２期に細分、底部内面が全体に凹む碗が新段階として設定され、若尾氏にも指摘されていた大畑大洞期と大洞東期の型式差を埋める形態となっている。なお、出土した山茶碗類はＡ～Ｇの７グループに大別され、Ａグループは白土原期、Ｂグループは明和期、Ｃグループは大畑大洞期古段階（大畑大洞期)、Ｄグループは大畑大洞期新段階（大谷洞期)、Ｅグループは大洞東期、Ｆグループは脇之島期、Ｇグループは生田期にそれぞれ該当する。

第３表　東濃型山茶碗編年表（田口 1983 より転載）



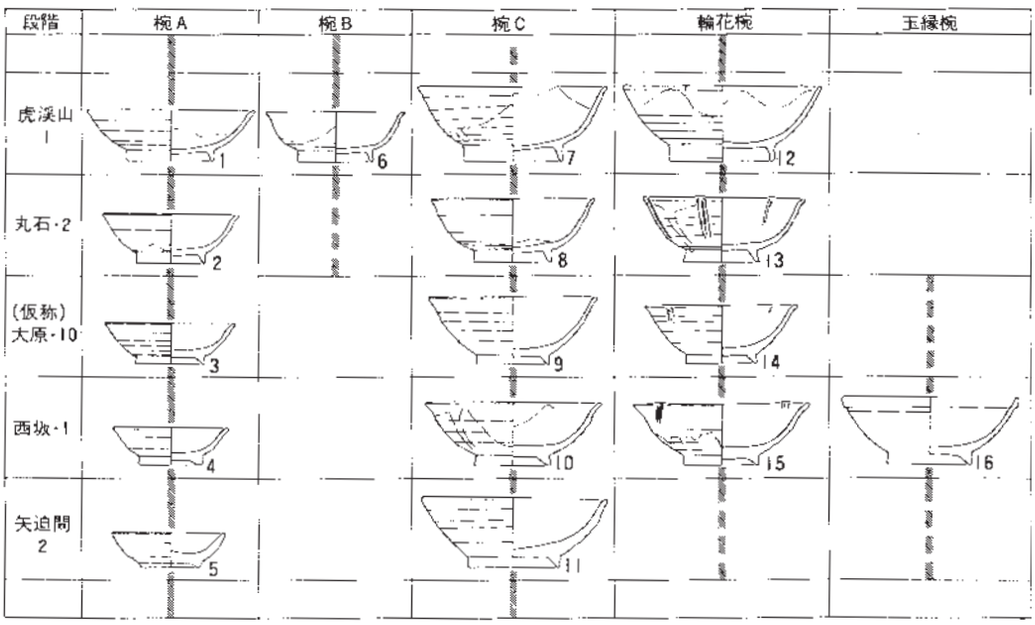
第４表　窯洞期から生田期の山茶碗と皿の型式変化（山内 1993 より転載



山内氏は窯洞期以降の山茶碗類について白土原・明和期を３期、大畑大洞期・脇之島期を２期に細分する編年を作成している（第４表）。また、北小木大上８号窯跡から出土した、古瀬戸前期の技術で作られた四耳壺・小型三耳壺・瓶子と共伴する山茶碗から、古瀬戸前Ⅱ期と白土原１号窯期が併行関係にあることが明らかとなった（山内 1993b）。

さて、発掘調査が進むにつれ各窯業地における山茶椀類の生産状況が徐々に明らかになり、編年研究も盛んに行われるようになるなか、藤澤氏は山茶碗類を五つの類型に大別した。すなわち、瀬戸窯・猿投窯・常滑窯を中心に生産される「尾張型」、渥美窯・湖西窯を中心に生産される「渥美湖西型」、東濃窯・

第５表　虎渓山１～谷迫間２段階編年表（若尾 1987 より転載）



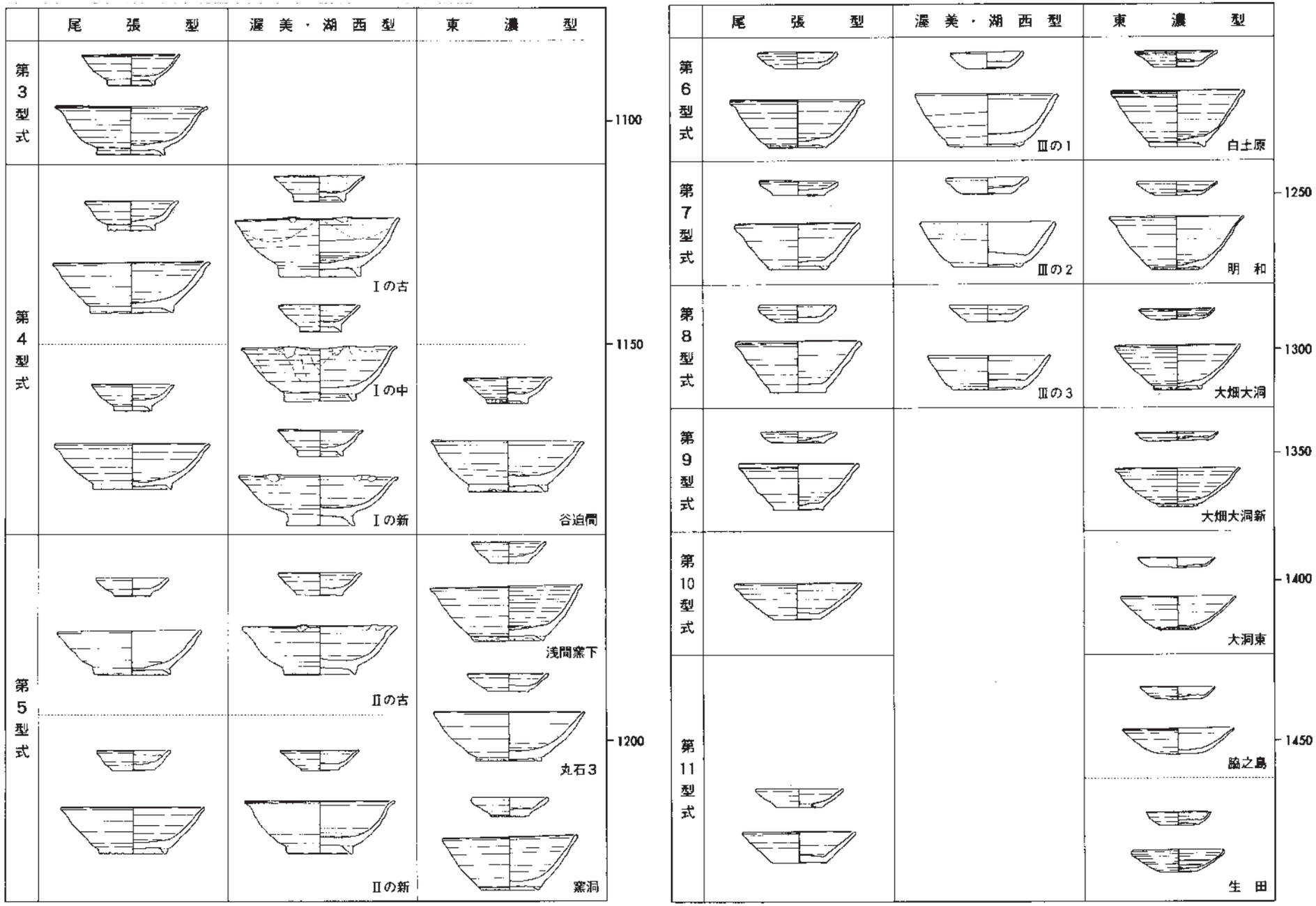
恵那中津川窯を中心に生産される「東濃型」、東遠諸窯で生産される「東遠型」、美濃須衛窯で生産される「美濃須衛型」に分かれるものである（註4）（藤澤 1993）。翌年には５類型をの併行関係を明らかにし、各窯業地の調査成果や編年研究の状況を反映させたこの見解は、これ以降研究者の間で広く共有されることとなる（第６表、藤澤 1994）。

こうしたなか、1997 年に可児市の矢戸上野２・３号窯の発掘調査が行われた。出土した山茶碗類のなかに、形態的に谷迫間２号窯の山茶碗類より古い様相を示すものが含まれるとし、山内氏は谷迫間期に先行する矢戸上野期を新たに設定するとともに、初期山茶碗としていた西坂期を灰釉陶器最末期に編入した（第７表、山内 1997）。これを以って、第３型式後半から第 11 型式にかけての東濃型山茶碗編年はひとまずの完成をみるのである。

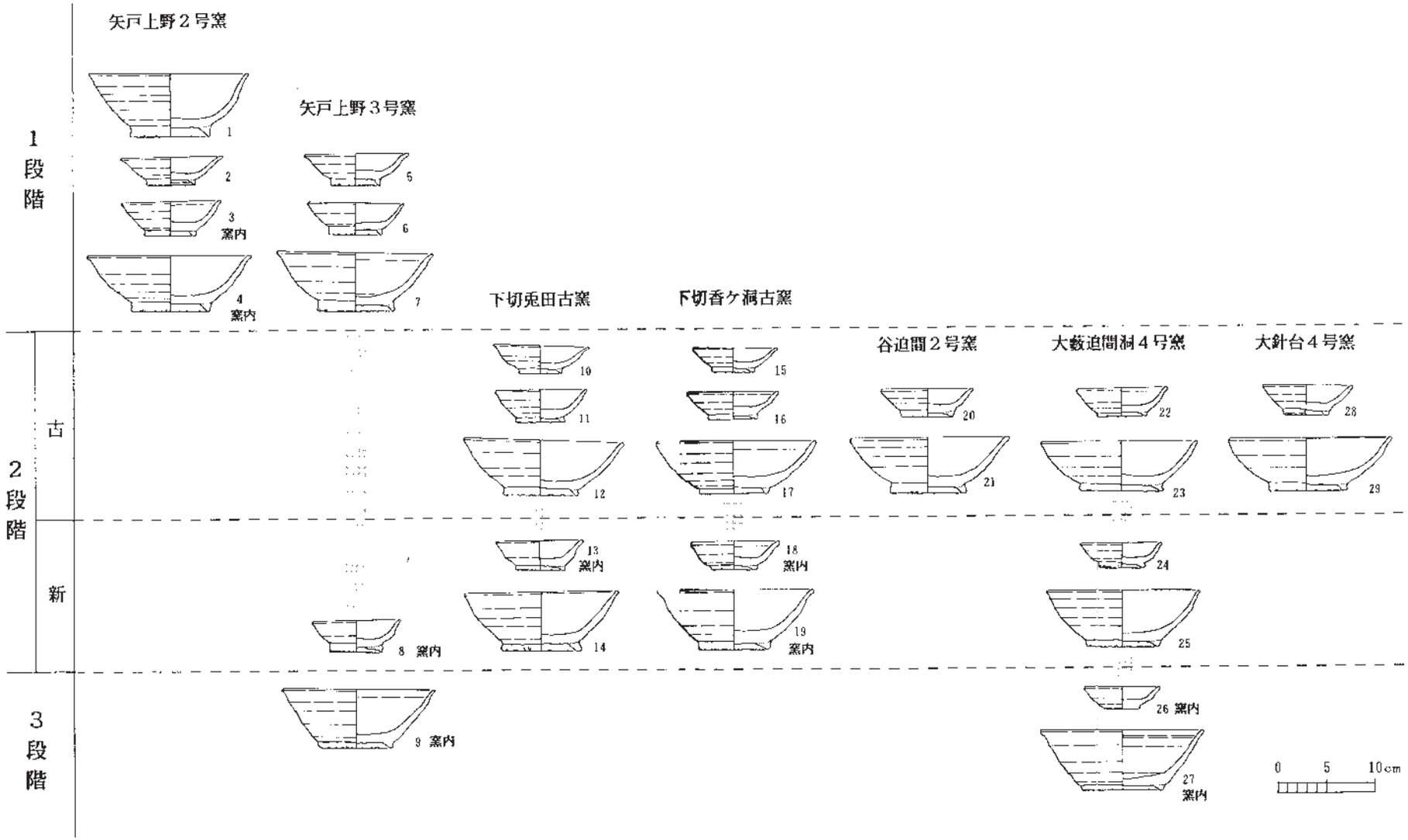
ところで、東海地方の中世窯では 12 世紀後半に四耳壺をはじめとした小形の壺瓶類が生産されるが、その形態から猿投型・美濃須衛型・瀬戸型・東濃型（註5）の４類型に大別されるという（藤澤 1993）。東濃窯では大薮迫間洞２号窯で美濃須衛型、北小木大上８号窯で瀬戸型、赤根曽窯で東濃型が認められるなど複数の系統の四耳壺が生産されている。12 世紀末葉から 13 世紀初頭にかけてほぼ同時期に四耳壺生産が行われ、その後古瀬戸生産の確立とともに瀬戸窯に集約されるという動向が指摘されている（藤澤 1993）。

瀬戸窯幡山区では東濃型山茶碗と古瀬戸が併焼されることから、古瀬戸製品との併行関係が求められている（藤澤 1995）。すなわち、第４型式・第５型式古段階は草創期、第５型式中段階は前Ⅰａ期、第５型式新段階は前Ⅰｂ期が併行関係にあるという。なお、瀬戸窯では第６型式以降、尾張型山茶碗生産に転換し、東濃型山茶碗はほとんどみられなくなるようだ。

第６表　主要３類型山茶碗編年表（藤澤 1994 より転載）



第７表　12 世紀中葉における山茶碗類の変遷（山内 1997 より転載）



第３節　2000 年代の研究

1990 年代に山茶碗編年が確立されたことで、2000 年代に入ると引き続き最新の調査成果から山茶碗編年の修正が行われていく一方、山茶碗類と併焼される四耳壺や水注・瓶子など小形壺瓶類についての研究も進められるようになる。

多治見市北西部に位置する北小木窯跡群で、山茶碗専焼窯に紛れて小形壺瓶類を併焼した窯が複数確認されている。山内氏は北小木窯跡群の調査成果から、大畑大洞期後半段階を埋める型式として大谷洞 14 号窯を標式とする大谷洞期を設定したほか、小形壺瓶類の分類を行いその変遷を追っている（山内 2001）。北小木古窯跡群で出土した四耳壺は、生産した窯名をとって①大谷洞７号窯型、②浜井場３号窯型、③畝欠田２号窯・一之洞 16 号窯型の三つに分類され、このうち②・③は 1993 年の藤澤分類における美濃須衛型に該当するが、①は先の分類には当てはまらない新しい類型であるという。共伴する山茶碗から①を白土原期前半段階、②を同期中葉段階、③を同期後半段階と位置付け、①→②→③の順で生産されたものとしている（第８表）。また、その成立・展開については白土原期に山茶碗生産の拡大に伴い宋代の白磁四耳壺をモデルとした四耳壺の生産を開始し、この段階では独自性の強い大谷洞７号窯型を生産するが、白土原中葉段階には瀬戸窯・美濃須衛窯からの直接的な技術導入を受け、後半段階には古瀬戸型の四耳壺は生産を終了し、美濃須衛型のみが生産されるが、白土原期末期には東濃窯も含め瀬戸窯以外の窯業地では四耳壺生産がみられなくなるとした（山内 2001）。

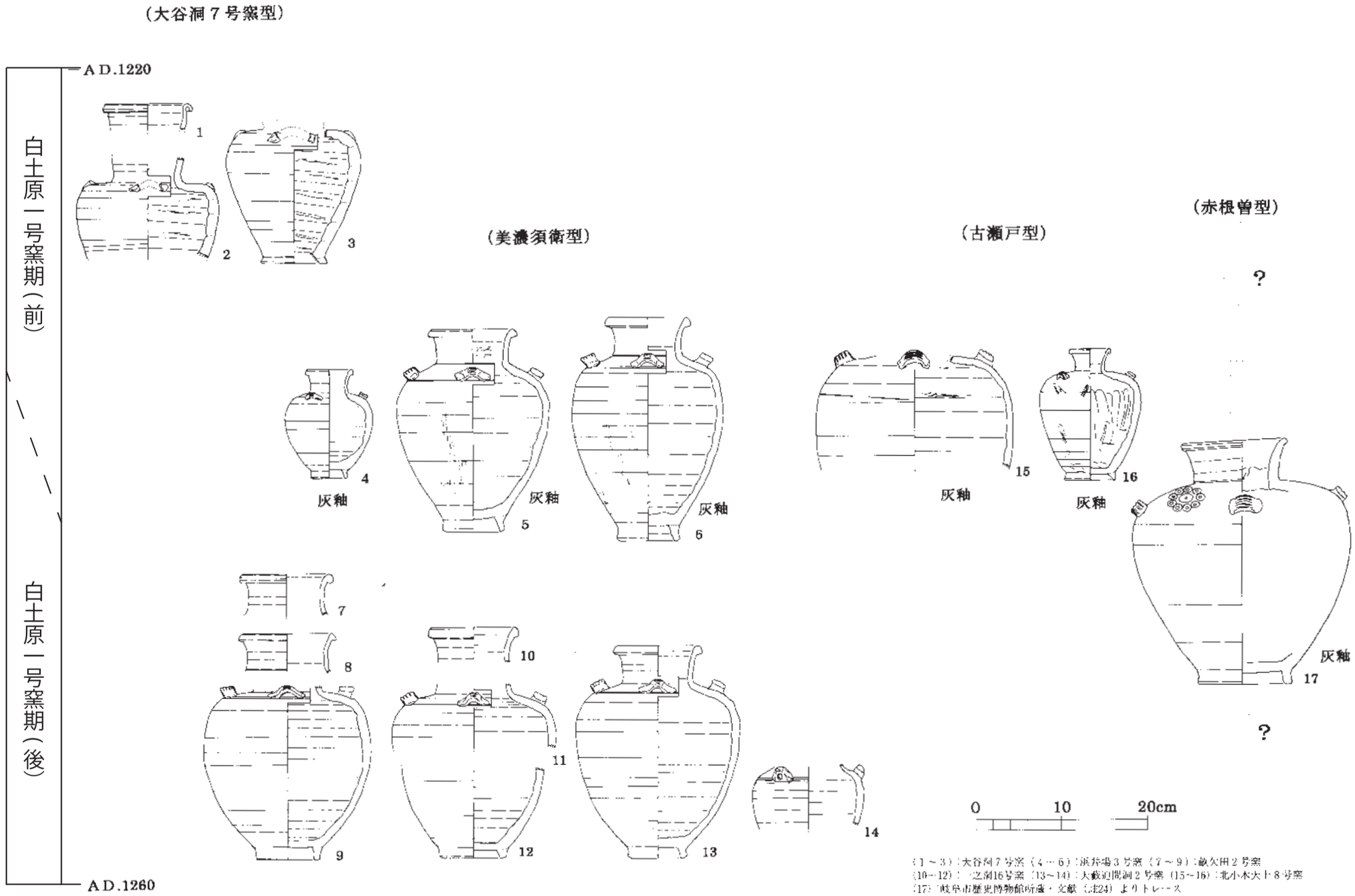
また、東濃窯では美濃須衛型の四耳壺に伴うような水注が確認されており、山内氏によって１～３類に細分されている（山内 2001）。これによると、高台が高く細身で胴部が若干張り、注口は長くＳ字状に斜め上方に緩やかに屈曲するものを１類、高台がやや低く細身で胴部が細長く卵形を呈し、注口は１類と同様であるが全面に灰釉が施されるものを２類、胴部が大きく張り球形に近く、注口は短くＳ字状に垂直に強く屈曲するものを３類としている。１類は白土原期前半段階、２類は同期中葉段階、３類は同期後半段階の山茶碗が伴うとし、１類→２類→３類の順で生産されたものとしている（第９表）。

一方、藤澤氏は 2003 年から 2005 年にかけて土岐市の丸石８～ 11 号窯跡、土岐口西山３・４号窯跡、下石西山２号窯跡で小形壺瓶類の併焼事例が相次いで報告されたことを踏まえ、東濃窯産の初期四耳壺をＡ型（猿投型）・Ｂ型（大谷洞型）・Ｃ型（土岐口西山３・４号窯）・Ｄ型（東濃型）・Ｅ型（美濃須衛型）・Ｆ型（瀬戸型）の六つに分類し、さらに技術伝播の視点からその変遷を記している（藤澤 2005）。新たに設定されたＣ型については土岐口西山４号窯で確認され、玉縁口縁をもち耳部の形状は不明だがＤ型やＦ型とは異なるもので、無文のものと肩部にヘラ画き沈線が施されるものがみられ、全面に灰釉がハケ塗りされるものである。また、Ｄ型については赤根曽窯に加え下石西山２号窯、土岐口西山３・４号窯で確認される。藤澤氏はそれぞれの整形技法についても言及し、Ａ～Ｄ型は東濃窯、Ｅ型は美濃須衛窯、Ｆ型は瀬戸窯の工人によってそれぞれ生産されたものであるとし、Ａ～Ｄ型については共伴する山茶碗の型式からＡ型（丸石期）→Ｂ型（窯洞期）→Ｃ型（白土原期）→Ｄ型（白土原期）の順で生産されたものと推測している。

岡本直久氏は、東濃型山茶碗編年における窯洞窯期までの標式窯が可児市・土岐市に所在し、白土原窯期以降の標式窯は全て多治見市に所在しているという点から、谷迫間窯期から浅間窯下窯期への変遷は比較的スムーズであるが、丸石窯期・窯洞窯期については碗の形状に地域差がありうまく変遷しないとして、丸石窯期から白土原窯期にそれぞれ土岐市域の窯の資料を並行させる編年案を作成し、土岐市域で生産された山茶碗と瀬戸窯幡山地区のものと比較した上で形態の共通性を指摘している（岡本 2005）。

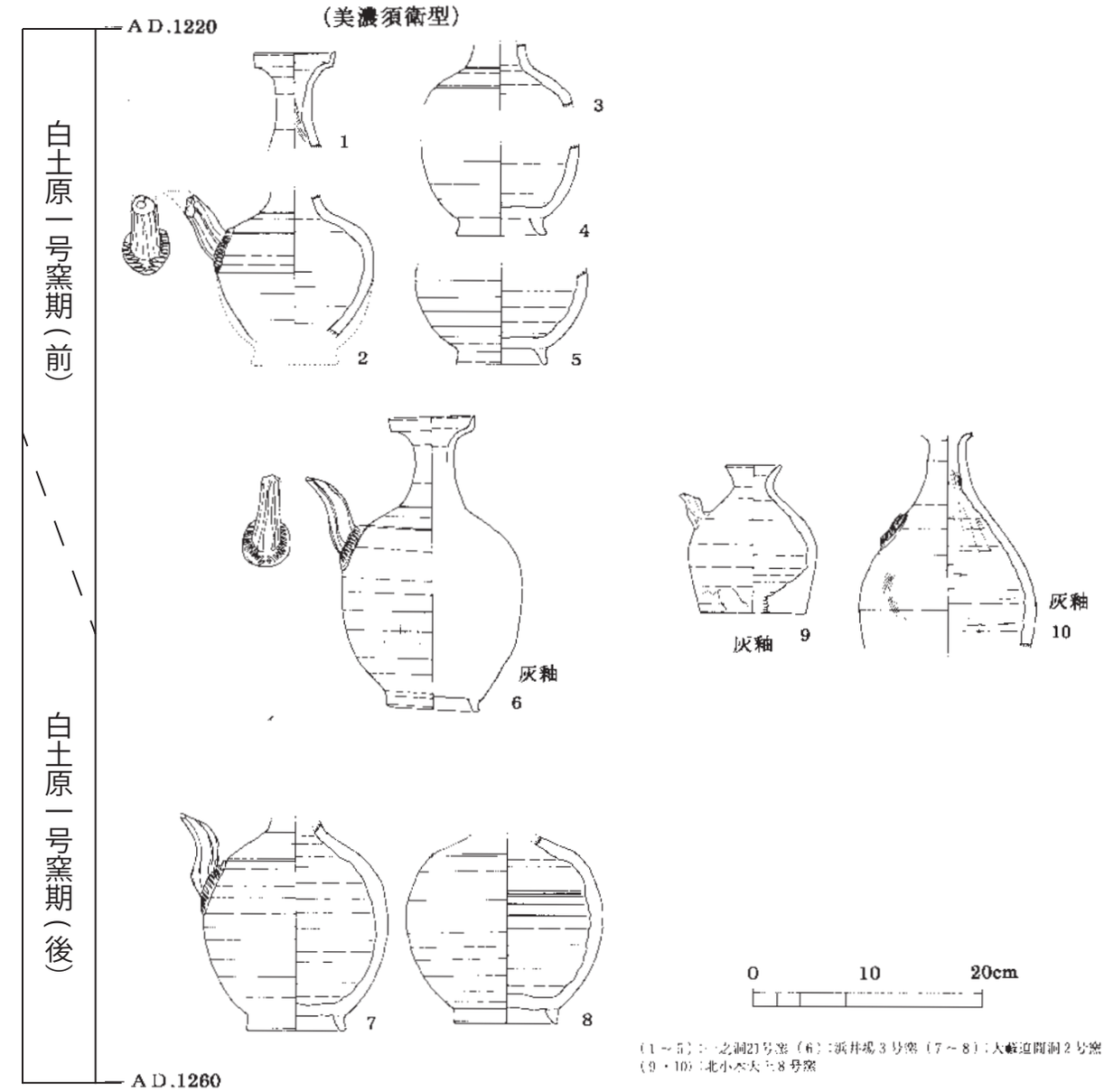
また、筆者は 2005 年の藤澤論文を参考に、中世美濃国産初期四耳壺をＡ類（猿投型）・Ｂ類（美濃須衛型）・Ｃ類（東濃型）・Ｄ類（瀬戸型）・その他（藤澤分類のＢ型とＣ型の一部）に再分類し、美濃

第８表　13 世紀前半代における東濃窯産四耳壺の変遷（山内 2001 より転載）



（1～3）：大谷洞７号窯（4～6）：浜井場３号窯（7～9）：畝欠田２号窯
（10～12）：一之洞16号窯（13～14）：大藪迫間洞２号窯（15～16）：北小木大十８号窯
（17）：岐阜市歴史博物館所蔵・文献（注24）よりトレース

第９表　13 世紀前半代における東濃窯産水注の変遷（山内 2001 より転載）



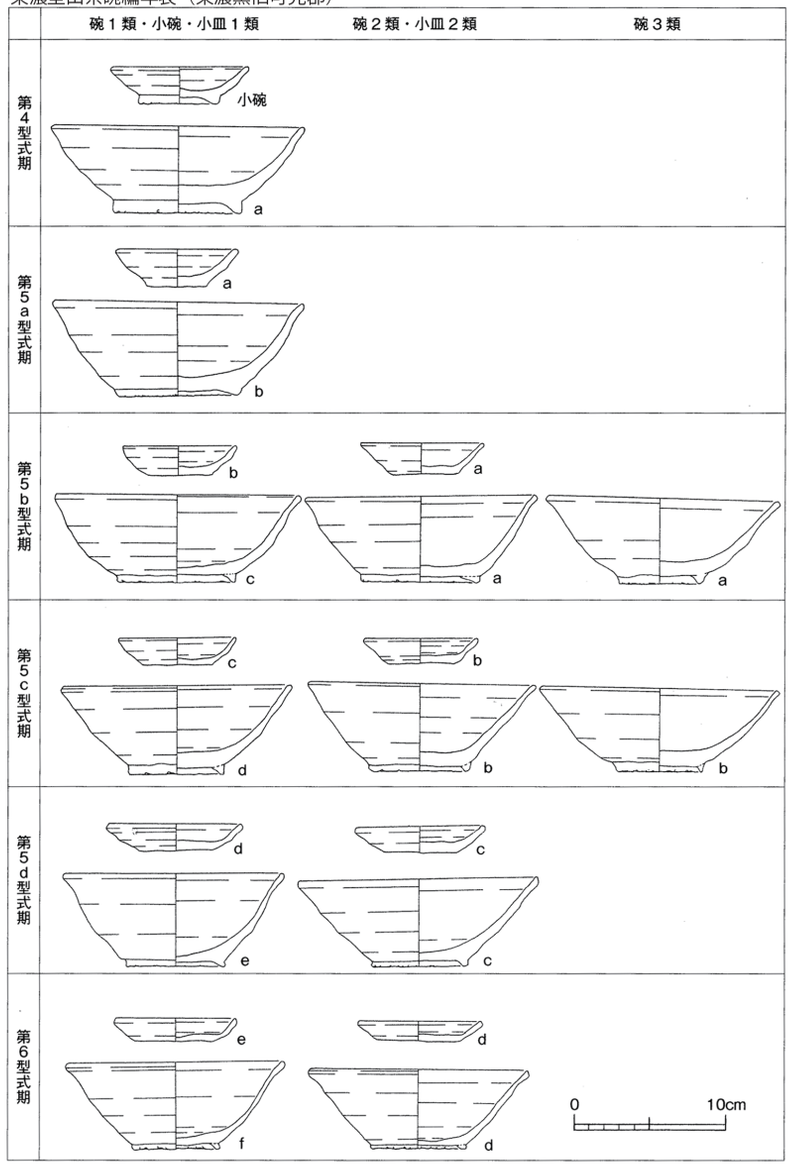
須衛窯や恵那中津川窯、瀬戸窯の生産状況を加味して各類型の生産状況を整理した（山本 2014）。

さて、可児市ほうの木窯は 2009 年に灰原の発掘調査が行われ、出土した碗・小碗のなかに高台端部に籾殻痕がほとんどみられない一群が含まれていることが明らかとなり、灰釉末期の西坂期と矢戸上野期の間を埋めるものとして報告された（長江 2014）。筆者はこれを受け、瀬戸窯の第３型式期に比定される旭浄水場窯の山茶碗類の高台には基本的に籾殻痕が認められないことから、これを第３型式と第４型式を区別する基準とし、矢戸上野２号窯を第４型式前半に繰り下げ、ほうの木窯を第３型式後半の標式窯として新たに設定した（山本 2015）。

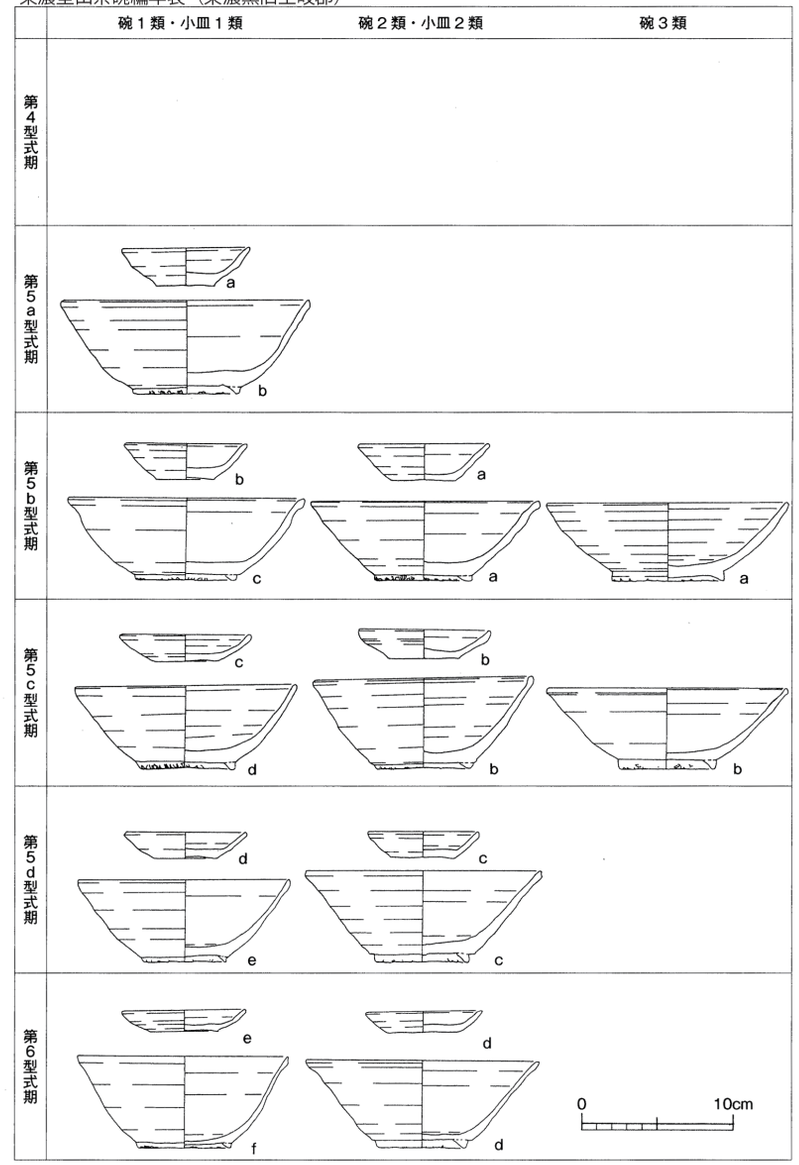
また、筆者は 2005 年に岡本氏が指摘した地域差について検証するため、旧可児郡および旧土岐郡に所属する浅間窯下期から白土原期の窯跡出土資料を細分・比較した結果、東濃窯のなかで特筆できるほど明確な地域差は認められなかった。また、当該期に東濃窯と瀬戸窯で生産された小形壺瓶類と共伴する山茶碗から、前者の谷迫間２号窯期から白土原１号窯期、後者の第４型式から第６型式について編年のすり合わせを行った。窯洞１号窯期は形態的にさらに前後に細分可能で、谷迫間期と第４型式、浅間窯下期・丸石期が第５型式古段階（古瀬戸草創期）、窯洞期古段階が第５型式中段階（古瀬戸前Ｉａ型式）、窯洞期新段階が第５型式新段階（古瀬戸前Ｉｂ段階）、白土原期と第６型式（古瀬

第 10 表　東濃型山茶碗編年表（山本 2017 より転載）

東濃型山茶碗編年表（東濃窯旧可児郡）



東濃型山茶碗編年表（東濃窯旧土岐郡）



1200

戸前Ⅱａ期）がそれぞれ併行関係にあるという結論を得た（第 10 表、山本 2017）。

近年、土岐市と多治見市の市境を流れる大洞川流域に位置する中山１号窯跡は、近年発掘調査が行われ、出土遺物から大洞東期に稼働したものと報告されている（澤井 2018）。出土した山茶碗は、内面の底部と体部の境に輪状の溝をもつものが多く含まれている。澤井計宏氏は、これを製作過程において底部の粘土円柱と体部を接着させるために用いた棒状工具の痕跡であるとの見解を示している。また、窯道具の蓋として報告されているが、無高台の山茶碗も相当数出土している。中山１号窯跡と同じく大洞川流域に立地する大洞東１号（大洞２号）窯跡、大洞１号窯跡、大洞南１・２号窯跡、大洞北１号窯跡の表採資料も併せて紹介されており、中山１号窯跡を含む大洞川流域の窯跡はいずれも大洞東期に属するという（澤井 2018）。

第４節　中世東濃窯の年代観と編年研究史上の問題点

続いて、中世東濃窯に関する年代観について整理し、最後に編年研究史上の問題点を挙げる。

（１）中世東濃窯の年代観

1973 年の田口編年では、西坂期を 1192 年、丸石期を 1290 ～ 1300 年、大洞東期終末期を 1380 年に位置付けた。年代設定の具体的な根拠については記されていないが、西坂期を鎌倉時代最初期、大洞東期を 1400 年に位置付け、1192 年から 1400 年までを５分割したものであろう。

11 型式が出揃う 1983 年の田口編年では、西坂期の年代を大幅に引き上げ 12 世紀前葉とし、谷迫間期を 12 世紀中葉、浅間窯下期を 12 世紀後葉、丸石期を 12 世紀終末期、窯洞期を 13 世紀前半、白土原期を 13 世紀後半から 14 世紀前葉、明和期を 14 世紀中葉、大畑大洞期を 14 世紀後葉、大洞東期を 14 世紀後葉から 15 世紀前葉、脇之島期を 15 世紀前半、生田期を 15 世紀中葉に位置付けている。

1993 年には小名田小滝１・９号窯跡で２基の灰原と９号窯の窯体の一部について発掘調査が行われ、灰原からは東濃型山茶碗編年における絶対年代資料として知られる「文永３年」(1266) と刻文された窯道具の蓋が出土した（第４図）。灰原は大きく上・中・下層に分かれ、上・中層が主に１号窯、下層が主に９号窯に帰属するという。この蓋は灰原中層から出土しているが、最下層から同形態の蓋と白土原期に比定される山茶碗が伴出するという。そして、小名田小滝９号窯の操業期間が白土原期末期から明和期初期であることから､山内氏は明和期の開始期を 1260 年に設定した (山内 1993a)。これに伴い、白土原１号窯期の上限は 1260 年から 1220 年に引き上げられ、浅間窯下期から丸石期は、1170 年から 20 年置きに縮小、大畑大洞期は 14 世紀第２四半期から第４四半期、大洞東期は 15 世紀前半、脇之島期は 15 世紀中葉、生田期は 15 世紀後半に位置付けられた。

岡本氏は、各生産地の編年では併行関係が明らかとなっている尾張型と東濃型の山茶碗編年が、消費地の編年では第６型式期以降後者が前者より遡るという時間的齟齬が生じているとし、尾張西部の中世遺跡における遺構共伴事例から、これを解消した（岡本 1993）。すなわち、第７・８型式期段階の共伴資料は東濃型第８型式期、常滑窯６型式期が共伴し、猿投窯産のものは含まれないことから、猿投窯以外のこれらが併行関係にあると結論付けたが、それでも東濃窯と瀬戸窯・常滑窯には約四半世紀の隔たりがあるとした。

一方、藤澤氏は尾張型、東濃型、渥美・湖西型の主要３類型における山茶碗編年の併行関係を明らかにした上で、各型式の実年代を比定している（藤澤 1994）。すなわち、第３型式期は、平安京左京四条一坊の井戸 SE ８で「寛治五年（1091）五月十三日」の墨書銘をもつ須恵器の鉢と猿投窯産尾張型第３型式期の山茶碗が共伴することから、11 世紀末には山茶碗生産が確立していたとして 11 世紀末から 12 世紀第１四半期とした。

第４型式期は、渥美の大アラコ窯で保延２年（1136）から久安元年（1145）、久安５年（1149）か

ら久寿２年（1155）の二度にわたり三河守を務めた藤原顕長の刻銘をもつ短頸壺が出土し、渥美・湖西型Ⅰ期中段階を中心にⅠ期新段階の山茶碗を併焼する。また、猿投の HG61 号窯で 12 世紀第２四半期に造営年代が集中する鳥羽離宮東殿の瓦と同范の軒丸瓦を焼成しており、尾張型第４型式期古段階の山茶碗を併焼している。東京都八王子市の白山神社経塚では、仁平４年（1154）年の奥書をもつ書写経、和歌山県日高町の若一王子経塚では保元３年（1158）年の奥書のある法華経に伴う知多窯産の甕と同タイプのものが出地田窯で生産され、併焼される山茶碗は尾張型第４型式を主体とし一部第５型式が含まれる。以上から、第４型式期は古段階が 12 世紀第２四半期、新段階が 12 世紀第３四半期あたりに比定される。

第５型式期は、渥美の東大寺瓦窯では「東大寺大佛殿瓦」と陽刻された軒丸瓦・軒平瓦がⅡ期の山茶碗と併焼され、これらが承元年間（1207 ～ 11）に造営される大仏殿東岡上の鐘楼から出土していることから、同窯の操業期間を 12 世紀末から 13 世紀初頭に位置付けている。埼玉県東松山市の利仁神社経塚から建久７年（1176）銘の経巻を、山梨県甲西町の熊野権現秋山経塚から建久８年（1197）銘の経巻を伴う知多産の甕と同タイプのものが南蛇ヶ谷１号窯などで生産されており、尾張型第５型式期新段階を主体とする山茶碗が併焼される。また、文治５年（1189）に廃絶する岩手県平泉町の平泉遺跡群からは、第５型式期に併焼される猿投窯産の四耳壺が出土する一方、東濃型窯洞期に併焼される古瀬戸前Ⅰ期の製品は確認されていない。以上のことから、第５型式期の実年代は古段階が 12 世紀後葉、新段階が 12 世紀末から 13 世紀初頭に求められる。

第６型式期の実年代を特定する良好な資料はみられないが、第７型式期の年代を比定した上で年代を推定している。第７型式は、尾張型第６型式終末から第７型式の山茶碗を生産した知多の中田池Ａ１号窯の窯内から「正見元年正月二十七日」等の刻銘をもつ陶硯が出土し、これは「正見」を「正元」と読み替え正元元年（1259）あるいは正元２年の製作とされる。また、東濃の小滝９号窯から出土した「文永三年（1266）」の刻銘をもつ山茶碗の蓋が東濃型第７型式期に比定される。以上から、第７型式期は 13 世紀中葉に比定され、第６型式期は 13 世紀初頭を除く前葉に位置付けられる。

第８型式は、瀬戸の萱刈窯で古瀬戸中Ⅱ期の施釉陶器と「（元）亨四年（1324）」の刻銘をもつ狛犬の台座及び「正中二（1325）」の陽刻銘をもつ陶板が採集され、灰原下層で出土する山茶碗は尾張型第８型式期であることから、当該期が 14 世紀第１四半期まで続いたものとしている。

また、山茶碗と古瀬戸の併焼関係について、古瀬戸前Ⅰ期と東濃型窯洞期、前Ⅱ期と尾張型６・７型式期、前Ⅲ期と尾張型第７型式期、前Ⅳ期～中Ⅱ期と同第８型式期、中Ⅲ期と同第９型式期、後Ⅱ・Ⅲ期と同第 10 型式期、後Ⅳ期と同第 11 型式期が概ね対応するとして、第９型式期を 14 世紀中・後葉、第 10 型式期を 14 世紀末から 15 世紀前葉、第 11 型式期を 15 世紀中・後葉にそれぞれ位置付けている（藤澤 1994）。

岡本氏は、東濃窯・美濃須衛窯・猿投窯・瀬戸窯で 12 世紀後半から 13 世紀初頭にかけて併焼された四耳壺から、東濃型の丸石期と尾張型の第５型式期前半、白土原期と古瀬戸前Ⅱ期並びに尾張型第６型式期がおおよそ併行関係にあることを明確にした（岡本 2005）。

ところで、多治見市虎渓山町に所在する永保寺では、2007 年に庫裡跡の発掘調査が行われ「正中二年十二月（1325）」の紀念銘をもつ東濃窯産の片口鉢が出土した（山内 2007）。山内氏によると、これと同形質の鉢は北小木浜井場２号窯や同１号炭焼窯から出土が確認されており、大畑大洞期の山茶碗と共伴するものである。大畑大洞期は 14 世紀初頭から中葉に位置付けられることから、東濃型山茶碗編年の実年代を裏付ける出土事例となった。

現在、東濃型山茶碗の最新の編年表は山内氏が 2008 年に発表したもので、実年代の基準となる文永３年銘の蓋を第７型式期の初め、正中２年銘の片口鉢を第８型式期に位置付けている。また、各年代

のおおよその年代観は、第３型式期が 1130 年にかけて、第４型式期が 1130 ～ 1170 年、第５型式の浅間窯下期が 1170 ～ 1190 年、丸石期が 1190 ～ 1210 年、窯洞期が 1210 ～ 1220 年、第６型式期が 1220 ～ 1260 年、第７型式期が 1260 ～ 1310 年、第８型式期が 1310 ～ 1360 年、第９型式期が 1360 ～ 1400 年、第 10 型式期が 1400 ～ 1440 年、第 11 型式の脇之島期が 1440 ～ 1460 年、生田期が 1460 ～ 1480 年に設定されている（第 11 表、山内 2008）。

（２）編年研究史上の問題点

さて、ここまで東濃窯の山茶碗類及び小形壺瓶類の編年研究を追ってきた。第３型式後半期から第４型式期の山茶碗編年、第４型式期後半から第６型式期にかけての山茶碗類の地域差、小形壺瓶類の分類・編年にまつわる問題については筆者によって解消されたものとみなすが（山本 2014・2015・2017）、本論は美濃須衛窯や瀬戸窯からの技術導入が絡む小形壺瓶類の生産状況も含めて中世東濃窯製品の生産動向を整理する目的も含むため、これらの概況も今一度記載し、山茶碗類の状況と併せて整理していきたい。

山茶碗編年に残された問題として、大洞東期の碗を生産する一方で無高台碗が多量に出土する中山１号窯跡の調査結果が挙げられる。この出土状況は有高台から無高台に変化するという大洞東期から脇之島期にかけての型式設定基準に一石を投じるものであり、これらの無高台碗が大洞東期に属するものなのか、脇之島期に属するものなのか検証する必要があろう。

さらに、紀年銘資料である「文永３（1266）年」銘をもつ蓋の編年的位置付けにも問題が残される。この蓋は、山内氏によると明和期の初め頃の山茶碗に伴うものとして明和期の初期に位置付けられるものであるが、これによって第７型式期中頃を 1250 年と位置付ける尾張型山茶碗編年との間に年代的な齟齬が生じている。これについても出土状況から共伴関係を整理し、これまで型式設定が行われてこなかった東濃型山茶碗の専用蓋についても触れていくこととする。

第２章　中世東濃窯の編年

東濃型山茶碗は、12 世紀中葉まで有高台の碗と小碗、15 世紀前葉まで有高台の碗と小皿、15 世紀中葉以降は無高台の碗と小皿の組み合わせで生産されている（山内 2008）。ところが、碗が無高台化する 15 世紀中葉以前にも、生産量は少ないながら大半の窯で無高台碗が確認されている。山茶碗を窯詰め・焼成する際には、碗・小皿を重ね置いた最上段に蓋を被せることがあるが、無高台碗は製品である可能性も指摘されながら、底部外面に自然釉が認められるなど確実に蓋として使用されている例が非常に多くみられるため、基本的に窯道具の要素を色濃くもつ器種とされてきた。

しかし、東濃窯にはこれ以外に第３節で詳述する製品とは全く異なる形状の専用蓋が存在し、これらには外面に自然釉がかからない個体はまずみられない。この状況から、自然釉が全くかからない個体や確実に蓋として使用されたといえない個体が一定数確認される以上、無高台碗は基本的に製品であると捉えるべきであろう。無高台碗は、具体的には第４型式期の少なくとも後半段階にはその存在が確認されており、これらが第 11 型式期の無高台碗へ型式的に連続する可能性も考えられるため、第１節では無高台碗も含めて山茶碗類の分類・編年を行うこととする。

第１節　山茶碗類の編年

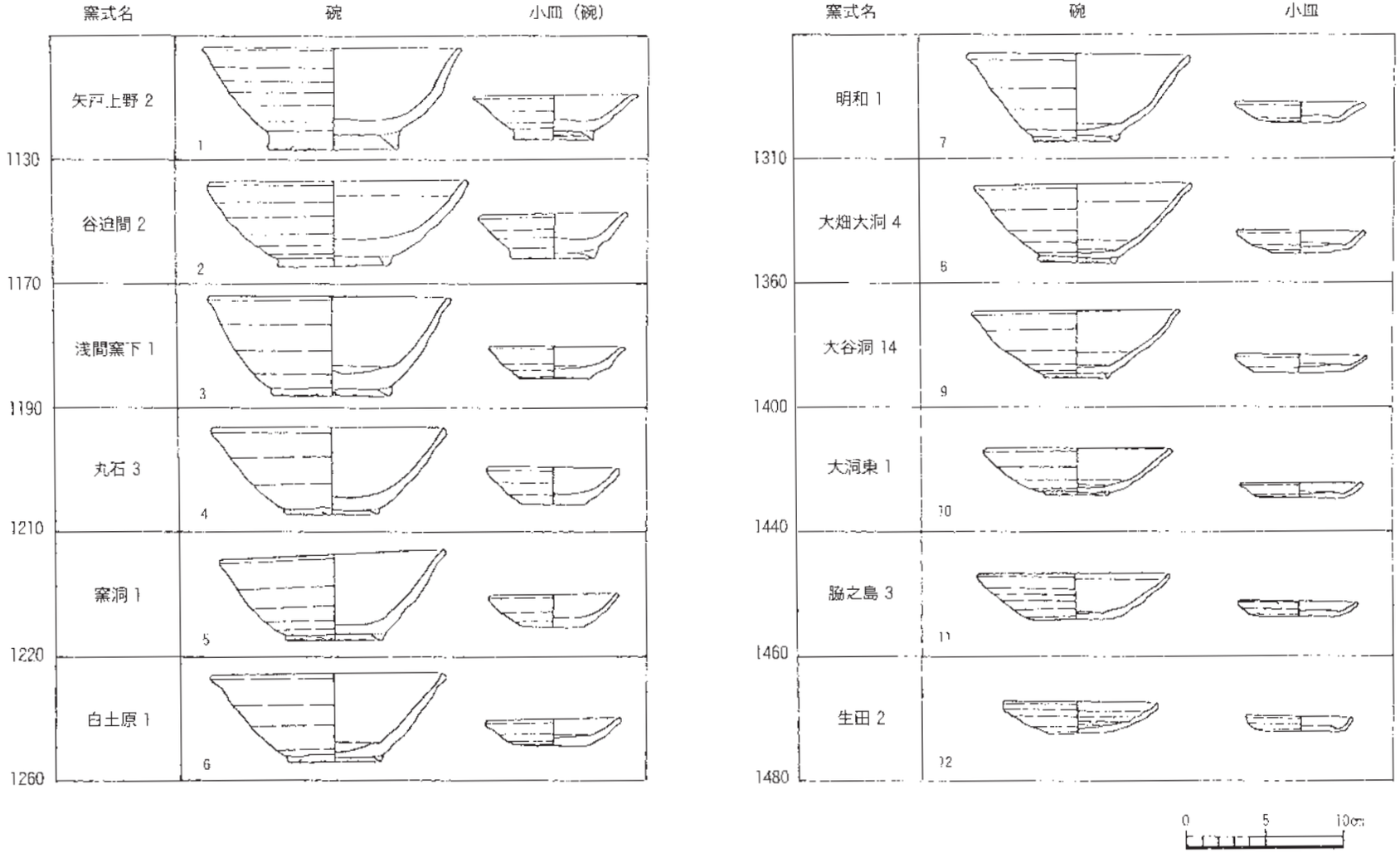
本章では、前章で指摘した中山１号窯跡出土の山茶碗類について紹介し、これを踏まえて東濃窯の主要製品である山茶碗・小碗・小皿及び無高台碗の分類・編年を行う。

（１）中山１号窯跡出土の山茶碗類

中山１号窯跡の山茶碗類は、その形状からａ～ｅ類、無高台の碗がａ･ｂ類、小皿がａ～ｄ類に分類できる。

第 11 表　東濃型山茶碗編年表

第９表　東濃型山茶碗編年表（山内 2008 より転載）



なお、有高台の碗はⅠ類、無高台の碗はⅡ類とする。

碗Ⅰａ類（第１図１・２）は、高台は底部外縁より内側に付けられ低くつぶれ、高台のナデ調整が粗雑なものが多い。体部は若干丸みを帯び、口縁部は丸く収められるものと角張るものがみられる。内面の底部と体部の境には明瞭な段をもち、底部内面にはコテナデ調整が及んでいない。底部内面の指圧痕、外面の板目状圧痕は認められない。口縁部のナデ調整は端部にのみ行われるものと、口縁部内外面にかけて行われるが端部の当たりが弱いものがみられる。器壁は底部が特に薄く、体部下方で厚くなり口縁部にかけてやや薄くなるものが多い。碗Ⅰｂ類（第１図３～７）は、全体の形状は碗１ａ類と類似するが、器高はそれより低いものが多く浅い形状である。内面の底部と体部の境に凹みが一周し、この部分以外の体部と底部にはコテナデ調整が行われる。碗Ⅰｃ類（第１図８）は、全体の形状は碗Ⅰｂ類と類似するが、器高と口径がやや小さくなる。内面の底部と体部の境は平滑で、前面にコテナデ調整が認められる。

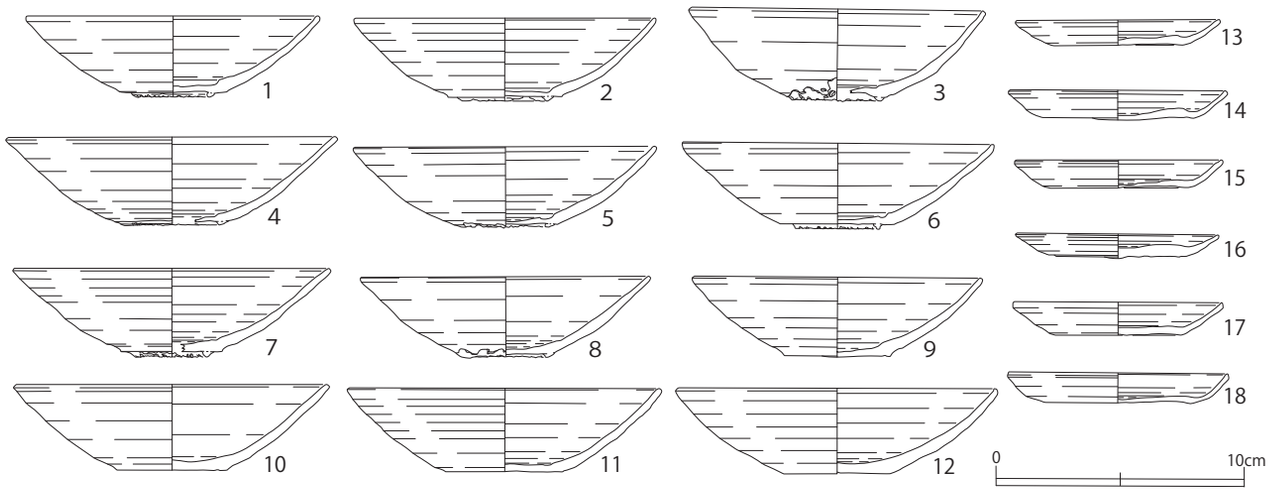
碗Ⅰｄ類（第１図９）は、底部外面外縁の内側を、棒状の工具で意図的に窪ませることで高台を整形した「寄せ高台」をもつ碗で、基本的な調整や形状は碗Ⅰｂ類と同様である。碗Ⅰｅ類（第１図 10）は、碗Ⅰｄ類と同様「寄せ高台」をもつ碗で、基本的な調整や形状は碗Ⅰｃ類と同様である。

碗Ⅱａ類（第１図 11）は、全体の形状・調整は碗Ⅰｂ類と同様であるが、口径・器高・底径ともそれより大きい。碗Ⅱｂ類（第１図 12）は、全体の形状・調整は碗Ⅰｃ類と同様であるが、口径・器高・底径ともそれより大きい。

小皿ａ類（第１図 13）は、体部がほぼ直線的に開き、口縁部は外反せず端部は丸く収められるか端部に面をもつ。内面の底部と体部の境には浅い凹みが一周し、この部分にはコテナデ調整が及んでいない。底部内面中央の指圧痕や外面の板目状圧痕は認められないものが多い。口縁部のナデ調整は端部にのみ行われる。器壁は、底部中央から外縁にかけて厚さを増し、体部は薄くなる。小皿ｂ類（第１図 14・15）は、体部は直線的に開き口縁部は外反しないか若干内湾気味である。口縁端部は丸く収められるものとやや尖り気味のものがみられる。内面の底部と体部の境はほぼ平滑である。底部内面中央の指圧痕と外面の板目状圧痕は認められない。口縁部のナデ調整は端部にのみ行われる。器壁は全体的に均一で薄いものと、底部中央が特に薄くなるものがみられる。小皿ｃ類（第１図 16）は、体部下方にわずかな丸みをもち、口縁部は若干外反し端部は尖り気味に仕上げられる。内面の底部と体部の境には浅い凹みが一周する。底部内面中央もやや凹み、静止指ナデ痕と外面の板目状圧痕がみられる。器高は低く浅い形状で、器壁は底部が特に厚く、口縁部にかけて薄くなる。

小皿ｄ類（第１図 17・18）は、体部が直線的に開くものと、体部下方から湾曲するように立ち上がるものがみられ、いずれも口縁部は外反せず上端が尖り気味に仕上げられる。内面の底部と体部の境は明瞭で、浅い凹みをもつものもある。口縁部のナデ調整は端部にのみ行われるものが多い。底部内面中央の静止指ナデ痕と外面の板目状圧痕は認められない。器壁は全体に均一で薄い。器高は小皿ａ～ｃ類より高く、やや大きく深い形状である。

なお、中山１号窯では床面が４面確認されており、各床面下には充填土が確認されている。碗Ⅰｃ類と小皿ｃ類は、床面下の第１～４次充填土には含まれず、最上面の第４次床面直上で確認される。このことから、これらが新しい要素を持っているといえよう。また、碗Ⅰａ類と碗Ⅰｂ類の前後関係は出土状況からは判断できないが、碗Ⅰｂ類のように内面の底部と体部の境に凹みが一周し、その部分にはコテナデ調整が及ばないという特徴をもつものについては、第９型式期に比定される大谷洞 14 号窯や第 10 型式期に比定される大畑大洞３号窯の資料にも確認される。また、同じ第 10 型式期に比定され、大畑大洞３号窯に後出する同２号窯の資料にはほとんど認められなかった。このことから、中山１号窯跡出土の碗Ⅰ類はａ類→ｂ類→ｃ類へと変遷するものと考えられる。



第１図　中山１号窯跡出土山茶碗類

（２）東濃型山茶碗の分類

碗は、有高台のⅠ類と無高台のⅡ類に大別可能で、碗Ⅰ類・碗Ⅱ類ともＡ～Ｍ類に細分される。なお、碗・小碗・小皿に共通する特徴として、内面にはコテナデ調整、外面にはロクロ目が認められ、口縁部にはナデ調整が行われ、Ⅰ類の高台端部には籾殻痕が認められる。

①碗Ⅰ類

Ａ類は、各分類のうち唯一高台端部に籾殻痕がほとんど認められないものである。高台は高く、断面三角形を呈し、端部はほとんど潰れない。体部は全体的に張りをもち、口縁部は外反するものが多いがほとんど外反しないものもある。口縁端部は丸く収められる。底部の器壁は厚く、体部から口縁部に向かうにつれ薄くなっていく。器高に対して口径が広く、深いが扁平な形状である。これは、従来のほうの木期の碗に該当する。

Ｂ類は、Ａ類よりやや高台が低くなるが、断面は三角形を呈する。体部は全体に張りをもつが、口縁部の外反度はやや弱く、端部は丸く収められる。底部の器壁は厚く、体部から口縁部に向かうにつれ薄くなっていく。器高に対して口径がやや広く、深いがやや扁平な形状である。これは、従来の矢戸上野期の碗に該当する。

Ｃ類は、高台が高く基部の幅も広い断面三角形ないし端部が潰れた台形を呈する。体部はやや弱い張りをもち、口縁部は外反し端部は丸く収められる。高台径も底部内面の径も広く扁平で、器壁は底部が特に厚く、体部から口縁部にかけてもあまり薄くならない。これは、従来の谷迫間期の碗に該当する。

Ｄ類は、高台はやや低く基部の幅は広い断面三角形を呈する。体部は丸みを帯びるものと直線的に開くものがみられ、口縁部は外反し、端部は面をもつものもある。口径に対して器高が低く扁平で、器壁はやや薄い。これは、従来の浅間窯下期の碗に該当する。

Ｅ類は、高台はやや低く基部の幅も広い断面三角形を呈する。体部は丸みを帯びるものと直線的に開くものがみられ、口縁部は外反し、端部は面取りされるものが多い。高台径に対して底部内面の径がやや広い。口径に対して器高が高くやや深い形状である。器壁は全体にやや薄くなるが、底部は厚い。これは、従来の丸石期の碗に該当する。

Ｆ類は、高台はやや小さく低く、基部の幅は広い断面三角形ないしそれが潰れた方形を呈する。体部は丸みを帯びるものと直線的に開くものがみられ、口縁部は外反し、端部は面をもつものもある。口径に対して器高が高くやや深い形状である。器壁は底部が厚く、体部は薄くなる。これは、従来の窯洞期前半の碗に該当する。

Ｇ類は、高台は低く、基部の幅はやや狭い断面三角形ないしそれが潰れた形状を呈する。体部は丸みを帯びるものと直線的に開くものがみられ、口縁部は外反し端部は丸く収められる。口径に対して器高が高い形状である。器壁は全体に均一でやや薄い。これは、従来の窯洞期後半の碗に該当する。

Ｈ類は、高台は低く小さく、基部の幅もやや狭い断面三角形ないしそれが潰れた方形を呈する。口縁部は外反し端部はやや肥厚し面をもつものが多い。内面の底部と体部の境が浅く凹むものもみられる。口径に対して器高が高いため深い形状である。器壁は底部も体部も薄い。底部内面に指圧痕、外面に板目状圧痕が認められるものもある。これは、従来の白土原期の碗に該当する。

Ｉ類は、高台は低く小さい断面三角形を呈する。体部は直線的に開くものと体部下方にやや丸みをもつものがみられ、口縁部は肥厚するものとほとんど肥厚しないものがあり、いずれも端部は丸く収められる。底部内面中央は指圧痕による凹みをもつものが多い。また、底部内面外縁には浅い凹みが一周する。口縁部内外面には指ナデ調整、底部外面には板目状圧痕が認められる。口径に対して器高が高く、他の分類と比べて最も深い形状である。これは、従来の明和期の碗に該当する。

Ｊ類は、高台は小さく断面三角形を呈し、体部はわずかに丸みをもって立ち上がるものが多い。口縁部は外反するものもみられるが、ほとんど外反しないか若干内湾気味となるものが大半である。底部内面中央が指圧痕により凹むものや、底部外面に板目状圧痕がみられるものが多い。底部内面外縁には浅い凹みが一周するものがほとんどである。また、口縁部の指ナデ調整は範囲が狭くなり、端部周辺にのみ施されるものが多い。これは、従来の大畑大洞期の碗に該当する。

Ｋ類は、高台は底部外縁より内側に付けられ低く潰れ、高台のナデ調整が粗雑なものが多い。体部は若干丸みを帯び、口縁部は外反するものもみられるが、大半は外反せず端部が丸く収められるものと口縁のナデ調整が甘く角張るものがみられる。内面の底部と体部の境には明瞭な段をもち、底部内面にはコテナデ調整が及んでいない。底部内面の指圧痕、外面の板目状圧痕は基本的に認められない。口縁部のナデ調整は端部にのみ行われるものと、口縁部内外面に行われるが端部の当たりが弱いものがみられる。器壁は底部が特に薄く、体部下方で厚くなり口縁部にかけてやや薄くなるものが多い。これは、従来の大谷洞期の碗に該当し、中山１号窯の碗Ｉａ類はこれに含まれる。

Ｌ類は、高台は底部外縁に付されるものが多いが、Ｋ類より粗雑なもので、高台の体をなさないものもみられる。体部から口縁部にかけて丸みをもって開き、口縁部は外反しない。口縁端部はナデ調整が甘く角張るものが多い。器高は低いものが多くやや浅い。内面の底部と体部の境には溝が一周し、この部分以外の体部と底部にはコテナデ調整が行われる。底部内面中央の静止指ナデ痕や外面の板目状圧痕は基本的に認められない。口縁部の指ナデ調整は端部周辺にのみ行われる。従来の編年には認められないが、中山１号窯の碗Ｉｂ類が該当し、主体的に生産されていることから今回新たに設定した。

Ｍ類は、全体の形状はＬ類と類似するが、高台はかなり粗雑でほとんど器高と口径が小さくなり、小ぶりで浅い形状である。内面の底部と体部の境は平滑で全面にコテナデ調整が行われる。また、大半は口縁部のナデ調整が甘く、端部は角張るものが多い。底部内面中央の静止指ナデ調整や外面の板目状圧痕は基本的に認められない。従来の大洞東期の碗が該当し、中山１号窯の碗Ｉｃ類はこれに含まれる。

②碗Ⅱ類

Ｃ～Ｍ類については、基本的な形状・調整は碗ＩＣ～Ｍ類とそれぞれ同様で、Ｋ類以外は特に第５ａ型式以降の窯で生産量は少ないながら大半の窯跡で確認されている。高台の有無以外は碗Ｉ類と同じ特徴をもつことから、Ｃ類は谷迫間期、Ｄ類は浅間窯下期、Ｅ類は丸石期、Ｆ類は窯洞期前半、Ｇ類は窯洞期後半、Ｈ類は白土原期、Ｉ類は明和期、Ｊ類は大畑大洞期、Ｋ類は大谷洞期、Ｍ類は大洞東期であると考えられ、中山１号窯の碗Ⅱｂ類は碗ⅡＭ類に含まれる。

また、碗ⅡＬ類は、中山１号窯の碗Ⅱａ類が該当し、同窯で主体的に生産される碗Ｉｂ類（碗ＩＬ類）

と同様の特徴を有していることから今回新たに設定した。なお、碗ⅡM類については全体の調整・形状は碗ⅠM類と共通するものの、前者の方が後者より一回り大きいサイズである。さらにその特徴をもつ碗は、従来の脇之島期の標式窯となっている脇之島３号窯で採集された資料にも多く含まれている。以下、碗Ⅰ類に類似する特徴がみられない碗ⅡN類及びⅡO類について詳述する。

N類は、底径・口径・器高ともM類より小さい。体部にやや丸みをもち、口縁部はほとんど外反しないかやや内湾する形状で、口縁端部はナデ調整が甘く角張るものが多い。内面にコテナデ調整が行われないが、ロクロ目の凹凸は比較的目立たないものである。底部内面中央の指圧痕と外面の板目状圧痕は認められない。従来の脇之島期の碗の一部に該当する。

O類は、体部から口縁部まで直線的に開くものと、体部に丸みをもち口縁部が内湾するものがみられ、いずれも口縁端部は内側に屈曲し尖り気味に仕上げられる。内面はロクロ目の凹凸が目立たないものもあるが、大半は顕著なものである。口縁部のナデ調整は端部にのみ行われる。器壁は、底部が特に厚く、体部から口縁部にかけても厚いものと、底部が厚く体部から口縁部にかけて徐々に薄くなるものがみられる。器高がやや高く碗の形状を保つものと、器高が低く浅い皿状となるものがみられる。器表面はこれまで大半を占めていた灰白色のものはほとんどみられず、灰色や暗灰色、暗赤灰色を呈するものが基本である。従来の生田期の碗に該当する。

（３）小碗・小皿の分類

小碗はＡ～Ｃ類に細分される。小皿は、形状的に小碗から連続しＡ～M類に細分される。

①小碗

Ａ類は、唯一高台端部に籾殻痕が認められないものである。高台は高く断面三角形を呈し、端部の潰れは小さい。体部は緩やかに湾曲し、口縁部は外反するものが多いがほとんど外反しないものもある。口縁端部は丸く収められる。底部は厚く、体部は口縁部に向かうにつれ薄くなっていく。従来のほうの木期の小碗に該当する。

Ｂ類は、高台はやや高く断面三角形を呈する。体部下方に張りをもち口縁部にかけて直線的に開き、端部は丸く収められる。器壁は全体に厚いが、底部が特に厚くなっている。器高はａ類とほとんど差はないが、口径や高台径がやや狭くなるものが目立つ。従来の矢戸上野期の小碗に該当する。

Ｃ類は、高台は低くやや基部の幅が広い断面三角形ないしそれが潰れた形状を呈する。口縁部は外反し、端部は丸く収められる。器高は低く、口径も狭くなるためｂ類より全体に小さい。従来の谷迫間期の小碗に該当する。

②小皿

Ａ類は、体部下方が外反するように立ち上がり、体部中央付近に稜を持つ。口縁部はやや外反し、端部は丸く収められるかやや尖り気味に仕上げられる。口径に対して器高が高いため深い形状である。器壁は全体に厚いが、口縁部は薄くなる。従来の浅間窯下期の小皿に該当する。

Ｂ類は、体部が直線的に開くものと丸みを帯びるものがあり、口縁部はほとんど外反せず端部が肥厚し面をもつものもある。器高はＡ類と比べ低く、やや深い形状である。器壁は全体にやや厚い。従来の丸石期の小皿に該当する。

Ｃ類は、体部が直線的に開くものと丸みを帯びるものがあり、口縁部はほとんど外反せず、端部は丸く収められる。口径に対して器高が低く、やや浅く扁平な形状である。器壁は全体にやや厚い。従来の窯洞期前半の小皿に該当する。

Ｄ類は、底径が広く、口縁部は若干外反し端部は丸く収められるものと面をもつものがある。口径に対して器高が低く扁平な形状である。器壁は底部に厚さが残るが、体部から口縁部にかけて薄くなるものが多い。従来の窯洞期後半の小皿に該当する。

E類は、体部がやや丸みを帯びるものが多く、口縁部はほとんど外反せず端部は丸く収められる。口径に対して器高が低く扁平な形状である。底部内面中央に指圧痕が施されるものが多い。器壁は全体に均一でやや薄いが、指圧痕により底部中央が特に薄くなっている。従来の白土原期の小皿に該当する。

F類は、体部下方から口縁部にかけて直線的に開き、口縁端部は肥厚し面をもつものが多い。内面の底部と体部の境が明瞭であるものや輪状の凹みをもつものがある。内面に施されるコテナデ調整は後者の凹んだ部分には及んでいない。器壁は底部中央から外縁にかけて厚さを増し体部で薄くなる。口縁部のナデ調整は端部周辺にのみ行われ、底部内面中央には指圧痕、外面には板目状圧痕が確認される。従来の明和期の小皿に該当する。

G類は、体部下方にやや丸みをもち、口縁部にかけて直線的に開く。口縁部は肥厚せず、端部は丸く収められるかやや尖り気味に仕上げられる。内面の底部と体部の境には浅い輪状の凹みをもつ。底部内面中央には指圧痕、外面には板目状圧痕が認められるものが多い。器壁は全体にやや薄く、口径に対して器高が低い、やや浅く扁平な形状である。従来の大畑大洞期の小皿に該当する。

H類は、体部がほぼ直線的に開き、口縁部は外反せず端部は丸く収められるか端部に面をもつ。内面の底部と体部の境には輪状の凹みをもち、この部分にはコテナデ調整が及んでいない。底部中央の指圧痕や外面の板目状圧痕は認められないものが多い。口縁部のナデ調整は端部にのみ行われる。器壁は、底部中央が薄く、そこから外縁にかけて若干厚さを増し、体部で再び薄くなるなるものや、全体に均一で薄く、底部中央のみ特に薄くなるものなどがみられる。従来の大谷洞期の小皿に該当し、中山1号窯の小皿a類はこれに含まれる。

I類は、体部は直線的に開き口縁部は外反しないか、体部から口縁部にかけて若干内湾気味である。口縁端部は丸く収められるものとやや尖り気味のものがみられる。内面の底部と体部の境は輪状の凹みをもつものとほぼ平滑なものがある。底部内面中央の指圧痕と外面の板目状圧痕は認められない。口縁部のナデ調整は端部にのみ行われる。器壁は全体に均一で薄いものと、底部中央が特に薄くなるものがみられる。従来の編年には認められないが、中山1号窯の小皿b類が該当し、主体的に生産されることから今回新たに設定した。

J類は、体部から口縁部にかけてほぼ直線的に開き、そこから丸みをもって立ち上がる。口縁部は外反せず、端部は丸く収められる。内面の底部と体部の境は輪状に浅く凹むかほぼ平滑で、底部中央の静止指ナデ痕や外面の板目状圧痕は認められない。器高はかなり低く、浅く扁平な形状である。器壁は底部が厚く体部から口縁部は薄い。従来の大洞東期の小皿に該当し、中山1号窯の小皿c類がこれに含まれる。

K類は、体部に丸みを帯びるものが多いが直線的に開くものもみられ、口縁部は外反せず端部は丸く収められるか上端が尖り気味に仕上げられる。内面の底部と体部の境は平滑なものと浅い輪状凹みをもつものがみられ、前者は器壁は全体に均一で薄く、後者は底部中央から外縁にかけて若干厚さが増すが、体部から口縁部にかけて再び薄くなる。J類と比べてひとまわり大きく、口径に対して器高が高く、深く扁平な形状である[註6]。従来の脇之島期の小皿の一部に該当し、中山1号窯の小皿d類がこれに含まれる。

L類は、体部から口縁部にかけて丸みを帯びるかほとんど直線的に開き、口縁部はわずかに肥厚し端部は丸く収められるか、ナデ調整が甘くやや角張るものである。内面の底部と体部の境は平滑なものと浅い輪状の凹みをもつものがあり、内面の静止指ナデ痕や外面の板目状圧痕は認められない。また、内面のコテナデ調整は行われずロクロ目が認められるが、凹凸は目立たず滑らかである。口縁部のナデ調整は端部にのみ行われる。器壁は底部が厚く体部から口縁部が薄くなるものと、底部中央がやや薄くそこから底部外縁にかけて厚さを増し、体部から口縁部にかけて若干薄くなるものがみられる。K類より

やや浅く扁平な形状である。従来の脇之島期の小皿の一部に該当する。

M類は、体部が直線的に開くものもあるが丸みを帯びるものが多く、後者には底部が柱状になるものも認められる。口縁部は、外反せず端部が丸く収められるものと、端部が肥厚し上端が内側に屈曲するものがある。内面の底部と体部の境には輪状の凹みが一周し、底部内面が柱状に突出するような形状となるものもみられる。底部内面の静止指ナデ痕や外面の板目状圧痕は認められない。内面のコテナデ調整は行われず、口縁部のナデ調整は端部のみみられる。器壁は底部が厚く体部から口縁部は薄い。器高はＬ類と同様で浅く扁平な形状であるが、口径・底径とも一回り小さい。また、器表面はこれまで大半を占めていた灰白色のものはほとんどみられず、暗灰色から青灰色を呈するものが基本である。従来の生田期の小皿に該当する。

（４）山茶碗類の編年

分類を行った山茶碗類について、型式ごとにセット関係を整理していく（第 12 表）。なお、各型式の年代観については 1994 年の藤澤編年に依拠し、2008 年の山内編年との年代的齟齬については第３節で触れる。なお、各型式の共伴関係は第 13 表の通りである。

①第３型式期後半（ほうの木期／ 12 世紀前葉）

碗ＩＡ類・小碗Ａ類が生産される。碗・小碗とも高い断面三角形の高台をもち、端部には籾殻痕が認められない段階である。体部全体に丸みを帯び、口縁部の外反度は強い。

②第４型式期（矢戸上野・谷迫間期／ 12 世紀中葉）

第４型式はａ・ｂ期に細分できる。第４ａ型式期（矢戸上野期）は、碗ＩＢ類･小碗Ｂ類が生産される。碗・小碗とも前段階より高台が小さく低くなり、当該機以降は高台端部に籾殻痕が認められるようになる。体部の丸みや口縁部の外反度は前段階よりやや弱くなる。

第４ｂ型式期（谷迫間期）は、碗ＩＣ類・碗ⅡＣ類・小碗Ｃ類が生産される。碗・小碗とも前段階より高台が低くなり、小碗は全体に小型化する。碗は体部の丸みは残るものの、口縁部の外反度は弱く、ほとんど外反しないものもみられる。また、口径に対して器高がやや低く扁平な形状となるものが多い。

③第５型式期（浅間窯下～窯洞期／ 12 世紀後葉から 13 世紀初頭）

第５型式は、ａ～ｄ期に細分される。第５ａ型式期（浅間窯下期）は、碗ＩＤ類・碗ⅡＤ類・小皿Ａ類が生産される。小碗から高台が消失し小皿化する段階である。碗は、第４ｂ型式期より高台が粗雑になり、口径に対してやや器高が高く深い形状となる。小皿は、小碗Ｃ類から高台が外れた形状で、体部中央に稜をもち深い形状を保っている。

第５ｂ型式期（丸石期）は、碗ＩＥ類・碗ⅡＥ類・小皿Ｂ類が生産される。前段階に比して碗の高台の作りがやや粗雑になり、器壁も若干薄くなる。小皿は第５ａ型式より浅く、体部中央の稜もみられなくなる。

第５ｃ型式期（窯洞期前半）は、碗ＩＦ類･碗ⅡＦ類･小皿Ｃ類が生産される。碗の高台径が狭くなり、器壁は底部が厚く体部が薄いものが多く、全体に小ぶりになる傾向をみせる。また、小皿は底径が広くなり、器高も低くなってやや扁平な形状となる。

第５ｄ型式期（窯洞期後半）は、碗ＩＧ類･碗ⅡＧ類･小皿Ｄ類が生産される。碗の高台が小さくなり、器壁が全体に均一でやや薄く、小皿は底径が広く扁平な形状である。

④第６型式期（白土原期／ 13 世紀初頭を除く前葉）

碗ＩＨ類・碗ⅡＨ類・小皿Ｅ類が生産される。碗は、底部内面の底部と体部の境に輪状の浅い凹みをもつものが多くみられる。碗・小皿とも底部内面中央に指圧痕が施されるものが一定量みられ、小皿はさらに扁平化が進む。

⑤第７型式期（明和期／ 13 世紀中葉）

碗ＩＩ類・碗ⅡＩ類・小皿Ｆ類が生産される。碗・小皿とも体部が直線的に開くものが主体となり、碗は口径に対して器高が高く最も深い形状となる段階である。内面の底部と体部の境は明瞭に屈曲するか、輪状の凹みをもつ。ほとんどの個体で底部内面の指圧痕と外面の板目状圧痕が確認される。また、第５c 型式から少量生産されていた、通常より一回り小さい碗が一定量焼成されるようになる。

⑥第８型式期（大畑大洞期／ 13 世紀後葉から 14 世紀前葉）

碗ＩＪ類・碗ⅡＪ類・小皿Ｇ類が生産される。碗は、前段階に比して高台および高台径が小さくなり、口径は維持するが器高が低く浅い形状となる。小皿も器高が低くなり、浅く扁平な形状となる。当該期も引き続き小型の碗が一定量生産される。

⑦第９型式期（大谷洞期／ 14 世紀中葉から後葉）

碗ＩＫ類・碗ⅡＫ類・小皿Ｈ類が生産される。碗は、底部内面が体部内面下端より一段下がり、当該部分にコテナデ調整が及ばずロクロ目を残す段階である。また、口縁部のナデ調整が粗雑になり、端部が角張るものが多くみられる。器高はやや低くなり、器壁は底部より体部の方が厚くなるものが多い。

⑧第 10 型式期（大洞東期／ 14 世紀末から 15 世紀前葉）

第 10 型式期は、中山１号窯跡で碗ＩＬ類が主体的に生産されており、内面の特徴から第９型式の碗ＩＫ類に後出し、且つ従来の第 10 型式の碗に先行するものと考えられることから、当該期をａ・ｂ期に細分し、従来の第 10 型式の碗はこの後半に位置付けられるものとする。

第 10a 型式期（大洞東期前半）は、碗ＩＬ類・碗ⅡＬ類・小皿Ｉ類が生産される。碗は、いずれも内面の底部と体部の境に輪状に溝が一周し、その部分にはコテナデ調整が及ばない。器壁は底部が薄く体部が厚いものが多く認められ、高台も小さく粗雑となり底部外縁より内側に付けられるものが多い。

第 10b 型式期（大洞東期後半）は、碗ＩＭ類・碗ⅡＭ類・小皿Ｊ類のセットに加え、小皿Ｊ類より一回り大きく深い形状の小皿Ｋ類が生産される。碗は、いずれも内面の底部と体部の境は平滑で、全面にコテナデ調整が行われるようになる段階である。碗ＩＭ類は前段階と比して底径が小さくなり、高台は底部外縁に付されるが、紐状で不正円形のものが多く、ナデ調整もかなり粗雑となる。器高も低く浅い形状である。

また、当該期には大畑大洞２号窯・同３号窯のように碗Ⅱ類がほとんど認められず碗ＩＭ類が主体となる窯と、脇之島３号窯のように碗ⅡＫ類が主体で碗Ｉ類がほとんど認められない窯、中山１号窯のように両者が数的に拮抗する窯が混在しており、有高台と無高台の生産比率が逆転する過渡期ともいえる。

⑨第 11 型式（脇之島・生田期／ 15 世紀中葉から後葉）

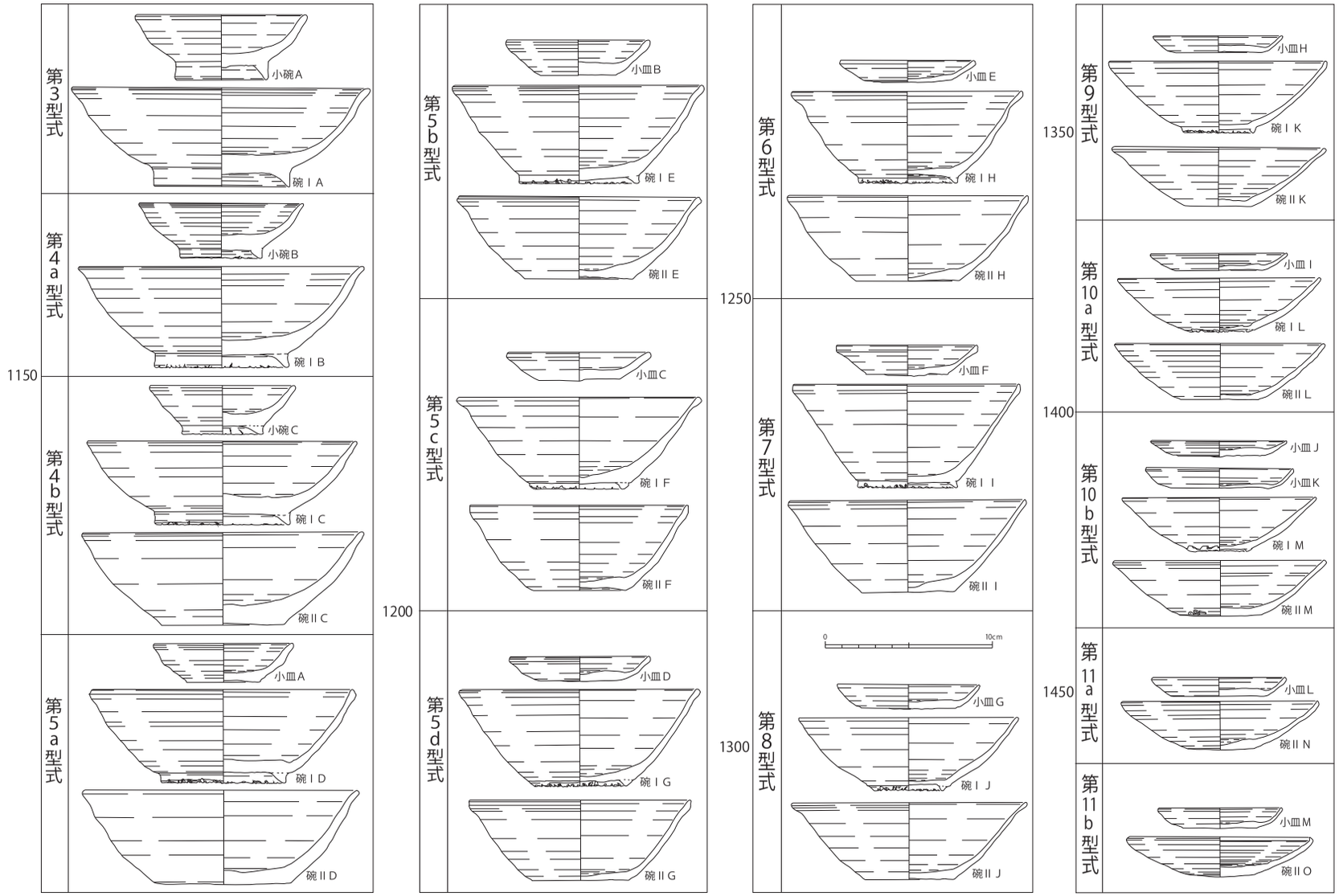
第 11 型式期は、ａ・ｂ期に細分される。第 11a 型式期（脇之島期）は、碗ⅡＮ類・小皿Ｌ類が生産される。碗は、内面にはコテナデ調整が行われないが、ロクロ目の凹凸はそこまで目立たないものが多い。小皿にもコテナデ調整が行われないものが認められる。なお、従来の第 11 型式前半期の標式窯とされてきた脇之島３号窯の採集資料をみると、碗ⅡＭ類・碗ⅡＭ類・小皿Ｊ類・小皿Ｌ類が確認されることから第 10 ｂ型式期から第 11 ａ型式期に比定されるものと考えられる。

第 11b 型式期（生田期）は、碗ⅡＯ類・小皿Ｍ類が生産される。碗・小皿とも内面のロクロ目が顕著となり、小皿Ｍ類は碗ⅡＭ類と同様に口縁端部が内側に屈曲するものも認められ、食膳具としての機能をほとんど失っているようである。また、色調も第３型式から第 11a 型式まで主体を占めていた灰白色ではなく、ほとんどが青灰色や暗灰褐色などを呈するようになる。

（５）山茶碗の形態における画期

以上を踏まえた結果、東濃型山茶碗生産のなかには大きく三つの画期が認められる。第１の画期は小碗が高台を失い小皿化する第５ａ型式期、第２の画期は有高台碗が姿を消し無高台碗が主体となり内面

第 12 表　東濃型山茶碗編年表



第 13 表　東濃型山茶碗Ⅱ類出土状況

窯跡名	碗Ⅰ類					碗Ⅱ類					小碗		小皿			
	C	D	E	F	G	C	D	E	F	G	B	C	A	B	C	D
大森笹洞５号窯	○					○						○				
北小木萱原４号窯	△	○	△				○				△		○	△		
深山１号窯		○	○	△			○	○					○	○		
浜井場１号窯		○					△						○			
大針塩井戸１号窯		○	○	○			○	○	○				○	○	○	
松阪３号窯		○	○				○	△					○	○		
住吉２号窯		○	△				△	△					○	△		
住吉14号窯		○					○						○			
大針塩井戸２号窯		△	○	△				○					△	○	△	
大藪西山２号窯			○					△						○		
北小木大上５号窯			○	○				○						○		
北小木萱原２号窯			○	○				○	○					○	○	
北小木萱原６号窯			○	△				○						○	△	
一之洞19号窯			○					○						○		
一之洞20号窯			○	○				○	○					○	○	
北丘18号窯			○	○					○					○	△	
北丘16号窯			○	△				○								
松阪４号窯			○	△				△						○	△	
松阪１号窯			○					△						○		
大原８号窯			○					○						○		
明和７号窯			○	△				○						○	△	
明和８号窯			○					○						○		
住吉５号窯			○				○							○		
住吉６号窯			○	△			○	△						○	△	
丸石10号窯			○	○				○						○	○	
窯洞１号窯			○	○				○	○					○	○	
北小木大上３号窯			△	○	△				○	△					○	△
北小木萱原７号窯			△	○				△	○					△	○	
二之洞３号窯			△	○					○					△	○	
大谷洞13号窯			△	○					○					△	○	
大針台５号窯				○	○				○	△					○	○
北小木大上９号窯				○	○				○	○					○	○
北小木大上１号窯				○					○						○	
北小木大上４号窯				○	○				○	○					○	○
北小木萱原５号窯				○					○						○	
畝欠田２号窯				○	○				○	○					○	○
二之洞２号窯				○	△				○						○	△
二之洞１号窯				○	△				○	△					○	△
神明洞１号窯				○	△				○						○	△
神明洞９号窯				○	△				○						○	△
神明洞10号窯				○	○				○						○	○
大谷洞12号窯				○	○				○						○	○
大谷洞21号窯				○					○						○	
大谷洞６号窯				○	△				○						○	△
大谷洞７号窯				○	○				○	○					○	○
大谷洞３号窯				○	○				○	○					○	○
大谷洞44号窯				○	△				○						○	△
大谷洞45号窯				○	○				○	○					○	○
大谷洞19号窯				○	○				○	○					○	○
松阪６号窯				○	△				○						○	△
松阪７号窯				○					○						○	
明和28号窯				○	○				○	△					○	○
明和19号窯				○					○						○	
明和29号窯				○					○						○	
丸石９号窯（新）				○					△						○	
北小木大上７号窯				△	○					○					△	○
北小木大上２号窯				△	○				△	○					△	○
北小木萱原１号窯				△	○					○					△	○
北小木萱原３号窯				△	○					○					△	○

窯跡名	碗Ⅰ類								碗Ⅱ類										小皿										
	F	G	H	I	J	K	L	M	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
神明洞11号窯	△	○							○	○									○	○									
大谷洞11号窯	△	○	△							○									△	○									
明和36号窯	△	○							△	○									△	○									
明和15号窯	△	○								○									△	○									
明和23号窯	△	○								○									△	○									
北小木大上10号窯		○	○							○	○									○	○								
松阪２号窯		○								○										○									
小名田西山１号窯		○								○										○									
小名田西ヶ洞２・３号窯		○								○										○									
土岐口西山３号窯		○	○							△										○	△								
北小木大上８号窯		△	○							○	○									△	○								
浜井場３号窯		△	○							△										△	○								
大谷洞１号窯		△	○	○							○									△	○	○							
下石西山２号窯		△	○							○	△									△	○								
一之洞16号窯			○								○										○								
一之洞21号窯			○								○										○								
北丘13号窯			○	△							○										○	△							
北小木大上12号窯			○								○										○								
小名田別山７号窯			○	○							○	○									○	○							
北丘19号窯			△	○							△	○									△	○							
畝欠田１号窯				○								○										○							
畝欠田３号窯				○								○										○							
大谷洞２号窯					○	△							○										○	○					
松阪５号窯				○	○								△									○	○						
松阪８号窯				○								○										○							
細峯３号窯				○								○										○							
高田岩ヶ峠１号窯				○								○										○							
高田岩ヶ峠２号窯				○								○										○							
北小木大上11号窯				○								○										○							
北小木大谷洞31号窯				○								○										○							
北小木大谷洞32号窯					○	△							○										○	△					
富士見１号窯				○								○										○							
明和１号窯				○								○										○							
明和22号窯				○								○										○							
高田東山１号窯					○								○										○						
高田東山２号窯				○								○										○							
高田東山３号窯				○	△							○										○	△						
半ノ木Ｅ１号窯				△	○								○									△	○						
半ノ木Ｅ２号窯				○								○										○							
下半田川Ｃ１号窯				○	○							○	○									○	○						
下半田川Ｃ２号窯					○								○										○						
小名田別山１号窯				○	○							○	○									○	○						
小名田別山２号窯																	△	○										△	○
小名田別山３号窯				○	○							△	○									○	○						
小名田別山４号窯					○								○										○						
小名田別山５号窯					○								○										○						
小名田別山６号窯					○								○										○						
大畑大洞１号窯				○	○							○	△									○	○						
大畑大洞２号窯							△	○							△	○									△	○			
大畑大洞３号窯							○	○							○	○									○	○			
大畑大洞４号窯					○	△							○										○	△					
大谷洞16号窯				△	○								○									△	○						
北小木大谷洞15号窯					△	○							△										△	○					
北小木大谷洞14号窯						○	○	△						○	○									○	○	△			
中山１号窯						△	○	○							○	○								△	○	○	○		
東町１号窯																○	○										○	○	
東町２号窯																	△	○										△	○
脇之島３号窯（採集）						△	△								○	○										○	○		
生田２号窯（採集）																		○											○

にコテナデ調整が行われなくなる第 11 a 型式期、第３の画期は内面にロクロ目による意図的な凹凸が形成され供膳具としての機能を失う第 11 b 型式期である。

第１の画期については先学の通りであるが、第２の画期については第 10 型式期の山茶碗類を細分し、Ⅰ類とⅡ類の併行関係を求めた結果明らかとなった。これにより従来の編年では第 11 型式に有高台の碗から高台が失われ無高台化するものと認識されてきたが、碗Ⅰ類の高台が失われるのではなく第 10 b 型式期に碗Ⅱ類の生産量が増加し、第 11 a 型式期には碗Ⅰ類が消滅し無高台碗が主体となることが判明した。第 11 a 型式期の碗の器高は口径に対して低く、碗というより皿に近い形状となり内面のコテナデ調整が行われなくなるが、ロクロ目は比較的目立たないものである。

しかし、第 11 b 型式期には内面のロクロ目が顕著になり、明確な凹凸が螺旋状に形成される。口縁端部も内側に折り返され色調も暗灰色・青灰色などに変化するなど、もはや食器としての機能を失っているものと考えられる。なお、第 11 b 型式期にみられる碗の特徴は、大窯１期の製品に含まれる焼締の灯明皿と共通することから、当該期の山茶碗にはすでにこれと同等の機能が求められていたものと推測される。

第２節　小形壺瓶類の編年

東濃窯に隣接する瀬戸窯は国産の施釉陶器である古瀬戸を生産した窯業地として知られているが、古瀬戸成立期前後の 12 世紀後葉から 13 世紀初頭にかけては、東濃窯や美濃須衛窯、猿投窯、常滑窯などでも四耳壺をはじめとする小形壺瓶類の生産が行われている。

筆者は、藤澤論文・山内論文を参考に、中世美濃国産の初期四耳壺をＡ類（猿投型）・Ｂ類（美濃須衛型）・Ｃ類（東濃型）・Ｄ類（瀬戸型）・その他（藤澤分類のＢ型・同Ｃ型の一部）に分類し、美濃須衛窯や恵那中津川窯、瀬戸窯の生産状況を加味して各系統の生産状況を整理した（山本 2014）。また、水注や瓶子についても四耳壺と同様にＡ類～Ｄ類に大別し、系統ごとの成立過程を考察している（山本 2017）。ここでは、山本論文に沿って系統ごとに分類・変遷を紹介する。なお、現在四耳壺Ｄ類に伴うような水注Ｄ類や、四耳壺Ａ類に伴うような瓶子Ａ類の生産は認められず、水注はＡ類・Ｂ類・Ｃ類、瓶子はＢ類・Ｃ類・Ｄ類が生産されるのみである。

（１）東濃窯産小形壺瓶類の分類

①Ａ系統

四耳壺は、粘土紐を２本貼り合わせた紐耳が付され、口縁部は逆Ｊ字状に仕上げられる。頸部・肩部・胴部に沈線が巡るもの、頸部・肩部に沈線が巡るもの、肩部にのみ沈線が巡るものがある。内面の底部外縁から胴部内面にかけてはロクロ目が認められ、原則として無釉である。頸部が短く外傾し、口縁端部と頸部の隙間がやや広いものをＡ１類、体部内面の粘土紐輪積み痕が明瞭で器壁が厚く全体にやや小ぶりなものをＡ２類とする。頸部や口縁部の形状から、Ａ１類はＡ２類に先行すると考えられる。Ａ１類は第５ａ型式期、Ａ２類は第５ｂ型式期の山茶碗を伴い、古瀬戸草創期の四耳壺や猿投窯で生産された四耳壺に類似する。

四耳壺Ａ類に伴う水注Ａ類は、胴部上方に張りをもち、頸部付け根よりやや下方に突帯が巡り、付け根との間に刺突痕がみられるもので、把手の付け根も確認されるが把手自体は残念ながら出土していない。頸部はやや外傾気味に立ち上がり、口縁部は外反し端部は丸く収められ、器壁は厚い。第５ｂ型式期の山茶碗と四耳壺Ａ２類を伴う。

②Ｂ系統

四耳壺は、ヘラ刻みによる沈線をもつ板状の耳が付され、耳部直下に一条の沈線が巡る。内面の底部中央から胴部にかけてロクロ目が認められ、紐輪積み痕は不明瞭である。美濃須衛窯において生産され

た中国の白磁四耳壺に酷似した、所謂美濃須衛型四耳壺である。美濃須衛窯で生産され、口縁部が逆Ｊ字状のものをＢ１類、玉縁状のものをＢ２類、東濃窯で生産され、玉縁状のものをＢ３類、灰釉が外面全面に刷毛塗りされるものをＢ４類とする。Ｂ４類以外は原則として無釉である。口縁部や胴部の形状、施釉の有無から、Ｂ１類→Ｂ２類→Ｂ３類→Ｂ４類という変遷を辿るものと考えられる。Ｂ３類は第５ｄ型式期・第６型式期、Ｂ４類は第６型式期の山茶碗を伴う。

水注は３形態確認され、いずれも注口の付け根が菊座となる。美濃須衛窯で生産が確認されるものもある。一つ目は、高台が高く断面三角形を呈し、体部は球状に近い形状となる。頸部は外反しながら立ち上が、口縁部は受け口状となり端部は丸く収められる。胴部上方と頸部の付け根に串による沈線が巡り、注口はＳ字ないしゆるいＳ字を描く。無釉で、把手はつかないが大藪迫間洞２号窯では、四耳壺と同じく串による沈線をもつ把手が認められる。美濃須衛窯の水注に酷似し、第５ｄ型式期の山茶碗と四耳壺Ｂ３類を伴う。

二つ目は、高台が高く端部が潰れた断面三角形を呈し、体部は徳利型で口縁端部は欠損しているが、頸部上方で強く外反していることからおそらく受け口状となる。外面全面に灰釉が刷毛塗りされ、北小木大上８号窯で確認される。第６型式期の山茶碗と四耳壺Ｄ類を伴う。

三つ目は、高台が高く断面方形を呈し、体部は全体に丸みをもつ。頸部はやや内傾しながら立ち上がり、上方で強く外反した後上方に屈折し、端部は尖り気味に仕上げられる。胴部上方と頸部の付け根に串による沈線が巡り、注口は緩いＳ字を描く。把手はもたず、外面全面に灰釉が刷毛塗りされ、浜井場３号窯で確認される。第６型式期の山茶碗と四耳壺Ｂ４類を伴い、ともに全面施釉である。

また、瓶子も四耳壺・水注と同様に東濃窯・美濃須衛窯で生産が確認される。所謂締腰形瓶子で、四耳壺Ｂ類と同様に胴部上方と肩部に櫛による沈線が施される。口縁部は外反し、端部は玉縁状に仕上げられる。内面の粘土紐輪積み痕は明瞭で、無釉である。第５ｄ型式期の山茶碗と四耳壺Ｂ３類を伴う。

③Ｃ系統

四耳壺は、型による突線をもつ板状の耳が付され、内面の底部外縁に強いナデが入り、そこからロクロ調整が行われる。原則として無文である（註7）。耳部の形状や灰釉が施されるという大まかな特徴は古瀬戸前期段階の四耳壺に類似するものの、全体の形状や成形技法が異なることから瀬戸窯ではなく東濃窯独自のものであると考えたい。東濃窯のほか、恵那中津川窯でも生産が確認される。東濃窯で生産され、薄い玉縁状のものをＣ１類、口縁部の指ナデ調整が甘く下端と頸部の間に隙間ができるものをＣ２類、恵那中津川窯で生産され逆Ｊ字状を呈するものをＣ３類、分厚い玉縁状のものをＣ４類とする（註8）。Ｃ１類・Ｃ２類は外面全面に灰釉が刷毛塗りされる。口縁部の形状から、Ｃ１類→Ｃ２類→Ｃ３類→Ｃ４類という変遷を辿るものと考えられ、Ｃ１類は第５ｄ型式期、Ｃ２類は第６型式期の山茶碗を伴う。

水注は、２形態確認される。一つ目は、把手をもたないもので、高台は断面方形ないしその端部が潰れた形状を呈するものと、高台がやや細い断面台形を呈するものがみられる。胴部は球状或いはやや肩を張る形状のもの、胴部上方が張り頸部中央から口縁部にかけて外反するように開くもの、胴部上方が張り頸部がやや短く立ち上がるものなどがあり、口縁部は受け口状である。注口は直線的に立ち上がり上方で外に折れる。第５ｃ型式期および第５ｄ型式の山茶碗と四耳壺Ｃ１類を伴う。

二つ目は、把手をもつもので、平底のものと断面方形を呈する有高台のものがある。胴部は扁平な球状で、頸部上方で外に折れる部分の内面には稜をもち、口縁部は受け口状となる。口縁部は内湾し端部は丸く収められるかやや尖り気味に仕上げられる。頸部上方から胴部中央にかけて型による突線をもつ把手を付される。第５ｄ型式期および第６型式期の山茶碗と第６型式期の山茶碗と四耳壺Ｃ２類を伴う。

瓶子は、頸部が内傾気味に立ち上がり、口縁部は直立するものと外反するものがあり、端部は丸く収められる。底部には幅が狭く低い高台が付され、胴部は直線的に立ち上がり、胴部上方は丸く膨らむ。

外面全面に灰釉が刷毛塗りされる。高台が付される点において、平底の美濃須衛型や古瀬戸の瓶子よりも忠実に青白磁の梅瓶を模倣しているといえる。第５ｄ型式期の山茶碗・四耳壺Ｃ２類・水注Ｃ１類を伴う。

④Ｄ系統

四耳壺は、耳部はＣ類と同様で外面には灰釉が刷毛塗りされる。また、胴部内面にヘラ状工具による掻き上げ痕が認められる。耳部の形状や胴部内面の調整方法なども瀬戸窯のものと全く同一であることから、古瀬戸工人によって生産された所謂瀬戸型の四耳壺である。Ｄ類は、第６型式期の山茶碗を伴い、古瀬戸編年において前Ⅱａ期に比定される。

瓶子は、口縁部が端部までやや外傾気味に素直に開き、端部はほとんど肥厚せず丸く収められ、外面には灰釉が刷毛塗りされる。第６型式期の山茶碗を伴う。古瀬戸前Ⅱａ期に比定されるが、典型的な形態とは言い難い。なお、四耳壺Ｄ類・瓶子Ｄ類に伴う水注Ｄ類は現在確認されていない。

⑤その他

東濃窯では、四耳壺Ａ類および四耳壺Ｃ類に類似するが、上記の分類基準には一致しないものが確認されている。四耳壺Ｃ１・Ｃ２類を生産した土岐口西山３・４号窯では、肩部に櫛による４状一組の沈線をもつ四耳壺が確認されている。耳部は欠損しておりその形状は不明で、Ｃ類同様外面に灰釉が刷毛塗りされるが、肩部に沈線が巡ることからＡ類の範疇に含め、仮にＡ３類とする。また、四耳壺Ａ２類を生産した丸石８～11号窯では、無釉無紋で口縁端部が尖り、頸部との隙間が広い四耳壺の破片が確認される。耳部は欠損しており残念ながらその形状は不明である。Ａ類同様無釉であるが、無文であることからＣ類の範疇に含め、ここでは仮にＣ０類としておく。四耳壺Ａ３類とＣ０類は第５ｃ型式期の山茶碗を伴う。

大谷洞７号窯では、上記の分類に当てはまらない四耳壺がごく少数生産されている。これは、粘土紐輪積み技法と粘土紐巻き上げ技法を組み合わせて成形しており、口縁部も逆Ｊ字状ではあるが、端部の器壁が明らかに薄く異質である。第５ｃ型式期の山茶碗を伴う。

（２）東濃窯産小形壺瓶類の編年（第14・15表）

①第５ａ型式期

四耳壺Ａ１類のほか、胴部の上方・肩部・中央に突帯文をもつ大形四耳壺や、水無瀬中学校窯に類例がみられる火舎、三筋文などの生産も確認される。東濃窯において最も早い段階に生産が開始される四耳壺Ａ類は、瀬戸窯や猿投窯、常滑窯にも同様のものが確認される。全体の形状や成形技法はそれぞれであるが、紐耳が付される点、三筋文が施される点、無釉である点は共通しており、各地で同時多発的に生産されたと考えられる。

②第５ｂ型式期

四耳壺Ａ２類に加えて水注Ａ類の生産が行われるが、前段階で生産が確認された大形の四耳壺や火舎、三筋壺などは姿を消す。

③第５ｃ型式期

四耳壺Ａ３類・四耳壺Ｃ０類・水注Ｃ類に加え、大谷洞７号のような特殊なタイプの四耳壺が生産される。出土数が少ないため詳細を述べることは避けるが、丸石８～11号窯で当該期に無釉無文の四耳壺の生産が確認される点や、土岐口西山３・４号窯で沈線が施される全面施釉の四耳壺が確認される点から、仮に前者をＣ類の最古型式、後者をＡ類の最新型式と捉えた場合、Ａ系統を生産した工人がその生産を終了するのと同時期にＣ系統の生産に着手したと推測することができる。

④第５ｄ型式期

四耳壺Ａ類がみられなくなり、四耳壺Ｂ２類・瓶子Ｂ類・水注Ｂ類・四耳壺Ｃ１類・水注Ｃ類・瓶子

Ｃ類が生産される。Ｂ系統はいずれも無釉で、美濃須衛窯産のものと酷似することから工人の移動による直接的な技術伝播によるものである可能性が高い。また、第５ｃ型式期から登場するＣ系統は、東濃窯のなかで最初に全面施釉が施され、古瀬戸製品に類似するものである。ただし、その作りの稚拙さから工人移動による直接的な技術伝播によるものではなく、東濃窯の工人が古瀬戸製品や輸入陶磁を模倣したものと捉えたい。特に、高台をもつ瓶子Ｃ類については、古瀬戸のモデルである青白磁梅瓶そのものの特徴を有していることから後者を模倣したことは明らかで、Ｃ系統が一概に古瀬戸を模倣したものとはいい切れない要因の一つとなっている。

⑤第６型式期

四耳壺Ｂ４類・水注Ｂ類・四耳壺Ｃ２類・水注Ｃ類に加え、四耳壺Ｄ類・瓶子Ｄ類の生産が行われる。Ｂ系統は、成立期である第５ｄ型式には無釉であったのに対し、当該期には形状はやや退化しているが全面に灰釉が施されている。新しく加わったＤ系統は、形状や成形技術等が瀬戸窯のものと酷似し全面施釉されることから、古瀬戸工人が東濃窯に移動し生産したものと考えられる。また、Ｂ系統の製品は原則として無釉であるにも拘わらず、Ｄ類と同じ第６型式期に生産される四耳壺Ｂ４類と水注Ｂ類はいずれも外面全面に灰釉が施されるという点で、古瀬戸工人によるＤ系統の生産がＢ系統の生産に影響を与えた可能性も低くはないだろう。Ｃ系統は引き続き四耳壺と水注の生産が行われるが、瓶子は現在のところ確認されていない。また、当該期の水注Ｃ類は基本的に把手をもち、有高台のものと無高台のものがみられる。なお、第６型式以降はＣ系統の生産が東方の恵那中津川窯に移って継続するが、東濃窯における小型壺瓶類はほぼ生産を停止し、これ以降は山茶碗類の生産に専念するようである[註9]。

（３）小形壺瓶類の生産における画期

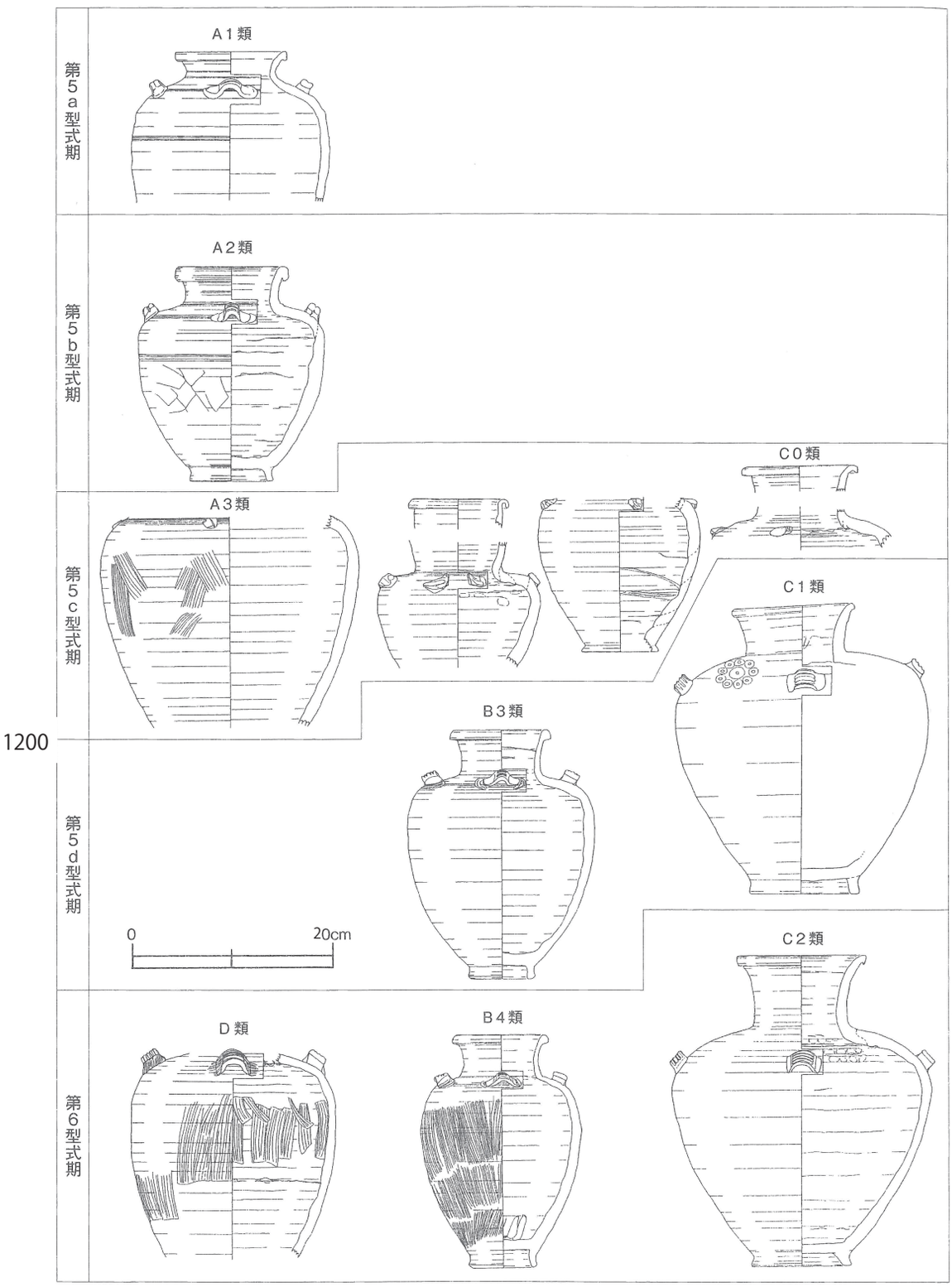
東濃窯における小形壺瓶類の生産は短期間ではあるが、三つの画期が見いだせる。第１の画期は、猿投窯・瀬戸窯などでも確認されている紐耳をもつ三筋文を施された無釉Ａ系統から、型耳をもつ無文で全面施釉された古瀬戸の模倣であるＣ系統の生産に切り替わる第５ｃ型式期である。第２の画期は、引き続きＣ系統の生産一方で、美濃須衛窯から工人移動による直接の技術導入を受けてＢ系統の生産が始まる第５ｄ型式期である。第３の画期は、瀬戸窯から工人移動による直接の技術導入を受けてＤ系統の生産が行われ、これに影響を受けてＢ系統の製品に全面施釉が行われるようになる第６型式期である。

東濃窯では複数系統が確認されることからもわかるように、工人の誘致による外部からの技術を段階的に受け入れている様子が窺える。また、Ｃ系統については第５ｃ型式期から第６型式期にかけて継続的に生産していることから、美濃須衛窯・瀬戸窯から直接技術導入を受けた窯と、間接的な技術によって生産を行なった窯があることは明白である。そして、第７型式期以降は東濃窯で小形壺瓶類の生産はほとんど行われなくなり、Ｃ系統のみが東方の恵那中津川窯に場所を移して少量生産されるのみとなる。

ところで、東濃窯では第５・６型式期に小形壺瓶類の生産が行われる以外は基本的に山茶碗専焼窯であるが、古瀬戸後Ⅳ期古段階（15 世紀中頃）になると瀬戸窯における古瀬戸工人の拡散に伴い、東濃窯に古瀬戸工人が移動し古瀬戸の生産を行うようになる（藤澤 2004）。第 10 ｂ型式期から第 11 型式期に比定される東町１・２号窯跡では、搬入品と目される古瀬戸後Ⅳ期の平碗や天目茶碗が出土しており、山茶碗工人と古瀬戸工人の生産組織が融合せずに瀬戸窯から新たに施釉陶器生産技術が導入されたことを示すものとされている（若尾 1989）。

瀬戸窯の施釉陶器生産の直接的技術導入は『美濃の古陶』でも指摘されているが、藤澤氏によれば古瀬戸工人は、続く後Ⅳ期新段階で大半が再び瀬戸窯へ戻り、直後の 15 世紀末には大窯が成立するという（藤澤 2004）。昔田窯で出土した古瀬戸後Ⅳ期段階の製品には、器表が青灰色を呈し内面に螺旋状の突帯が巡るという東濃型山茶碗第 11 ｂ型式期の特徴を引き継ぐ灯明皿が含まれ、古瀬戸工人が瀬戸窯に帰還する際一部の東濃型山茶碗工人がこれに追従した可能性を示すものである（藤澤 2004）。

第 14 表　東濃窯産初期四耳壺編年表（山本 2017 より転載）



第 15 表　東濃窯産初期水注・瓶子編年表（山本 2017 より転載）

第３節　専用蓋の編年

本章の冒頭で少し触れたが、東濃型山茶碗を焼成した窯では山茶碗類を重ね焼く際に、降灰を防ぐ目的で最上段に蓋を被せることがある。蓋として使用されるものには、本来は製品として作られた有高台あるいは無高台の碗を蓋として転用する場合と、初めから専用蓋として作られた場合がある。専用蓋は、形状・調整からして明らかに蓋と認識できるもので、他の窯業地では山茶碗焼成に伴う専用蓋はおろか東濃窯でいう無高台碗もほとんど確認されていない。この専用蓋は東濃型山茶碗生産の特徴のひとつといえようが、出現時期や変遷などはほとんど明らかにされていない。ここでは、専用蓋の大まかな分類を行いその変遷を追うとともに、「文永三年」の刻銘をもつ蓋の年代的位置付けを行う。

（１）窯道具の蓋に関する研究史

田口氏は、丸石期から最末期まで焼成した碗と同じものや無高台のものを蓋として被せてたものと認識している（田口 1981）。さらに、西ヶ洞１号窯跡出土の無高台碗のうち製品と判断されるのはわずか５％で、ほとんどが外面に自然釉がかかり４割は焼成前に製品価値を失った破損品であったことから、無高台碗は降灰防止の蓋として窯道具に転用されたものと推定している（田口 1985）。

山内氏は、「文永三年」銘の蓋が出土した小名田小滝９号窯の専用蓋を器形・法量値から大きく四つに分類している（第２図、山内 1993）。なお、小名田小滝１・９号窯は灰原及び９号窯焼成室部分のトレンチ調査が行われ、灰原部分の下層は９号窯、中・上層は１号窯の遺物が多く含まれるという。前者は第６・７型式期、後者は第８型式期に比定されている。

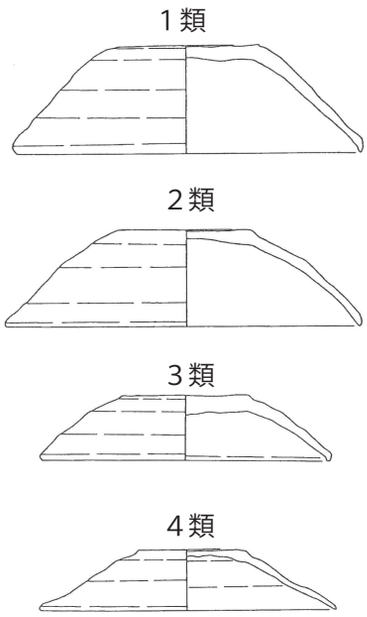
蓋１類は、口径 13.7cm ～ 14.3cm、器高 4.2cm ～ 4.9cm、底径 5.4cm ～ 5.9cm で、体部全体が弱く張るか直線的に開き、口縁部はほとんど外反しない。天井部内面中央には渦巻き状の小突起が残り、碗のような静止指ナデ痕や指圧痕はみられない。天井部の器壁は厚く扁平な形状である。灰原最下層から出土することから小名田小滝９号窯に帰属し、紀年銘資料もこれに含まれる。蓋２類は、口径 13.0cm ～ 14.0cm、器高 3.8cm ～ 4.3cm、底径 5.2cm で、体部全体に張りをもつものが多く、口縁部はほとんど外反しないものが多い。蓋１類より器高が低く、器壁は全体に薄く仕上げられている。灰原中・上層で多く出土することから、１号窯に帰属するものである。

蓋３類は、口径 11.4m、器高 2.6cm、底径 5.0cm と小形で、蓋１類と同様天井部の器壁は厚く、扁平な形状である。灰原最下層から出土することから、９号窯に帰属するものである。蓋４類は、口径 10.7cm ～ 12.9cm、器高 1.3cm ～ 2.8cm、底径 3.6cm ～ 5.0cm で、蓋３類より器壁は薄く、器形はバリエーションが多いことからさらに細分可能であるという。また、内面にヘラ描き文（オロシ目）を伴うものもみられる。灰原上層で多く出土することから、１号窯に帰属するものである。なお、蓋１・３類は９号窯に帰属し第６・７型式期、蓋２・４類は１号窯に帰属し第８型式期に比定されている。

また金子健一氏は、第７型式期から第８型式期に比定される瀬戸市の下半田川Ｃ窯跡の専用蓋をＡ～Ｆ類の六つに分類している（第３図、金子 1993）。蓋Ａ類は、口径 13.2cm ～ 13.6cm、器高 5.1cm ～ 5.4cm、底径 4.8cm ～ 5.3cm で、無高台である点以外で第７型式期の碗と形状が一致するもので、自然釉等の痕跡に依らなければ無高台碗との区別が困難である。成形・調整技法は製品と同様であるが、製品に比べて内面の調整がやや雑である。蓋Ｂ類は、口径 12.1cm、器高 3.7cm、底径 4.7cm 前後で、体部はやや丸みを帯び、口縁端部は角張るものが多い。、蓋Ａ類同様、成形・調整技法は製品と同じであるがやや雑に行われ、底部内面の指ナデがみられないものもある。器高は蓋Ａ類より低く浅い形状である。蓋Ｃ類は、口径 8.8cm、器高 1.6cm、底径 5.1cm 前後で、器高は低く皿状である。成形・調整技法は小皿類と同様であるが、全体的に極めて雑な作りである。蓋Ｄ類は、口径 10.9cm ～ 11.0cm、器高 1.4cm ～ 2.1cm、底径 3.6cm ～ 4.4cm 前後で、蓋Ｃ類同様皿状であるが、法量は大きく形状も小皿とはかけ離れている。また、内面にはコテナデ調整が行われず、ロクロ目が明瞭に認められ、底部外面に板目状

圧痕はみられない。

蓋Ｅ類は、口径 11.5cm、器高 2.9cm、底径 4.7cm で、底部から外反しながら立ち上がり、体部は直線的に開く。器高はやや低く浅い形状である。形状や法量、調整技法は製品と大きくことなり、内面はコテナデ調整が行われずロクロ目が明瞭に残る。蓋Ｆ類は、口径 12.3cm、器高 4.3cm、底径 4.6cm 前後で、無高台である点と体部が若干外反しながら開く点を除き、第８型式期の小碗及び無高台碗と形状や法量、成形・調整技法とも共通するもので、自然釉等の痕跡に依らなければ無高台碗との判別は困難である。蓋Ｇ類は、口径 12.7cm ～ 13.9cm、器高 2.5cm ～ 3.4cm、底径 7.0cm ～ 7.5cm 前後で、底径がかなり広く器高が低いため、碗と皿の中間的な形状である。成形・調整技法は製品と同一であるが、やや雑に行われ、器壁もきわめて厚い。なお、下半田川Ｃ窯跡は２基の窯で構成されており、１号窯→２号窯の順で連続して操業したものと考えられる。蓋Ａ・Ｆ類はそれぞれ第７型式と第８型式に比定され、蓋Ｄ・Ｅ・Ｆ類は２号窯窯内埋土から出土するという（金子 1993）。



第２図　小名田小滝９号窯出土蓋分類
（山内 1993 より作成）S=1/3

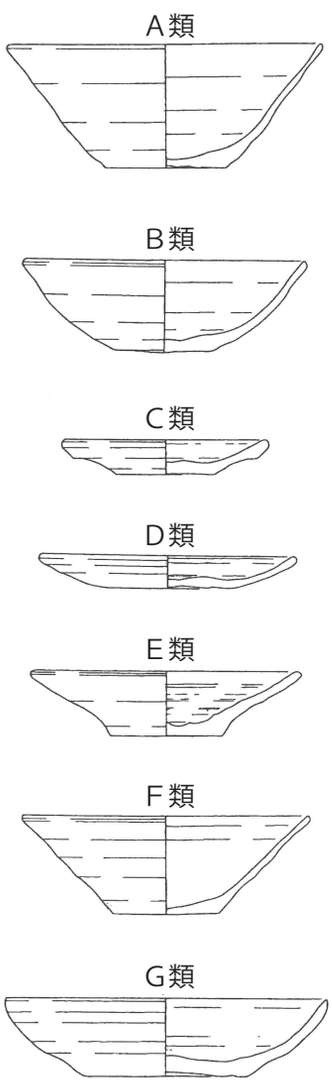
山内氏や金子氏の分類はそれぞれ発掘調査報告書の中で行われたものである。本節ではこれらを参考にしつつ専用蓋の分類･編年を行うが、専用蓋は製品に対して出土数が少ないうえに窯道具であるため調整が粗雑で形状のバラエティに富み、分類可能で変遷を追うことができるものは限られる。ここでは、複数の窯で確認され、分類・編年を行える程度の出土数がみられるものについて考察を加える。

（２）専用蓋の分類

全体の形状からＡ・Ｂ類に大別され、調整技法などによってそれぞれ１～３類に細分可能である。

蓋Ａ類は、口径に対して器高が高くやや深い形状で、体部は直線的に開くものである。蓋Ａ１類は、口縁部はほとんど外反しないか若干内湾気味で､内面には製品と同様にコテナデ調整が行われる。Ａ２類は、口縁部がやや外反し、内面にはコテナデ調整が行われずロクロ目が残されるものである。Ａ３類は、口縁部は外反せず、内面にはロクロ目による凹凸が明瞭に認められるものである。

蓋Ｂ類は、口径に対して器高が高くやや深い形状で、体部は全体に丸みを帯びるものである。蓋Ｂ１類は、口縁部はほとんど外反しないか若干内湾気味となるもので、内面にはコテナデ調整が行われないがロクロ目の凹凸はそれほど目立たないものが多い。山内氏の蓋３類はこれに含まれる。蓋Ｂ２類は、体部下方の丸みが強く、口縁部は若干外反する。蓋Ｂ１類より器高が高く、最も深い形状である。内面のコテナデ調整は行われず、ロクロ目が明瞭に認められる。蓋Ｂ３類は、体部下方の丸みが強く、中央付近から口縁部にかけてやや外反しながら開くもので、内面にはロクロ目による凹凸が明瞭に認められる。



第３図　下半田川 C1･2 号窯出土蓋分類
（金子 1993 より作成）S=1/3

（３）専用蓋の変遷

各分類の専用蓋について、併焼される山茶碗類を基準におおよその変遷をみていく（第 16 表）。

①第７・８型式期

東濃型山茶碗の専用蓋は第７型式期に多くの窯で出現し、第８型式期にかけては蓋Ａ１類・蓋Ｂ１類が確認される。蓋Ａ１類は内面にコテナデ調整が行われるが蓋Ｂ１類は出現時点でロクロ目が認められるが、その凹凸は目立たないものである。蓋Ａ１類は、第７型式から第８型式にかけて器高・口径ともやや数値が小さくなる傾向がみられる。蓋Ｂ類は、第７型式期から第８型式期にかけて口径には変化はないが器高が低くなる傾向がみられる。蓋Ａ１類は大畑大洞１号窯や同４号窯、大谷洞 32 号窯などで、蓋Ｂ１類は大畑大洞１号窯や浜井場４号窯、大谷洞 32 号窯などで出土する。

②第９型式期

蓋Ａ２類・蓋Ｂ２類が確認され、当該期には蓋Ａ類も内面のコテナデ調整が行われなくなり、蓋Ａ２類は第８型式期の蓋Ａ１類より浅い形状となる。蓋Ｂ２類は蓋Ｂ１類と大きな変化はみられないが、器壁は厚く内面のロクロ目がやや明瞭となる。蓋Ａ２類は大谷洞 32 号窯や半ノ木Ｂ窯など、蓋Ｂ２類は大谷洞 14 号窯や同 32 号窯などで出土する。

③第 10 型式期

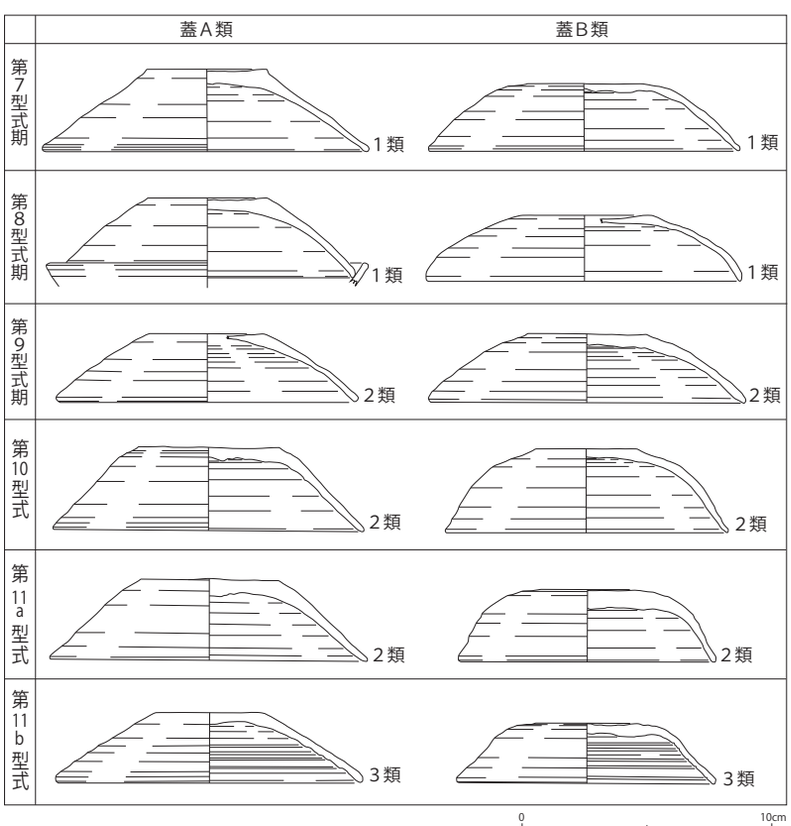
当該期は山茶碗類のように２期に細分することは困難であったため、第 10 型式期として一括する。蓋Ａ２類・蓋Ｂ２類が確認され、蓋Ａ・Ｂ類とも第９型式期のものより口径に対して器高が高く深い形状となるようだ。蓋Ａ２類は脇之島３号窯、大畑大洞３号窯、東町１・２号窯など、蓋Ｂ２類は中山１号窯などで出土する。

④第 11 型式期

第 11 ａ型式期は前段階から引き続き蓋Ａ２類・蓋Ｂ２類が確認され、蓋Ａ２類は第 10 型式期と比べほとんど変化はみられないが、蓋Ｂ２類は体部上方の丸みが強くなるようだ。蓋Ａ２・Ｂ２類とも東町１・２号窯で出土する。

最終末である当該期には蓋Ａ３類・蓋Ｂ３類が確認され、製品である碗２ｏ類と同様に内面のロクロ目が顕著なものとなる。蓋Ａ３類は東町１・２号窯、蓋Ｂ３類は東町１・２号窯、生田２号窯で確認される。

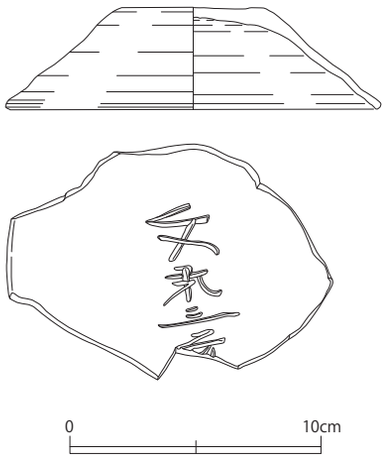
第 16 表　東濃型山茶碗専用蓋編年表



（４）「文永三年」銘蓋の位置付け

ところで、「文永三年」銘をもつ蓋（第４図）は形状的に蓋Ａ１類に近いものであるが、紀年銘をもつことに加え、法量がＡ１類より大きく調整も丁寧であることから、通常の専用蓋とは異なる性質をもつものと捉え、本節の分類からは除外したい。ただし、東濃型山茶碗編年ひいては東海の山茶碗編年の年代設定の基準となる重要な資料であるため、ここで当該資料の位置付けを行っておく。

先述の通り、小名田小滝１・９号窯の灰原重複部分は、下層が９号窯、中・上層が１号窯に帰属する。山内氏によると、下層からは紀年銘資料と同じ蓋１類が出土し、同９号窯の操業年代が第６型式末期から第７型式前半であることから、紀年銘資料がこれらの転換期を示すものであると捉えられるという（山内 1993）。しかし、紀年銘資料自体は中層から出土している点、小名田小滝９号窯の出土遺物は第７型式が主体である点、紀年銘資料が通常の専用蓋と異なる可能性が高い点を踏まえると、当該資料は必ずしも第７型式の最初期に製作されたものとは確定できない。紀年銘資料の製作時期を最初期に限定せず、第７型式の前半段階のものと考えれば、第７型式を 13 世紀中葉とする尾張型山茶碗編年との年代的な齟齬も解消されるだろう。



第４図　小名田小滝９号窯出土
「文永三年」銘蓋

第３章　中世東濃窯の窯体構造

東濃窯の生産状況を把握する上で欠かせない、窯体構造や工房など作業場遺構についてみていく。これらについては製品とともにすでに先学諸氏によって研究が重ねられてきているため、まずは先行研究を整理し、これを踏まえて窯体構造の分類・変遷を行なっていく。

第１節　窯体構造の変遷に関する研究史

東濃窯の窯体構造についての研究は、1973 年の田口論文で紹介されたものが初出である。田口氏は、灰釉陶器窯と山茶碗窯は構造的に大差がないものとし、いずれも須恵器窯の型式を引き継いだ窖窯で、船底式と分炎柱を設けた窯に大別されるという程度の認識であった。分炎柱をもつ窯の燃焼室床面は、焚口から焼成室へ向かって緩傾斜で下るものと、上るものがみられると記している。また、煙道部については細長い煙突を横に倒した格好のものや、幅の広い扁平なものがみられるとした（田口 1973）。1981 年には、谷迫間２号窯の窯体構造が灰釉陶器窯の様相を多分に残しているのに対し、次の浅間窯下期に比定される北丘９号窯は焚口や燃焼室の狭まり方、煙道部の構造が異なると指摘している（田口 1981）。浅間窯下期に一部の窯で焼成室下半の床面下に排水溝が設けられることについても触れ、常滑窯でも同様の構造をもつ窯がみられる点に注目している。平面形においては焼成室の下半が横に張り出す形状は、山茶碗窯のなかでも古い型式に特徴付けられるとした。

一方、若尾氏は大畑大洞１～４号窯の窯体構造から、窖窯からプレ大窯[註 10]までの変遷を想定している。４基の操業順序は１号窯（明和期）→４号窯（大畑大洞期）→２・３号窯（大洞東期）であるとし、１号窯は通有の窖窯であるのに対してこれに続く４号窯は分炎柱脇の床面傾斜が急角度になる点、２・３号窯は煙道部が煙突状になり焼成室最後部に築かれるようになる点及び煙道部の位置と形状の変化に伴い全長が短くなる点、分炎柱の両脇に高さ約 50cm の昇炎壁が設けられる点、焼成室下半が大きく張り出す平面形となる点などからも、２～４号窯が美濃大窯へ続く移行期間に築かれたプレ大窯であるとしている[註 11]（若尾 1983）。また、山茶碗最末期に比定される東町１・２号窯は、いずれもプレ大窯に比定され、灰原に堆積する灰層が非常に厚い点、窯の立地が大窯と同じく急斜面に築かれている点、２号窯に前庭部が認められない点、燃焼室の床面が石敷きとなる点について、焼成時に燠を

大量に掻き出す大窯と共通するとして、若尾氏は大畑大洞２～４号窯跡と同様にプレ大窯から大窯への発展を裏付ける窯跡として位置付けた。なお、若尾氏は製品の出し入れについても言及しており、これによると１号窯・２号窯ともこれまでの窯と比較すると焚口がかなり狭く造られている点、２号窯においては燃焼室を撤去して製品の搬出が行われたようだが１号窯はその痕跡がみられなかった点、１号窯の焼成室前部の左側付近で浮いた状態の礫を数個検出しいずれも被熱していることから製品の出し入れ口の構築に使用されたものと考えられる点などから、大窯にみられる専用の出し入れ口はプレ大窯の段階で出現するものであると結論付けた（若尾 1989）。

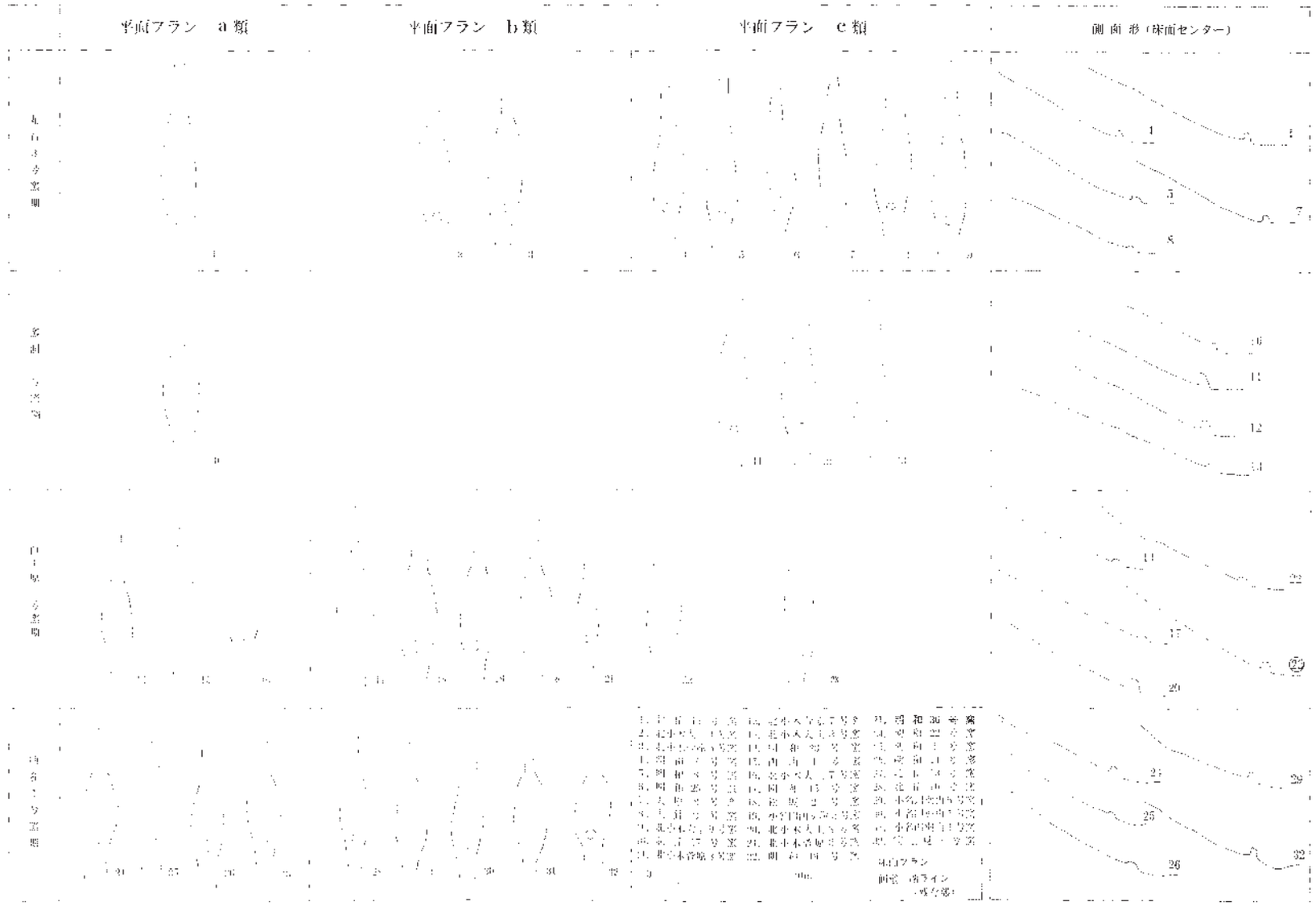
山内氏は、北小木窯跡群第１次調査で調査を行った窯について窯体の規模を比較している。調査を行なった 19 基（うち１基は焼成前に放棄された未焼成窯）のうち、白土原期に比定される４基中３基が全長 8.5 ～ 9.3m と小型である点に注目し、当該期が最も生産量が多い時期であること、当該期に属する窯跡も多く発見されているがこの３基はそのなかでも最小の部類であることなどを加味し、小形の窯が築かれた要因について高まる需要に急速に対応するため操業の回転を高め効率化を図った現れであるか、もしくは増大する生産に伴って山林の荒廃と燃料不足を招き操業短縮に追い込まれた結果であると指摘している（田口・山内 1991）。

1992 年に刊行された『美濃の古陶』では、若尾氏によって白瓷の発生から山茶碗の消滅に至る窯体構造の変遷が紹介されている[註 12]。これによると、山茶碗窯は西坂期には半地下式であったものが谷迫間期には大型化し地下式となる。また、この時点で煙道部が焼成室と区画され、ダンパーが設置されるという[註 13]。また、谷迫間期・浅間窯下期の焼成室床面下に排水施設や、燃焼室から前庭部にかけて排水溝を設ける例が多くみられる要因として、砂礫層を掘り下げた地下式の窯は、焼成室前部で地下２m に達することによる地下からの湧水を想定している。丸石期には沢に近いところから徐々に高い位置に立地が移動するとし、先の湧水に対して排水溝・床面下排水施設は決定的な解決方法とならず、乾燥した場所へ移動することで解決法を求めたと解釈している[註 14]。また、灰原における灰の量が当該期から減少するとし、燠が比較的溶けやすい、還元の弱い炎で製品が焼成されたと考えられるという。製品の器表の色調の変化に加え、窯体の側壁が脆く遺存状態が悪いこともそれに起因し、この状態はプレ大窯に転換するまで継続するという。また、窯が高い位置に移動するにつれ全長は長くなり、丸石期から窯洞期にかけてそのピークを迎える。特に煙道部の変化が著しいとし、若尾氏は焼成方法の変化が煙道部を長くして窯内の「引き」を強くする必要性があったと推測している。また、白土原期には工房・作業場[註 15]が出現し、明和期には昇炎壁とはいえないものの、燃焼室と焼成室を区画する動きがみえ始めるという（若尾 1992）。

1993 年には、山内氏によって初めて窯体構造について型式学的な研究が行われる（山内 1993c）。山内氏は、丸石期から明和期にかけての山茶碗窯を平面プランを基準にａ～ｃ類に分類している（第 17 表）。これによると、ａ類は焼成室と煙道部の境が明瞭にくびれをもち、このくびれは時代が下るにつれ顕著となるもので、白土原期から明和期では煙道部が二等辺三角形を呈するものが多くなるという。ｂ類は焼成室から煙道部に至ると急激に幅を減じ、煙道部が幅細く概して長いのを特徴とするもので、くびれはみせないが焼成室・煙道部の境は明瞭である。ｃ類は焼成室と煙道部の境が不明瞭で、焼成室・煙道部の幅の差が小さいもので、全体に寸胴なプランを呈するという。

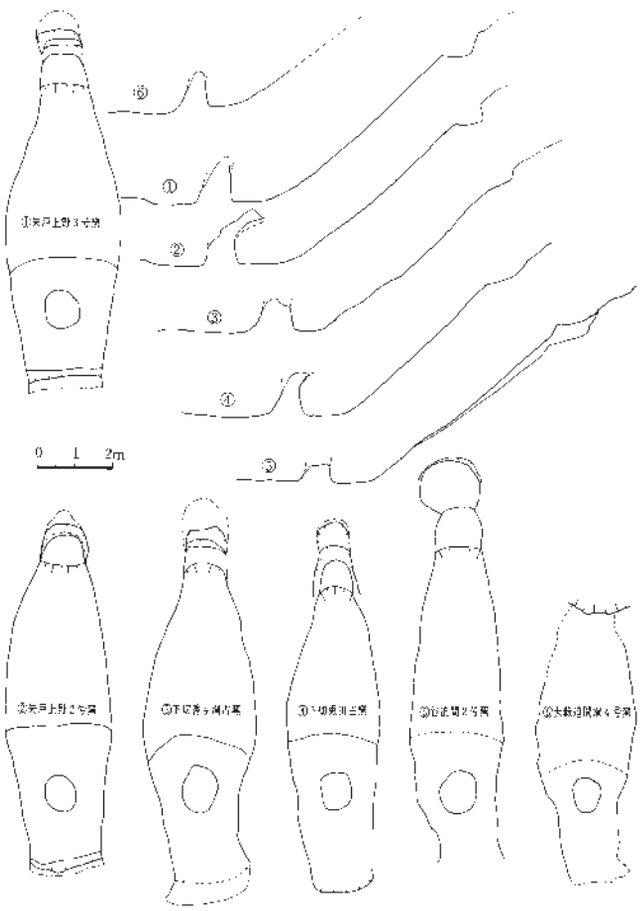
山内氏によると、丸石期にはｃ類が主体的でａ・ｂ類は若干認められるのみであり、当該期の窯は長大で、焼成室の最大幅が狭いのが特色である。側面形は、燃焼室の床面が水平で分炎柱は傾斜の変換点に位置し、煙道部にかけて徐々に傾斜を増して煙道部は緩傾斜となる。この傾向は窯洞期まで続くが、側面形では分炎柱の位置が若干奥へ後退する傾向が現れ始めるとともに焼成室の床面は一定の傾斜で立ち上がるようになるとしている。また、白土原期は窯体プランの変遷上画期となる段階で、ｃ類はほと

第 17 表　東濃窯窯体構造編年表（山内 1993c より転載）



んど姿を消し、ａ・ｂ類が主体で、焼成室の胴張りが目立つようになるという。窯ごとに大小の差が大きいことについては、窯の数が急増するなかでの混乱状況を示すものであると推察している。明和期には完全にａ・ｂ類のみとなり、全長 9.5m 内外と小形となって形状は安定する。側面形は焚口から分炎柱に至る床面が一旦低くなるため、分炎柱が傾斜変換点からさらに後退することとなり、煙道部は弧状に斜め上方へ立ち上がるのが特徴であるという（山内 1993）。

一方、谷迫間期の窯体構造については長瀬治義氏の論考でカバーされている。長瀬氏は、遺物の特徴から谷迫間期を前半・後半に区分した。窯体は西坂期と比べて飛躍的に大形化し、谷迫間期の中でも前半から後半へ大形化指向が読み取れるとし、若尾の指摘を裏付けている（第５図、長瀬 1994）。窯体は、分炎柱が平坦部に設置され、床面最大幅は焼成室下半部に位置し、床面傾斜は平均 41°、煙道部は床面がほぼ水平になった後、垂直に近い傾斜で立ち上がる構造をもつという。また、燃焼室の床面が焚口より若干低くなることが一般的であるようだ。

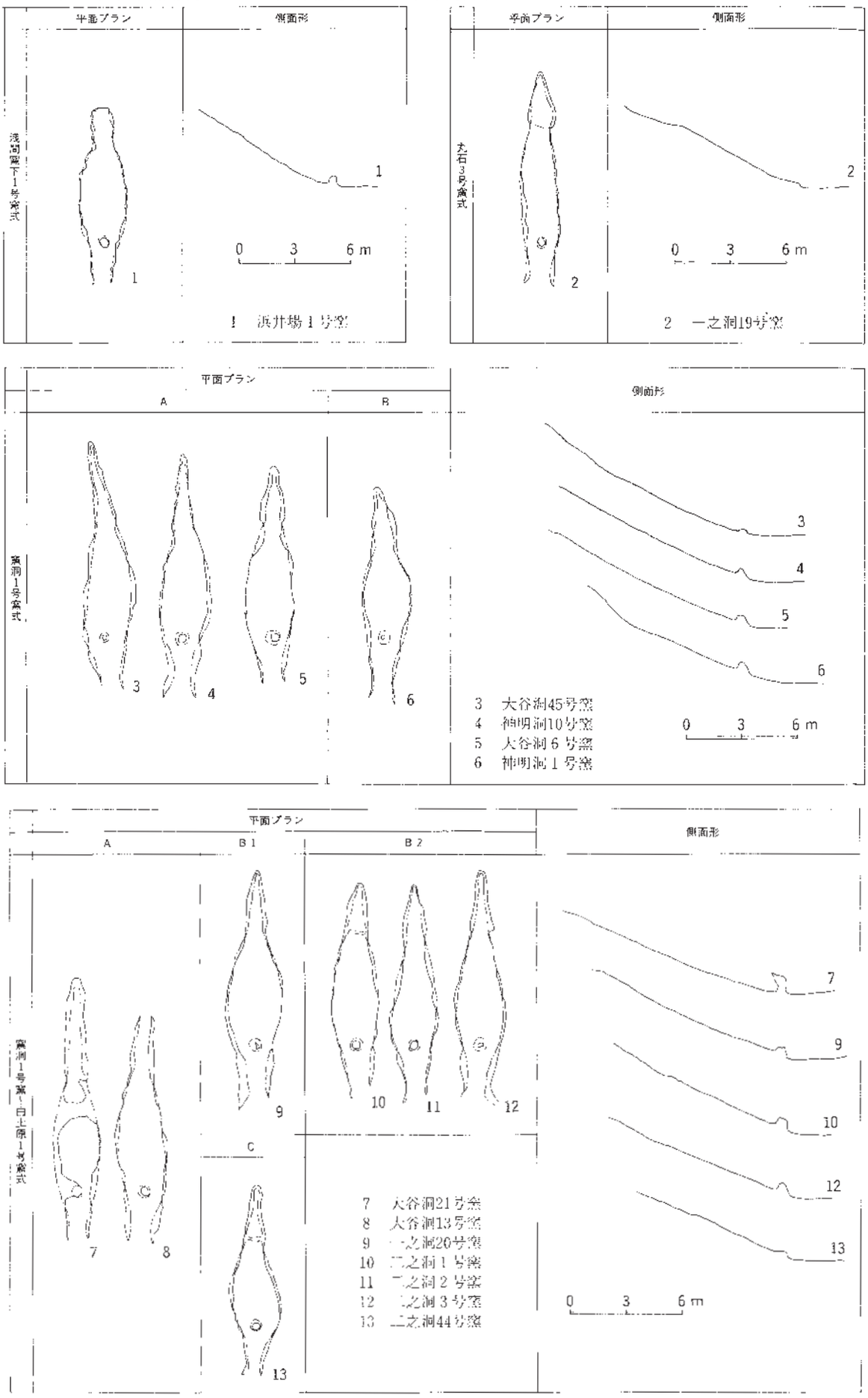


第５図　谷迫間２号窯期の窯体構造（長瀬 1994 より転載）

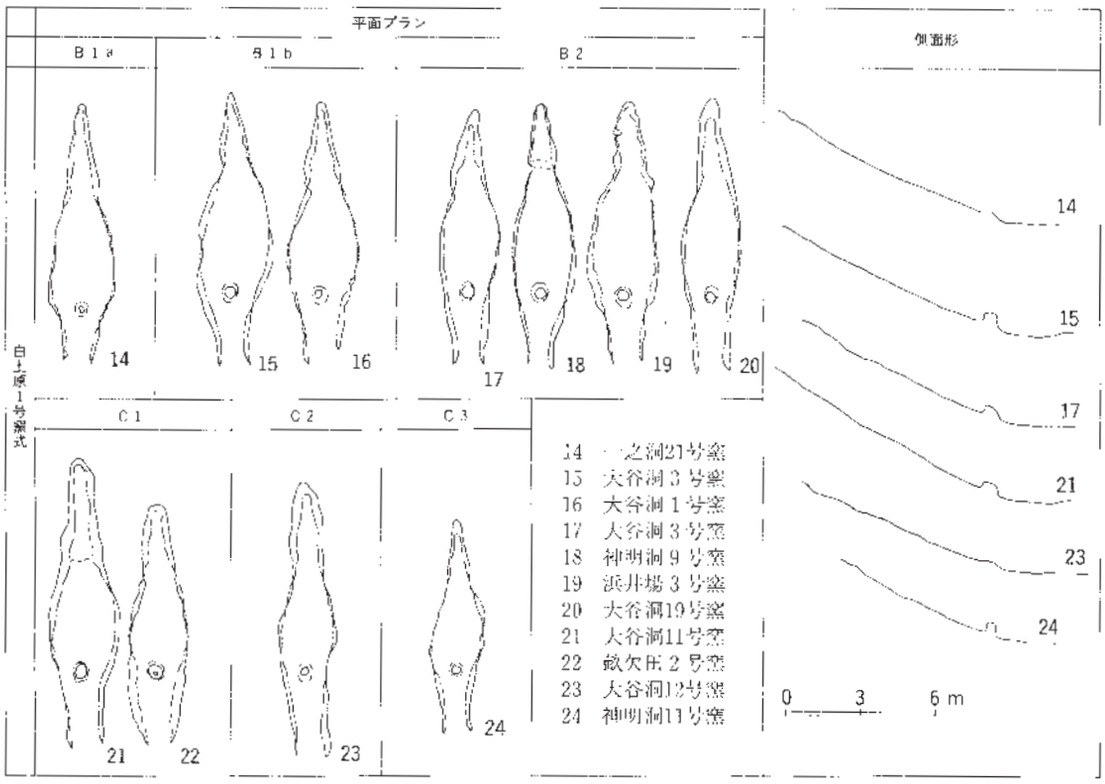
岩下英治氏は、北小木古窯跡群第２次調査で調査が行われた窯について、遺物による推定操業時期を基に浅間窯下期から大畑大洞期までの窯体構造を整理している[註16]（第 18・19 表、岩下 2001）。これによると、浅間窯下期は床面傾斜が 35°前後とやや急で、傾斜は焼成室と煙道部で異なるという。丸石期は、焼成室の全長が長く胴部が張りをもたない寸胴形で、床面傾斜が緩くなりその始点は分炎柱背後となる。煙道部の平面形については谷迫間期の窯と類似するやや古い様相をもつものがみられるという。

窯洞期は焼成室胴部の張りが再びみられるようになり、丸石期の胴部を軽く張らせた形態のＡ型、焼成室の全長が丸石期に比べやや小さくなる形態のＢ型に大別可能で、側面形においては焼成室から煙道部への傾斜がほぼ一定となっているものが多いという。また、窯洞期から白土原期にかけては規模や平面形が安定せず、窯体構造の変化の過渡期であるとし、窯洞期から白土原期にかけてはＢ型のうち胴部の張りが顕著なＢ１型、胴部に弱い張りがあるＢ２型に細分され、後者が増加し始める。また、Ｂ型よりさらに小型であるＣ型も出現するという。これらの煙道部は二等辺三角形を呈し、焼成室の大きいＡ類は窯洞期以降消失するという。白土原期になるとＢ型が主流となり、焼成室の規模が小さくなる点、焼成室に張りをもつ点、分炎柱後方から床面傾斜が始まり煙道部の先端まで角度が一定である点が特徴として挙げられている。平面形は最大幅の位置が焼成室中央付近より分炎柱側に寄りであるＢ１ａ型、最大幅の位置が中央付近であるＢ１ｂ型、Ｂ２型がみられ、Ｃ型は規模や構造によって１～３類に細分

第 18 表　北小木窯跡群における窯体構造編年表（1）（岩下 2001 より転載）



第 19 表　北小木窯跡群における窯体構造編年表（2）（岩下 2001 より転載）



されているが、詳述されていない。

明和期はＢ２型がみられ、床面の傾斜は分炎柱の手前から始まる点、焼成室と煙道部の境はわずかに緩傾斜となりそこからまた傾斜が増す点、煙道部の床面幅が狭く断面Ｕ字形になる点が特徴として挙げられている。また、焼成室長が５m 前後、全長が 10m 前後とほぼ安定しており、北小木古窯跡群やそれ以外の窯跡でもＣ型に属する窯が姿を消すという。大畑大洞期はＢ２型が大半を占め明和期から大きな変化はみられないが、焼成室と煙道部の境の平坦面が顕著となり、煙道部の床面幅は急に狭くなるものが多くなる。また、Ｂ２型のうち最大幅が中央付近より分炎柱寄りのものをＢ２ａ型、中央付近のものをＢ２b 型としている。

岩下氏は、これらの窯構造の変遷について丸石期の窯は焼成回数１～２回と少ない点や最大幅に変化はみられないが焼成室長が短くなっていくという変化に注目し、丸石期の窯は長大であるがゆえに天井が落ちやすいものとみて、これを改善するために最大幅を維持しながら窯を小形化し、焼成回数を増やす方向で量産化を図ったものと推測している。そして、これは白土原期以降最大幅に変化がみられない点、灰原から出土した個体数が倍以上になっている点、明和期に窯の規模・形状が安定する点からも裏付けられるという（岩下 2001）。

山内氏は、丸石期に旧土岐郡側に築かれた丸石８～ 11 号窯跡の窯体が同時期の可児郡側に築かれた窯より全長がかなり短いものであることに注目し、９号窯で旧可児郡にみられない三筋文四耳壺を焼成している点からも、全く別の工人集団によって築かれた可能性を指摘している（山内 2008）。

近年では、中山１号窯の窯体構造についてプレ大窯にみられる特徴を有しているとし、これに比定される各窯と構造の比較・検討が行われている（澤井 2018）。まず昇炎壁は時期が降るにつれ徐々に高くなるとされるが、中山１号窯より後出の東町１号窯と比較すると後者の方が低くなっていることから、高くなった後に再び低くなる傾向があるとした。焚口も徐々に狭くなる傾向があり、中山１号窯以降は 35cm 程に落ち着くという。また、焼成室床面に埋め込まれた天井架構用の基礎は、大畑大洞期から脇

之島期にかけて認められるとし、大畑大洞４号窯では焼成室の側壁を利用してアーチ状の木組みにより天井を架構、大畑大洞２・３号窯では壁際の床面に粘土塊の基礎を置いて木組みを組み架構、中山１号窯ではより堅牢な基礎とするため礎石まで用いたとしている。さらに、東町１号窯では礎石と粘土塊を併用し、窯の中軸に沿って基礎を並べる構造に変化しているという。

さて、ここまで東濃窯の窯体構造についての研究史を概観してきた。大畑大洞期から生田期に比定される窯跡の調査は 1980 年代を中心に行われ、矢戸上野期から明和期の窯跡は 1990 年以降を中心に調査が進められている状況である。東濃窯の中心地である多治見市では、窯跡の調査とともに報告書の中で窯体構造の変遷についても考察が行われているが、全体を総括したものは 1992 年の若尾論文のみである。この時点では調査例も限られており型式設定も行われていないため、矢戸上野期から生田期までを通じた窯体構造の分類・変遷を行う必要がある。。また、山内・岩下両氏の分類は平面形を基準としているが、縦断面の床面傾斜の変換点と分炎柱の位置及び煙道部の床面形状をみると平面形より時期差を反映しているものと考えられる。本章では、縦断面形を基準に窯体構造を分類し、平面形についても考慮しながらその変遷を辿る。

第２節　窯体構造の分類

窯体構造の分類は、縦断面の形状を重視し分炎柱及び床面傾斜の変換点の位置を基準にＡ～Ｇ類の６類に大別可能で、煙道部の断面形からＡ類・Ｂ類・Ｄ類・Ｅ類は１・２類、Ｆ類は１～４類に細分される。

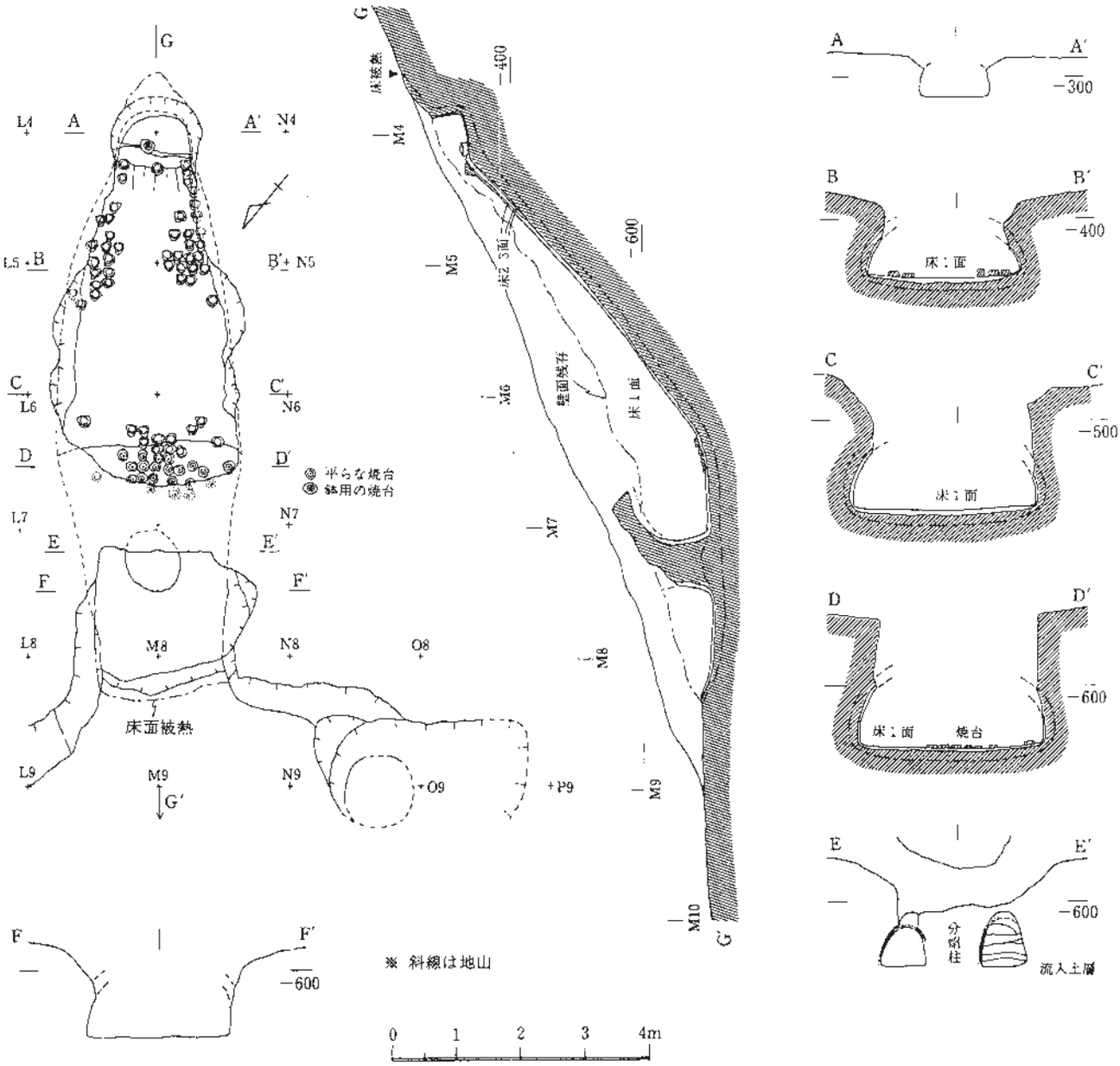
Ａ類は、燃焼室および焼成室下方の床面がほぼ水平で、長径が 1.0m 前後となる比較的大形の分炎柱が築かれるものである。焼成室下方の水平部分が比較的長く、煙道部に平坦面を形成しテラス状となるＡ１類（第６図）、焼成室下方の平坦部がやや短く、テラス状には至らないが明瞭なくぼみをもつＡ２類（第７図）に細分可能である。なお、煙道部についてＡ１類には貼り床や貼り壁、Ａ２類には貼り床が確認されるものもみられる。また、焼成室下半の水平部以降の床面傾斜については 20°～ 36°で、Ａ１類・Ａ２類に共通して煙道部との境まで一定となるものと、中央付近からは 39°～ 45°とさらに角度が増すものがみられ、水平部分を含めると２段階ないし３段階の傾斜変化をみせる。

また、平面系は焼成室中央に最大幅が位置し、煙道部にかけて床面幅が減ずる「紡錘形」と、焼成室下方に最大幅が位置し、煙道部にかけて床面幅がほとんど変化しない「寸胴形」に大別される。

Ｂ類は少数で、燃焼室から分炎柱の上端までがほぼ水平で分炎柱背後に 10°前後の緩傾斜部分がみられ、そこから煙道部にかけて 28°～ 36°とほぼ一定の傾斜となる。Ａ２類と類似する煙道部形状をもつＢ１類（第８図）と、焼成室と煙道部の床面に傾斜変化がほとんどみられないＢ２類（第９図）に細分される。また、Ｂ類にはダンパー施設が残存する窯が認められ、同施設が検出されない窯でも該当部分に僅かに平坦部をもつ窯や、焼成室と煙道部の境に傾斜変化は認められないがその周辺部分で貼り床や側壁が途切れる窯が多くみられる。これらを踏まえると、Ｂ類には基本的にダンパーが設けられていたものと捉えられ、この状況はダンパーの遺存する窯が確認されるＣ～Ｅ類とＦ類の一部に共通する特徴である。

平面形はＡ類と同様に「紡錘形」と「寸胴形」に大別される。また、Ｂ１類の煙道部長はＡ２類と同等で、Ｂ２類はそれよりやや長くなる。なお、「紡錘形」と「寸胴形」はＡ類でも認められるが、その区別はやや曖昧なものである。

Ｃ類（第 10・11 図）は、燃焼室がほぼ水平で、分炎柱下端から床面傾斜が始まるもので、分炎柱背後に緩傾斜部分がみられる窯もみられるが、ほとんどの窯は焼成室の床面傾斜が均一で、20°～ 30°の幅に収まる。また、長大な焼成室をもつものも確認される。煙道部の傾斜が焼成室とほとんど変化のない、あるいはダンパー部に平坦面が設けられる窯が主体的で、煙道部が焼成室と比べ緩傾斜となる窯が

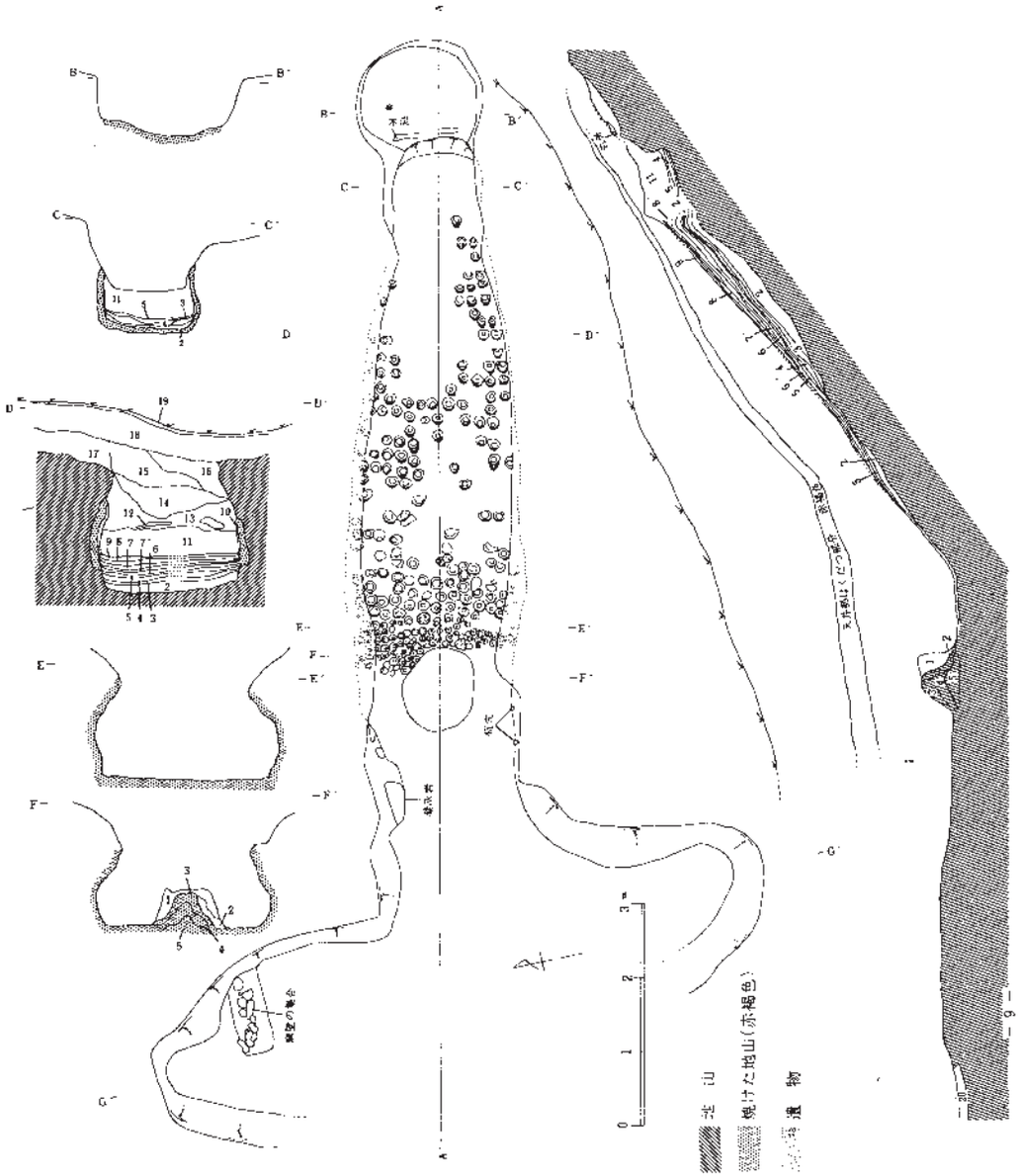


第６図　矢戸上野２号窯窯体実測図（Ａ１類／紡錘形）（長瀬 1994 より転載）

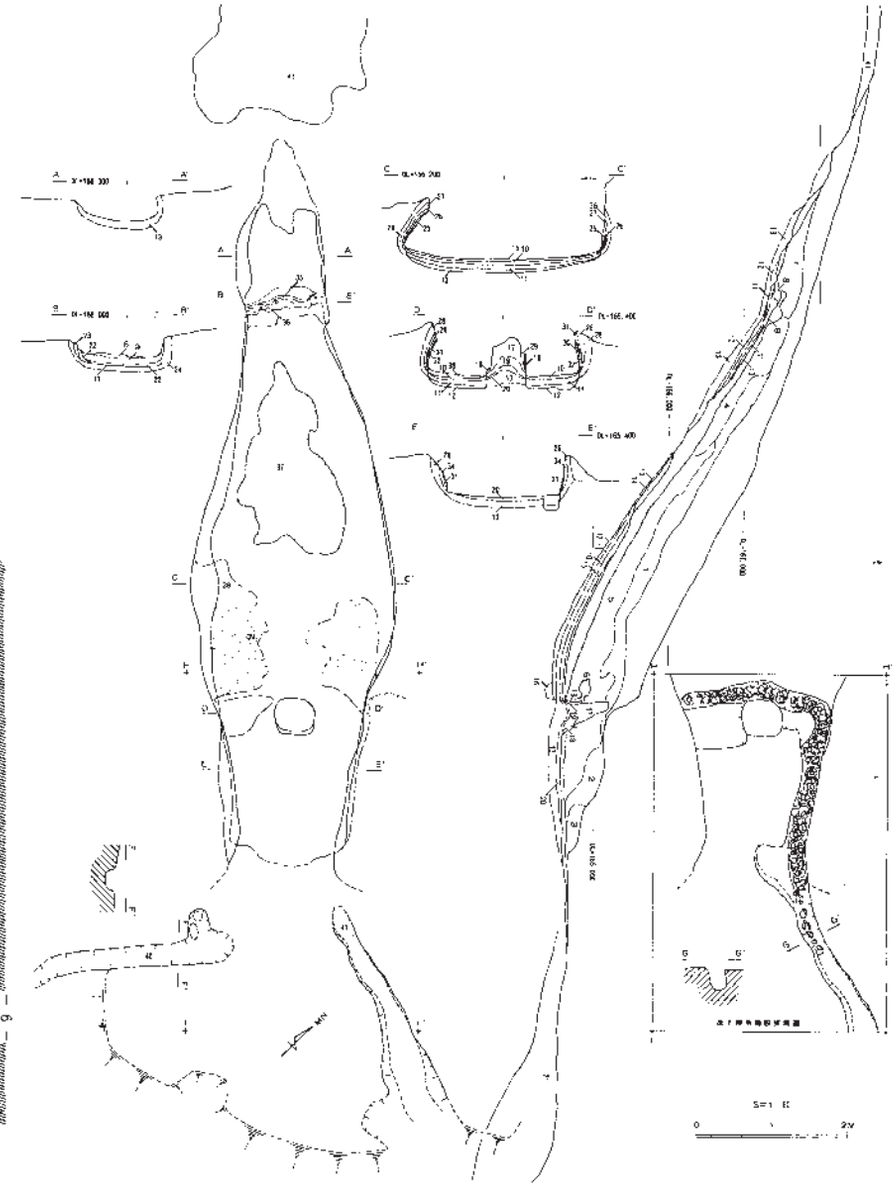
少数認められる。平面形は、「紡錘形」と「寸胴形」がみられ、前者は燃焼室やダンパー部の床面幅がＢ類と比べて狭くなるものが多い。後者は萱原３号窯や窯洞１号窯のように焼成室長が長くなるものがみられる一方、丸石８号窯や同９号窯のような全長 10 m前後とかなり小形のものが認められる。いずれも煙道部長はＢ類と比較すると長くなる。

Ｄ類（第 12･13 図）は､燃焼室がほぼ水平だが分炎柱の少し手前から床面が傾斜し始めるものである。焼成室の床面傾斜は均一で、25 ～ 30°のものが多い。煙道部は、床面傾斜が焼成室からほとんど変化のないものが主体となり、ダンパー部分に平坦面が設けられるものが少数認められる。平面形は「紡錘形」と「寸胴形」がみられ、「紡錘形」は燃焼室とダンパー部分の床面幅と最大幅との差が大きい胴張りの強いタイプと、これらの差が小さい細身のタイプが確認される。「寸胴形」は、Ｃ類と同様に丸石９号窯や土岐口西山３・４号窯のような最大幅２m前後、全長９m以下と小型のものがみられる。

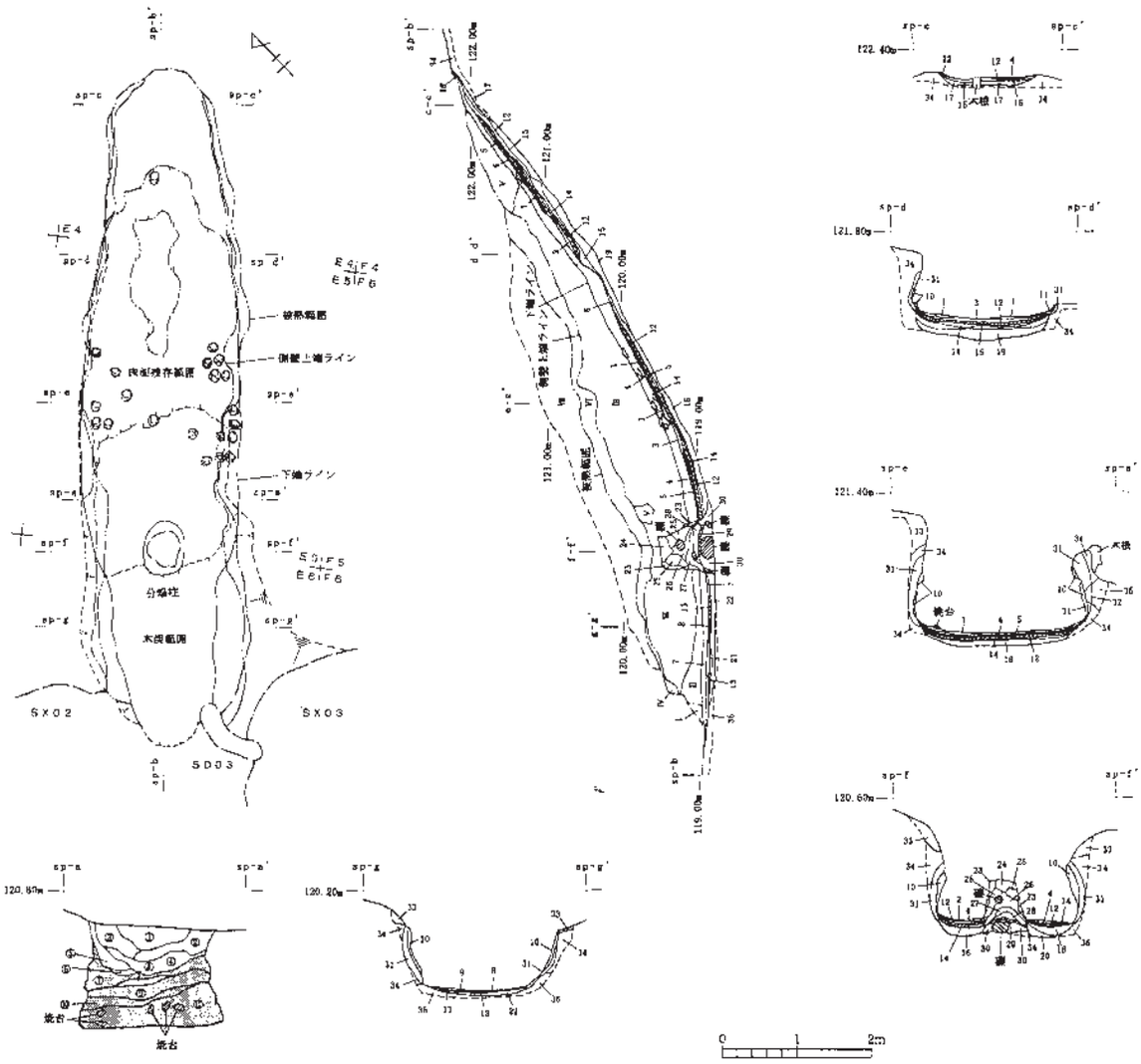
Ｅ類は燃焼室内に水平部分が短く、中央付近から床面傾斜が始まるもので、焼成室の床面傾斜は均一で、20°～ 30°のものが多い。煙道部は、床面傾斜が焼成室とほとんど変化のない、あるいはダンパー部に平坦面が設けられるＥ１類（第 14 図）が主体的で、ダンパー部分の床面の傾斜変化は顕著ではな



第７図　谷迫間２号窯窯体実測図（Ａ２類／寸胴形）（中島ほか 1987 より転載）



第８図　大薮迫間洞１号窯窯体実測図（Ｂ１類／紡錘形）（若尾 1989 より転載）

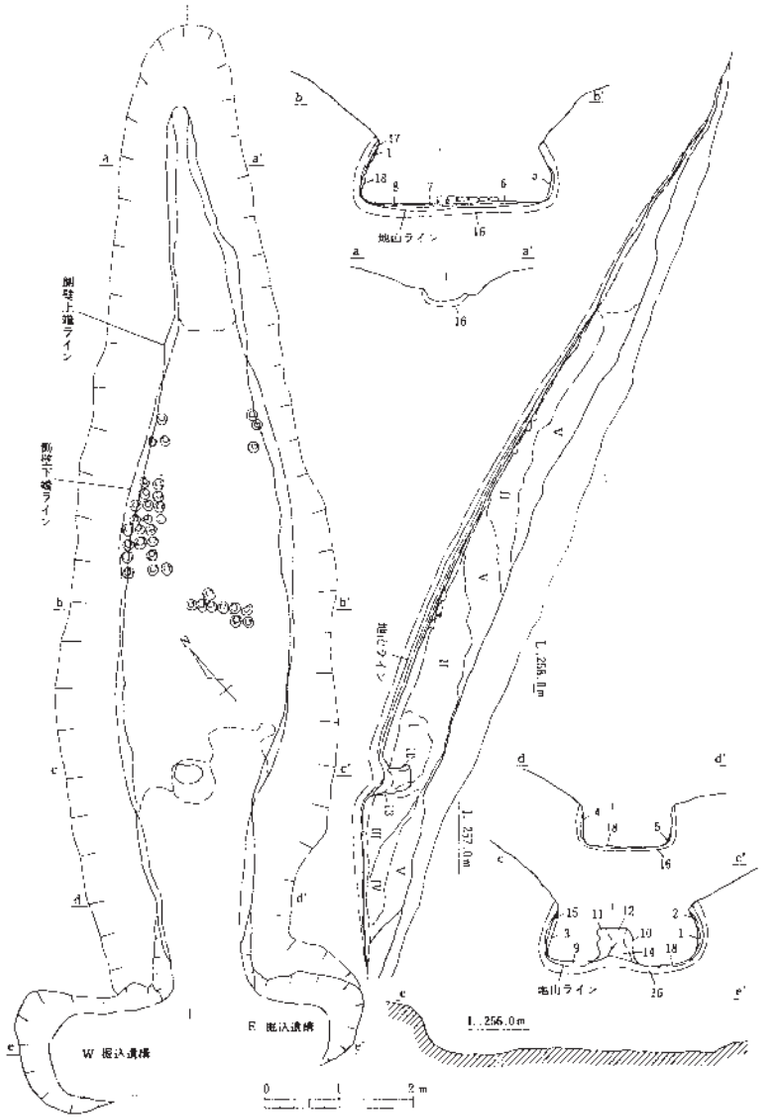


第９図　住吉 14 号窯窯体実測図（Ｂ２類／寸胴形）（河野ほか 2016 より転載）

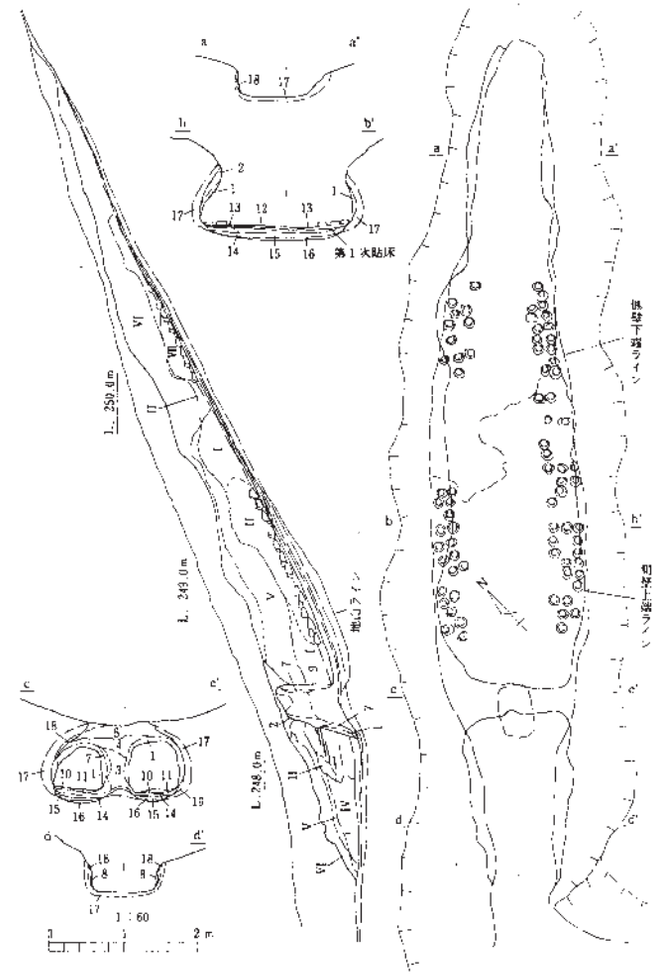
いが、その奥で先端部にかけて急傾斜となるＥ２類（第 15 図）が少数認められる。平面形は「紡錘形」と「寸胴形」がみられる。後者はＣ・Ｄ類にみられた小型のタイプは認められない。主体となるのは「紡錘形」であり、「寸胴形」は少数確認されるのみで、Ｅ２類の平面形は「紡錘形」に限られる。

Ｆ類は燃焼室に平坦部をもたず焚口から床面傾斜が始まるもので、分炎柱脇に昇炎壁をもつものもみられる。焼成室の床面傾斜は均一で、20°～ 30°のものが多い。また、分炎柱脇の床面傾斜がやや急角度となるものもみられる。ダンパー部分で床面傾斜にほとんど変化がみられないか煙道部床面が弧状に掘り込まれるＦ１類（第 16・18 図）と、ダンパー部に傾斜変化はみられないがその奥で先端にかけて急傾斜となるＦ２類（第 17 図）がみられ、Ｆ１類が主体を占める。平面形は「紡錘形」と「寸胴形」に加え、焼成室の最大幅が焼成室下半に位置し、ダンパー部分に向かうにつれ緩やかに床面幅を減じ、ダンパー部手前で窄まる形状の「倒卵型」が認められる。主体となるのは「紡錘形」で、「倒卵形」は少数である。「寸胴形」に関しては高田東山１・３号窯が確認されるのみである。また、窯体深度が浅く半地下式となるものもみられる。

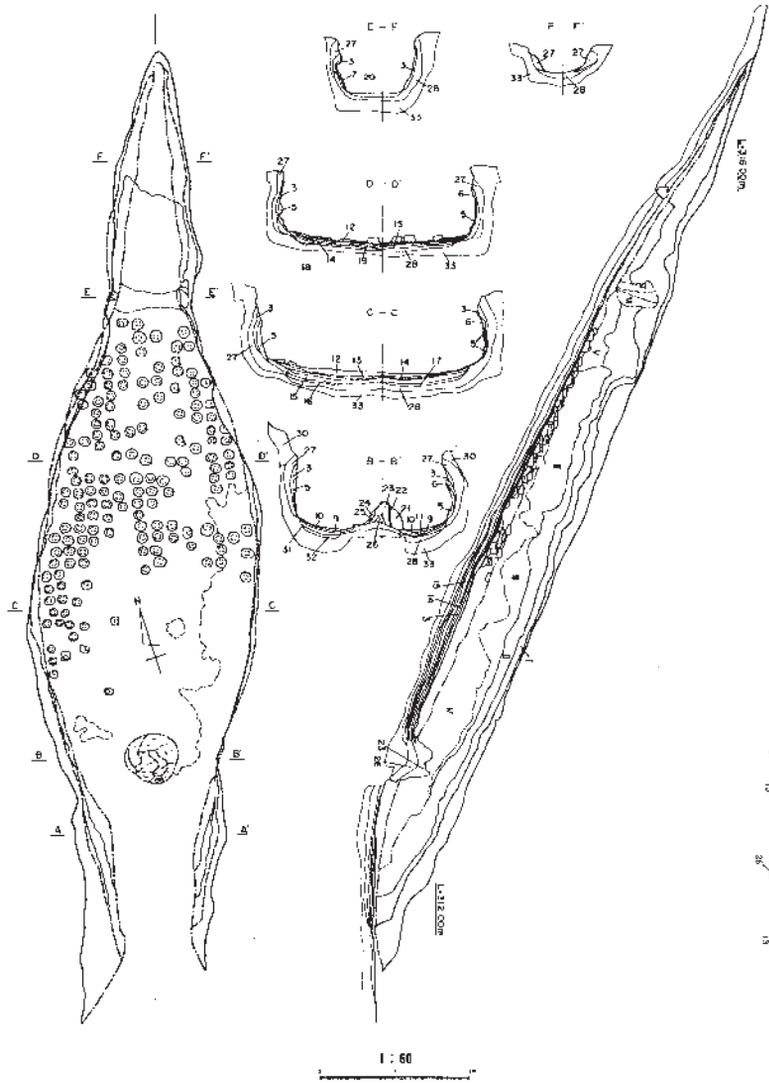
Ｇ類は、焚口から床面傾斜が始まり分炎柱脇に昇炎壁をもつものである。焼成室の床面傾斜は均一で、20°～ 30°のものが多い。煙道部床面が弧状となるＧ１類（第 21 図）、大型の分炎柱をもち煙道部が焼成室最後部に煙突状に築かれたとみられるＧ２類（第 19 図）、Ｇ２類と類似するが煙道部がＡ１類と同様にテラス状となるＧ３類（第 20 図）が認められる。なお、Ｇ３類には燃焼室の床面および側壁が石敷・石組となるものや、焼成室内に天井支柱の礎石らしきものが検出されるものある。平面形は「倒卵形」



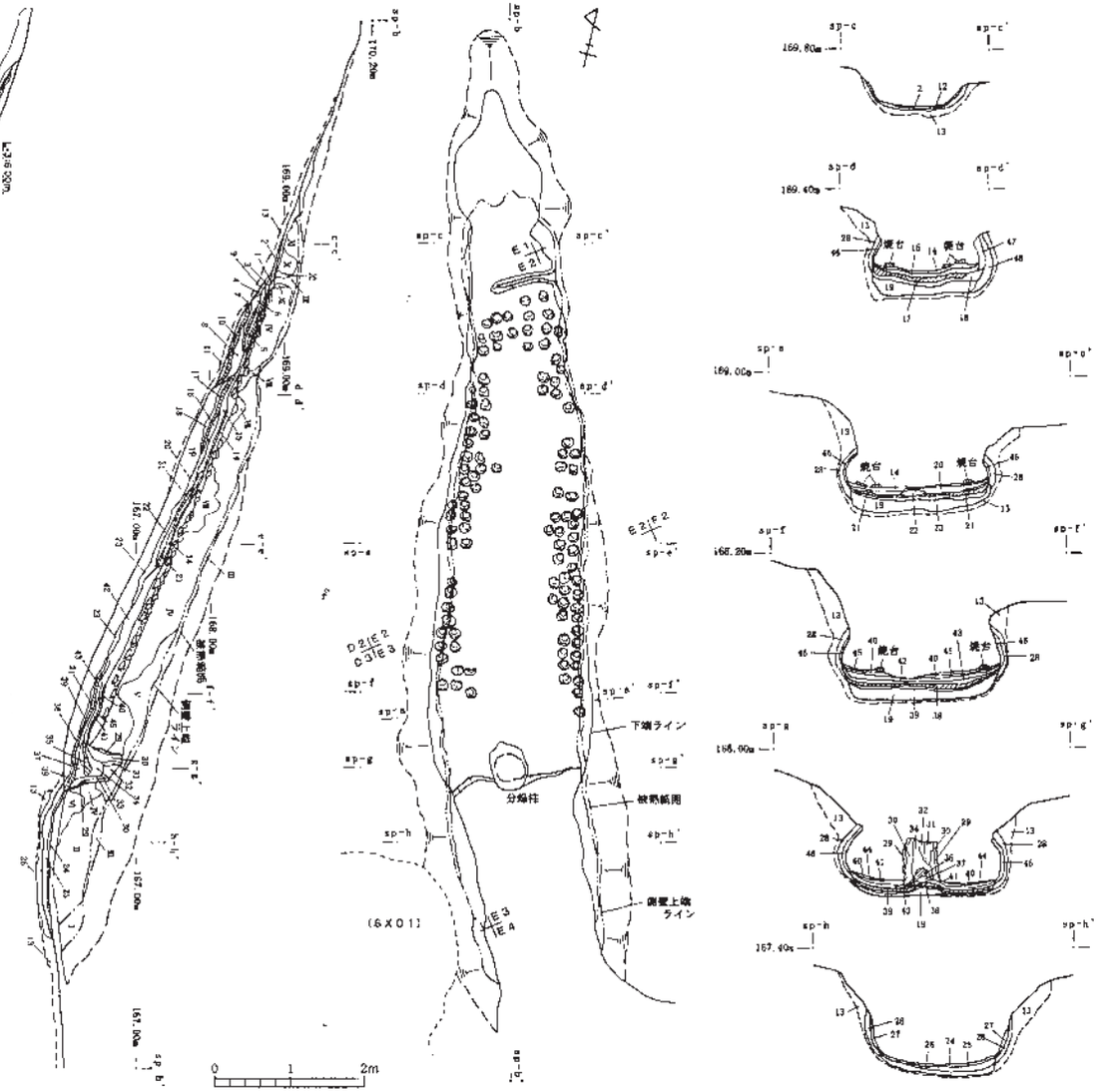
第 10 図　北小木萱原５号窯窯体実測図（Ｃ類／紡錘形）
（若尾ほか 1991 より転載）



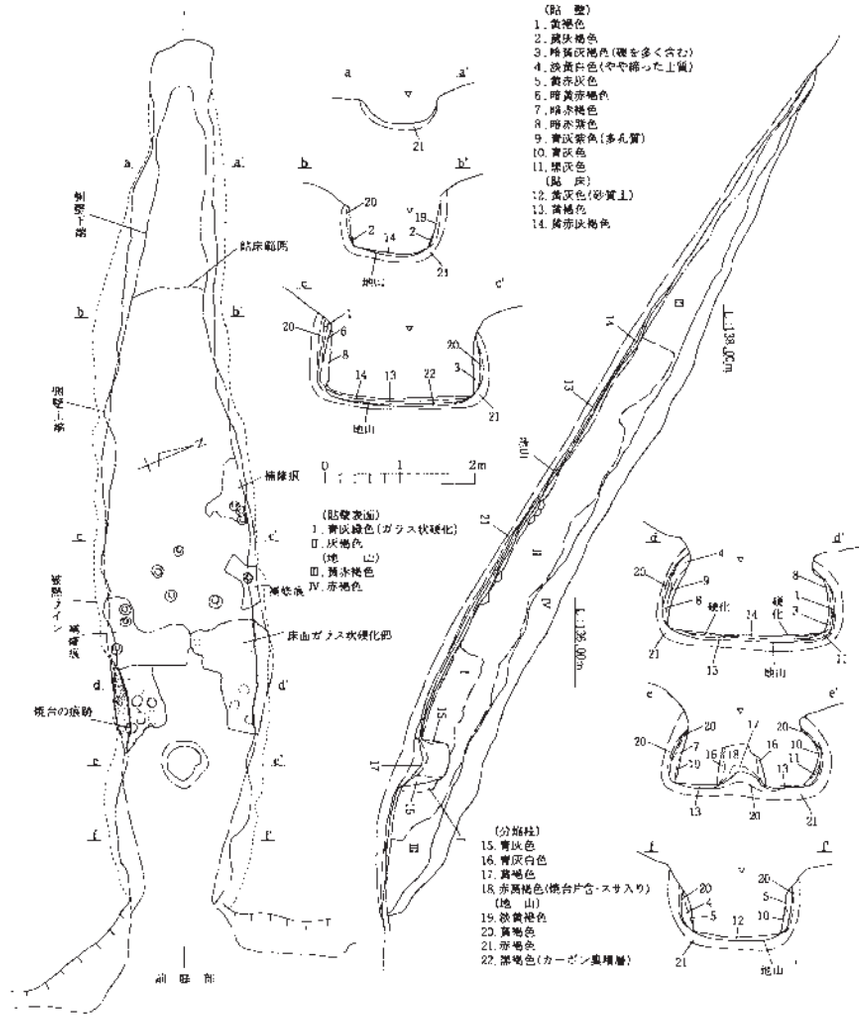
第 11 図　北小木萱原３号窯窯体実測図（Ｃ類／寸胴形）
（若尾ほか 1991 より転載）



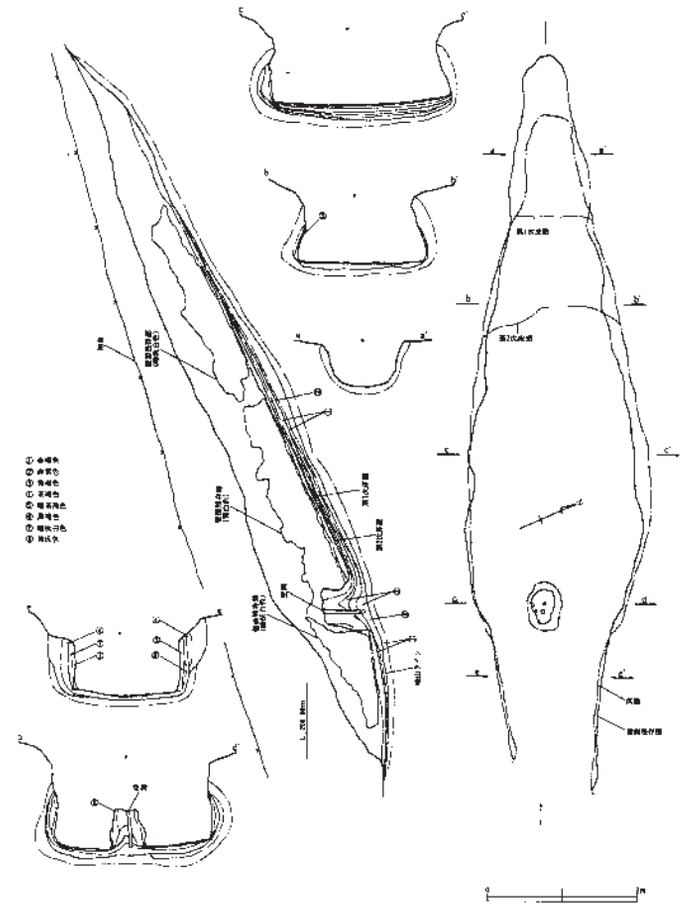
第 12 図　北小木一之洞 20 号窯窯体実測図（D 類／紡錘形）
（山内ほか 2001 より転載）



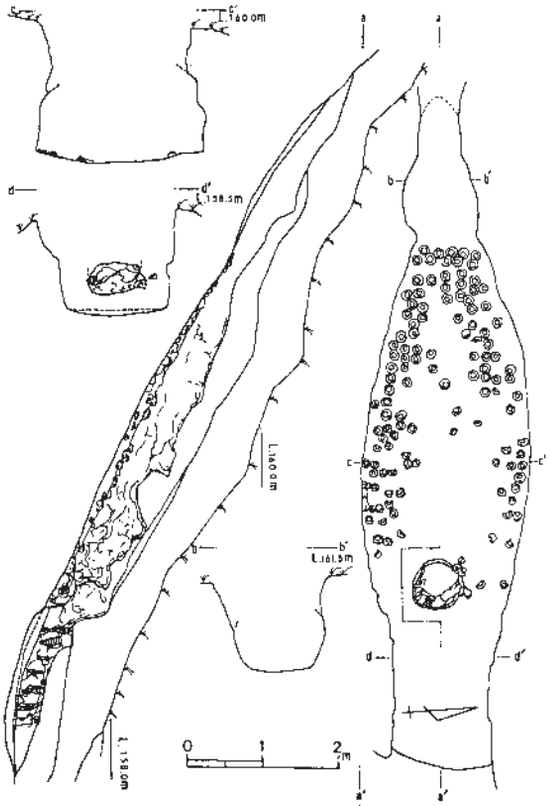
第 13 図　住吉 5 号窯窯体実測図（D 類／寸胴形）
（河野ほか 2016 より転載）



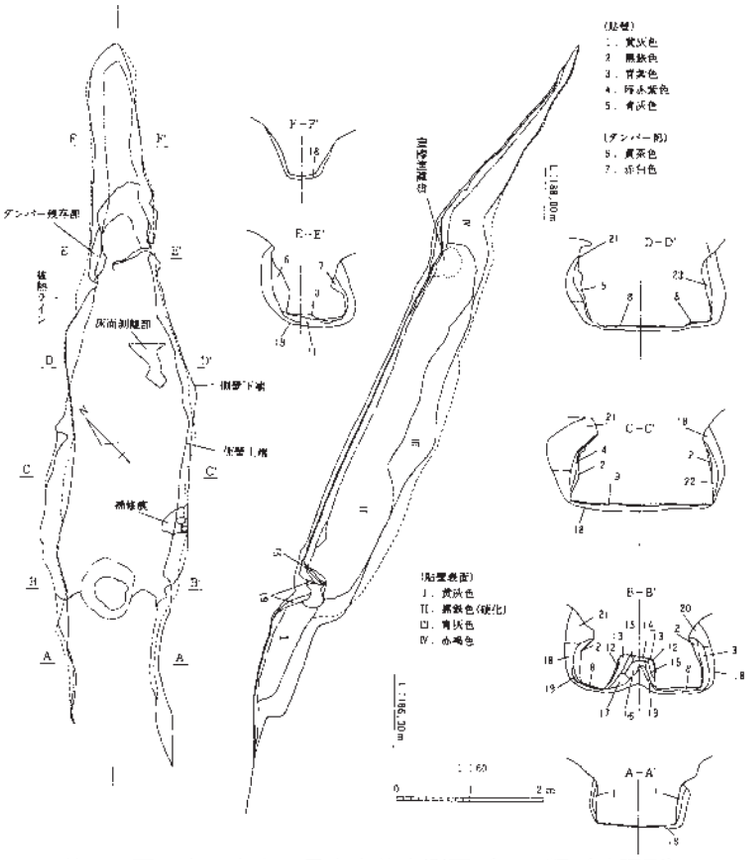
第 14 図　明和 36 号窯窯体実測図（Ｅ１類／寸胴形）
（山内 1993b より転載）



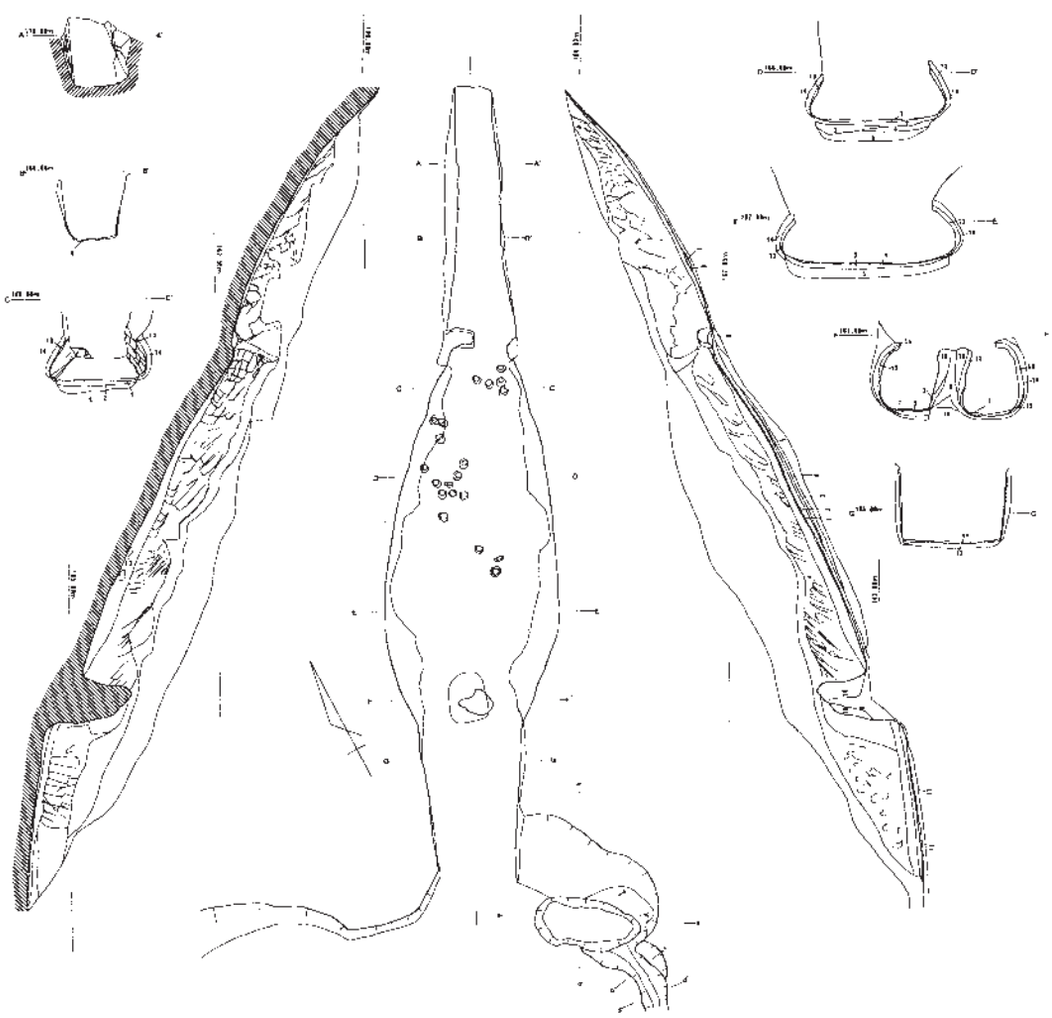
第 15 図　小名田西ヶ洞３号窯窯体実測図（Ｅ２類／紡錘形）
（若尾 1985a より転載）



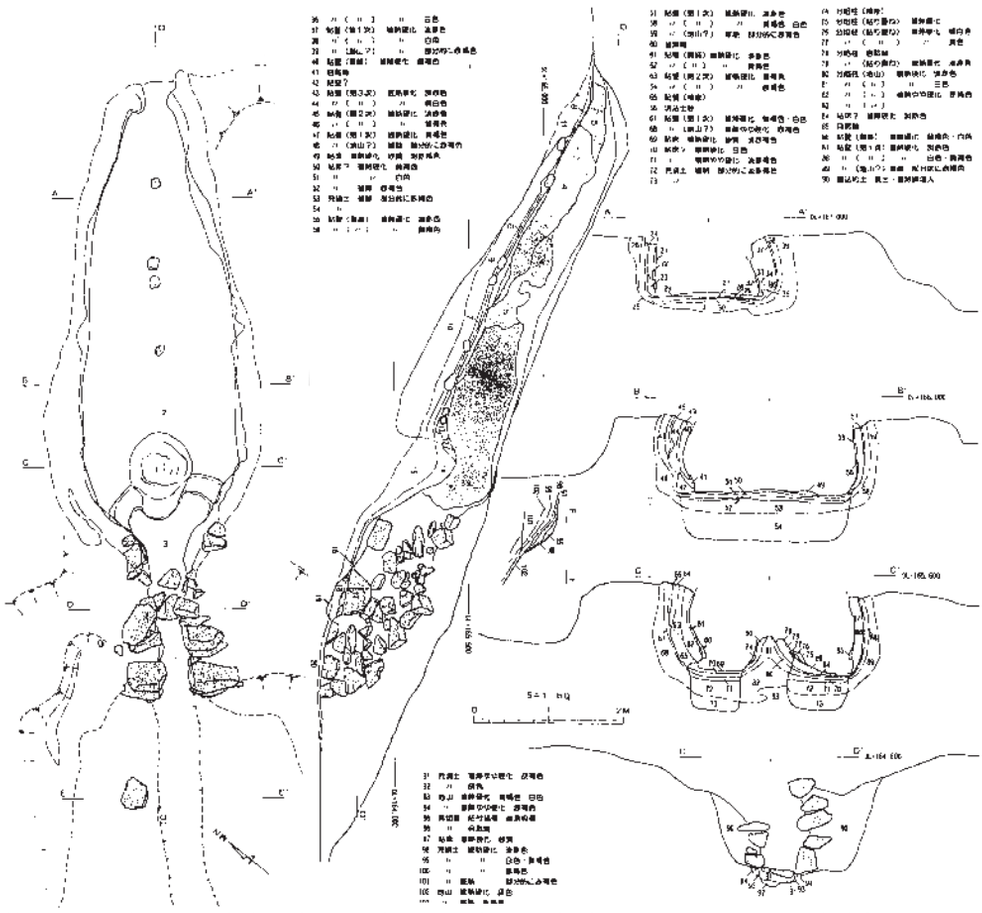
第 16 図　明和１号窯窯体実測図（Ｆ１類／紡錘形）
（古川ほか 1973 より転載）



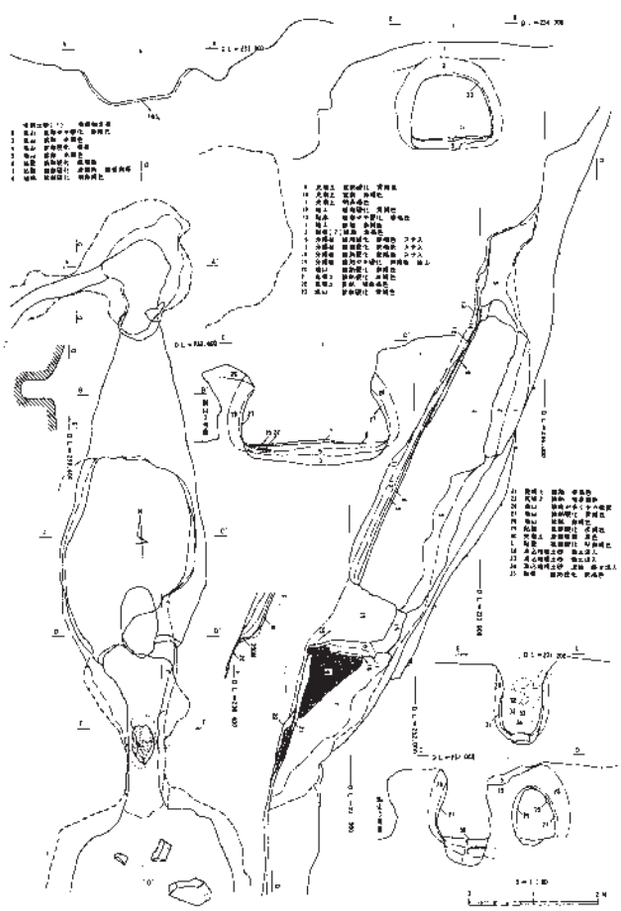
第 17 図　高田東山１号窯窯体実測図（Ｆ２類／寸胴形）
（田口ほか 1999 より転載）



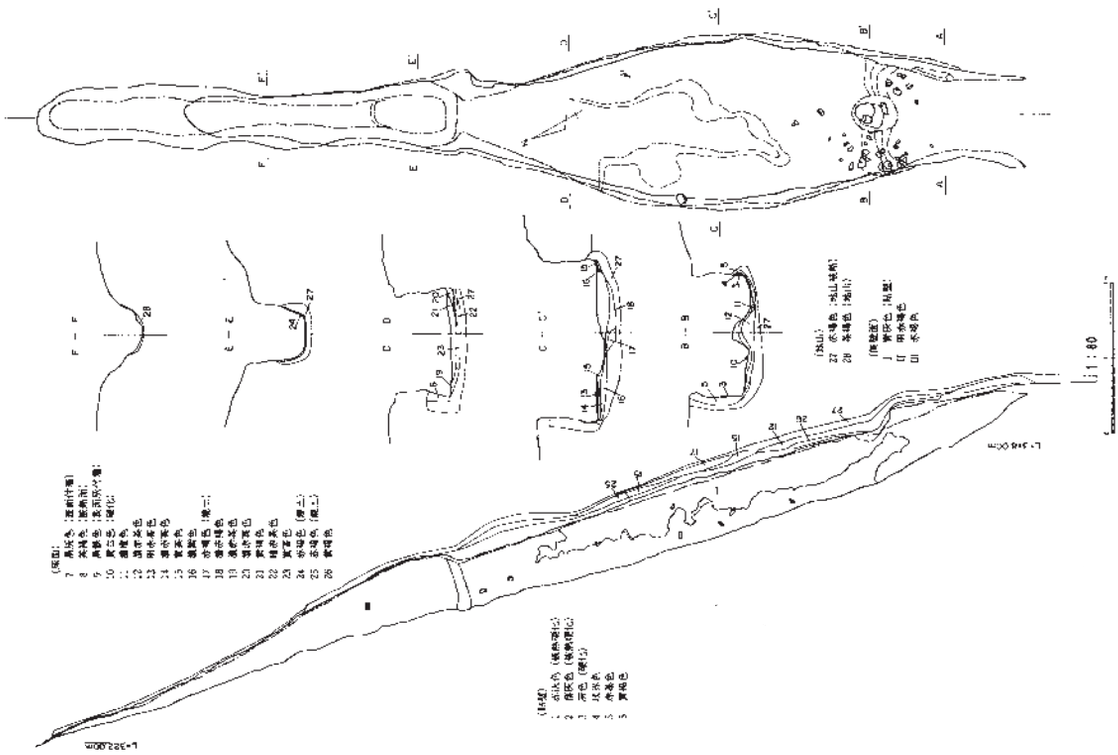
第 18 図　半ノ木Ｅ２号窯窯体実測図（Ｆ１類／倒卵形）（藤澤 1990c より転載）



第 19 図　東町１号窯窯体実測図（Ｇ２類／倒卵形）（若尾ほか 1989 より転載）



第 20 図　小名田別山２号窯窯体実測図（Ｇ３類／倒卵形）（若尾ほか 1987 より転載）



第21図　北小木大谷洞14号窯窯体実測図（G１類／紡錘形）
（山内ほか2001より転載）

が主体で、Ｇ２類・Ｇ３類の平面形は「倒卵形」に限られる。「倒卵形」は燃焼室の床面幅が焚口に向かって緩やかに減ずるタイプと、急速に窄まり焚口にかけてＵ字溝状となるタイプが認められる。さらに、Ｇ類には窯体深度が浅く半地下式となるものがみられる。

第３節　窯体構造の変遷

ここで、前節で設定した分類に従い時期別に状況を整理し、その変遷を明らかにする。

（１）窯体構造の変遷（第 20 ～ 22 表）

①第４型式期

当該期に築かれる窯体はいずれもＡ類で、末期の灰釉陶器窯にはＡ類と同様に燃焼室から分炎柱背後まで水平部分がみられることから、初期山茶碗の段階までこの要素が残っていることがわかる。また、Ａ２類に比定される下切香ヶ洞窯や谷迫間２号窯では、築窯時の煙道部床面をみるとＡ１類に分類されるが、操業中に３回に亘る貼り床を行い最終的に緩傾斜となるＡ２類の床面を呈している。このことから、Ａ１類からＡ２類への変化が窺える。平面形は、いずれも最大幅が焼成室の床面傾斜の変換点付近に位置し、焚口部及びダンパー部の床面幅が広く最大幅との差が小さい。

平面形は、最大幅が焼成室の中央付近に位置し、そこから煙道部に向かって床面幅が減ずる「紡錘形」と、焼成室下方に最大幅が位置し、煙道部にかけて床面幅がほとんど変化しない「寸胴形」に大別される。

②第５型式期

第５ａ型式期に主体を占めるＢ類は、Ａ類にみられた分炎柱背後の平坦面部分が緩く傾斜し、焼成室中央よりやや手前付近でやや角度を増す。煙道部は焼成室と同じ傾斜のものと、やや緩傾斜となるものがみられる。平面形は、「紡錘形」と「寸胴形」に大別される。

第５ｂ型式期には燃焼室床面が平坦なＣ類と、床面傾斜が分炎柱のやや手前から始まるＤ類が主体的に築かれる。主体はＣ類であるが、Ｄ類も一定数確認される。平面形はいずれも引き続き「紡錘形」と「寸胴形」が認められ、前者は焚口部やダンパー部の床面幅が狭くなり、後者は焼成室長が長くなるものや規模の小さい小型のものが現れるなど、それぞれ変化が現れる。

第 20 表　東濃型山茶碗窯窯体構造編年表（1）

第4型式期	紡錘形 A 1類 A 2類	寸胴形 A 1類 A 2類
第5a型式期	B類	B 2類
第5b型式期	C類	C類

第 21 表　東濃型山茶碗窯窯体構造編年表（2）

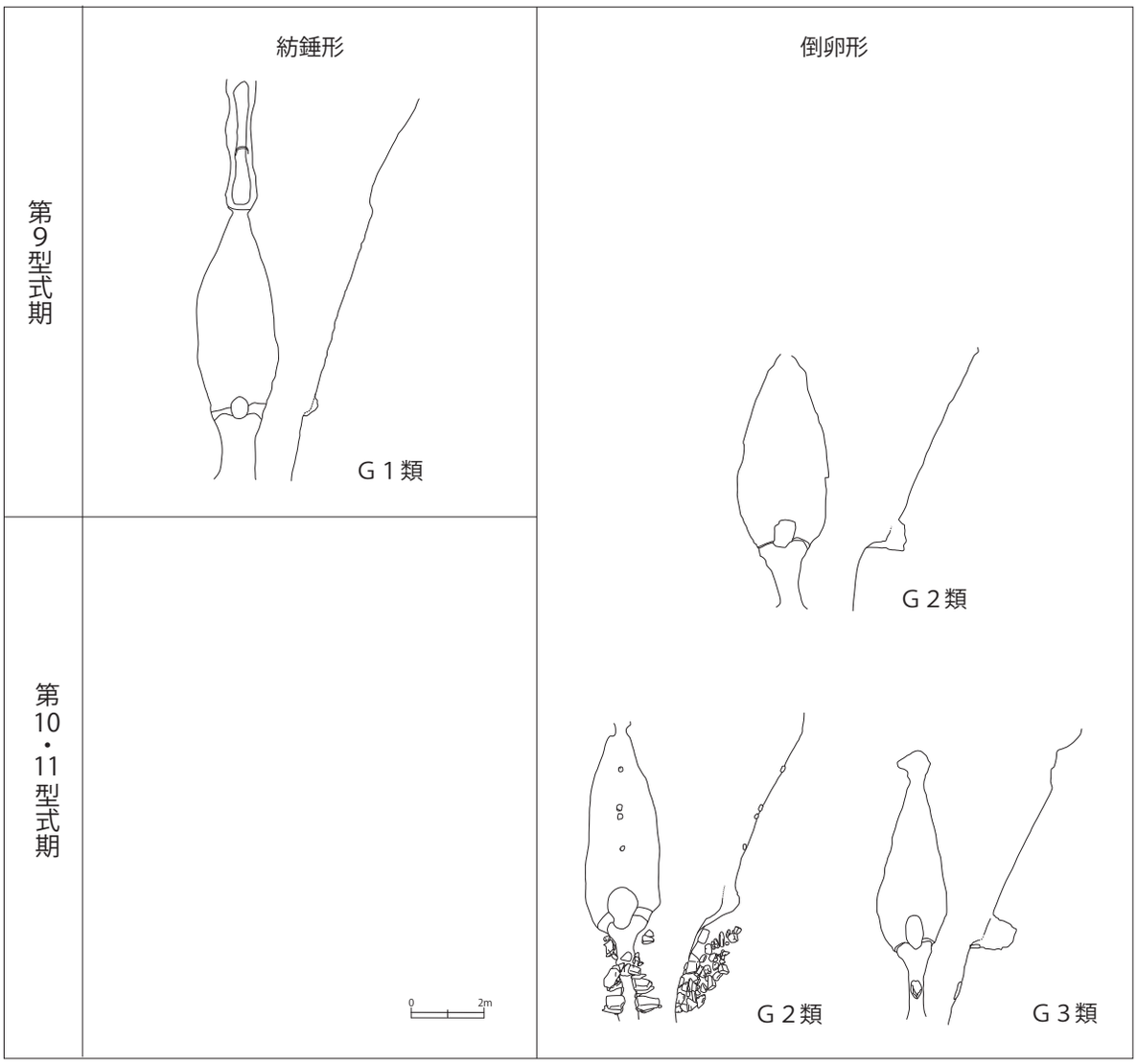
	紡錘形	寸胴形	倒卵形
第5b・c型式期	D類	D類	
第5c・d～第6型式期	E２類	E１類	0 2m
第7・8型式期	F１類	F２類	F１類

第５ｃ型式から第５ｄ型式にかけては、引き続きＣ類・Ｄ類が築かれるほか、燃焼室中央付近から床面傾斜が始まるＥ１類・Ｅ２類が加わる。主体となるのはＥ１類で、Ｃ類・Ｄ類・Ｅ２類は少数である。平面形は前段階と同様「紡錘形」と「寸胴形」が認められ、いずれも窯体の規模は前段階よりやや小さくなる傾向がみられる。

③第６型式期

当該期はＣ類がほとんどみられなくなり、Ｅ類を主体にＤ類が少数築かれる。また、Ｅ類のなかでも

第 22 表　東濃型山茶碗窯窯体構造編年表（３）



Ｅ２類の割合が増加している。平面形はほとんどが「紡錘形」で、小名田西ヶ洞３号窯のように焼成室の最大幅がやや下方に下がるものも認められる。「寸胴形」は第５ｃ型式から操業する下石西山２号窯が確認されるのみである。

④第７型式期

前段階に主体を占めたＥ類はほとんど姿を消し、焚口から床面傾斜が始まるＦ類が主体となる。Ｆ類のなかでもＦ１類が大多数で、Ｆ２類は少数である。平面形は「紡錘形」が主体を占め、「寸胴形」が少数築かれるが、後者は高田東山３号窯が確認されるのみである。

⑤第８型式期

引き続きＦ類が築かれるほか、分炎柱脇に昇炎壁構造をもつＧ類が登場する。主体はＦ２類で、Ｆ１類とＧ類は少数である。平面形は「紡錘形」が主体で、「寸胴形」は高田東山１号窯が確認されるのみであり、これ以降は認められない。また、当該期から少数ではあるが「倒卵形」が登場する。

⑥第９型式期

当該期の調査事例は少ないが、Ｆ類がほとんどみられなくなりＧ類が主体となるようだが、「倒卵形」の平面形をもつ窯で当該期が操業の主体となるものはほとんどみられない。当該期より操業し、第 10

型式期を主体とする中山１号窯は、煙道部が従来のような山の斜面に沿うようなものではなく、焼成室上端に煙突状に築かれるタイプである。平面形は「紡錘形」が主体で「倒卵形」は少数である。

⑦第 10 型式期

第９型式と同様調査事例は少ないが、当該期に比定される大畑大洞２号窯・同３号窯はいずれもＧ２類である。平面形はいずれも「倒卵形」で、燃焼室や焚口の床面幅が狭くなる傾向がみられる。

⑧第 11 型式期

終末期である第 11 型式期はＧ２・Ｇ３類が築かれ、Ｇ３類は小名田別山２号窯が確認されるのみで、平面形はいずれも「倒卵形」である。燃焼室の床面幅は焚口に向かって急速に窄まる形状に変化し、当該部分の床面や側壁が石敷き・石組みとなる。地上式の窯には焼成室内に天井支柱のための礎石が配され、側壁には専用の出入れ口が築かれたものと考えられる。

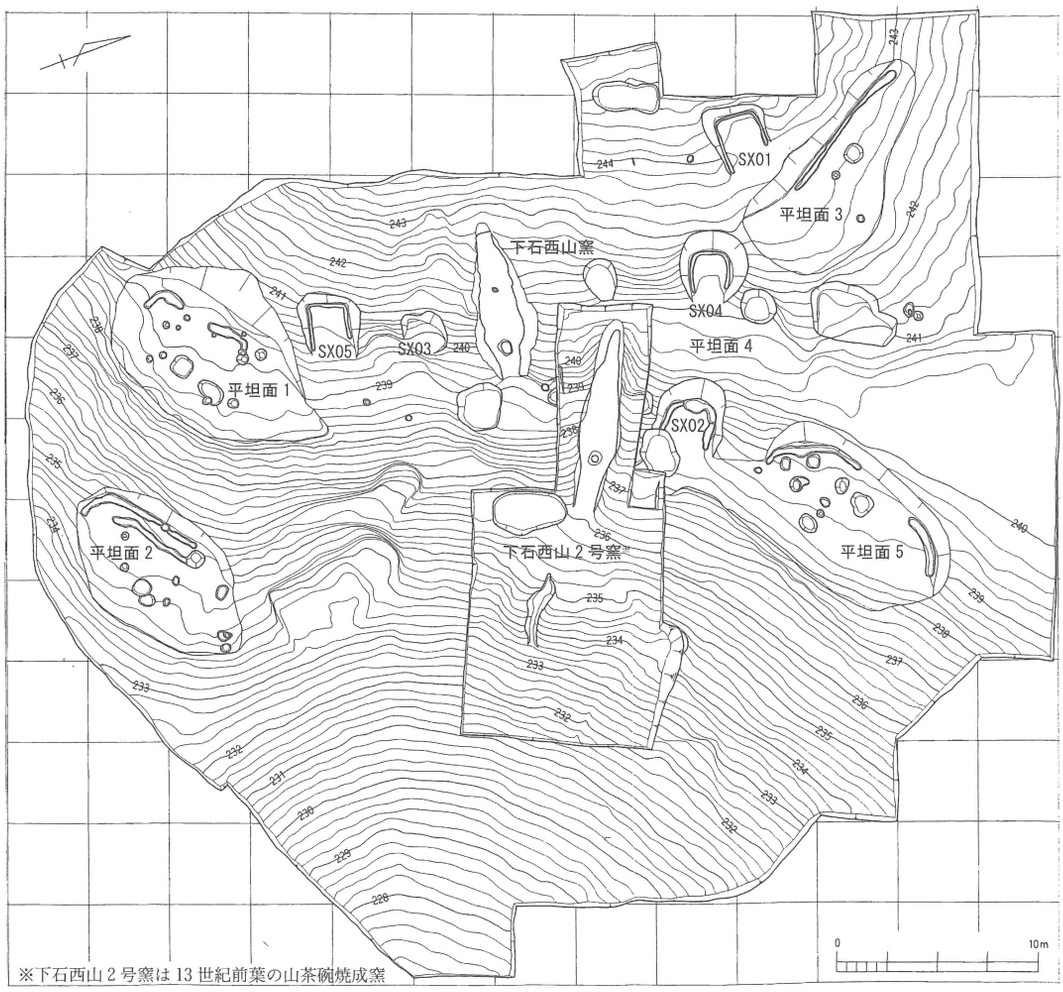
（２）窯体構造の変遷における画期

東濃窯の窯体構造の変遷には二つの画期がみられる。第１の画期は分炎柱背後と煙道部に水平部をもつＡ類から、当該部分に水平部を失い緩傾斜となるＢ類が主体となる第５ａ型式期である。また、第５ｂ型式期にはＣ・Ｄ類、第５ｃ型式Ｅ類が登場し、第８型式期にかけて一部併行しながらＣ類からＦ類へと変化していくようだ。また、平面形においては窯差はあるものの第４～７型式期にかけては「紡錘形」・「寸胴形」のいずれかに分類され、第８型式期にはこれに「倒卵形」が加わる。この「倒卵形」については北小木地区や土岐川以南地域で初めに登場し、第７型式期のこれらの地域の窯は「紡錘形」を主体としていることから、おそらく「紡錘形」から発展したものと考えられる。

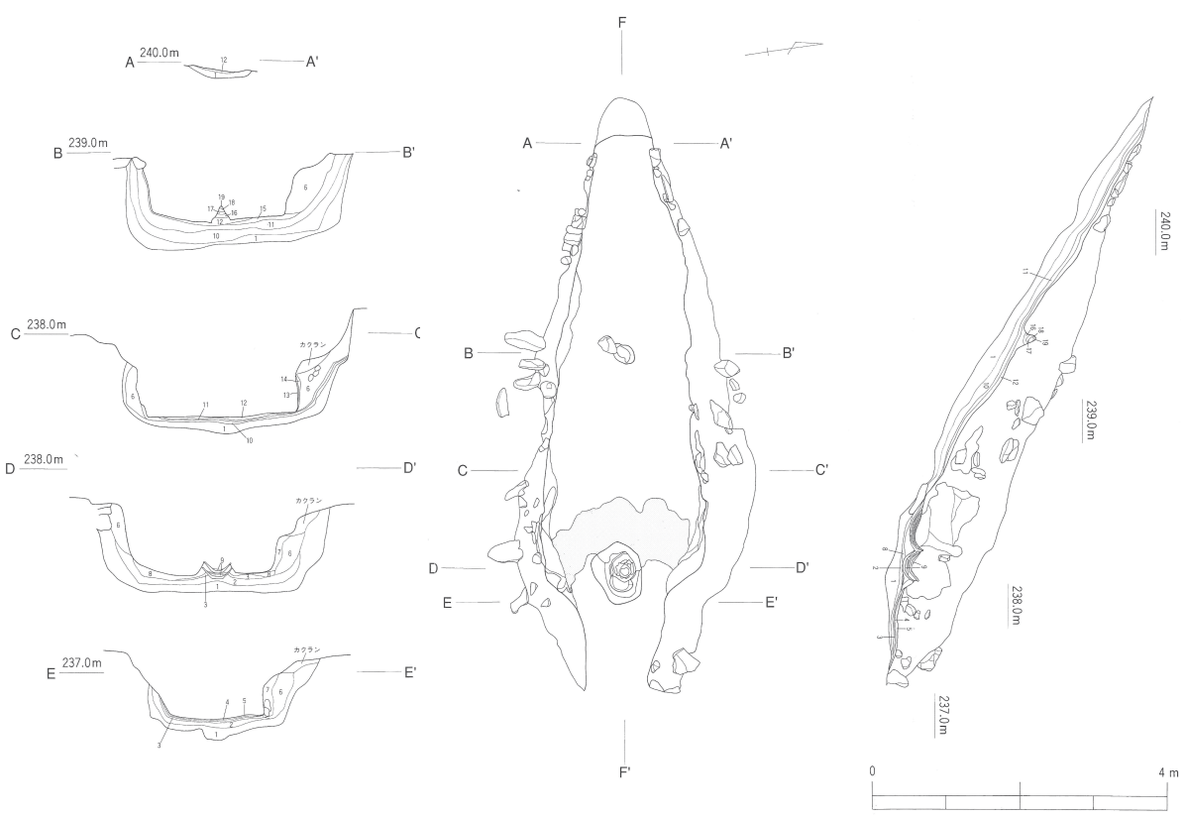
第２の画期は、昇炎壁構造をもつＧ類が登場する第８型式である。平面形はこれまで主体を占めてきた「紡錘形」に加えて「倒卵形」が登場し、従来の煙道部構造とは異なる焼成室最後部に煙突構造の煙道部をもつものもみられるようになる。第 11 ａ・ｂ型式期には燃焼室の床面や側壁が石敷き・石組みになり、焼成室内には天井支柱のための礎石、焼成室前方の側壁には専用の出し入れ口の痕跡がみられるなどの変化が現れる。

なお、第４型式期で窯体の平面形は「紡錘形」と「寸胴形」に大別され、第８型式期にはこれに「倒卵形」が登場し「寸胴形」はみられなくなるが、このことから第４型式期の工人は大きく２系統に分かれ、「紡錘形」の工人は第８型式期にかけて主体を占め、「寸胴形」の工人は第８型式期を最後に姿がみられなくなる。また、「倒卵形」の平面形は「紡錘形」と区別に迷うものもみられ、前者は後者が主体となる土岐川以南地域の多治見市南西部や瀬戸市北部で登場することから、「倒卵形」は「紡錘形」の工人が発展させた形状と考えられる

また、15 世紀中葉の土岐市に築かれた古瀬戸系施釉陶器窯である土岐口西山窯の窯体構造をみると（第 23 図）、同時期の東濃窯では昇炎壁構造をもつＧ類が築かれるのに対し、土岐口西山窯はこれをもたない。さらに、前者の平面形が「倒卵形」を呈するのに対し、後者は分炎柱のすぐ上方で最大幅となりそこから煙道部にかけては直線的に伸びている。また、東濃型山茶碗窯の工房址は窯炉１基に対してひとつ検出されるかどうかという状況だが、下石西山窯跡では窯炉１基に対して五つの工房址が検出されており、東濃窯の山茶碗窯とは異なる窯体構造・経営形態であったようだ（第 22 図）。



第 22 図　下石西山窯跡遺構配置図（藤澤 2004 より転載）



第 23 図　下石西山 2 号窯窯体実測図（近藤ほか 2004 より転載）

第 23 表　東濃窯窯体構造一覧（1）

（　　）内は推定値及び実測図の計測値

No	窯名	主軸長(m)			窯体幅(m)		床面傾斜					分炎柱形状	分炎柱(m)（長径×短径）	窯体分類	時期	平面形	窯体深度	工房	備考
		全長	焼成室	煙道部	焚口	焼成室	燃焼室	焼成室			煙道部								
								下方	中央	上方									
1	矢戸上野２	9.2	5.55	1.05	2.1	2.8	水平	水平	36	44	10～105	楕円	0.95×0.80	A1	4a	紡錘	地下		
2	大森笹洞５	8.9	5.2	1.0	(1.88)	2.3	水平	水平	30	45	水平～90以上	楕円	1.00×0.90	A1	4a	寸胴	地下		間仕切り障壁あり。
3	矢戸上野３	9.45	5.4	1.45	1.95	3.05	-28～水平	水平	35	44	水平～74	楕円	1.0×0.9	A1	4a・b	紡錘	地下		
4	下切兎田	9.95	4.90	1.70	1.6	2.46	(水平)	水平	43		15～50～40	楕円	0.96×0.80	A2	4a・b	寸胴	地下		
5	下切香ヶ洞	9.85	5.4	0.85	2.35	3.0	水平	水平	36	45	水平～25	楕円	1.25×1.00	A1→A2	4b	紡錘	地下		煙道部３回貼床。水平の状態から角度を足している。
6	谷迫間２	9.95	6.2	2.25	(1.68)	2.4	水平	水平	44～40		水平～90以上	楕円	0.98×0.87	A1→A2	4b	寸胴	地下		焼成室後方床面４面あり。36°→41°→43°と急になっていく。
7	大針台４	10.0	6.0	2.6	1.0	2.3	水平	水平	20	39	11～58	楕円	0.38×0.30	A1	4b・5a	紡錘	地下		
8	大薮迫間洞４	7.24以上	4.81以上	－	1.32	2.61	-4～水平	水平	36.5		－	楕円	0.91×0.75	A	4b・5a	紡錘	地下		
9	北丘９	10.96	6.5	2.06	0.86	2.86	水平～3	水平	12	32	31	楕円	0.64×0.54	B2	4b・5a	紡錘	地下		
10	大薮西山２	9.1	5.1	2.0	1.36	2.58	水平	35			35～40	楕円	0.70×0.64	B2	5a	紡錘	地下		
11	北小木萱原６	9.7	5.5	2.2	1.12	1.94	5	30	34		20	円	0.60×0.61	B2	5a	寸胴	地下		
12	北小木浜井場１	9.6以上	約6	－	0.90	2.70	水平	20			(20)	楕円	0.70×0.50	B2	5a	紡錘	地下		
13	住吉14	8.7	6.1	0.4以上	1.0	2.1	水平	15	27	35	(35)	楕円	0.7×(0.55)	B2	5a	寸胴	地下		
14	大薮迫間洞１	9.79	5.45	2.29	2.74	1.34	水平	10	33.5		(20)	隅丸方形	0.62×0.53	B1	5a・b	紡錘	地下		分炎柱背後～前庭部に床下施設・暗渠排水溝あり
15	深山１	9.98	5.94	1.9	1.51	2.54	水平	10	28	36	30	楕円	0.94×0.30	B1	5a・b	寸胴	地下		焼成室下半～前庭部に床下施設・暗渠排水溝あり。
16	北丘30	12.3	6.6	3.0	1.0	2.7	-3	8	24		25	楕円	0.63×0.52	B2	5a・b	紡錘	地下		焼成室上半に床下施設あり
17	住吉２	9.1	5.7	1.4	1.3	2.1	水平	15	25	31	25	楕円	0.70×(0.55)	B2	5a・b	寸胴	地下		
18	大原８	12.25	7.33	2.7	0.92	2.13	水平	20	30		(30)	楕円	0.64×0.53	B2	5a・b	寸胴	地下		
19	大針塩井戸１	10.21	7.2	1.6	－	2.25	水平	8	30		30～40	楕円	0.75×0.57	B2	5a～c	寸胴	地下		焼成室中ほどに床面下施設あり
20	大針14	13.2	6.1	4.8	0.96	2.4	水平	25			(30)	円	(0.40×0.40)	C	5b	寸胴	地下		焼成室最終床面に天井支柱の痕跡あり。
21	大針塩井戸２	12.60	5.78	4.33	1.20	2.19	水平～(15)	24			(24)	楕円	0.63×0.43	C	5b	紡錘	地下		ダンパー木芯痕残存せず。
22	北小木大上２	15.1	7.1	5.3	(1.0)	2.4	水平～(5)	25			25	円	0.55×0.55	C	5b	寸胴	地下		
23	北小木萱原４	8.52	5.8	0.9	1.2	2.3	水平	32			32	円	0.66×0.62	B2	5b	寸胴	地下		
24	北小木萱原７	11.20	5.6	2.8	0.98	2.4	水平～10	(25)			20	楕円	0.88×0.68	C	5b	寸胴	地下		
25	北小木一之洞19	11.12	6.26	2.92	1.10	2.00	水平～12	8	30		10～12	楕円	0.56×0.49	C	5b	寸胴	地下		
26	大森奥山２	11.75	5.88	2.60	1.25	2.4	(-5～5)	28～31			32	円	0.55×0.55	C	5b	寸胴	地下		焼成室半ばに床面下排水施設あり
27	松坂１	13.04	5.87	5.00	0.96	2.35	水平	29			29	楕円	0.57×0.46	C	5b	紡錘	地下		
28	松坂６	11.20	6.00	3.00	1.64	2.26	水平	20			10	楕円	0.60×0.54	C	5b	寸胴	地下		
29	丸石３	11.52	6.80	2.12	0.80	1.91	8	30～35			25～16	楕円	0.66×0.57	C	5b	寸胴	地下		
30	丸石８	9.7	5.4	2.5	1.8	2.3	4	31			31	楕円	1.0×0.8	C	5b	寸胴	地下		
31	丸石９(古)	10.4	3.8	2.0	0.9	2.3	(5～20)	30			30	円	0.7×0.7	C	5b	寸胴	地下		
32	大針２	11.56	2.2	1.36	1.0	2.41	水平	25			17	楕円	0.55×0.48	D	5b・c	寸胴	地下		焼成室下半に床面下除湿施設あり。谷迫間～丸石含む
33	大薮迫間洞３	6.75以上	4.30以上	－	1.05	2.14	水平	22			－	楕円	0.64×0.51	C	5b・c	寸胴	地下		
34	北小木一之洞20	12.18	6.08	3.43	1.02	2.87	水平～7	23			30～35	円	0.70×0.68	D	5b・c	紡錘	地下		
35	北小木大谷洞13	12.20	6.35	(3.6)	(1.25)	2.55	(水平～10)	22			28	円	0.65×0.65	C	5b・c	紡錘	地下		
36	北小木大谷洞45	13.10	6.1	5.4	1.04	2.35	水平～12	18～27			48	円	0.51×0.51	C	5b・c	寸胴	地下	○	
37	北丘16	13.1	7.6	3.0	1.2	2.36	水平～(5)	14	26		24	円	0.56×0.51	C	5b・c	寸胴	地下		
38	北丘17	11.98	5.80	3.54	－	2.62	水平～(20)	24			30	楕円	0.47×0.34	D	5b・c	紡錘	地下		
39	明和７	10.37	4.71	3.37	0.96	2.14	水平	30			28	楕円	0.48×0.42	D	5b・c	紡錘	地下		焼成室床面掘り込み→充填土→貼り床
40	明和８	11.72	6.60	2.88	0.98	2.00	水平	38			38	隅丸方形	0.65×0.88	C	5b・c	寸胴	地下		焼成室床面掘り込み→充填土→貼り床
41	住吉５	10.8	6.7	3.0	1.0	2.6	(水平)～6	12	25～29		20	円	(0.8)×(0.85)	D	5b・c	寸胴	地下		
42	住吉６	8.9	6.4	3.1	1.4	2.2	(水平)～10	15	25		15	楕円	0.60×(0.50)	C	5b・c	寸胴	地下		
43	丸石10	10.7	5.9	2.4	1.0	2.5	-3	30			29	隅丸方形	1.0×0.8	C	5b・c	寸胴	地下		
44	丸石11	8.4	5.2	2.5	1.5	2.3	3	31			29	円	0.7×0.7	C	5b・c	寸胴	地下		
45	窯洞１	13.5	7.2	3.9	1.0	2.7	水平	25			(25)	円	0.76×0.76	C	5b・c	寸胴	地下		
46	大針15	10.5	4.2	3.0	1.7	2.1	-5～10	28			25～30	楕円	0.60×0.50	E1	5c	紡錘	地下		
47	大薮西山１	12.15	5.5	4.1	1.27	2.44	-5～(5)	16	30		25	円	0.47×0.46	E1	5c	紡錘	地下		ダンパー部木芯痕残存せず。
48	大薮迫間洞２	10.54	5.69	2.60	1.13	2.62	水平～21	26			(26)	楕円	0.67×0.50	E1	5c	紡錘	地下		
49	北小木大上１	13.4	6.3	4.15	0.85	2.53	水平	25			25	楕円	0.70×0.57	C	5c	紡錘	地下		
50	北小木大上３	15.3	6.2	6.54	1.12	2.17	水平～(10)	25			25	楕円	0.62×0.46	E1	5c	寸胴	地下		
51	北小木萱原２	9.73	5.3	1.3以上	0.8	2.02	水平	30			20	楕円	0.84×0.55	C	5c	寸胴	地下		
52	北小木萱原５	11.48	6.1	3.0	1.0	2.35	水平	20	30		(25)	円	0.59×0.59	C	5c	紡錘	地下		
53	北小木二之洞３	11.68	6.34	3.08	1.00	2.54	水平～(10)	24			24	楕円	0.74×0.68	C	5c	紡錘	地下		
54	北小木神明洞１	10.34	4.08	4.1	0.91	2.61	(水平)～20	25			10～21～39	楕円	0.72×0.56	E1	5c	紡錘	地下		
55	北小木大谷洞21	13.08	5.97	5.35	0.92	2.52	(水平)	12～20	27.5		19～25	楕円	0.62×0.42	C	5c	紡錘	地下		
56	北小木大谷洞44	10.27	4.5	2.8	0.63	2.6	4	24			24	円	0.58×0.55	C	5c	紡錘	地下	○	
57	大森奥山５	12.84	6.48	3.07	1.07	2.42	水平	29			14～30	楕円	0.60×0.50	C	5c	寸胴	地下		
58	松坂４	13.40	6.60	3.50	1.00	2.24	水平～10	10	26		25	楕円	0.84×0.70	D	5c	寸胴	地下		焼成室床面下施設あり
59	松坂７	10.70	5.70	2.24	1.44	2.22	水平	23～26			10～20	楕円	0.60×0.48	C	5c	寸胴	地下		焼成室床面下施設あり
60	明和６	12.71	6.85	3.57	1.05	2.38	水平	29.0			30	円	0.57×0.54	D	5c	紡錘	地下		焼成室床面掘り込み→充填土→貼り床
61	明和29	9.62	5.9	1.77	0.99	1.86	水平～15	25			20	楕円	0.62×0.55	D	5c	寸胴	地下		
62	丸石９(新)	7.2	3.5	1.0	1.5	1.9	3	26			30	楕円	0.6×0.5	D	5c	寸胴	地下		
63	大針台５	8.5	4.0	2.0	0.70	2.0	水平～(5)	32	15	45	(45)	楕円	0.55×0.45	C	5c～6	紡錘	地下		
64	大薮西山３	7.3	3.3	2.1	0.85	1.78	水平～20	30			30	円	0.44×0.40	E1	5c・d	紡錘	地下		
65	北丘12	6.96以上	4.48以上	－	0.94	2.80	水平～(10)	15.5			－	楕円	0.70×0.50	D	5c・d	紡錘	地下		
66	北小木大上４	17.22	7.2	7.7	(1.1)	2.35	水平～(5)	25			25	楕円	0.58×0.50	D	5c・d	寸胴	地下		
67	北小木萱原３	11.36	6.3	2.65	0.84	2.1	水平	25			20	方形	0.7×0.46	C	5c・d	寸胴	地下		萱原２号窯の灰原の上に３号の掘抜き排土・灰原が堆積
68	北小木畝欠田２	9.06	4.60	2.06	1.04	2.30	5～20	23			30～38	円	0.54×0.55	E2	5c・d	紡錘	地下		
69	北小木二之洞１	11.25	6.25	2.74	1.00	2.50	(5～10)	25			(35)	円	0.60×0.60	D	5c・d	紡錘	地下		
70	北小木二之洞２	11.25	5.90	2.76	1.02	2.16	-10～7	20			20	楕円	0.64×0.56	E1	5c・d	紡錘	地下		
71	北小木神明洞９	9.88	5.11	2.31	0.76	2.24	-6～6	24			20～34	楕円	0.76×0.66	E2	5c・d	紡錘	地下		
72	北小木神明洞10	11.76	5.80	3.86	0.88	2.53	4～20	24			24	楕円	0.71×0.65	C	5c・d	紡錘	地下		
73	北小木神明洞11	7.72	3.41	2.04	0.90	2.00	5～15	24			30	円	0.52×0.48	D	5c・d	紡錘	地下	○	
74	北小木大谷洞３	10.30	4.50	2.25	0.90	2.27	水平～10	25			33	楕円	0.78×0.60	E2	5c・d	紡錘	地下		
75	北小木大谷洞６	11.42	6.02	3.30	1.0	2.54	水平	20			20	楕円	0.78×0.72	D	5c・d	紡錘	地下		
76	北小木大谷洞７	10.94	5.34	2.74	1.0	2.90	(-10)～6	16			(30)	楕円	0.68×0.56	E1	5c・d	紡錘	地下		
77	北小木大谷洞11	11.30	4.6	2.94	1.1	2.50	(水平～10)	29			35	楕円	0.74×0.56	E1	5c・d	紡錘	地下	○	
78	北小木大谷洞12	9.94	4.02	1.2	0.99	2.01	(5)	21～25			17～22	楕円	0.74×0.58	E1	5c・d	紡錘	地下		
79	北小木大谷洞19	10.80	4.92	3.02	1.14	2.20	5～10	25			30～45	楕円	0.66×0.58	E2	5c・d	紡錘	地下	○	
80	大森奥山11	11.2	5.6	2.6	1.48	2.4	水平	28			24	円	0.60×0.56	C	5c・d	寸胴	地下		
81	松坂３	12.84	6.50	3.69	1.08	2.20	水平	18			27	楕円	0.74×0.56	C	5c・d	紡錘	地下		
82	松坂９	10.8	6.0	2.2	0.96	2.4	水平	20	30		(15～30)	円	0.48×0.48	C	5c・d	寸胴	地下		
83	北丘18	11.81	6.16	3.20	1.47	2.46	(10)	25			(20～30)	楕円	0.56×0.45	D	5b・c	紡錘	地下		
84	明和19	12.35	5.1	3.83	0.98	2.37	7～8	27			40	楕円	0.67×0.55	E2	5c・d	寸胴	地下		
85	明和15	12.66	5.65	4.15	1.20	2.54	12	25			25	円	0.56×0.53	E1	5c～6	紡錘	地下		
86	下石西山２	9.6	5.00	2.95	1.03	1.90	(水平～25)	25			20～65	円	0.45×0.45	E2	5c～6	寸胴	地下		
87	北小木大上７	9.3	4.24	2.86	(0.8)	2.15	水平～8	30			30	円	0.60×0.60	E1	5d	紡錘	地下		
88	北小木大上９	13.13	6.1	4.7	1.22	2.3	水平～(10)	26			23	円	0.59×0.59	D	5d	紡錘	地下		
89	大森奥山６	15.45	7.38	4.62	1.0	2.23	5～8	20～24			30	円	0.50×0.50	E1	5d	寸胴	地下		
90	北小木萱原１	8.52	3.15	2.97	0.87	1.68	水平～18	20			20～35	円	0.43×0.46	E2	5d・6	紡錘	地下		
91	北小木浜井場３	10.68	4.90	2.92	1.10	2.48	水平～30	30			20	楕円	0.88×0.66	E1	5d・6	紡錘	地下		

第 24 表　東濃窯窯体構造一覧（2）

No	窯名	主軸長(m)			窯体幅(m)		床面傾斜				分炎柱形状	分炎柱(m)(長径×短径)	窯体分類	時期	平面形	窯体深度	工房	備考
		全長	焼成室	煙道部	焚口	焼成室	燃焼室	焼成室			煙道部							
								下方	中央	上方								
92	大森奥山４	12.43	5.79	3.88	1.28	2.40	(水平～10)	24～27			27～30	円	0.55×0.52	D	5d・6	紡錘	地下	
93	松坂２	11.63	5.01	4.16	1.35	2.62	13	27			27	楕円	0.80×0.70	E1	5d・6	紡錘	地下	
94	土岐口西山３	8.8	4.22	2.30	1.00	2.06	3	28			32	楕円	0.64×0.50	D	5d・6	寸胴	地下	
95	土岐口西山４	8.7	4.40	1.70	1.32	1.98	4	28			30	楕円	0.60×0.40	D	5d・6	寸胴	地下	
96	北小木大上８	11.28	5.4	3.38	1.1	2.33	水平～(10)	25			25～34	楕円	0.54×0.44	E2	5d・6	紡錘	地下	
97	北小木大上10	8.96	4.36	(2.9)	0.82	1.67	水平～(5)	25			30	円	0.46×0.43	D	5d・6	紡錘	地下	
98	北小木大上12	9.74	4.65	3.0	1.08	2.12	15	22			15～30	隅丸方形	0.87×0.54	F1	6	紡錘	地下	
99	北小木一之洞21	10.36	5.04	3.18	1.06	2.46	水平～17	25			25～35	楕円	(0.55×0.45)	E1	6	寸胴	地下	
100	大森奥山３	10.80	4.97	2.63	1.3	2.46	(水平～10)	20～25			30	楕円	0.60×0.50	E1	6	寸胴	地下	
101	柿下１	16.37	10.5	3.62	()	2.2	10	27			(27)	円	0.60×0.60	D	6	紡錘	地下	
102	北丘13	8.56	4.77	1.46	0.90	2.23	10	26			28	楕円	0.51×0.47	F1	6	紡錘	地下	
103	明和23	10.34	4.45	3.65	1.03	2.14	8	25			30	円	0.51×0.50	E1	6	紡錘	地下	
104	小名田西山１	10.26	4.72	2.92	(1.15)	2.39	水平～20	23			26	楕円	0.74×0.66	F1	6	紡錘	地下	煙道部は後に炭焼き窯として利用。側壁の上半分・床面の一部が破壊される。
105	小名田西ヶ洞２	9.8	5.2	2.38	0.84	2.53	5	20			(20)	楕円	0.68×0.39	D	6	紡錘	地下	○
106	小名田西ヶ洞３	9.8	5.20	2.11	1.02	2.45	水平～(5)	22			22～50	円	0.64×0.46	E2	6	紡錘	地下	○
107	北丘10	9.86	5.04	2.62	1.0	2.31	8～19	27～30			31～35	楕円	0.64×0.54	F1	6・7	紡錘	地下	
108	北小木大谷洞１	10.32	5.00	2.76	120	2.80	水平～5	26			26	楕円	0.72×0.63	F1	6・7	紡錘	地下	○
109	松坂８	10.2	5.28	2.5	1.0	2.4	水平～(20)	23			15～38	円	0.66×0.66	F2	6・7	紡錘	地下	
110	北丘19	4.86以上	2.88以上	－	－	2.26	15	20			－	円	0.78×0.60	F1	6・7	紡錘	地下	
111	明和14	12.1	4.5	3.7	1.20	22.2	(5)	35			40	楕円	0.82×0.63	E1	6・7	紡錘	地下	
112	明和36	11.54	6.4	3.3	(0.9)	2.16	水平～10	30			30	円	0.62×0.62	E1	6・7	寸胴	地下	○
113	白土原５	8.2以上	4.7	2.7	－	2.36	21	23			30	楕円	0.64×0.48	E1	6・7		地下	
114	小名田西ヶ洞１	9.55	5.23	2.08	0.96	2.04	5	28.5			47	楕円	0.74×0.50	F2	6・7	紡錘	半地下	○
115	小名田野田内１	9.28	5.18	2.10	1.18	2.20	(5)	27			(27～90)	円	0.65×0.60	F1	6・7	紡錘	地下	○
116	小名田別山７	9.76	4.65	2.90	1.30	2.22	6	24			(24)	楕円	0.81×0.60	F1	6・7	紡錘	地下	○
117	高田水口１	11.0	5.0	2.9	1.05	2.3	12	27			31	楕円	0.70×0.50	E2	6・7	寸胴	地下	
118	滝呂向島	9.81	5.07	2.43	1.1	2.24	7～15	21～23			27～40	楕円	0.76×0.51	F2	6・7	紡錘	地下	
119	細峯３	11.36	4.66	3.90	1.25	2.28	6～15	28			30～35～60	楕円	0.72×0.64	F1	7	紡錘	地下	○
120	北小木大上11	10.26	4.3	3.71	1.2	2.27	6	29			30～50	円	0.53×0.54	F1	7	紡錘	地下	
121	北小木畝欠田１	9.16	4.86	2.16	1.08	2.20	(20)	(20)			20～31	円	0.65×0.60	F2	7	紡錘	地下	
122	北小木畝欠田３	10.34	4.78	3.20	1.22	2.40	28	25			25～35	円	0.58×0.58	F1	7	紡錘	地下	
123	北小木大谷洞31	9.63	4.8	2.5	1.1	2.08	水平～20	22			40	隅丸方形	0.56×0.53	F1	7	紡錘	地下	○
124	富士見１	9.66	4.2	2.6	1.2	2.38	17	28			37	円	0.63×0.63	F1	7	紡錘	地下	○
125	明和１	8.75	4.2	1.82	1.3	2.20	15	25～31			30	楕円	(0.70×0.66)	F1	7	紡錘	地下	○
126	明和22	10.86	4.9	2.4以上	1.47	2.50	20	27～28			20～30	楕円	0.72×0.61	F1	7	紡錘	地下	
127	小名田可児郷３	8.43	4.69	1.66	0.98	1.99	10	24.5			31	隅丸方形	0.67×0.62	F1	7	紡錘	地下	
128	高田東山２	8.40以上	4.20	1.80以上	1.08	2.20	13	18			32	楕円	0.88×0.70	F2	7	紡錘	地下	○
129	高田東山３	10.30	5.40	2.92	1.25	2.10	10	18			30	楕円	0.84×0.70	F1	7	寸胴	地下	○
130	高田岩ヶ峠１	9.35	4.7	2.2	1.3	2.15	17.5	21～27			49	円	0.65×0.60	F2	7	紡錘	地下	
131	高田岩ヶ峠２	9.65	4.7	2.35	1.05	2.4	水平～18.5	23			23～43	円	0.45×0.40	E2	7	紡錘	半地下	○
132	半ノ木Ｅ２	10.5	4.75	3.22	1.04	2.32	(5)	25			20～45	隅丸方形	0.68×0.50	F1	7	紡錘	地下	○
133	北小木大谷洞16	9.58	4.52	2.74	1.20	2.26	10	17～24			24～45	楕円	(0.70×0.65)	F2	7・8	紡錘	地下	
134	小名田別山１	9.84	5.09	2.90	0.87	2.09	15	20			30	楕円	0.61×0.51	F1	7・8	紡錘	地下	○
135	小名田別山３	9.25	4.63	2.78	0.98	2.30	(15)	20			12～30	楕円	0.60×0.50	F1	7・8	紡錘	半地下	○
136	大畑大洞１	10.32	5.16	3.00	0.74	1.96	7～27	27			(27)	隅丸方形	0.62×0.50	F1	7・8	紡錘	地下	○
137	下半田川Ｃ１	10.78	5.28	3.22	0.88	2.46	10	21			25～40	隅丸方形	0.62×0.54	F1	7・8	紡錘	地下	
138	北小木大谷洞２	10.06	4.64	3.1	1.06	2.40	15	24			19～38	円	0.57×0.57	F1	8	倒卵	半地下	
139	小名田別山４	9.20	4.58	2.62	0.83	2.46	18	21			32	楕円	0.68×0.54	F1	8	紡錘	半地下	○
140	小名田別山５	9.02	4.65	2.62	1.00	2.23	6～17	22			18～43	隅丸方形	0.52×0.49	F2	8	紡錘	半地下	○
141	小名田別山６	10.57	4.51	3.65	1.06	2.10	水平～19	23			(40)	円	0.60×0.55	F1	8	紡錘	地下	○
142	高田東山１	9.20	4.50	2.90	1.10	2.0	15	20			40	楕円	0.82×0.70	F2	8	寸胴	地下	○
143	大畑大洞４	6.28	4.65	－	1.10	2.12	20	24			掘り込み状	楕円	0.60×0.45	F1	8	紡錘	半地下	△
144	半ノ木Ｅ１	10.5	5.30	2.74	1.0	2.24	(23)	25			35	隅丸方形	0.58×0.41	F1	8	倒卵	地下	○
145	下半田川Ｃ２	8.2以上	4.9	－	1.04	2.38	18	14	23～29		23～39	楕円	0.75×0.55	F1	8	倒卵	地下	
146	北小木浜井場２	9.82	4.36	3.86	1.04	2.44	7～20	23			6～32	楕円	(0.80×0.60)	F1	8・9	紡錘	半地下	○
147	北小木浜井場４	11.54	5.22	4.32	0.70	2.56	8～19	13～16			16～32	楕円	0.72×0.50	F1	8～10a	紡錘	半地下	○
148	北小木大谷洞32	12.32	4.45	5.05	1.08	2.47	15	20～18			(18)～39	円	0.55×0.52	F2	8・9	紡錘	地下	○
149	北小木大谷洞15	10.98	4.38	(4.55)	1.02	2.32	4～18	16			5～50	楕円	(0.70×0.50	G1	9	紡錘	地下	
150	北小木大谷洞14	13.14	5.14	1.12	0.98	2.28	13～11	17.5			29～20	楕円	(0.60×0.50)	G1	9～10a	紡錘	半地下	○
151	中山１	(6.60)	(4.8)	－	(0.50)	(2.1)	(5～15)	27			－	隅丸方形	(0.6×0.6)	G2	9～10b	倒卵	半地下	○
152	大畑大洞２	6.81	5.15	－	0.60	2.43	7～24	25			×	方形	0.84×0.53	G2	10a・b	倒卵	半地下	○
153	大畑大洞３	6.70	4.98	－	0.62	2.49	30	28	35	15	×	円	0.70×0.70	G2	10a・b	倒卵	半地下	○
154	東町１	8.28	4.98	－	0.35	2.09	19	25.5			×	楕円	0.96×0.85	G2	10b・11a	倒卵	半地下	○
155	東町２	6.73	4.18	－	0.35	2.03	(20)	30			×	方形	0.28×0.30	G2	11a・b	倒卵	地下	○
156	小名田別山２	8.38	4.76	1.43	0.53	2.26	18	27			水平～90以上	楕円	1.02×0.55	G3	11b	倒卵	地下	○
157	北小木神明洞12	5.70以上	3.59以上	－	1.00	2.28	3～20	25.5			－	楕円	1.32×0.94	C	不明	不明	地下	
158	北小木大谷洞20	5.98以上	3.48以上	－	0.72	2.75	水平～10	21			－	楕円	0.74×0.64	C	不明	不明	地下	
159	北小木大上６	4.4以上	2.7以上	－	(0.70)	2.45	(水平)	25	35		－	楕円	0.58×0.45	D	不明	不明	地下	
160	松坂10	7.80	3.96	1.42	0.58	2.22	水平	28			31	楕円	1.04×0.64	C	不明	寸胴？	地下	
161	松坂11	9.94	4.88	2.60	0.84	2.64	水平	23			29	楕円	0.88×0.56	C	不明	寸胴？	地下	

第４章　中世東濃窯の分布と群構造

これまで、山茶碗類や小形壺瓶類の生産状況、窯体構造の分類・変遷について述べてきたが、本章では先行研究を参考に東濃窯の範囲及び地区設定を行い、各時期の窯跡分布を地区別に整理することで山茶碗窯の動向を探っていく。

第１節　窯跡分布についての研究史

田口氏は、多治見市・土岐市における窯跡の分布密度と地理的環境によって、多治見市北部窯跡群、多治見市南部窯跡群、土岐市北部窯跡群、土岐市南部窯跡群という四つの窯跡群に分けている（田口 1976）。これによると、多治見市北部窯跡群は多治見市の土岐川以北一帯に分布し、長瀬山地の南麓に分布する一群と、華立山地の東麓に分布する一群に細分される。多治見市南部窯跡群は、多治見市の土岐川以南の地域に分布し山茶碗末期の窯が多く含まれる。土岐市北部窯跡群は、土岐市の土岐川以北に分布する。土岐市南部窯跡群は、土岐市の土岐川以南に分布し、特に大洞地区に末期の山茶碗窯が集中するという。

また、北丘窯跡群で明和期を最後に生産が途絶え、土岐川以南の地域に移っていく点について、楢崎彰一氏は工人達の自律的な動きではなく池田御厨を所領する伊勢神宮と土岐氏の庶流と政治的な関係のなかにその要因を求めるべきとしている（楢崎 1981）。

若尾氏は、西坂期以降谷迫間期・浅間窯下期に窯がみられず、再び丸石期から白土原期まで稼働、それ以降消滅するという断続的な生産が、大原窯跡群・北丘窯跡群・明和窯跡群などに見受けられることから、燃料を要因とする窯の移動を想定している（若尾 1985）。また、多治見市北西部にはいずれも谷迫間期・浅間窯下期の窯が存在しないことから西坂期を最後に窯が可児市域へ移動したものと捉えている。

さらに、若尾氏は多治見市北西部にあたる華立山地東麓に位置し、幸・昭栄・根本・北丘・大針町一帯を中心に南端を大原町、北端を大薮町から可児市の今あたりまでに分布する古代・中世の窯を華立山地東麓窯跡群と設定しており、これは田口氏が多治見市北部窯跡群のうち華立山地東麓に分布する一群としたものに相当する（若尾 1987b）。華立山地東麓窯跡群は、８世紀前半に須恵器生産がみられ、10世紀中葉の光が丘期に本格的に稼働、谷迫間期・浅間窯下期前半に空白期間を挟み浅間窯下期後半から北丘窯跡で生産が再開される。大針・白土原でも操業がみられるが、分布は東麓北部一帯に留まる傾向がみられる。丸石期には北丘・大針町などで再度分布密度が高まり、分布範囲も拡がり窯数も増加する。続く窯洞期には窯数が一時的に減少するが、白土原期・明和期には当該地から長瀬山にかけて分布が広がり、これを最後に華立山地東麓窯跡群は終焉を迎えるという。さらに、明和期以降の窯が小名田窯跡群で数多くみられる点については華立山地東麓窯跡群の衰退に伴うものであるとした（若尾 1987c）。

また、若尾氏によると小名田窯跡群は、別山窯跡のように複数基が集中して築かれたり、尾根に近い位置に窯が構築される傾向がみられ、この特徴は当該期の窯が分布する脇之島町周辺でも認められるという。また、東濃窯では明和期に生産の最盛期を迎えるが、これ以降の生産の中心的な役割は小名田・高田窯跡群が担ったものとし、脇之島窯とともに山茶碗生産終末期における最大の窯跡群と捉えている。ただし、小名田・高田町一帯に築かれた窯は、いずれも白土原期以降、脇之島期以前であることから、当該地では急激に窯が増加し一気に衰退したものと捉え、土岐市東部の土岐川以南から瀬戸市北部にかけても同様の現象が認められるとしている（若尾 1988）。

田口氏は、華立山地の北小木地区に分布する窯跡群を華立山地古窯跡群とし、多くの窯が窯洞期から白土原期に比定されることから、北丘窯跡群と明和窯跡群の空白期間を埋める窯跡群であり、一窯跡群が操業を継続することが極めて困難であった当時の状況を表すものとした（田口 1990）。なお、田口氏

は同書のなかで、長瀬山地（松坂・高根・日向・旭ヶ丘・元三ヶ根・明和・光ヶ丘・住吉・弁天・上山・虎渓山・赤根曽地区）に分布する、古代から近代にかけての窯跡群を「長瀬山古窯跡群」とした。これは以前多治見市北部窯跡群のうち、長瀬山地の南麓に分布する一群としていたものである。また、特定の名称はつけられていないが可児市の柿下・大森・浅間などの古窯跡群をひとつの地域とし、美濃南西部古窯跡群、華立山地東麓古窯跡群、小名田・高田古窯跡群と合わせて東濃窯全体を大きく六つのまとまりに分けている（田口 1990）。

山内氏は、山茶碗窯が急増しその分布域を拡大する浅間窯下期から丸石期とし、土岐川以南を含めた旧土岐郡にも分布はみられるが、その中心は旧可児郡に属する多治見市北西部にあるとした（山内 2008）。山茶碗の分布域の中心が旧可児郡の土岐川以北から旧土岐郡の土岐川以南および瀬戸市蛇ヶ洞川流域に移る大畑大洞期には、これまで窯業生産の中心地であった土岐川以北地域と以南で初めて窯数が逆転し、これ以降その傾向は顕著なものとなるという。

ところで、山内氏は山茶碗窯が特に集中する北小木窯跡群のなかでの工人移動についても注目している（山内 2001・2008）。北小木地区には約 120 基の窯が属し、地区内は東西に流れる北小木（五条）川によって南部と北部に、北部は南北に流れる北小木川の支流によってさらに北西部と北東部に分かれる。最も古い段階の浅間窯下期から丸石期にかけては北西部に集中し、窯洞期から白土原期には北東部に移動し窯数も急増する。明和期になると窯数は激減し、北部地域の生産は停止し、北小木川を超えて大きく南下した南部地区に工人が移動する。この動きの要因について 13 世紀前半代での飛躍的な増産が招いた山林の荒廃と深刻な薪不足であるとし、基盤層が土岐砂礫層である北部とは違い、窯業に不向きなチャート・粘板岩などが大部分を占める南部へ移動する背景には原料よりも燃料の確保が最優先事項であったと推測している。

また、詳しくは第６章で述べるが、山内氏は 14 世紀以降も北小木地区で山茶碗窯が沖積地ではなく高地、それもチャート・粘板岩を基盤とする場所に築かれる点、土岐川以南で窯が激増する点から、正和２年（1313）に創建される永保寺が山茶碗生産に対する「干渉者」たり得たのではないかとの見解を示している（山内 2008）。

ここまで東濃窯の窯跡分布についての先行研究を整理した。田口・若尾両氏は東濃窯を大きく六つの窯跡群に分けているが、小名田・高田古窯跡群と土岐市北部古窯跡群、美濃市西南部古窯跡群と土岐市南部古窯跡群は市境を基準に区別されている。また、可児市域の窯跡は柿田・大森・浅間地区については言及しているが南西部の矢戸川・横市川・姫川周辺地域の窯跡については触れられていない。また、両氏が窯跡群を設定してから調査例も増加していることに加え、瀬戸市北部の窯跡を含めて今一度地区設定を改める必要がある。

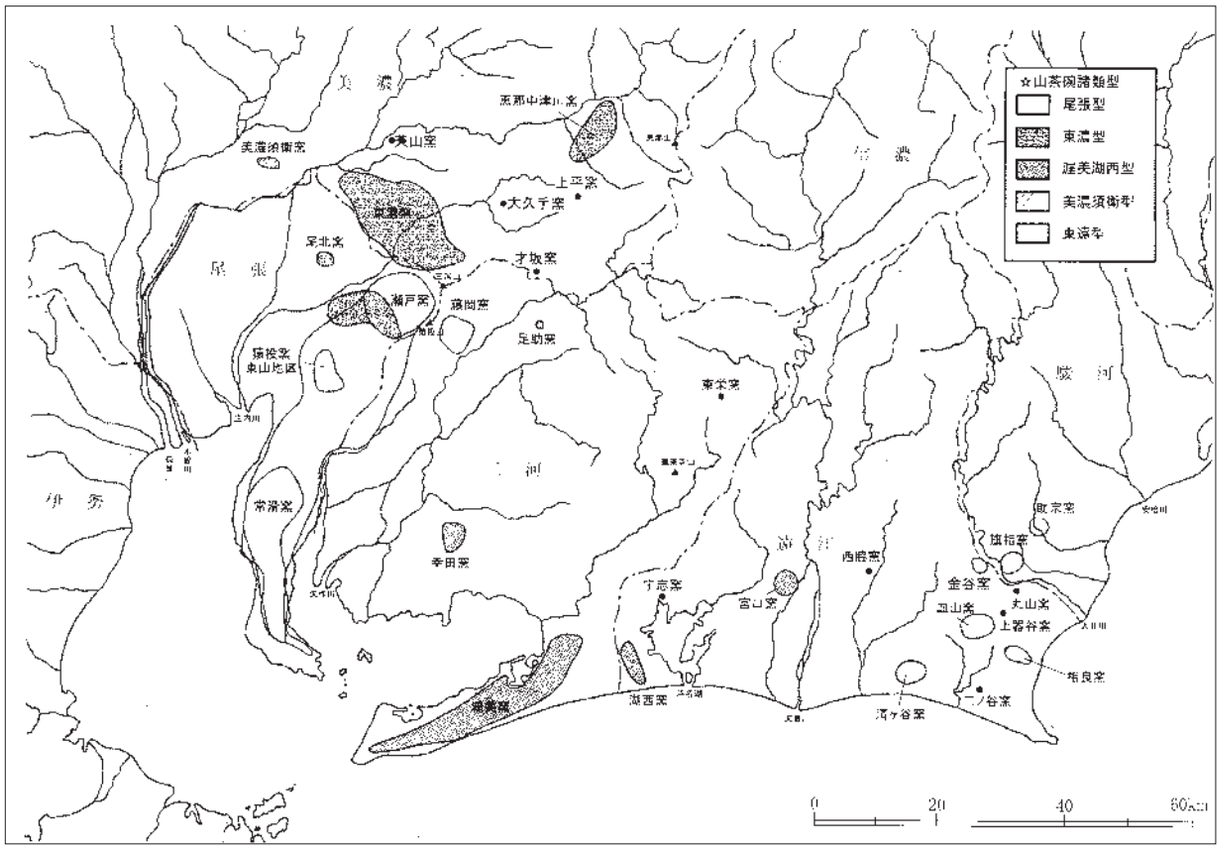
第２節　中世東濃窯の分布範囲と地区設定

本節では、中世東濃窯の範囲を明確にし、地形や河川などを加味して東濃窯のなかで地区を設定した後、次節にて時期別に窯跡の分布推移をみていく。

（１）中世東濃窯の分布範囲

東濃窯の地区設定を行う前に、中世東濃窯の範囲について触れておく。東海地方では古代から現代にかけて窯業生産が活発に行われてきた。中世窯の代表的な窯業地として、美濃国の美濃須衛窯、東濃窯、恵那中津川窯、尾張国の瀬戸窯、猿投窯、常滑窯、三河国の渥美窯、遠江西部の湖西窯・宮口窯、同国東部の東遠諸窯が挙げられ、このほかに小規模な窯業地や単独窯なども築かれる（第 24 図）。

中世美濃国内の窯業生産は南西部の美濃須衛窯と南東部の東濃窯・恵那中津川窯が拠点となっており、前者は美濃須衛型山茶碗、後二者は東濃型山茶碗を生産しているほか、単独の窯跡として知られる恵那



第 24 図　東海地方の中世窯位置図（藤澤 2018 より転載）

市南部の才坂窯跡・上平窯跡、瑞浪市の大久手窯跡でも東濃型山茶碗を生産している。近年では、東海地方の窯業地間での競合・補完関係を考慮した上で、これら東濃型山茶碗を生産した窯業地を「東濃型諸窯」、猿投窯・常滑窯・藤岡窯など尾張型山茶碗を生産した窯業地を「尾張型諸窯」、渥美窯・湖西窯・宮口窯など渥美湖西型山茶碗を生産した窯業地を「渥美湖西型諸窯」として一括する見解も示されている（藤澤 2018）。なお、美濃国東部では恵那中津川窯や可児市の古城山窯で壺甕類の生産も行われており、常滑窯からの技術導入が指摘されている。

（２）中世東濃窯の地区設定（第 25・26 図・第 25 ～ 34 表）

東濃窯の分布範囲を南西から北東へ流れる土岐川を挟んだ北部地域と南部地域は、すでに田口・若尾・山内の三氏に指摘されているように、その様相が異なる。ここでは、先行研究に従い東濃窯を土岐川以北・以南の二地域に大別し、それぞれ地形・河川・窯跡の分布状況を加味すると、土岐川以北地域は可児市南西地区、同南部中央地区、同南東地区、多治見市北西地区、北小木地区、明和・住吉地区、高田・小名田地区、丸石地区の８地区、土岐川以南地域は大洞・土岐口地区、大畑・下半田川地区、城山地区、肥田地区の４地区に分かれる。

①可児市南西地区

可児市の矢戸川・横市川・姫川流域の低丘陵地帯に窯跡が点在し、密集度は低い。２基以上の窯から構成される窯跡はほとんどみられない。ほうの木窯跡、矢戸上野２・３号窯跡、下切兎田窯跡、下切香ヶ洞窯跡、谷迫間２号窯跡などが挙げられるほか、犬山市に所在し可児市との市境付近に位置する今井１号窯跡・同２号窯跡もひとまず当該地区に含むものとする。

②可児市南部中央地区

可児市南端部の浅間山以西、姫川以東、多治見市と可児市の市境となる尾根より北側の地域に窯跡が分布し、大森川左岸の笹洞、同川右岸の奥山、浅間山西麓の柿下・浅間に分布が集中する傾向がある。田口・若尾両氏の柿下・大森・浅間窯跡群がこれに相当する。大森新田笹洞窯跡群、大森奥山窯跡群、

第 25 表　地区別・時期別窯跡数表

	3	4a	4b	5a	5b	5c	5d	6	7	8	9	10a	10b	11a	11b
可児市南西地区	1(1)	4(4)	4(4)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
可児市南部中央地区	0	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	2(2)	3(3)	3(2)	0	0	0	0	0	0	0
多治見市北西地区	0	0	3(3)	10(8)	17(15)	21(18)	7(7)	12(11)	9(8)	2(2)	0	0	0	0	0
北小木地区	0	0	0	2(1)	9(7)	30(24)	22(19)	14(12)	47(36)	9(8)	4(4)	2(2)	0	0	0
明和・住吉地区	0	0	0	2(1)	6(4)	8(6)	2(2)	4(4)	5(7)	0	0	0	1(1)	1(1)	0
高田・小名田地区	0	0	0	0	1(1)	1(1)	1(1)	12(10)	31(28)	12(8)	2(2)	2(2)	3(3)	2(2)	1(1)
丸石地区	0	0	0	0	5(2)	3(1)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
大洞・土岐口地区	0	0	0	0	4(4)	3(3)	3(2)	3(2)	1(1)	1(1)	4(4)	5(4)	6(6)	3(3)	2(2)
大畑・下半田川地区	0	0	0	0	0	0	0	2(2)	24(15)	21(15)	6(5)	9(7)	10(8)	2(2)	2(2)
城山地区	0	0	0	0	0	0	0	0	1(1)	2(2)	1(1)	0	0	0	0
合計	1(1)	5(5)	8(8)	15(11)	43(34)	68(55)	38(34)	50(43)	118(96)	47(36)	17(16)	18(15)	20(18)	8(8)	5(5)

柿下側窯跡、柿下１号窯跡、同２号窯跡、浅間窯下１号窯跡、浅間山３・４号窯跡、姫塚東窯跡が挙げられる。可児市南西地区と同様、３基以上の窯から構成される窯跡はほとんどみられない。

第 26 表　地域・地区別窯跡数

東濃窯総窯数	520基以上(353窯跡)
時期不明窯	177基(146窯跡)
旧土岐郡	125基(92窯跡)
旧可児郡	395基(261窯跡)
可児市南西地区	13基(13窯跡)
可児市南部中央地区	23基(22窯跡)
可児市南東地区	19基(19窯跡)
多治見市北西地区	80基(55窯跡)
北小木地区	148基(102窯跡)
明和・住吉地区	33基(23窯跡)
高田・小名田地区	70基(44窯跡)
丸石地区	6基(3窯跡)
大洞・土岐口地区	22基(18窯跡)
大畑・下半田川地区	64基(46窯跡)
城山地区	4基(4窯跡)
肥田地区	6基(６窯跡)

③可児市南東地区

浅間山東部、高根山西部、久々利川以南に分布する。向平１号窯跡、同２号窯跡、同３号窯跡、同４号窯跡、西ノ洞窯跡、同２号窯跡、向山窯跡群、青山北窯跡、青山窯跡跡、奥磯山号窯跡群、黒岩１号窯跡、同２号窯跡が挙げられる。西ノ洞・向山・奥磯山・向平・黒岩など２～４箇所の窯跡が密集する傾向がみられるようだが、発掘調査が行われた窯跡は皆無で詳細は不明である。田口・若尾両氏の地域区分には含まれていなかったため、今回新たに設定した。

④多治見市北西地区

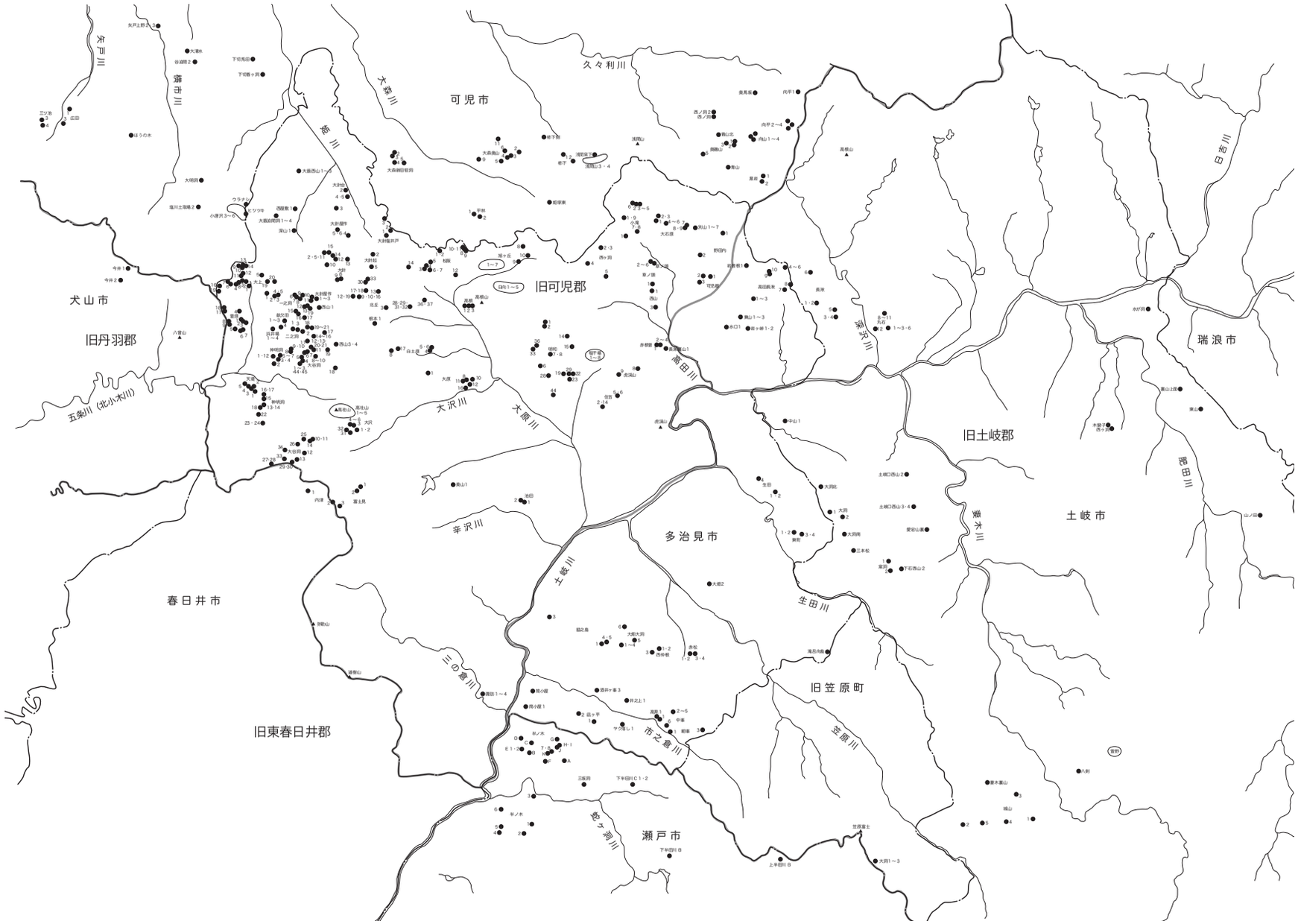
多治見市の姫川流域の大針･大薮、大原川上流域の松坂･旭ヶ丘･日向･高根、大原川右岸の北丘･白土原･大原・根本、唐沢川以北の美山・池田など多治見市北西部の低丘陵地帯の広範囲に多数の窯跡が分布する。これらの大半は田口・若尾両氏のいう華立山地東麓窯跡群に相当し、長瀬山地古窯跡群の北部に含まれている松坂・旭ヶ丘・日向・高根は、大針・北丘と距離的に近いものであるため多治見市北西地区に属するものと考える。当該地区は窯跡が２～５箇所程度密集するところもあるが後述する高地部の北小木地区に比べると密集度は低い。最大４基の窯で構成される窯跡が認められる。なお、可児市南西部の横市川上流域に位置する大明洞窯跡や塩川土取場２号窯跡、多治見市と可児市の市境に密集するウラナシ窯跡・ヒツツキ窯跡・小唐沢３～６号窯跡は、未調査であるため詳細は不明だが、多治見市大薮から分布が連続するためひとまず当該地区の低丘陵地帯に含めておく。

⑤北小木地区

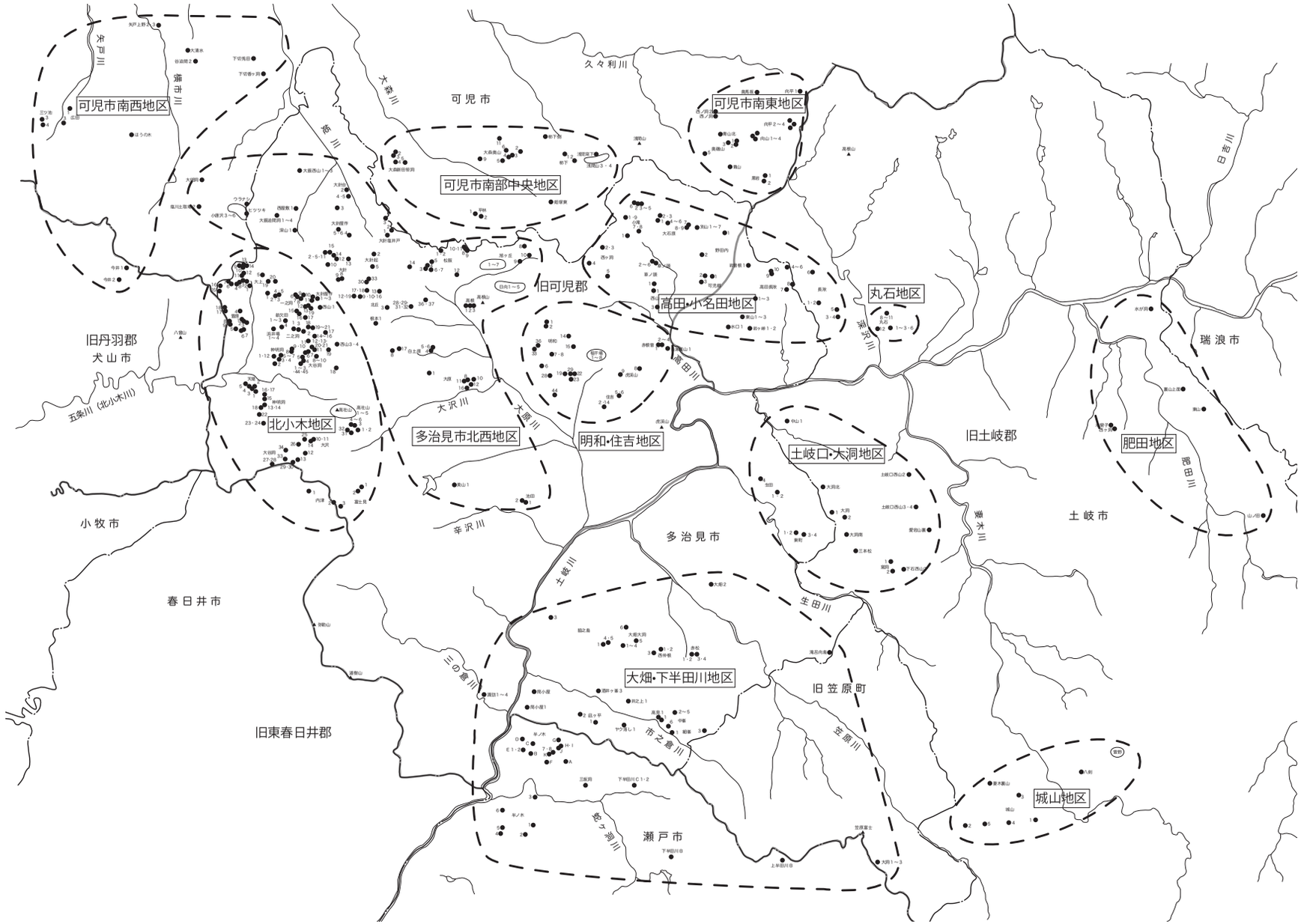
多治見市北西部に位置し、北小木川以北で八曽山（犬山市）東麓の北小木北西部（大上・萱原）、華立山地の高地部にあたる北小木北東部（一之洞・二之洞・畝欠田・神明洞・大谷洞の北部・大上の一部）、高社山西南麓の北小木南西部（天堤・大谷洞の南部）・大沢・高社山、内津峠周辺の富士見・内津などの高地に分布が密集する。大半が田口・若尾両氏のいう華立山地古窯跡群に相当し、山内氏の北小木地区と同様のものである。他の地区と比べ、窯跡同士が近接して築かれ、最大４基の窯で構成される窯跡も認められる。

⑥明和・住吉地区

大原川左岸の明和を中心に、虎渓山北西麓の住吉･虎渓山、高田川右岸に窯跡が分布している。田口･若尾両氏の長瀬山地古窯跡群の南半分に相当する。明和窯跡群、住吉２・14 号窯跡、同５・６号窯跡、



第 25 図　中世東濃窯窯跡分布図（山内ほか 2001・中島 2003・岐阜県教委 1990 より作成）　※○内は推定範囲



第 26 図　中世東濃窯の地域区分

第 27 表　中世東濃窯地名表（1）

地区	窯跡名	窯名	所在地	時期	報告書刊行年	備考
可児市 南西	下切兎田	下切兎田	可児市下切字大知洞708番地の1	4a・b	S60	
	下切香ヶ洞	下切香ヶ洞	可児市下切字香ヶ洞1314番地の6	4b	H6	
	矢戸上野２	矢戸上野２	可児市矢戸上野1458番地の1	4a		
	矢戸上野３	矢戸上野３	可児市矢戸上野1458番地の1	4a・b		
	谷迫間２	谷迫間２	可児市下切谷迫間入会大清水	4b	S53	
	大清水	大清水	可児市谷迫間大清水	詳細不明		
	ウラナシ	ウラナシ	可児市今釜ヶ谷	詳細不明		
	ヒツツキ	ヒツツキ	可児市今唐沢	詳細不明		
	小唐沢３	小唐沢３	可児市今唐沢	詳細不明		
	小唐沢４	小唐沢４	可児市今唐沢	詳細不明		
	小唐沢５	小唐沢５	可児市今唐沢	詳細不明		
	小唐沢６	小唐沢６	可児市今唐沢	詳細不明		
	大明洞	大明洞	可児市塩河東山	詳細不明		
	塩河土取場２	塩河土取場２	可児市塩河大明洞	詳細不明		
	ほうの木	ほうの木	可児市室原ほうの木573・574-2	3・4a		
	三ツ池３	三ツ池３	可児市東慎子西屋敷	詳細不明		
	三ツ池４	三ツ池４	可児市東慎子西屋敷	詳細不明		
	広田１	広田１	可児市長洞広田	詳細不明		
	広田２	広田２	可児市長洞広田	詳細不明		
可児市 南部中央	大森新田笹洞２	大森新田笹洞２	可児市大森字笹洞	詳細不明		
	大森新田笹洞３	大森新田笹洞３	可児市大森字笹洞	詳細不明		
	大森新田笹洞４	大森新田笹洞４	可児市大森字笹洞	詳細不明		
	大森新田笹洞５	大森新田笹洞５	可児市大森字笹洞	4a	H30	
	平林１	平林１	可児市大森奥山	詳細不明		
	平林２	平林２	可児市大森奥山	詳細不明		
	大森奥山１	大森奥山１	可児市大森字奥山1501番地の5280外11筆	詳細不明		現状保存
	大森奥山２	大森奥山２	可児市大森字奥山1501番地の5280外11筆	5b	S60	
	大森奥山３・４	大森奥山３	可児市大森字奥山1501番地の5280外11筆	6	S60	
		大森奥山４		5d・6		
	大森奥山５	大森奥山５	可児市大森字奥山1501番地の5280外11筆	5c	S60	
	大森奥山６	大森奥山６	可児市大森字奥山1501番地の5280外11筆	5d	S60	
	大森奥山７	大森奥山７	可児市大森字奥山	詳細不明		
	大森奥山８	大森奥山８	可児市大森字奥山	詳細不明		
	大森奥山９	大森奥山９	可児市大森字奥山	詳細不明		
	大森奥山10	大森奥山10	可児市大森字奥山	詳細不明		
	大森奥山11	大森奥山11	可児市大森1501番6457	5c・d	H28	
	柿下側	柿下側	可児市久々利柿下入会柿下山	詳細不明		
	柿下１	柿下１	可児市皐ヶ丘4丁目	6	S48	
	柿下２	柿下２	可児市皐ヶ丘4丁目	詳細不明		
	姫塚東	姫塚東	可児市桜ヶ丘7-254	詳細不明		
可児市 南東	浅間窯下１	浅間窯下１	可児市久々利柿下入会浅間山	4b・5a		
	浅間山３	浅間山３	可児市久々利柿下入会浅間山	詳細不明		
	浅間山４	浅間山４	可児市久々利柿下入会浅間山	詳細不明		
	西ノ洞	西ノ洞	可児市久々利柿下入会弘法西洞	詳細不明		
	西の洞２	西の洞２	可児市久々利柿下入会弘法西洞	詳細不明		
	奥馬坂	奥馬坂	可児市久々利柿下入会弘法東洞	詳細不明		
	向山１	向山１	可児市久々利柿下入会奥磯山	詳細不明		
	向山２	向山２	可児市久々利柿下入会奥磯山	詳細不明		
	向山３	向山３	可児市久々利柿下入会奥磯山	詳細不明		
	向山４	向山４	可児市久々利柿下入会奥磯山	詳細不明		
	奥磯山１	奥磯山１	可児市久々利柿下入会奥磯山	詳細不明		
	奥磯山２	奥磯山２	可児市久々利柿下入会奥磯山	詳細不明		
	奥磯山３	奥磯山３	可児市久々利青山	詳細不明		
	奥磯山５	奥磯山５	可児市久々利柿下入会奥磯山	詳細不明		
	向平１	向平１	可児市久々利柿下入会奥磯山	詳細不明		
	向平２	向平２	可児市久々利柿下入会奥磯山	詳細不明		
	向平３	向平３	可児市久々利柿下入会奥磯山	詳細不明		
	向平４	向平４	可児市久々利柿下入会奥磯山	詳細不明		
	青山	青山	可児市久々利青山	詳細不明		
	青山北	青山北	可児市久々利柿下入会奥磯山	詳細不明		
	黒岩１	黒岩１	可児市久々利黒岩	詳細不明		
	黒岩２	黒岩２	可児市久々利黒岩	詳細不明		
多治見市 北西	大針２・５	大針２	多治見市大針町286-2	5b・c	S62	５号窯は調査前に窯体滅失
		大針５		5a		
	大針11	大針11	多治見市大針町	詳細不明		窯体現存。
	大針８・９	大針８	多治見市大針町	5b	R1調査	
		大針９		5c		

第 28 表　中世東濃窯地名表（2）

地区	窯跡名	窯名	所在地	時期	報告書刊行年	備考
多治見市北西	大針10	大針10	多治見市大針町	詳細不明		滅失。
	大針12	大針12	多治見市大針町	詳細不明		滅失。
	大針13	大針13	多治見市大針町	詳細不明		滅失。
	大針14	大針14	多治見市大針町屋作288	5b	H26	
	大針15	大針15	多治見市大針町屋作287	5c	H26	
	大針起２	大針起２	多治見市大針町起	詳細不明		
	大針起５	大針起５	多治見市大針町起	詳細不明		
	大針塩井戸１	大針塩井戸１	多治見市大針町塩井戸665	5a～c	H7	
	大針塩井戸２	大針塩井戸２	多治見市大針町塩井戸665	5b	H2	
	大針塩井戸３	大針塩井戸３	多治見市大針町塩井戸672-13	詳細不明		
	大針台２	大針台２	多治見市大針町台	詳細不明		
	大針台３	大針台３	多治見市大針町台	6・7		滅失
	大針台４・５	大針台４	多治見市大針町台6番4・5	4b・5a	H9	
		大針台５	多治見市大針町台6番4・5	5c～6	H9	
	大針屋作１～３	大針屋作１	多治見市大針町屋作319・321	詳細不明		３基。
		大針屋作２	多治見市大針町屋作319・321			
		大針屋作３	多治見市大針町屋作319・321			
	大針屋作４	大針屋作４	多治見市大針町屋作274-5	詳細不明		窯体一部滅失。
	大針屋作５・６	大針屋作５	多治見市大針町屋作	詳細不明		
		大針屋作６				
	大針屋作７	大針屋作７	多治見市大針町屋作	4b		
	大針西屋敷１	大薮西屋敷１	多治見市大薮町1861-1	詳細不明		
	深山１	深山１	多治見市大薮町深山1918	5b	H8	
	大薮西山１・３	大薮西山１	多治見市大薮町西山1234-2	5c	H10	
		大薮西山３		5c・d		
	大薮西山２	大薮西山２	多治見市大薮町西山1234-2	5a	H10	
	大薮迫間洞１～４	大薮迫間洞１	多治見市大薮町迫間洞	5a・b	S63	
		大薮迫間洞２		5c		
		大薮迫間洞３		5b・c		
		大薮迫間洞４		4b・5a		
	松坂１・２	松坂１	多治見市松坂町4丁目2	5b	H11	
		松坂２		5d・6		
	松坂３	松坂３	多治見市松坂町2丁目10他8筆	5c・d	H11	
	松坂４	松坂４	多治見市松坂町2丁目10他8筆	5c	H11	
	松坂５	松坂５	多治見市松坂町2丁目10他8筆	7・8	H11	灰原調査
	松坂６・７	松坂６	多治見市松坂町2丁目10他8筆	5b	H11	
		松坂７	多治見市松坂町2丁目10他8筆	5c	H11	
	松坂８～11	松坂８	多治見市松坂町5丁目11-1	6・7	H15	
		松坂９		5c・d		
		松坂10		遺物なし		未焼成窯
		松坂11		遺物なし		
	松坂12	松坂12	多治見市松坂町5丁目	詳細不明		
	旭ヶ丘１～７	旭ヶ丘１	多治見市旭ヶ丘5丁目	詳細不明		
		旭ヶ丘２				
		旭ヶ丘３				
		旭ヶ丘４				
		旭ヶ丘５				
		旭ヶ丘６				
		旭ヶ丘７				
	旭ヶ丘８	旭ヶ丘８	多治見市旭ヶ丘5丁目	5c		S62滅失
	旭ヶ丘９	旭ヶ丘９	多治見市旭ヶ丘5丁目	5b～d		
	日向１～５	日向１	多治見市旭ヶ丘5丁目	詳細不明		滅失か。
		日向２				
		日向３				
		日向４				
		日向５				
	高根１～３	高根１	多治見市高根町4丁目	15c（9以降か）		『美濃の古陶』。団地造成時滅失。
		高根２				
		高根３				
	北丘３	北丘３	多治見市北丘町5丁目	5b・c		
	北丘９・10・16	北丘９	多治見市北丘町7丁目	4b・5a	S56	
		北丘10		6・7	S56	
		北丘16		5b・c	S56	
	北丘12・19	北丘12	多治見市北丘町8丁目	5c・d	S56	
		北丘19		6・7	S56	
	北丘13	北丘13	多治見市北丘町6丁目	6	S56	

第 29 表　中世東濃窯地名表（3）

地区	窯跡名	窯名	所在地	時期	報告書刊行年	備考
多治見市北西	北丘17・18	北丘17	多治見市北丘町7丁目	5b・c	S56	
		北丘18		5b・c	S56	
	北丘28	北丘28	多治見市根本町8丁目	詳細不明		
	北丘29	北丘29	多治見市根本町8丁目	詳細不明		
	北丘30	北丘30	多治見市北丘町7丁目	5a・b	H24	
	北丘31	北丘31	多治見市根本町8丁目	詳細不明		
	根本１	根本１	多治見市根本町12丁目	詳細不明		
	白土原４	白土原４	多治見市昭栄町	詳細不明		滅失
	白土原５	白土原５	多治見市根本町5丁目39番8	5c～6	H22	燃焼室・焚口は調査範囲外
	白土原６	白土原６	多治見市根本町5丁目39番5	6・7	H22	煙道部以外調査範囲外
	白土原８	白土原８	多治見市昭栄町	6か		工事により滅失
	白土原17	白土原17	多治見市昭栄町9丁目	5a・6・8		複数基か。
	大原１	大原１	多治見市大原町8丁目	7	S46	
	大原８	大原８	多治見市幸町5丁目	5a・b	S61	
	大原16	大原16	多治見市幸町5丁目	詳細不明		
	美山１	美山１	多治見市美山町	7		窯体不明
	池田２	池田２	多治見市池田町6丁目	7以降か		滅失。S56『池田の歴史（1）』池田町
	池田９	池田９	多治見市月見町1丁目	詳細不明		
北小木	西山１	西山１	多治見市西山町４丁目	詳細不明		
	西山３・４	西山３	多治見市西山町3丁目	6・7		２基。
		西山４				
	北小木大上１	北小木大上１	多治見市北小木町大上	5c	H13	
	北小木大上２・３	北小木大上２	多治見市北小木町大上	5b	H13	
		北小木大上３		5c		
	北小木大上４	北小木大上４	多治見市北小木町大上	5c・d	H13	
	北小木大上５	北小木大上５	多治見市北小木町大上	5b・c	H13	灰原調査。窯体残存。
	北小木大上６・７	北小木大上６	多治見市北小木町大上	－	H13	６号は構築中に放棄
		北小木大上７		5d		
	北小木大上８	北小木大上８	多治見市北小木町大上	5d・6	H13	
	北小木大上９・10	北小木大上９	多治見市北小木町大上	5d	H13	
		北小木大上10		5d・6		
	北小木大上11・12	北小木大上11	多治見市北小木町大上	7	H13	
		北小木大上12		6		
	北小木大上13	北小木大上13	多治見市北小木町大上	詳細不明		
	北小木大上14	北小木大上14	多治見市北小木町大上	詳細不明		
	北小木大上15	北小木大上15	多治見市北小木町大上	詳細不明		
	北小木大上16	北小木大上16	多治見市北小木町大上	詳細不明		
	北小木大上17	北小木大上17	多治見市北小木町大上	詳細不明		
	北小木大上18	北小木大上18	多治見市北小木町大上	詳細不明		
	北小木大上19	北小木大上19	多治見市北小木町大上	7		
	北小木大上20	北小木大上20	多治見市北小木町大上	7		窯体不明。
	北小木萱原１～３	北小木萱原１	多治見市北小木町萱原	5d・6	H13	
		北小木萱原２		5c	H13	
		北小木萱原３		5c・d	H13	
	北小木萱原４	北小木萱原４	多治見市北小木町萱原	5b	H13	
	北小木萱原５	北小木萱原５	多治見市北小木町萱原	5c	H13	
	北小木萱原６・７	北小木萱原６	多治見市北小木町萱原	5a	H13	
		北小木萱原７		5b	H13	
	北小木萱原８	北小木萱原８	多治見市北小木町萱原	詳細不明		
	北小木萱原９	北小木萱原９	多治見市北小木町萱原	詳細不明		
	北小木一之洞１	北小木一之洞１	多治見市北小木町一之洞91-1	詳細不明		
	北小木一之洞２・３	北小木一之洞２	多治見市北小木町一之洞91-1	詳細不明		複数基あり。
		北小木一之洞３				
	北小木一之洞４・５	北小木一之洞４	多治見市北小木町一之洞89-1	詳細不明		複数基あり。
		北小木一之洞５				
	北小木一之洞６	北小木一之洞６	多治見市北小木町一之洞89-1	詳細不明		
	北小木一之洞７	北小木一之洞７	多治見市北小木町一之洞89-1	詳細不明		
	北小木一之洞８	北小木一之洞８	多治見市北小木町一之洞89-1	詳細不明		
	北小木一之洞９	北小木一之洞９	多治見市北小木町一之洞89-1	詳細不明		
	北小木一之洞10	北小木一之洞10	多治見市北小木町一之洞89-2	詳細不明		
	北小木一之洞11	北小木一之洞11	多治見市北小木町一之洞89-2	詳細不明		
	北小木一之洞12	北小木一之洞12	多治見市北小木町一之洞89-2	詳細不明		
	北小木一之洞13	北小木一之洞13	多治見市北小木町一之洞89-2	詳細不明		
	北小木一之洞14	北小木一之洞14	多治見市北小木町一之洞89-2	詳細不明		
	北小木一之洞15	北小木一之洞15	多治見市北小木町一之洞87-1	5c・d	H13	灰原調査。
	北小木一之洞16	北小木一之洞16	多治見市北小木町一之洞87-1	6・7	H13	灰原調査。
	北小木一之洞17	北小木一之洞17	多治見市北小木町一之洞87-2	詳細不明		

第 30 表　中世東濃窯地名表（4）

地区	窯跡名	窯名	所在地	時期	報告書刊行年	備考
北小木	北小木一之洞18	北小木一之洞18	多治見市北小木町一之洞86	詳細不明		
	北小木一之洞19～21	北小木一之洞19	多治見市北小木町一之洞86	5b	H13	
		北小木一之洞20		5b・c		
		北小木一之洞21		6		
	北小木畝欠田１・２	北小木畝欠田１	多治見市北小木町畝欠田75-5	7	H13	
		北小木畝欠田２		5c・d		
	北小木畝欠田３	北小木畝欠田３		7		
	北小木畝欠田４	北小木畝欠田４	多治見市北小木町畝欠田63-1	詳細不明		
	北小木浜井場１～４	北小木浜井場１	多治見市北小木町浜井場57-1	5a	H13	
		北小木浜井場２		8・9	H13	
		北小木浜井場３		5d・6	H13	
		北小木浜井場４		8～10a	H13	
	北小木二之洞１	北小木二之洞１	多治見市北小木町二之洞	5c・d	H13	
	北小木二之洞２	北小木二之洞２	多治見市北小木町二之洞	5c・d	H13	
	北小木二之洞３	北小木二之洞３	多治見市北小木町二之洞	5c	H13	
	北小木大谷洞１～３	北小木大谷洞１	多治見市北小木町大谷洞626	6・7	H13	
		北小木大谷洞２		8		
		北小木大谷洞３		5c・d		
	北小木大谷洞４	北小木大谷洞４	多治見市北小木町大谷洞623-2	詳細不明		１基。
	北小木大谷洞５	北小木大谷洞５	多治見市北小木町大谷洞623-2	詳細不明		１基。
	北小木大谷洞６	北小木大谷洞６	多治見市北小木町大谷洞623-2	5c・d	H13	
	北小木大谷洞７	北小木大谷洞７	多治見市北小木町大谷洞623-2	5c・d	H13	
	北小木大谷洞８～10	北小木大谷洞８	多治見市北小木町大谷洞619-3	詳細不明		３基。
		北小木大谷洞９		詳細不明		
		北小木大谷洞10		詳細不明		
	北小木大谷洞11	北小木大谷洞11	多治見市北小木町大谷洞621-1	5c・d	H13	
	北小木大谷洞12・13・	北小木大谷洞12	多治見市北小木町大谷洞620-2	5c・d	H13	
		北小木大谷洞13		5b・c		
		北小木大谷洞20		5b・cか		
		北小木大谷洞21		5c		
	北小木大谷洞14～16	北小木大谷洞14	多治見市北小木町大谷洞620-1	9～10a	H13	
		北小木大谷洞15		9		
		北小木大谷洞16		7・8		
	北小木大谷洞17	北小木大谷洞17	多治見市北小木町大谷洞620-3・11	詳細不明		１基。
	北小木大谷洞18	北小木大谷洞18	多治見市北小木町大谷洞	詳細不明		
	北小木大谷洞19	北小木大谷洞19	多治見市北小木町大谷洞	5c・d	H13	
	北小木大谷洞22	北小木大谷洞22	多治見市北小木町大谷洞	7		１基。
	北小木大谷洞23・24	北小木大谷洞23	多治見市北小木町大谷洞	7		２基。
		北小木大谷洞24				
	北小木大谷洞25	北小木大谷洞25	多治見市北小木町大谷洞	7		
	北小木大谷洞26	北小木大谷洞26	多治見市北小木町大谷洞	詳細不明		１基。道路により灰原切断。窯体残存。
	北小木大谷洞27	北小木大谷洞27	多治見市北小木町大谷洞	詳細不明		
	北小木大谷洞28	北小木大谷洞28	多治見市北小木町大谷洞578-1	6・7	H9（県）	煙道部のみ調査。
	北小木大谷洞29・30	北小木大谷洞29	多治見市北小木町大谷洞578-11・12	8	H9（県）	２基。
		北小木大谷洞30		6・7		
	北小木大谷洞31	北小木大谷洞31	多治見市大沢町1丁目	7	H8	旧：大沢７
	北小木大谷洞32	北小木大谷洞32	多治見市北小木町大谷洞	8・9	H8	旧：大沢９
	北小木大谷洞33	北小木大谷洞33	多治見市北小木町大谷洞	7		
	北小木大谷洞34	北小木大谷洞34	多治見市北小木町大谷洞	7		１基。
	北小木大谷洞44	北小木大谷洞44	多治見市北小木町大谷洞626	5c	H13	
	北小木大谷洞45	北小木大谷洞45	多治見市北小木町大谷洞626	5b・c	H13	
	北小木神明洞１・12	北小木神明洞１	多治見市北小木町神明洞530	5c・d	H13	
		北小木神明洞12		遺物なし	H13	未焼成窯。
	北小木神明洞２	北小木神明洞２	多治見市北小木町神明洞531-1	詳細不明		１基。
	北小木神明洞３・４	北小木神明洞３	多治見市北小木町神明洞520	詳細不明		２基か。
		北小木神明洞４				
	北小木神明洞５～７	北小木神明洞５	多治見市北小木町神明洞519・520	詳細不明		３基か。
		北小木神明洞６				
		北小木神明洞７				
	北小木神明洞８	北小木神明洞８	多治見市北小木町神明洞508-1	詳細不明		
	北小木神明洞９・10	北小木神明洞９	多治見市北小木町神明洞508-1	5c・d	H13	
		北小木神明洞10		5c・d	H13	
	北小木神明洞11	北小木神明洞11	多治見市北小木町神明洞505	5c・d	H13	
	北小木神明洞13・14	北小木神明洞13	多治見市北小木町神明洞	7		２基。
		北小木神明洞14				
	北小木神明洞15	北小木神明洞15	多治見市北小木町神明洞	7		１基。
	北小木神明洞16・17	北小木神明洞16	多治見市北小木町神明洞	7		２基。
		北小木神明洞17				

第 31 表　中世東濃窯地名表（5）

地区	窯跡名	窯名	所在地	時期	報告書刊行年	備考
北小木	北小木神明洞18	北小木神明洞18	多治見市北小木町神明洞	7		１基。
	北小木天堤１	北小木天堤１	多治見市北小木町天堤	10a・b		１基。
	北小木天堤２	北小木天堤２	多治見市北小木町天堤	8		１基か。窯体不明
	北小木天堤３	北小木天堤３	多治見市北小木町天堤	7		１基。
	北小木天堤４	北小木天堤４	多治見市北小木町天堤	7		１基か。窯体不明
	北小木天堤５	北小木天堤５	多治見市北小木町天堤	7		１基。
	大沢１・２	大沢１	多治見市大沢町1丁目	7		２基
		大沢２				
	大沢３	大沢３	多治見市大沢町1丁目	7		１基
	大沢４～６	大沢４	多治見市大沢町1丁目・北小木町大谷洞	7		３基
		大沢５				
		大沢６				
	大沢10・11	大沢10	多治見市大沢町2丁目	7		２基
		大沢11	多治見市大沢町2丁目			
	大沢12	大沢12	多治見市大沢町2丁目	7		１基か。窯体不明。
	大沢13	大沢13	多治見市北小木町大谷洞578-2他2筆	6	H9（県）	
	大沢14	大沢14	多治見市北小木町大谷洞	7		１基。植木仮植えのため窯体上部破壊。
	高社１～５	高社１	多治見市北小木町大谷洞	14c（7・8か）		『美濃の古陶』。滅失か。
		高社２				
		高社３				
		高社４				
		高社５				
	富士見１	富士見１	多治見市富士見町5丁目	7	H1	滅失。
	富士見２	富士見２	多治見市富士見町5丁目	7		滅失。
	富士見３	富士見３	多治見市富士見町5丁目	7		道路工事により窯体滅失。
	内津１	内津１	多治見市春日井市内津町393番地1	7		
	内津２	内津２	多治見市春日井市内津町408番地2他	7		遊歩道の上方に窯体、下方に灰原あり。
明和・住吉	明和１	明和１	多治見市明和町4丁目4	7	S48	保存処理
	明和２	明和２	多治見市明和町4丁目	詳細不明		現況保存
	明和６	明和６	多治見市明和7丁目	5c	H2	
	明和７・８	明和７	多治見市明和7丁目	5b・c	H2	
		明和８		5b・c		
	明和14	明和14	多治見市明和7丁目	6・7	H2	
	明和15	明和15	多治見市明和7丁目	5c～6	H2	
	明和19	明和19	多治見市明和9丁目	5c・d	H2	
	明和22	明和22	多治見市明和9丁目	7	H2	
	明和23	明和23	多治見市明和9丁目	6	H2	
	明和28	明和28	多治見市明和8丁目	詳細不明		
	明和29	明和29	多治見市明和9丁目	5c	H2	
	明和33	明和33	多治見市明和5丁目30	詳細不明		
	明和36	明和36	多治見市明和5丁目	6・7	H5	
	明和44	明和44	多治見市光ヶ丘5丁目	詳細不明		
	稲干場１～８	稲干場１	多治見市長瀬町7丁目	詳細不明		
		稲干場２				
		稲干場３				
		稲干場４				
		稲干場５				
		稲干場６				
		稲干場７				
		稲干場８				
	虎渓山６	虎渓山６	多治見市虎渓山町3丁目	詳細不明		
	虎渓山８	虎渓山８	多治見市虎渓山町3丁目	7		１基。砂防工事により窯体不明。
	虎渓山９	虎渓山９	多治見市長瀬町	詳細不明		
	住吉２・14	住吉２	多治見市住吉町7丁目	5a・b	H28	
		住吉14		5a	H28	
	住吉５・６	住吉５	多治見市住吉町7丁目・金岡町5丁目	5b・c	H28	
		住吉６		5b・c	H28	
	住吉７	住吉７	多治見市住吉町7丁目・金岡町5丁目	詳細不明		窯体確認不明。
	住吉８	住吉８	多治見市住吉町7丁目・金岡町5丁目	詳細不明		
	住吉10	住吉10	多治見市住吉町7丁目・金岡町5丁目	5b	H28	灰原調査。窯体位置不確定。
	赤根曽１	赤根曽１	多治見市長瀬町	7		
	赤根曽２～４	赤根曽２	多治見市長瀬町	7・10b・11a		３～４基。 10b･11a期の窯は燃焼室が石組み。
		赤根曽３				
		赤根曽４				
	長瀬裏山１	長瀬裏山１	多治見市虎渓山町7丁目	詳細不明		

第 32 表　中世東濃窯地名表（6）

地区	窯跡名	窯名	所在地	時期	報告書刊行年	備考
高田・小名田	小名田小滝１・９	小名田小滝１	多治見市小名田町小滝5-2	8	H5	灰原・９号窯内トレンチ調査。
		小名田小滝９		6・7		
	小名田小滝２	小名田小滝２	多治見市小名田町小滝	7・8		１基。
	小名田小滝３～５	小名田小滝３	多治見市小名田町小滝	7・8		３基。
		小名田小滝４				
		小名田小滝５				
	小名田小滝６	小名田小滝６	多治見市小名田町小滝	7		１基。
	小名田小滝７・８	小名田小滝７	多治見市小名田町小滝5-2	7	H5	１～２基。
		小名田小滝８				
	小名田大石原１	小名田大石原１	多治見市小名田町大石原	7		
	小名田大石原２・３	小名田大石原２	多治見市小名田町大石原	7		
		小名田大石原３				
	小名田大石原４～５	小名田大石原４	多治見市小名田町大石原	7		
		小名田大石原５				
		小名田大石原６				
	小名田大石原７	小名田大石原７	多治見市小名田町大石原	8		
	小名田大石原８・９	小名田大石原８	多治見市小名田町大石原	7		
		小名田大石原９				
	小名田別山１～７	小名田別山１	多治見市小名田町別山20	7・8	S61	
		小名田別山２		11b		
		小名田別山３		7・8		
		小名田別山４		8		
		小名田別山５		8		
		小名田別山６		8		
		小名田別山７		6・7		
	小名田野田内１	小名田野田内１	多治見市小名田町野田内	6・7	S61	
	小名田野田内２	小名田野田内２	多治見市小名田町野田内	詳細不明		保存処理
	小名田西ヶ洞１	小名田西ヶ洞１	多治見市小名田町西ヶ洞	6・7	S60	
	小名田西ヶ洞２・３	小名田西ヶ洞２	多治見市小名田町西ヶ洞	6	S60	
		小名田西ヶ洞３		6		
	小名田西ヶ洞４	小名田西ヶ洞４	多治見市小名田町西ヶ洞	7		道路により窯体滅失か。
	小名田西ヶ洞５	小名田西ヶ洞５	多治見市小名田町西ヶ洞	詳細不明		
	小名田草ノ頭	小名田草ノ頭	多治見市小名田町草ノ頭	詳細不明		
	小名田草ノ頭１	小名田草ノ頭１	多治見市小名田町草ノ頭	7		滅失
	小名田草ノ頭２～６	小名田草ノ頭２	多治見市小名田町草ノ頭	6・7		複数基あり。
		小名田草ノ頭３				
		小名田草ノ頭４				
		小名田草ノ頭５				
		小名田草ノ頭６				
	小名田可児郷１	小名田可児郷１	多治見市小名田町可児郷5	7～10b	S63	複数基あり。灰原調査。
	小名田可児郷２	小名田可児郷２	多治見市小名田町可児郷5	7	S63	灰原調査。
	小名田可児郷３	小名田可児郷３	多治見市小名田町可児郷5	7	S63	
	小名田西山１	小名田西山１	多治見市小名田町西山1	6	S62	
	小名田西山３	小名田西山３	多治見市小名田町西山10	8	H9	
	高田岩曽根１	高田岩曽根１	多治見市高田町岩曽根	10b・11ａか		灰原の大半が削平。
	高田長湫１～３	高田長湫１	多治見市高田町長湫	8～11ａ		複数基あり。
		高田長湫２				
		高田長湫３				
	高田長湫４～５	高田長湫４	多治見市高田町長湫	6・7		３基。仮設道路で一部破壊。
		高田長湫５				
		高田長湫６				
	高田長湫７	高田長湫７	多治見市高田町長湫	6・7		
	高田長湫８	高田長湫８	多治見市高田町長湫	詳細不明		窯体後部道路で削平。
	高田長湫９	高田長湫９	多治見市高田町長湫	7	H27・28調査	
	高田長湫10	高田長湫10	多治見市高田町長湫	7	H27・28調査	
	長湫１・２	長湫１・２	多治見市土岐市泉町久尻字滝ヶ洞	詳細不明		
	長湫３・４	長湫３・４	多治見市土岐市泉町久尻字滝ヶ洞	7		
	長湫５	長湫５	多治見市土岐市泉町久尻字滝ヶ洞	5b・c		
	長湫６	長湫６	多治見市土岐市泉町久尻字滝ヶ洞	7		
	高田東山１～３	高田東山１	多治見市高田町東山	8	H11	
		高田東山２		7	H11	
		高田東山３		7	H11	
	高田水口１	高田水口１	多治見市高田町10丁目	6・7	H11	
	高田岩ヶ峠１	高田岩ヶ峠１	多治見市高田町岩ヶ峠	7	H11	
	高田岩ヶ峠２	高田岩ヶ峠２	多治見市高田町岩ヶ峠	7	H11	

第 33 表　中世東濃窯地名表（7）

地区	窯跡名	窯名	所在地	時期	報告書刊行年	備考
丸石	丸石３	丸石３	土岐市泉町久尻字丸石	5b		
	丸石８～11	丸石８	土岐市泉町久尻字丸石	5b		
		丸石９(古)		5b		
		丸石９(新)		5c		
		丸石10		5b・c		
		丸石11		5b・c		
	丸石12	丸石12	土岐市泉町久尻字丸石	時期不明		
大洞・土岐口	中山１	中山１	土岐市土岐津町土岐口字中山1372-1	9～10b		
	土岐口西山２	土岐口西山２	土岐市土岐口字小凪	5b・c		
	土岐口西山３・４	土岐口西山３	土岐市土岐津町土岐口	5d・6		
		土岐口西山４		5d・6		
	大洞北	大洞北	土岐市土岐津町土岐口字新開・西山	10b		
	大洞１	大洞１	土岐市土岐津町土岐口字西山	10a		
	大洞２（大洞東１）	大洞２（大洞東１）	土岐市土岐津町土岐口字西山	9～10b		
	大洞南	大洞南	土岐市土岐津町土岐口字西山	10a・b		
	愛宕山裏	愛宕山裏	土岐市土岐津町土岐口字栄楽	5b		
	三本松	三本松	土岐市下石町字西山	5b		
	窯洞１	窯洞１	土岐市下石町字西山	5b・c		
	窯洞２	窯洞２	土岐市下石町字西山	時期不明		
	下石西山２	下石西山２	土岐市下石町字西山322番地の1	5c～6		
	生田１	生田１	多治見市東町２丁目	7～9		
	生田２	生田２	多治見市東町2丁目	11a・b	H13灰原試掘	複数基あり。
	生田４	生田４	多治見市東町2丁目	詳細不明		
	生田15	生田15	多治見市東町3丁目	詳細不明		
	東町１・２	東町１	多治見市東町4丁目10	10b・11ａ	H1	
		東町２		11a・b		
	東町３・４	東町３	多治見市東町4丁目	9～11a		
		東町４				
	東町５	東町５	多治見市東町3丁目	詳細不明		
	東町６	東町６	多治見市東町3丁目	詳細不明		
大畑・下半田川	滝呂向島	滝呂向島	多治見市滝呂町14丁目	6・7	S52	
	大畑２	大畑２	多治見市大畑長2丁目	詳細不明		
	脇之島１	脇之島１	多治見市脇之島町3丁目	詳細不明		窯体不明。 ゴミ処理場により滅失か。
	脇之島３	脇之島３	多治見市脇之島町3丁目	10b・11ａ		
	脇之島４・５	脇之島４	多治見市脇之島町4丁目	10a・b		前庭部長50m。
		脇之島５				
	脇之島６	脇之島６	多治見市脇之島町5丁目	7		２基か。S62霊園工事で滅失。
	大畑大洞１～４	大畑大洞１	多治見市大畑町大洞48-1・2	7・8		４基
		大畑大洞２		10a・b		
		大畑大洞３		10a・b		
		大畑大洞４		8・(9)		
	大畑大洞５	大畑大洞５	多治見市大畑町大洞	7・8		１基。滅失。
	大畑西仲根１・２	大畑西仲根１	多治見市大畑町西仲根	10a・b		２基。沢に遺物流出。砂防工事により窯体位置不明。
		大畑西仲根２		7・8		
	大畑西仲根３	大畑西仲根３	多治見市大畑町西仲根17-1	9・10a	H7	灰原調査。
	大畑赤松１・２	大畑赤松１	多治見市大畑町赤松89・90	8～10bか		２基か。
		大畑赤松２				
	大畑赤松３・４	大畑赤松３	多治見市大畑町赤松89・90	8・9	H30調査	２基
		大畑赤松４				
	酒井ヶ峯３	酒井ヶ峯３	多治見市市之倉町10丁目	詳細不明		
	井之上１	井之上１	多治見市市之倉町9丁目	詳細不明		
	市之倉高見１	市之倉高見１	多治見市市之倉町2丁目	10a・b		
	中峯１	中峯１	多治見市市之倉町2丁目	6・7		滅失。
	中峯２～５	中峯２	多治見市市之倉町2丁目	10a・b		複数基並ぶ。 山道により灰原切断。
		中峯３				
		中峯４				
		中峯５				
	中峯６	中峯６	多治見市市之倉町2丁目	10b～11b		滅失
	細峯１	細峯１	多治見市市之倉町1丁目	詳細不明		
	細峯３	細峯３	多治見市市之倉町1丁目	7	H28	
	諏訪１～４	諏訪１	多治見市諏訪町神田	７型式以降		滅失。
		諏訪２				
		諏訪３				
		諏訪４				
	市之倉筒小屋	市之倉筒小屋	多治見市市之倉町13丁目	詳細不明		複数基あり。
	市之倉筒小屋１	市之倉筒小屋１	多治見市市之倉町13丁目	詳細不明		

第 34 表　中世東濃窯地名表（8）

地区	窯跡名	窯名	所在地	時期	報告書刊行年	備考
大畑・下半田川	凪ヶ平１	凪ヶ平１	多治見市市之倉町10丁目	詳細不明		
	凪ヶ平２	凪ヶ平２	多治見市市之倉町11丁目	詳細不明		団地造成時に滅失。
	ヤク落し１	ヤク落し１	多治見市市之倉町7丁目	詳細不明		
	半ノ木A	半ノ木A	愛知県瀬戸市下半田川町3009	7・8		
	半ノ木B	半ノ木B	愛知県瀬戸市下半田川町3010	9		
	半ノ木C	半ノ木C	愛知県瀬戸市下半田川町3011	9		
	半ノ木D	半ノ木D	愛知県瀬戸市下半田川町3012	7		
	半ノ木E	半ノ木E１	愛知県瀬戸市下半田川町3013	8	H2	
		半ノ木E２		7		
	半ノ木F	半ノ木F	愛知県瀬戸市下半田川町3014	8		
	半ノ木G	半ノ木G	愛知県瀬戸市下半田川町3015	7		
	半ノ木H	半ノ木H	愛知県瀬戸市下半田川町3016・3017	(7)・8		
	半ノ木I	半ノ木I				
	半ノ木J	半ノ木J	愛知県瀬戸市下半田川町3018	(7)・8・11b		
	半ノ木K	半ノ木K	愛知県瀬戸市下半田川町3019	7		
	半ノ木７・８	半ノ木７	愛知県瀬戸市定光寺町3007・3008	8		
		半ノ木８				
	三坂洞	三坂洞	愛知県瀬戸市下半田川町	8		
	下半田川C	下半田川C１	愛知県瀬戸市下半田川町3621	7・8	H5	
		下半田川C２		8		
	半ノ木１	半ノ木１	愛知県瀬戸市定光寺町3001	(7)・8		
	半ノ木２	半ノ木２	愛知県瀬戸市定光寺町3002	詳細不明		
	半ノ木３	半ノ木３	愛知県瀬戸市定光寺町3003	(7)・8		
	半ノ木４	半ノ木４	愛知県瀬戸市定光寺町3004	詳細不明		
	半ノ木５	半ノ木５	愛知県瀬戸市定光寺町3005	詳細不明		
	半ノ木６	半ノ木６	愛知県瀬戸市定光寺町3006	詳細不明		
	上半田川B	上半田川B	愛知県瀬戸市上半田川町3705	7		
	下半田川B	下半田川B	愛知県瀬戸市下半田川町3730	7		
	大洞１～３	大洞１	多治見市笠原町音羽深山	7		３基か。
		大洞２				
		大洞３				
城山	妻木浦山	妻木浦山	土岐市妻木町字浦山	7・8		
	八剣	八剣	土岐市妻木町字東山	8		
	城山３	城山３	土岐市妻木町字推手・本城	9		
	萱野（八剣２）	萱野（八剣２）	土岐市妻木町字東山	詳細不明		窯体位置不明。
肥田	水が洞	水が洞	土岐市肥田町肥田字水洞	詳細不明		滅失か。
	東山上西	東山上西	土岐市肥田町肥田字東山	詳細不明		
	東山	東山	土岐市肥田町肥田字東山	詳細不明		窯体位置不明。
	木欒子	木欒子	土岐市肥田町肥田字木欒子洞	詳細不明		窯体位置不明。
	西ヶ洞	西ヶ洞	土岐市肥田町肥田字西之洞	詳細不明		窯体位置不明。
	山ノ田	山ノ田	土岐市駄知町字山ノ田	詳細不明		窯体位置不明。

虎渓山８号窯跡、同９号窯跡、稲干場１～８号窯跡、赤根曽１号窯跡、赤根曽２～４号窯跡、長瀬裏山窯跡などが挙げられる。窯跡の密集度は多治見市北西地区の低丘陵地帯と同程度で、３基以上の窯から構成される窯跡はほとんどみられない。

⑦高田・小名田地区

高田川以東及び土岐市深沢川以西に窯跡が分布する。田口・若尾両氏のいう小名田・高田古窯跡群におおよそ相当するが、今回は土岐市と多治見市の市境に位置する丘陵部に展開する長湫窯跡群もこれに含む。窯跡の密集度はそれほど高くないが、小名田別山１・３～７号窯跡のように最大６基の窯で構成される窯跡も認められる。なお、当該地区は旧可児郡と旧土岐郡にまたがっており、小名田は前者、高田・長湫は後者に属する。

⑧丸石地区

深沢川左岸に位置し、現在のところ丸石３号窯跡、同８～ 11 号窯跡、同 12 号窯跡が分布するのみで、丸石８～ 11 号窯跡は４基の窯から構成される。

⑨肥田地区

土岐市東部を南北に流れる肥田川流域に窯跡が点在し、窯跡の密集度は低い。東濃窯のなかで最も東

に位置し、水が洞窯跡、裏山上面窯跡、木欒子窯跡、西ヶ洞窯跡、山ノ田窯跡などが挙げられるが、発掘調査が行われた窯跡は皆無で、いずれも分布調査では窯体が確認されていない（中嶌 2003）。田口・若尾両氏の地域区分には含まれていなかったため、今回新たに設定した。

⑩大洞・土岐口地区

生田川下流の右岸、大洞川下流域、妻木川下流の西側地域に散在する。田口・若尾両氏の土岐市南部窯跡群と、生田・東町を含むものである。なお、生田・東町は両氏の地域区分では美濃西南部古窯跡群に含まれている。窯洞１号窯跡や土岐口西山３・４号窯跡、下石西山２号窯跡、中山１号窯跡、大洞１号窯跡、大洞２（大洞東１）号窯跡、大洞北窯跡、大洞南窯跡、生田１・２号窯跡、東町１・２号窯跡、同３・４号窯跡などが挙げられる。窯跡の密集度は低く、３基以上の窯で構成される窯跡は認められない。

⑪大畑・下半田川地区

生田川の南から蛇ヶ洞下流左岸地域にかけて窯跡が分布する。また、当該区に限って１箇所ではあるが土岐川以北の三の倉にまで窯跡が展開する。滝呂向島窯跡、大畑大洞１～４号窯、大畑赤松１・２号窯跡、同３・４号窯跡、脇之島３号窯跡、大畑西仲根１・２号窯跡、同３号窯跡、細峯３号窯跡、中峯１号窯跡、高見１号窯跡、半ノ木窯跡群、下半田川Ｂ窯跡、上半田川Ｂ窯跡などが挙げられる。窯跡は大畑や市之倉川流域、半ノ木に集中する傾向がみられ、最大４基の窯で構成される窯跡も認められる。

⑫城山地区

妻木川の上流及びその周辺地域に分布し、大畑・下半田川地区と同様、東濃窯の最南部に位置し、妻木浦山窯跡、城山窯跡群、八剣窯跡、萱野窯跡などが点在している。発掘調査は行われていないが、採集資料によりおおよその時期が判明している窯跡もある（中嶌 2003）。

第３節　中世東濃窯の分布と群構造

続いて、前節の地区設定に従い型式別に窯跡の分布推移をみていきたい。ただし、可児市南東部地区と肥田地区については、現時点で詳細な時期がわかる窯跡がほとんどないため詳述は避けたい。本節では調査例が豊富な地区を中心に、採集資料などである程度時期が判明している窯跡を含めて考察する。

（１）第３・４型式期（第 27 図上段）

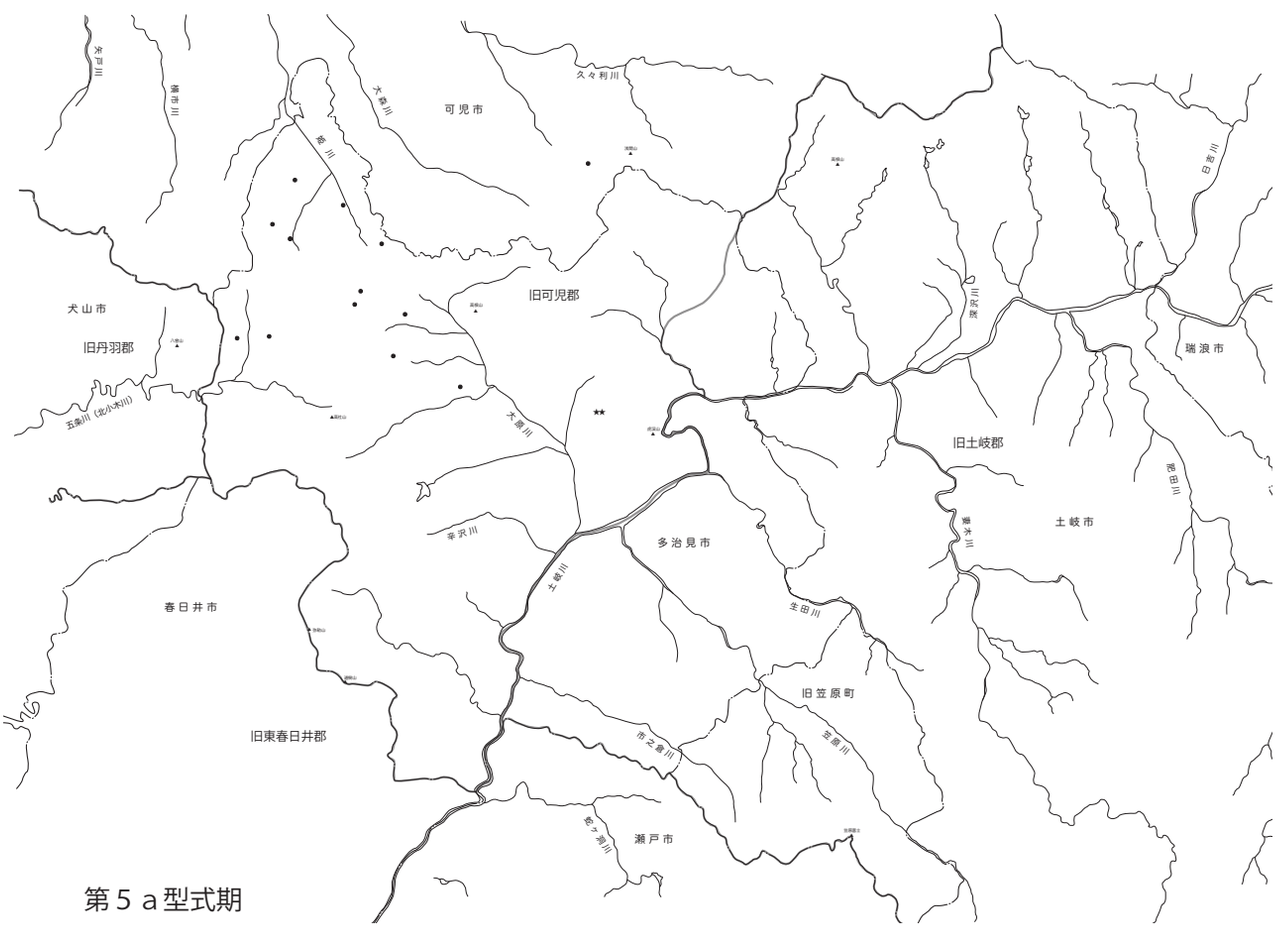
東濃型山茶碗の成立期である第３型式後半期の窯跡で現在確認されているのはほうの木窯跡のみである。同窯跡は可児市南西地域に立地する。１窯跡のみであるため詳細を知ることはできないが、続く第４型式期の分布状況をみても中世東濃窯が当該地域で成立することは明らかである。

第４ａ型式期には分布域がやや北上するようだが、引き続き可児市南西部に矢戸上野２・３号窯や下切兎田窯が築かれるほか、可児市南部中央地区の大森川左岸でも大森笹洞５号窯が築かれ、少数ではあるが前段階より窯跡が拡散する傾向がみられる。

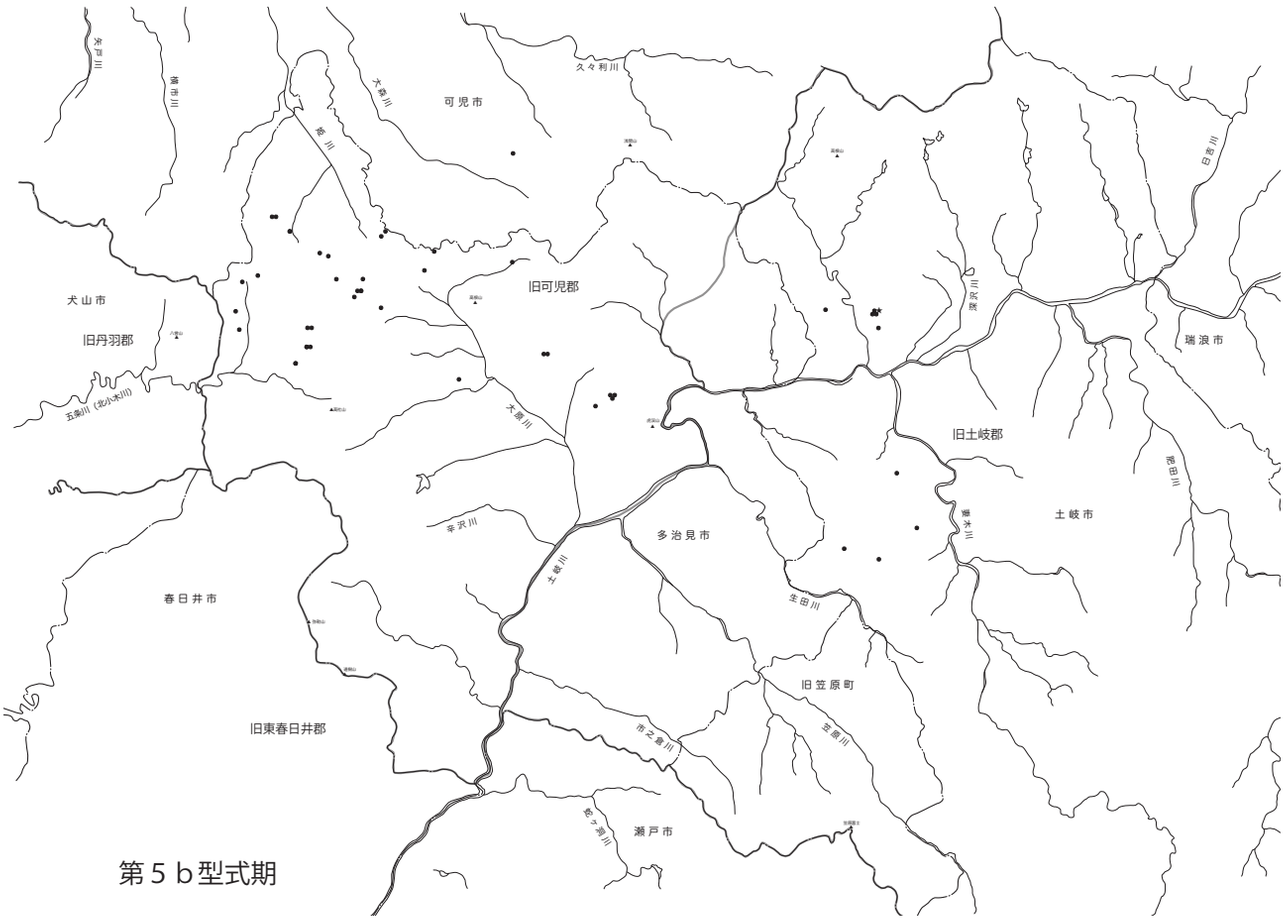
第４ｂ型式期も依然として窯数は少ないが、可児市南西地区の矢戸上野３号窯や谷迫間２号窯、下切香ヶ洞窯、可児市南部中央地区東部の浅間窯下１号窯に加え、多治見市北西部に南下・進出し姫川上流域の大薮・大針を中心に、北丘にも築かれる。

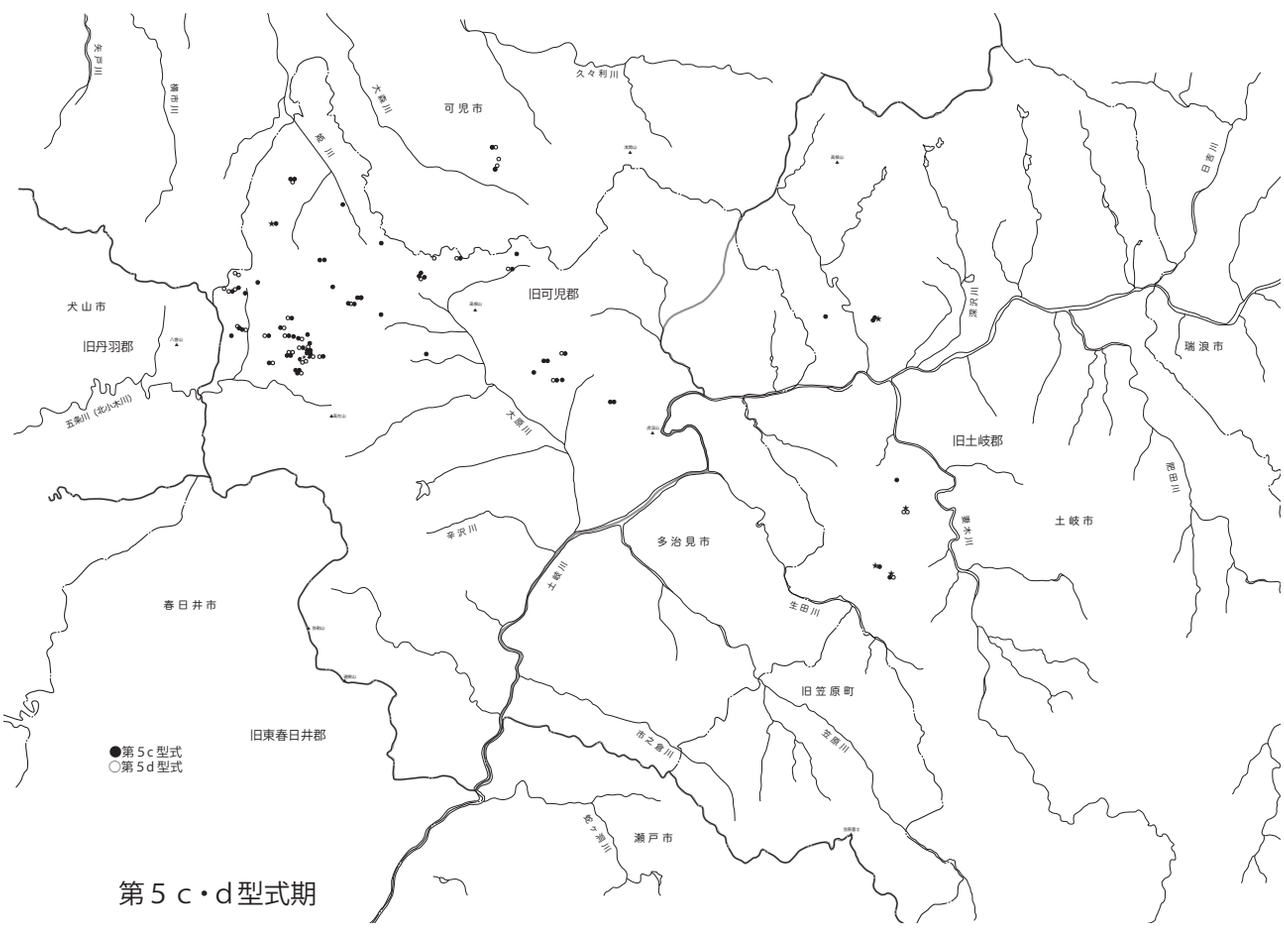
（２）第５型式期（第 27 図下段・第 28 図）

第５ａ型式期は、これまで中心となっていた可児市南西地区でほとんど窯跡がみられなくなり、窯跡の分布域の中心は多治見市北西部へ移るほか、大原川を挟んで東側の明和・住吉地区にも窯が進出していく。ただし、窯跡の密集度は低く、広範囲に散在する状況である。多治見市北西地区では、前段階と同様に姫川上流域である大針・大薮に加え大原川左岸の北丘・白土原・大原で分布がみられ、北小木地区北部（萱原・浜井場）にも窯が築かれるようになる。明和・住吉地区では住吉に窯がみられる程度であるが、ここでは小形壺瓶類が併焼される。また、可児市南部中央地区では引き続き浅間窯下１号窯が

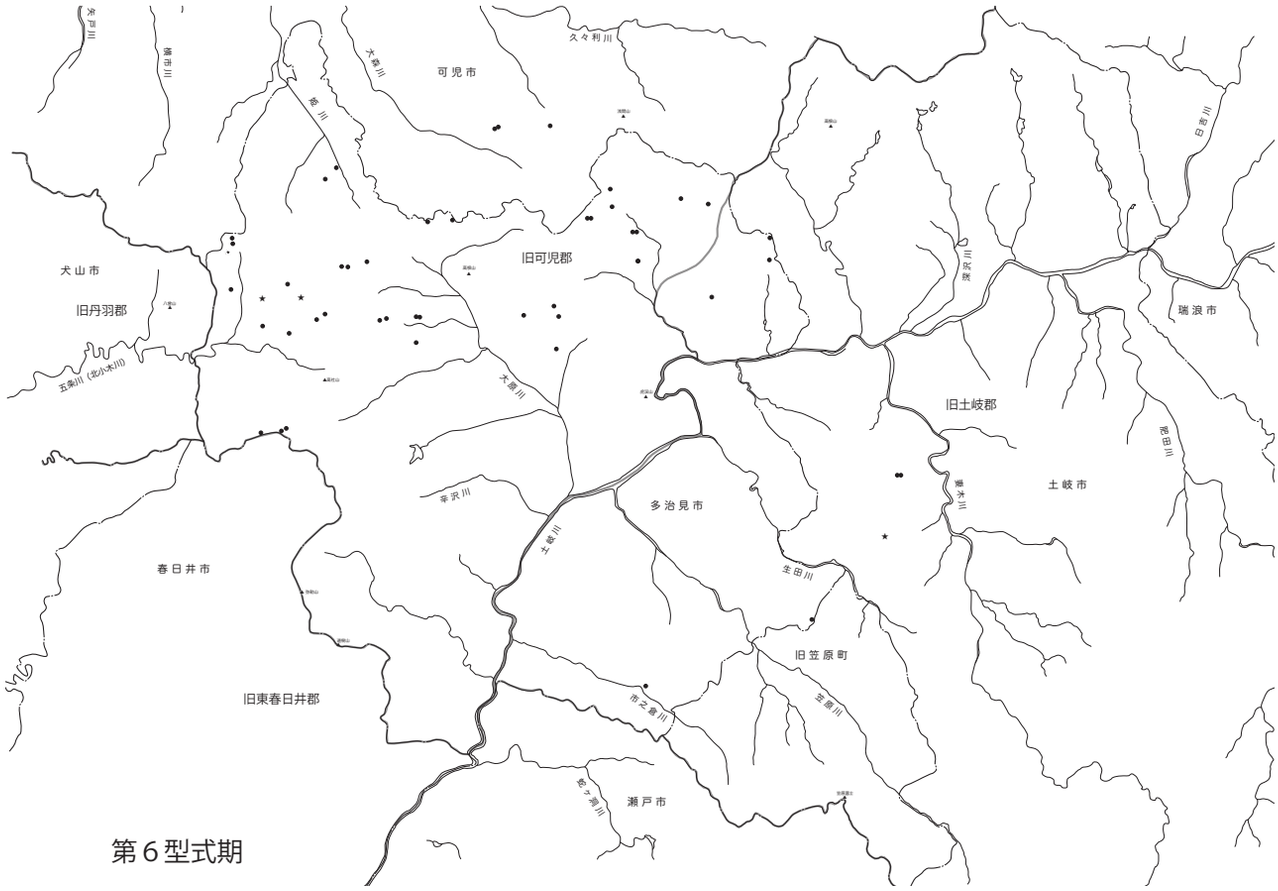


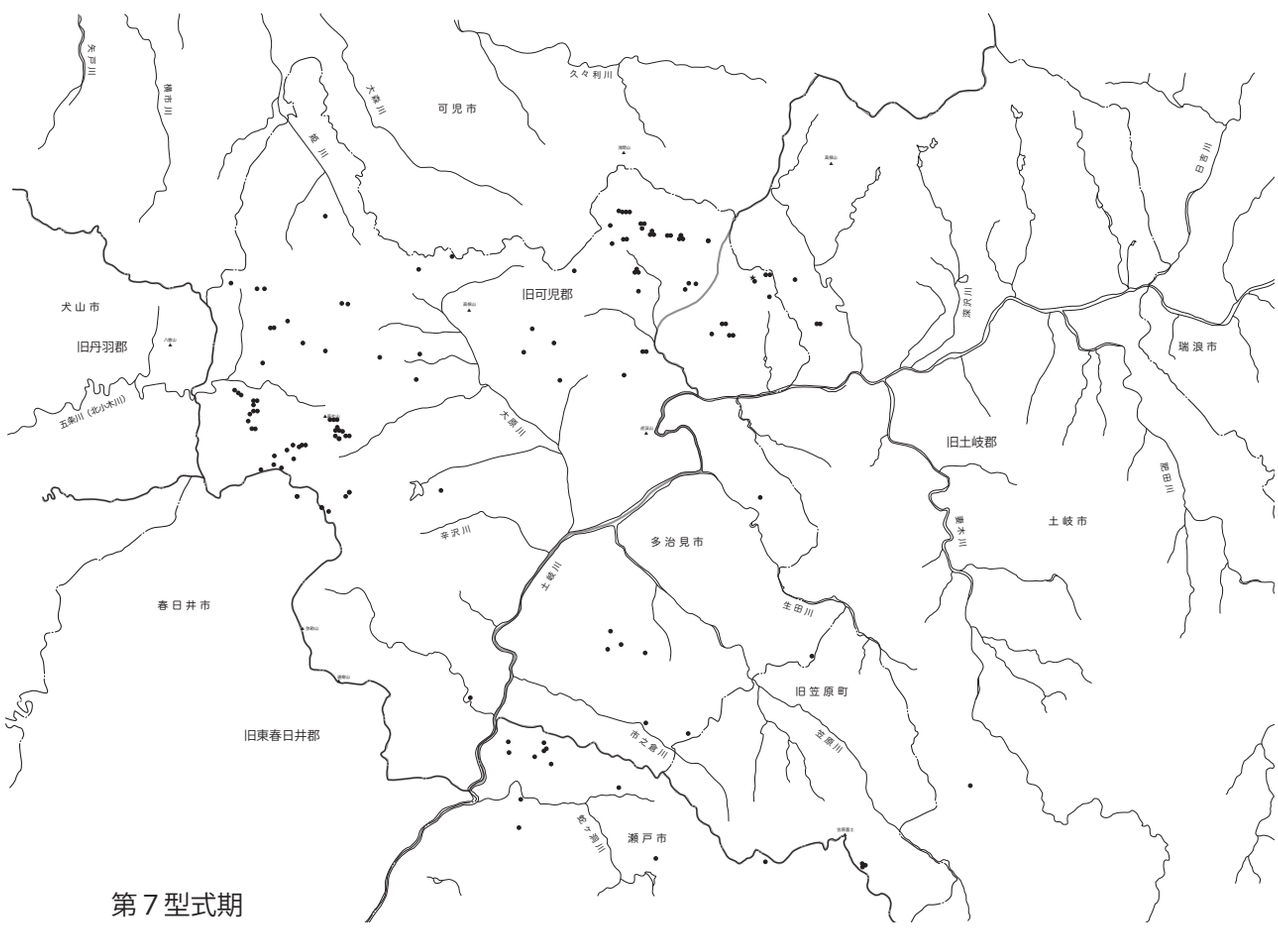
第 27 図　時期別窯跡分布図（1）



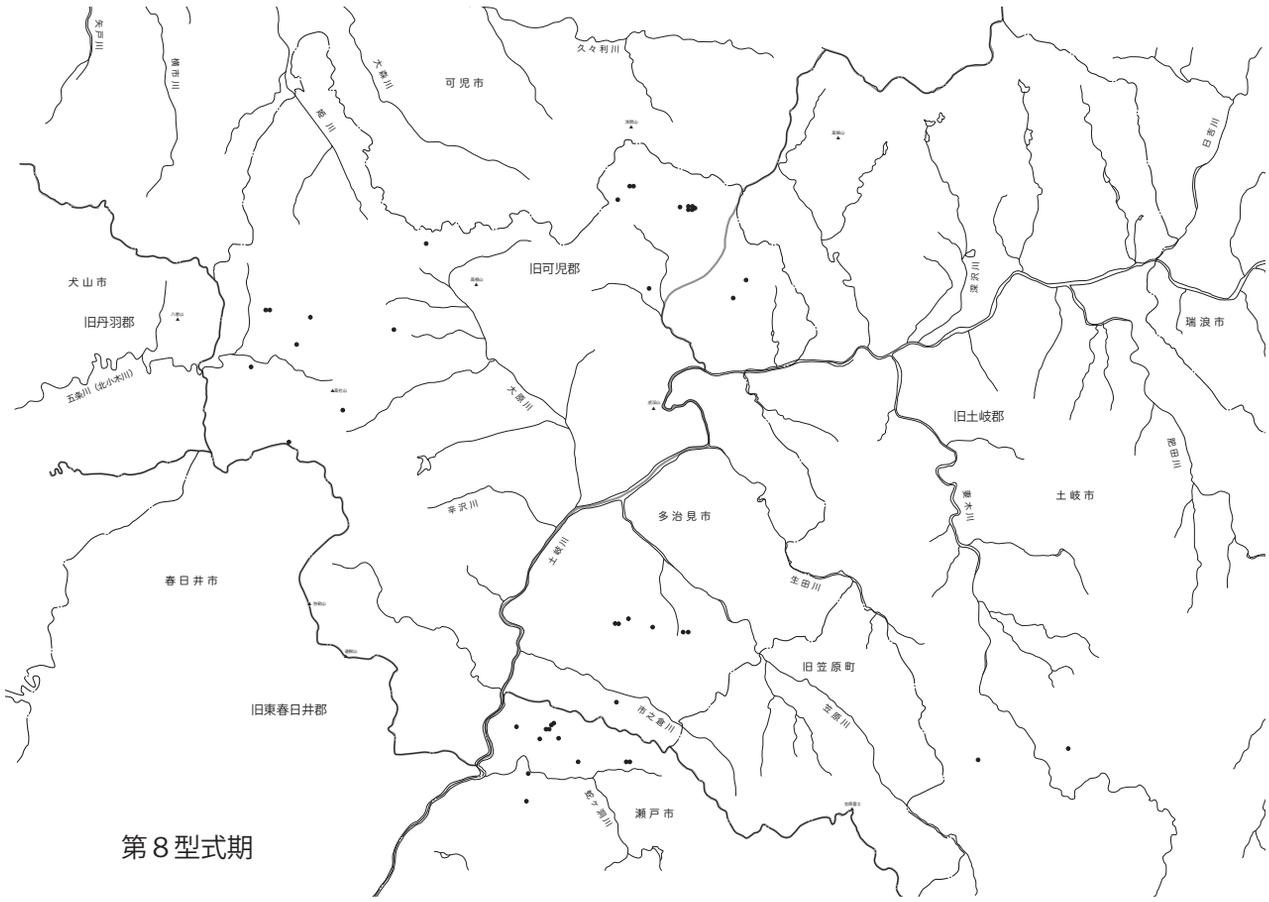


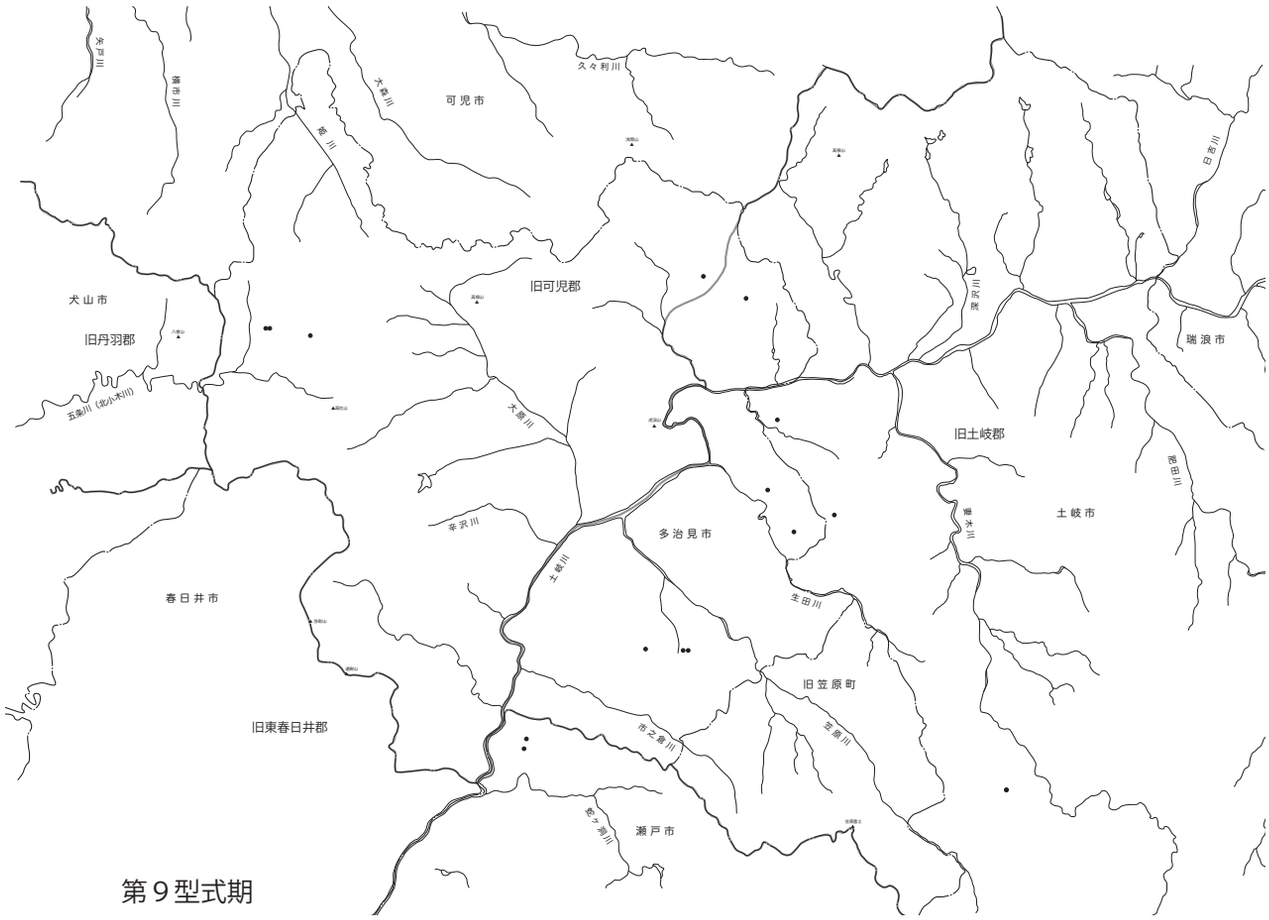
第 28 図　時期別窯跡分布図（２）



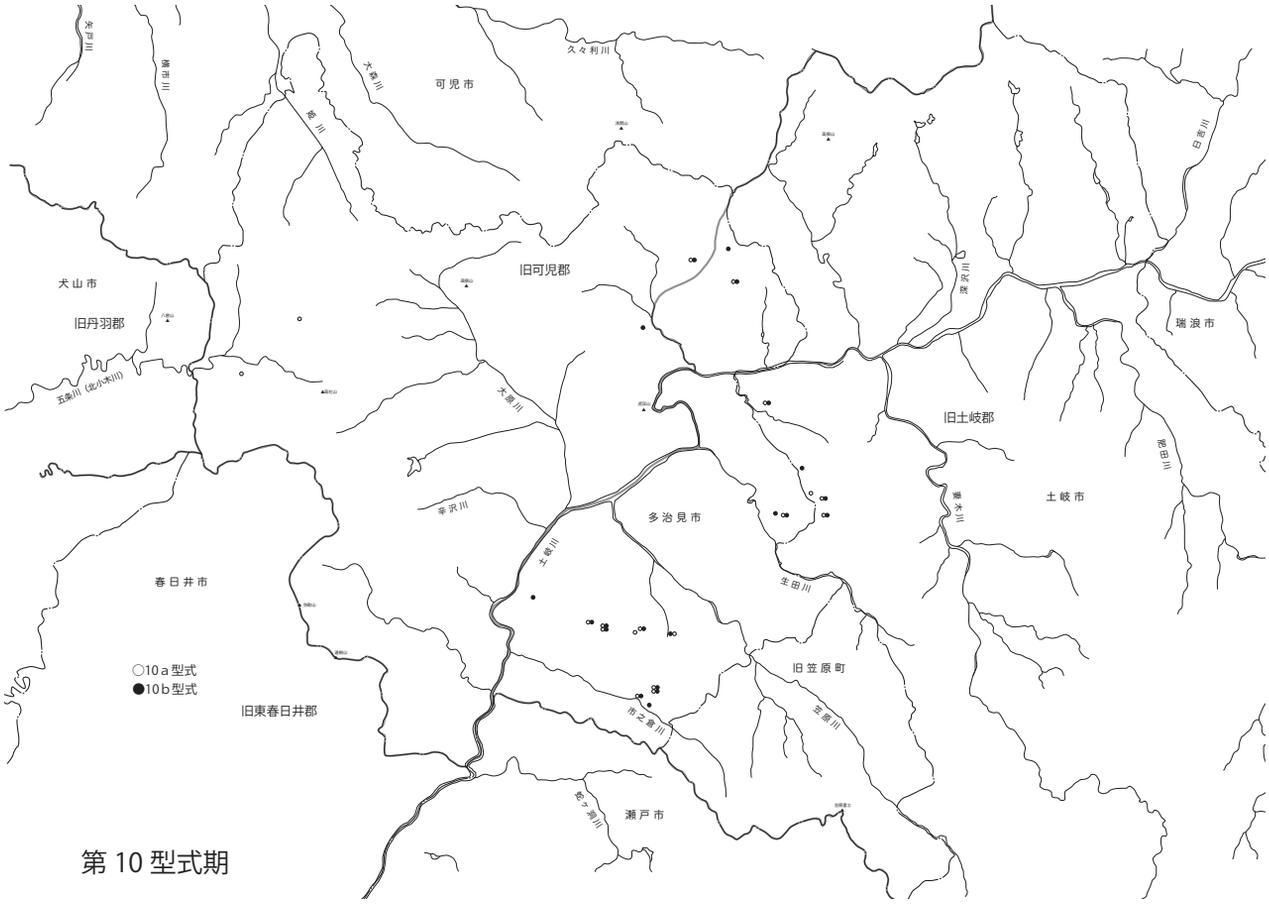


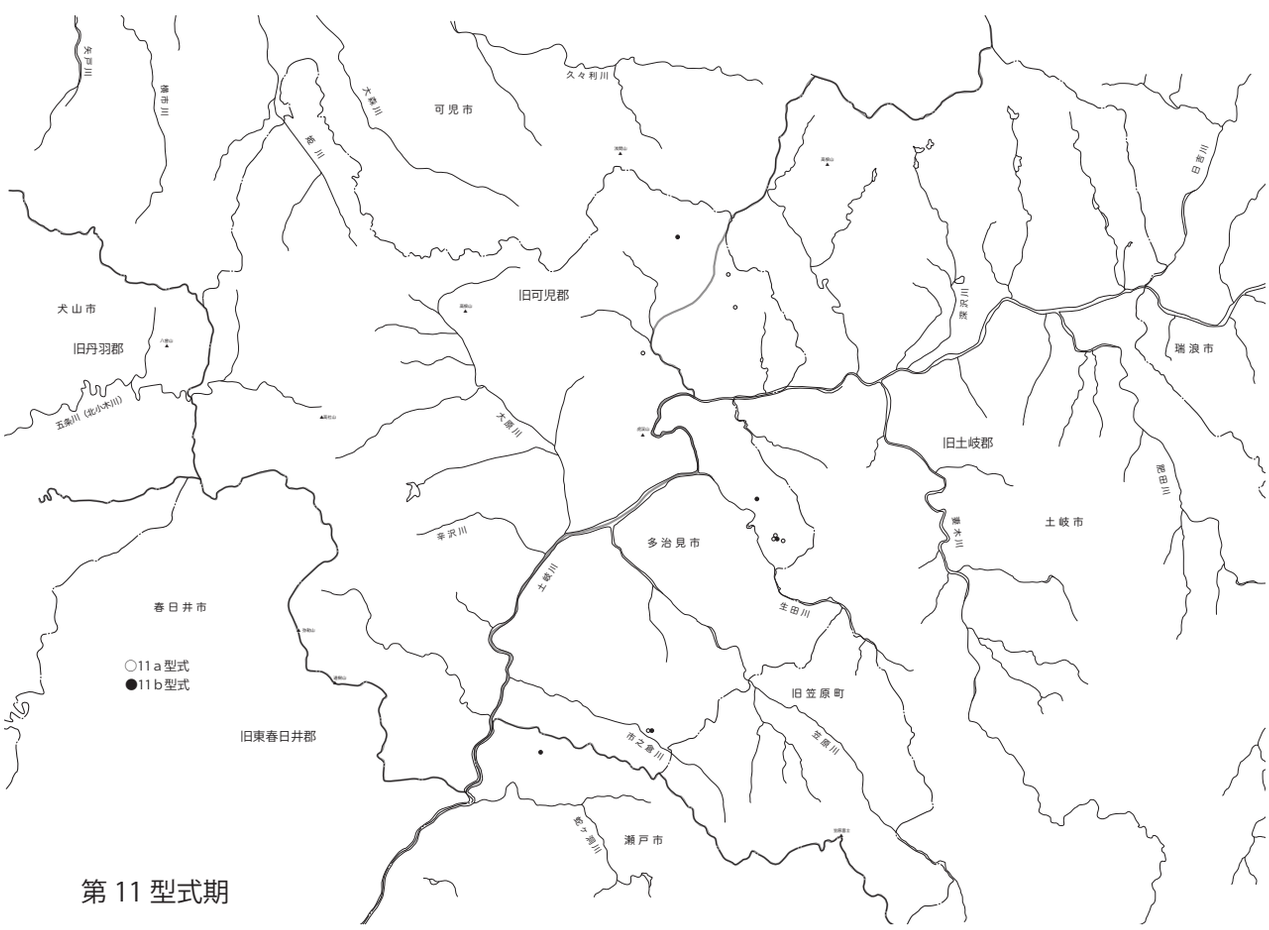
第 29 図　時期別窯跡分布図（3）





第 30 図　時期別窯跡分布図（4）





第 31 図　時期別窯跡分布図（5）

稼働する。なお、明和・住吉地区では小形壺瓶類が併焼されている。

第５ｂ型式期になると窯跡数は前段階の倍以上になり、分布の中心は多治見市北西地区にあるが、その範囲は旧可児郡を出て旧土岐郡の丸石地区にまで拡大し、土岐川を超えて以南の大洞・土岐口地区にまで進出する。可児市南部中央地区では、東部から中央部の奥山に窯が移る。多治見市北西地区では引き続き大薮・大針・北丘及び北小木地区（萱原・大上・大谷洞）に分布が集中するほか、松阪や旭ヶ丘にも窯が築かれるようになる。住吉・明和地区では住吉で引き続き分布がみられるほか、明和でも窯が築かれる。また、高田・小名田地区の東側に位置する深沢川右岸と、同川左岸に位置する丸石地区にも窯跡が築かれる。丸石地区と土岐川を挟んで南側に位置する大洞・土岐口地区では窯跡が４箇所ほど点在している状況である。なお、丸石地区の一部の窯で新たに小形壺瓶類が併焼される。

第５ｃ型式期の分布範囲は前段階と大きな変化はみられないが、ほとんどの地区で窯数が激増する。とくに顕著なのは北小木地区で、複数の窯跡が密集して築かれるようになる。また、明和・住吉地区では分布の中心が明和に移る。高田・小名田地区では前段階に引き続き深沢川右岸に窯が認められるほか、西側の高田川右岸にも分布がみられ、後者では小形壺瓶類が併焼される。丸石地区や大洞・土岐口地区の分布状況にも大きな変化はみられない。なお、第５ｄ型式は各地区とも第５ｃ型式と大きな変化は認められないが、全体的に窯跡数がやや減少し、東端の丸石地区および高田・小名田地区の深沢川右岸には窯が築かれなくなる。また、多治見市北西地区（大薮）・北小木地区（畝欠田・浜井場・大谷洞）の一部の窯と、明和・住吉地区の高田川右岸の赤根曽窯跡で小形壺瓶類が併焼され、大洞・土岐口地区では大半の窯でこれらの併焼が確認される。

（３）第６型式期（第 29 図上段）

第６型式期に入ると、北小木地区では窯数が減少する一方、北小木川を挟んで南側の春日井市との境に位置する尾根近くにまで窯が南下する。可児市南部中央地区では引き続き大森奥山で窯が分布するほか、その東方に柿下１号窯が築かれる。明和・住吉地区では明和にのみ窯が分布する。高田・小名田地区ではこれまで分布がみられなかった高田川上流域の小名田を中心に窯数が急増しており、生産の中心が多治見市北西地区から分散されるような動きをみせ始める。大洞・土岐口地区では窯数が減少するのに対し、大畑・下半田川地区では生田川と笠原川に挟まれた、旧笠原町との境に滝呂向島窯跡、市之倉川右岸に中峯１号窯跡が点的に築かれる。なお、北小木地区（浜井場・一之洞）及び大洞・土岐口地区の一部では小形壺瓶類が併焼される。

（４）第７型式期（第 29 図下段）

前段階から窯数が激増し、生産のピークを迎える時期である。北小木地区では前段階に窯が出現した北小木川の南側に分布が集中し、複数の窯が密集して築かれている。また、高田・小名田地区では前段階からさらに窯数を３倍以上に増加させている。また、前段階で窯が点的に築かれていた大畑・下半田川地区においても窯数が激増しており、その分布は瀬戸市と旧笠原町との境に位置する笠原富士周辺にまで及んでいる。また、笠原富士の東方に位置する城山地区でも点的に窯が築かれている。一方、明和・住吉地区では継続的に窯跡が分布しているが、可児市南部中央地区や大洞・土岐口地区ではほとんど窯が築かれなくなり、当該期においては北小木地区、高田・小名田地区、大畑・下半田川地区の三箇所がその生産の中心をになっていたものと考えられる。

（５）第８型式期（第 30 図上段）

前段階で生産のピークを迎えた東濃窯は、当該期に入ると窯数が減少する。特に北小木地区では前段階に分布が集中していた北小木川の南側にはほとんど窯がみられなくなる。また、多治見市北西地区の姫川上流域や大原川の西側の低丘陵地帯でもほとんど窯がみられなくなってしまう。高田・小名田地区でも窯数は減少し、第５ａ型式期から継続して窯の分布がみられた明和・住吉地区には窯が築かれなく

なる。城山地区では引き続き点的に窯が築かれるが、土岐川以南の大洞・土岐口地区にも窯は認められず、唯一前段階から窯数を維持しているのは大畑・下半田川地区のみである。ただし、第７型式期と比較すると製品は確実に小型化するが、窯体の規模は前段階と対して変化がみられないことから、一度の焼成で生産できる製品の量は増加している可能性が高い。第７型式期は、分布状況から生産の中心地が３地区に集中する様子が窺い知れたが、当該期には大畑・下半田川地区に窯跡が集中する傾向が認められ、土岐川以北地域と以南地域の窯数はこの時点でほぼ同数となる。

（６）第９型式期（第 30 図下段）

第９型式期においても窯跡の減少傾向にあり、多治見市北西地区では分布が全くみられなくなる。北小木地区でも数基認められる程度で、高田・小名田地区も同様に分布はほとんど認められない。土岐川以南地域では、大洞・土岐口地区に再び窯が点在するようになるが、前段階で窯跡が集中していた大畑・下半田川地区でも窯数が減少し、特に蛇ヶ洞川南部には分布が認められなくなる。とはいえ、窯数は土岐川以南地域が以北地域を上回っている。第３型式期に可児市南西地区で成立して以降、土岐川以北地域が東濃窯の生産の中心地となってきたが、当該期をもってこれが土岐川以南地域へ移るようで、大洞・土岐口地区と大畑・下半田川地区がその中心となっている。

（７）第 10 型式期（第 31 図上段）

第 10 ａ型式期は、土岐川以北地域の北小木地区と高田・小名田地区では前段階と大きな変化はみられないが、明和・住吉地区の高田川右岸に窯がみられるようになる。土岐川以南地域では、窯数に大きな増減はみられないが大洞・土岐口地区では特に大洞川流域、大洞・下半田川地区では大畑と市之倉川右岸に窯跡が集中する傾向がみられる。

第 10 ｂ型式期は、北小木地区で全く分布がみられなくなる一方で、高田・小名田地区ではやや窯跡を増加させ、明和・住吉地区でも引き続き高田川右岸で生産を行なっている。大洞・土岐口地区ではやはり大洞川流域を中心に前段階と同数程度の窯が展開している。大畑・下半田川地区でも分布状況は前段階と同様であるが、窯数は若干増加しているようだ。

（８）第 11 型式期（第 31 図下段）

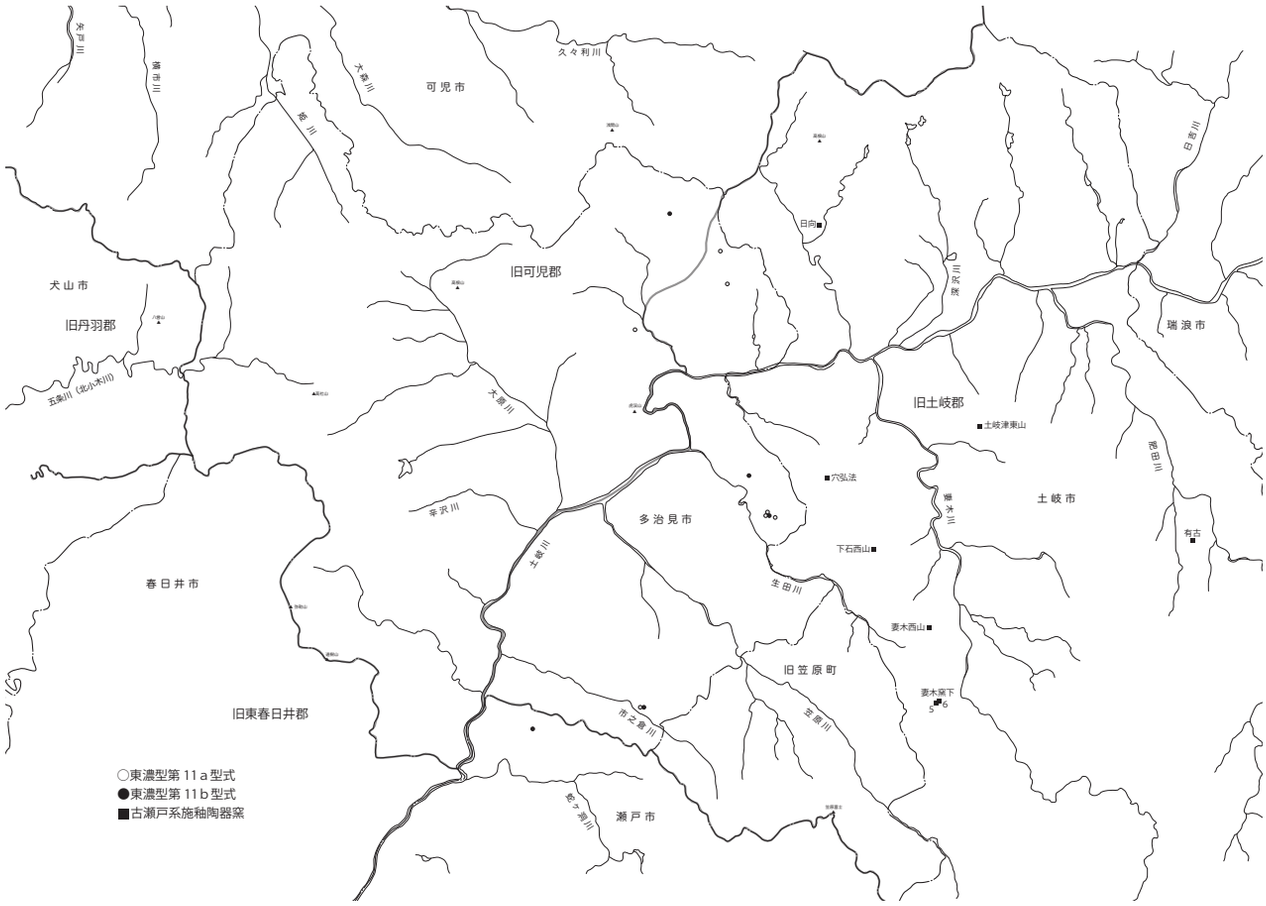
第 11 ａ型式期は再び窯数が減少し、高田・小名田地区と明和・住吉地区では前段階とほとんど変化がみられないが、大洞・土岐口地区では大洞川流域に窯がみられなくなり、生田川右岸に数基が集中している。大畑・下半田川地区ではわずか１基が市之倉川右岸に築かれるのみとなる。

最終末期である第 11 ｂ型式期には、高田・小名田地区の北部に１基、大洞・土岐口地区の生田川右岸に２基、大畑・下半田川地区の市之倉川右岸と蛇ヶ洞川の北側に２基が確認される程度で、当該期を以って中世東濃窯は廃絶に至る。

（９）分布推移にみる画期

中世東濃窯の分布推移には三つの画期が認められる。第１の画期は、分布範囲が大幅に拡大し窯数も急増する第５ｂ・ｃ型式期である。第５ａ型式期にかけて可児市南西部から徐々に南下し、第５ｂ型式期にはいると多治見市北西部に加え高田・小名田地区や丸石地区、さらに土岐川を超えた大洞・土岐口地区にまで分布範囲が拡大し、特に第５ｃ型式期にかけては土岐川以北の北小木地区で窯が急増する。この段階の生産の中心地は北小木地区にあり、同地区の窯跡の密集度は非常に高い。ただし、第６型式期には密集度が下がり、反比例するように高田・小名田地区で窯跡が増加しはじめるようだ。

第２の画期は、土岐川以北の北小木地区、高田・小名田地区と土岐川以南の大畑・下半田川地区の三箇所に窯の分布が集中し、生産のピークに達する第７型式期である。北小木地区では北小木川以南の地域に窯が集中して築かれ、高田・小名田地区と大畑・下半田川地区でも窯数が激増する。また、初めて土岐川以南地域に生産拠点が認められ、第８型式期以降は土岐川以南地域が生産の中心となるが、窯数は



第 32 図　古瀬戸系施釉陶器窯分布図

減少していく。

第３の画期は、土岐川以北地域と以南地域の窯数が逆転する第９型式期である。これは、これまで生産の中心を担ってきた土岐川以北地域から土岐川以南地域に生産拠点が移ったことを意味し、第 11 型式期までこの状況は変わらない。特に北小木地区や多治見市北西地区では第 11 型式期の窯跡は全くみられないのである。

ところで、15 世紀中頃の古瀬戸系施釉陶器窯の分布をみると、山茶碗窯からやや離れた位置に窯が築かれており、窯体構造や経営形態の違いからも古瀬戸工人と東濃型山茶碗工人がそれぞれで別個で生産を行なっていたであろうことがわかる（第 32 図）。ただし、今回設定した地区のうち、両者とも土岐川以南では大洞・土岐口地区、土岐川以北地域では高田・小名田地区内に収まるもので、分布域が全くかけ離れているわけではないこと、東町１・２号窯跡で古瀬戸製品が少量搬入されていることなどから、この段階で両者が接触していたことが窺われる。

第４節　工人集団数についての予察

山茶碗窯の経営形態について赤羽一郎氏は、知多市の小原池１号窯では１回の焼成で 7616 枚の山茶碗が生産されることから、山茶碗ひとつの重量が 300g とすると必要な粘土量が３トン近くとなり、労働力について製土８、成形 40、乾燥４、窯詰め４、焼成 40、窯出し・選別 12 の計 112 人とし、一回の焼成に必要な薪（赤松）約２トンを確保するのに 120 人、約 40㎥とされる同窯の築窯に 40 人を加えると、延べ 272 人の労働力が必要となると推測している（赤羽 1989）。そして、これらを行う山茶碗生産の労働者については４人程度の家族的小経営が想定されるという。

藤澤氏も先の論考のなかで、工房跡の規模が小さくロクロも一挺であること、ある程度専門的な技術や経験を必要とする工程では大量の労働力を投入できたとは考えられないことから、山茶碗生産の労働者について赤羽氏の説に賛同している（藤澤 1995a）。そのうえで藤澤氏は、一回の焼成が４人がかり

で３ヶ月以上を要するとすれば、半農半工の農民であれば年１回、専門の職人であったとしてもせいぜい年２回程度と想定し、赤羽氏の試算に採土・製品の荷造り・市場などへの搬出、さらには製品の販売などの工程が加わるとなるとより多くの労働力を必要とする可能性を指摘した。

赤羽氏や藤澤氏の想定する家族的小経営小経営を前提とした場合、東濃窯の具体的な生産規模についてはどのように考えられるだろうか。まず、彼らが兼業であることを前提として年に１回の焼成を行なった際に想定される、各時期にどの程度の工人集団が窯業生産を行っていたのかを試算してみたい。

（１）時期別にみた各地域の集団数

第 35 表は、おおよその焼成回数・焼成室に並ぶ焼台数・窯跡における山茶碗類の総出土個体数及び焼台数などが判明している窯をまとめたものである。焼成室に並ぶ焼台数や焼成回数は、報告されていないが碗の口径や総出土個体数、焼台数などから算出できたものに関して（　）内に表記している。また、重ね焼きの枚数については各型式で判明している窯を参考に推定しているためやや不安定であり、それを使って算出した１回の窯詰め数・失敗率についても同様であることは留意しておきたい。また、基本的に複数基から構成される窯跡では同時操業が行われないことを前提条件に加え、２型式以上にまたがって操業している窯についてはダブルカウントを行っている。また、未調査の窯跡については１窯跡につき１基と仮定し最小窯数を算出した。

集団数は、①各型式の期間、②各時期の窯跡数、③各時期の平均焼成回数、④１型式期の間に１集団が築窯可能な最大窯数から割り出していく。窯体規模などの情報がほぼ皆無である第３型式期を除くと、①は、第４型式期（12 世紀初頭を除く前葉～中葉）が約 40 年、第５型式期（12 世紀後葉～ 13 世紀初頭）が約 50 年、第６型式期（13 世紀初頭を除く前葉）が約 20 年、第７型式期（13 世紀中葉）が約 30 年、第８型式期（13 世紀後葉～ 14 世紀前葉）が約 50 年、第９型式期（14 世紀中葉～後葉）が約 50 年、第 10 型式期（14 世紀末～ 15 世紀中葉）が約 40 年、第 11 型式期（15 世紀中葉～末を除く後葉）が約 50 年となる。②は、第４型式期が 13 窯跡、第５型式期が 135 窯跡、第６型式期が 43 窯跡、第７型式期が 96 窯跡、第８型式期が 36 窯跡、第９型式期が 15 窯跡、第 10 型式期が 24 窯跡、第 11 型式期が 13 窯跡である。また、③は第４型式期が４回、第５型式期が５回、第６型式期が 12 回、第７型式期が 13 回、第８型式期が９回、第９型式期が 10 回、第 10 型式期が３回、第 11 型式期が２回と推定される。次に、１型式期の間に１集団が築窯可能な最大窯跡数は①を③で割ることで求められ、第４・５型式はそれぞれ 10 基、第６・７型式期はそれぞれ２基、第８型式期は６基、第９型式期は５基、第 10 型式期は 13 基、第 11 型式期は 25 基となる。

１集団１窯跡と想定し②を④割ると、各時期の集団数は第４型式期が２集団、第５型式期が 14 集団、第６型式期が 22 集団、第７型式期が 48 集団、第８型式期が６集団、第９型式期が３集団、第 10 型式期が２集団、第 11 型式期が１集団以下という結果となる。しかし、これはそれぞれの数値から単純計算した結果であるため、窯跡の分布状況や窯体構造、各地区の未調査の窯数なども当然考慮に入れなければならない。そこで、どの地区に最低どの程度の集団が存在していたのか、第 27 ～ 31 図、第 35・36 表などを参考に時期別に整理していきたい。

①第４型式期

可児市南西地区は８窯跡が分布し紡錘形が２基、寸胴形が３基認められる。可児市南部中央地区は２窯跡が分布し紡錘形が１基認められる。多治見市北西地区は３窯跡が分布し紡錘形が１基認められる。計算上では２集団存在するという結果だが、２集団における築窯数が 13 基であることを考えると、可児市南西地区には紡錘形１集団・寸胴形１集団程度の計２集団の存在が想定され、このうち紡錘形の集団は可児市南部中央地区の西側から多治見市北西地区北部に展開していったものと考えられる。また、可児市南部中央地区の東側に築かれる浅間窯下１号窯跡は、未調査のため詳細は不明であるが立地的に

第 35 表　焼成回数等試算表

窯名	主軸長(m)	焼台出土数	焼成回数	出土総個体数		碗：小皿	重ね焼き枚数	一回の窯詰数(概算)		失敗率	時期
	全長	()内は窯内		碗	小碗・小皿		()内は各時期の平均値	碗	小碗・小皿		
矢戸上野２	9.2	422(294)	2	3,019	1,083	3:1	10	3,900	1,300	44%	4a
大森笹洞５	8.9	259	2	6,338	1,779	4:1	(10)	3,280	820	97%	4a
下切兎田	9.95	829(218)	5	3,247	1,200	3:1	9～11	2,280	760	37%	4a・b
矢戸上野３	9.45	1,337	4	4,659	1,280	4:1	11	4,268	1,067	37%	4a・b
下切香ヶ洞	9.85	970(104)	5	2,850	1,283	2:1	(10)	3,150	1,575	18%	4b
大針台４	10.0	344(70)	3以上	1,017	758	1:1	(10～11)	2,937	2,937	12%	4b・5a
住吉14	8.7	298	2	1,020	150	7:1	(12)	2,772	396	18%	5a
北小木浜井場１	9.6以上		2～3	3,187	930	3:1	(12)	3,540	1,180	30～45%	5a
北丘30	12.3	1,970(85)	5～7	8,294	1,139	7:1	(12)	4,500	643	26～37%	5a・b
住吉２	9.1	791	3	1,659	124	13:1	(12)	4,440	342	12%	5a・b
北小木一之洞19	11.12		2	1,678	359	5:1	(12～14)	3,120	624	26%	5b
住吉５	10.8	1082	(4)	3,497	523	7:1	(12～14)	3,770	539	23%	5b・c
住吉６	8.9	993	(4)	2,830	619	5:1	(12～14)	3,900	780	18%	5b・c
北小木大谷洞45	13.10		2	1,711	194	3:1	(12～14)	5,880	1,960	15%	5b・c
北小木一之洞20	12.18		4～5	4,928	1,114	4:1	(12～14)	5,447	1,362	16～23%	5b・c
大針15	10.5	(161)	(3)	6,499	878	7:1	13～14	3,010	430	72%	5c
北小木大谷洞44	10.27		5～6	3,835	751	5:1	(13～14)	4,088	818	16～19%	5c
北小木神明洞10	11.76		2	1,208	364	4:1	(13～14)	4,942	1,236	12%	5c・d
北小木二之洞１	11.25		6～7	8,681	3,711	2:1	(13～14)	6,524	3,262	19～22%	5c・d
北小木大谷洞６	11.42		2	2,830	619	2:1	(13～14)	4,858	2,429	29%	5c・d
北小木畝欠田２	9.06		10～11	13,736	1,969	7:1	(13～14)	4,732	676	26～29%	5c・d
北小木大上８	11.28	1,382(61)	(2)	11,998	1,184	10:1	(13～20)	8,109	811	74%	5d・6
北小木浜井場３	10.68		24～25	26,792	7,597	4:1	(13～20)	7,242	1,811	15%	5d・6
北小木一之洞21	10.36		9～10	9,934	1,819	5:1	(13～20)	5,508	1,102	18～20%	6
小名田西ヶ洞３	9.8	7,675	24			9:1	13～20	5,440	604	30%	6
小名田西山１	10.26	600(217)	(3)	4,157	256	16:1	(13～20)	4,506	338	31%	6
北小木大谷洞１	10.32	(120)	5～6	6,887	776	9:1	(13～20)	6,647	739	17～21%	6・7
細峯３	11.36	600(166)	3	10,670	2,035	5:1	(15～20)	6,408	1,780	56%	7
富士見１	9.66	11,228	(47)	35,284	3,286	11:1	(15～20)	4,158	378	18%	7
北小木畝欠田３	10.34		9～10	12,288	2,734	4:1	(15～20)	6,984	1,746	18～20%	7
下半田川Ｃ１	10.78		(1)	1,211	142	9:1	15	6,225	692	20%	7・8
大畑大洞４	6.28		2以上	1,610	135	12:1	12～20	4,112	343	20%	8
北小木浜井場２	9.82		29～30	19,261	3,415	6:1	(12～20)	2,820	470	23～24%	8・9
北小木浜井場４	11.54		2	1,506	265	6:1	(12～20)	4,905	818	15%	8～10a
北小木大谷洞14	13.14		3～4	4,122	837	5:1	(12～20)	6,525	1,305	16～21%	9・10a
中山１	(6.60)		4以上			(6:1)	(12～20)	4,500	750		9～10b
東町１	8.28		2以上				(20程度)	6,260程度			10b・11a

第 36 表　平面形別・時期別窯数

地区	第４型式期		第５型式期		第６型式期		第７型式期		第８型式期			第９型式期		第10型式期		第11型式期
	紡錘	寸胴	紡錘	寸胴	紡錘	寸胴	紡錘	寸胴	紡錘	寸胴	倒卵	紡錘	倒卵	紡錘	倒卵	倒卵
可児市南西	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
可児市南部中央	1	0	1	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
多治見市北西	3	0	17	11	4	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
北小木	0	0	27	11	10	1	11	0	6	0	0	3	0	1	0	0
明和・住吉	0	0	3	9	2	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
高田・小名田	0	0	0	0	5	1	13	3	3	1	0	0	0	0	0	1
丸石	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
大洞・土岐口	0	0	0	3	0	3	0	0	0	0	0	0	1	0	2	2
大畑・下半田川	0	0	0	0	1	0	5	0	3	0	2	0	0	0	2	0

離れていることから、この周辺にも集団が存在していた可能性が考えられる。したがって、当該期には最低でも３集団程度が存在していたものと推測される。

②第５型式期

可児市南部中央地区に７窯跡が分布し、紡錘形が１基、寸胴形が４基認められる。多治見市北西地区は 48 窯跡が分布し、紡錘形が 17 基、寸胴形が 11 基認められる。北小木地区は 51 窯跡が分布し、紡錘形が 27 基、寸胴形が 11 基認められる。明和・住吉地区は 13 窯跡が分布し紡錘形が３基、寸胴形が９基認められる。丸石地区は３窯跡が分布し寸胴形が６基、大洞・土岐口地区は９窯跡が分布し寸胴形が３基認められる。また、高田・小名田地区は未調査であるが３窯跡が分布している。

計算上では 14 集団存在するという結果である。１集団における築窯数が８基であることを考えると、可児市南部中央では寸胴形１集団、多治見市北西地区では紡錘形３集団・寸胴形２集団の計５集団、北小木地区では紡錘形４集団・寸胴形２集団の計６集団、明和・住吉地区では紡錘形１集団・寸胴形１集団の計２集団、丸石地区と大洞・土岐口地区ではそれぞれ寸胴形１集団の存在が想定される。また、高田・小名田地区にも１集団存在すると仮定し、可児市南部中央地区の紡錘形１基は多治見市北西地区の集団に含むものと考えると、当該期には合計 16 集団が存在していたことになる。

③第６型式期

可児市南部中央地区は２窯跡が分布し紡錘形が２基認められる。多治見市北西地区は 11 窯跡が分布し紡錘形が４基認められる。北小木地区は１２窯跡が分布し紡錘形が 10 基、寸胴形が１基認められる。明和・住吉地区は４窯跡が分布し紡錘形が２基、寸胴形が１基認められる。高田・小名田地区は 10 窯跡が分布し紡錘形が５基、寸胴形が１基認められる。大洞・土岐口地区は３窯跡が分布し寸胴形が３基認められる。また、大畑・下半田川地区は未調査であるが２窯跡が分布しており、これ以降当該地に築かれる窯に寸胴形が見られないことを考えると、紡錘形である可能性が高い。

計算上では 22 集団存在するという結果である。１集団における築窯基数が２基であることを考えると、可児市南部中央地区・多治見市北西地区では寸胴形が認められないことから、前者では紡錘形１集団、後者では紡錘形５集団、北小木地区では紡錘形５集団・寸胴形１集団の計６集団、明和・住吉地区では紡錘形１集団・寸胴形１集団の計２集団、高田・小名田地区では紡錘形４集団・寸胴形１集団の計５集団、大洞・土岐口地区では寸胴形２集団の存在が想定される。また、大畑・下半田川地区にも紡錘形が１集団以上存在すると仮定すると、当該期には最低でも合計 22 集団が存在していたことになる。

④第７型式期

多治見市北西地区は８窯跡が分布し紡錘形が１基、寸胴形が１基認められる。北小木地区は 36 窯跡が分布し紡錘形が 11 基認められる。明和・住吉地区は７窯跡が分布し紡錘形が３基認められる。高田・小名田地区は 28 窯跡が分布し紡錘形が 13 基、寸胴形が３基認められる。大畑・下半田川地区は 15 窯跡が分布し紡錘形が５基認められる。また、未調査であるが大洞・土岐口地区と城山地区にそれぞれ１窯跡が分布している。

計算上では 48 集団存在するという結果である。１集団における築窯基数が２基であることを考えると、多治見市北西地区では紡錘形２集団・寸胴形２集団の計４集団、北小木地区では紡錘形 18 集団、明和・住吉地区では紡錘形３集団、高田・小名田地区では紡錘形 10 集団・寸胴形４集団の計 14 集団、大畑・下半田川地区では紡錘形８集団の存在が想定される。また、大洞・土岐口地区については未調査であるため平面形は不明であるが、前型式期までの状況を考慮すると寸胴形である可能性が高い。しかし、窯跡数が僅か１窯跡であること、北に位置する土岐川以北の高田・小名田地区で寸胴形の窯数がやや増加していることを考えると、大洞・土岐口地区にいた寸胴形の集団は当該期に土岐川を越えて当該地区に移ったものと考えられる。さらに、この状況を前提として同じく未調査である城山地区について考えた

場合、立地と窯跡数からみて大畑・下半田川地区の紡錘形の集団が東進したと考えるのが自然である。したがって当該地区に紡錘形１集団が存在したと仮定すると、当該期には合計 48 集団が存在していたことになる

⑤第８型式期

北小木地区は８窯跡が分布し、紡錘形が６基認められる。高田・小名田地区では８窯跡分布し紡錘形が３基、寸胴形が１基認められる。大畑・下半田川地区では 15 窯跡分布し紡錘形が３基、倒卵形が２基認められる。このほか、未調査であるが多治見市北西地区・城山地区はそれぞれ２窯跡、大洞・土岐口地区は１窯跡が分布している。

計算上では６集団存在するという結果である。１集団における築窯基数が７基であることを考えると、北小木地区では紡錘形・倒卵形の２系統が合わせて２集団、高田・小名田地区では紡錘形１集団・寸胴形１集団の計２集団、大畑・下半田川地区では紡錘形・倒卵形の２系統が合わせて３集団程度の存在が想定されるほか、多治見市北西地区・城山地区にそれぞれ１集団程度存在したと仮定すると、当該期には合計９集団程度が存在していたことになる。

⑥第９型式期

北小木地区は４窯跡が分布し紡錘形が３基認められる。大洞・土岐口地区は４窯跡が分布し倒卵形が１基認められる。このほか、未調査であるが高田・小名田地区に２窯跡、大畑・下半田川地区に５窯跡、城山地区に１窯跡が分布している。

計算上では３集団存在するという結果である。１集団における築窯基数が６基であることを考えると、北小木地区では紡錘形１集団、大洞・土岐口地区では倒卵形１集団の存在が想定されるほか、高田・小名田地区、大畑・下半田川地区、城山地区にそれぞれ最低１集団存在したと仮定すると、当該期には合計５集団以上が生産を行なっていたものと考えられる。

⑦第 10 型式期

北小木地区は２窯跡分布し紡錘形が１基認められる。大洞・土岐口地区は 10 窯跡分布し倒卵形が２基認められる。大畑・下半田川地区は 15 窯跡分布し倒卵形が２基認められる。このほか、未調査であるが明和・住吉地区に１窯跡、高田・小名田地区に５窯跡が分布している。

第 10 型式期は、計算上では２集団存在するという結果である。１集団における築窯基数が 13 基であることを考えると、北小木地区では紡錘形１集団、大洞・土岐口地区では倒卵形１集団、大畑・下半田川地区では倒卵形２集団程度の存在が想定されるほか、明和・住吉地区の１窯跡は高田・住吉地区に近い高田川右岸に位置することからこれらは同一集団として捉えられ、少なくとも１集団が存在していたものと仮定すると、当該期には合計５集団程度が存在していたことになる。

⑧第 11 型式期

高田・小名田地区は３窯跡が分布し倒卵形が１基認められる。大洞・土岐口地区は５窯跡が分布し倒卵形が２基認められる。このほか、未調査であるが明和・住吉地区に１窯跡、大畑・下半田川地区は４窯跡が分布している。

計算上では１集団が存在するのみである。１集団における築窯基数が 30 基であることを考えると、明和・住吉地区と高田・小名田地区は第 10 型式期と同じく同一集団として倒卵形１集団が、大洞・土岐口地区、大畑・下半田川地区もそれぞれ倒卵形１集団程度が存在していたと仮定すれば、当該期には合計３集団が存在していたことになる。

（２）中世東濃窯における工人集団の動向

第３型式期の状況は不明であるが、現在確認されている可児市南西地区のほうの木窯跡周辺に少なくとも１集団が存在し、第４型式期には紡錘形・寸胴形合わせて２～３集団に増え、紡錘形の集団は多治

見市北西地区の北端にかけて展開するようだ。

第５型式期には紡錘形の集団は多治見市北西地区・北小木地区を中心に明和・住吉地区に８集団、寸胴形の集団は南東進して明和・住吉地区や丸石地区、大洞・土岐口地区を中心に可児市南部中央地区・多治見市北西地区・北小木地区に８集団が展開する。この分布状況から、紡錘形の集団は多治見市北西から明和・住吉地区の位置する中央付近にかけて比較的まとまっている印象を受け、逆に寸胴形の集団は土岐川以北と以南の大洞・土岐口地区にかけて広範囲に拡散していく様子が窺える。

ただし、第６型式期には可児市南部中央地区と多治見市北西地区では紡錘形の集団が留まり集団数を増加させ、高田・小名田地区へ進出するのに対し、寸胴形の集団は大洞・土岐口地区を中心として明和・住吉地区、高田・小名田地区など東濃窯の東部に分布範囲が限定されるほか、確実に集団数が減少している。なお、当該期には１部の紡錘形の集団が北小木地区か多治見市北西地区から土岐川を越えて大畑・下半田川地区へ移ってきている可能性が高い。

第７型式期は、寸胴形の集団は高田・小名田地区に４集団、多治見市北西地区に１集団程度存在し、大洞・土岐口地区の集団は再び土岐川以北の地区に戻るもの考えられる。減少傾向にある寸胴形の集団とは対照的に、紡錘形の集団は東濃窯の広範囲に展開する。土岐川以北地域の多治見市北西地区には２集団、北小木地区には 18 集団、明和・住吉地区には３集団、高田・小名田地区には 10 集団が存在し、土岐川以南の大畑・下半田川地区へは当該期に紡錘形９集団程度が新たに移動したものとみられる。

第８型式期になると、寸胴形の集団は高田・小名田地区に１集団みられるのみとなる。前段階に増加・拡散した紡錘形の集団もその数を減らし、北小木地区に１～２集団、高田・小名田地区に１集団、大畑・大洞地区に１～２集団程度認められるのみである。また、北小木地区や大畑・大洞地区では倒卵形の集団が１～２集団存在するようだ。

第９型式期には、北小木地区で紡錘形が１集団、大洞・土岐口地区で倒卵形が１集団確認されるのみで、寸胴形の集団は姿を消すようである。なお、集団数でみると各地区の集団数は同程度であるが、第８型式期は北小木地区と高田・小名田地区がそれぞれ８窯跡であるのに対し大畑・下半田川地区は 15 窯跡が分布していることから、土岐川以南の集団の方が活発に活動していたものと考えられる。また、第９型式期は調査例が限られていることから詳細を述べることは難しいが、土岐川以南では大畑・下半田川地区に５窯跡、大洞・土岐口地区に４窯跡分布しており、後者では倒卵形の平面形をもつ窯が築かれることから、前者から集団が移ったものと考えられる。

第 10 型式期になると、紡錘形の集団は北小木地区で１集団認められるのを最後に姿を消し、土岐川以南では倒卵形の集団が大畑・下半田川地区に２集団、大洞・土岐口地区に１集団存在している。続く第 11 型式期には引き続き倒卵形の集団が大畑・下半田川地区と大洞・土岐口地区に１集団ずつ存在するほか、おそらく大洞・土岐口地区から土岐川を越えて高田・小名田地区に１集団移動しているようだ。なお、燃焼室の石組みや煙道部のテラス構造などＧ３類の窯体構造にみる差は、これらの集団の差を表している可能性が高い。

第５章　中世東濃窯製品の流通

東濃窯の生産状況について整理したところで、流通状況に論を移したい。ここでは先行研究を追って現段階での問題点を挙げ、時期別に製品の流通状況を把握した上で流通経路などについても考察していく。

第１節　山茶碗類の流通研究史

（１）山茶碗の流通状況

山茶碗の流通研究が本格的に行われるようになったのは 1990 年に入ってからである。藤澤氏は愛知・岐阜・三重・静岡県下における山茶碗の流通状況を明らかにした[註 18]（藤澤 1990a・1994）。特に 1994 年の論文は、三重県埋蔵文化財センターが主体となって行った「中世土器の生産と流通－胎土分析からみた山茶碗の生産と流通－」をテーマとした共同研究の成果として発表されたもので、主要３類型を中心に生産地の状況を加味して整理されており、今日の山茶碗流通研究の礎となっている。藤澤氏は、尾張地方を庄内川を境に東部と西部、三河地方を矢作川流域の西部、豊川流域の東部、美濃地方を東濃型山茶碗の生産地である東部とそれ以外の中・北西部、伊勢地方を南部・北部、遠江地方を東部・西部にそれぞれ区分し、これに駿河西部を加えている。ここでは、特に東濃型・尾張型の流通状況について以下にまとめていく[註 19]。

尾張地方は、東部と西部で様相が異なり、生産地をもたない尾張西部では、第３～７型式期にかけて尾張型が安定して流通するが、第８型式期には減少、第９型式期には全くみられなくなる。東濃型山茶碗は第７型式期から本格的に流通し[註 20]、この段階で既に尾張型に代わって主体を占めており、第９型式期以降は減少するものの第 11 型式期まで安定して流通しているという。一方、猿投窯の大部分・常滑窯・瀬戸窯など尾張型山茶碗を生産した窯業地を抱える東部は、第３～９型式期まで一貫して尾張型が主体を占め、第 10 型式期以降は激減する。東濃型は第８型式期以降に搬入されるが、第 10 型式期以降に尾張型と流通量が逆転する以前は量的にそれほど多くないという。

三河地方は、西部と東部では様相が異なり、尾張型山茶碗を生産した猿投窯の一部・藤岡窯や渥美・湖西型山茶碗の範疇に含まれる幸田窯を抱える三河西部は、第３～９型式期にかけて山茶碗が流通し、それ以降は山茶碗流通圏から外れる。尾張型が主体であるが、第４～６型式期にかけては渥美・湖西型が一定量みられ、第７型式期以降は東濃型が少量流通する。また、東濃型は山間部の遺跡ほど出土量が多いとしている。渥美・湖西型を生産する渥美窯を抱える東部は、第４～８型式期にかけて山茶碗が流通し、それ以降は山茶碗流通圏から外れる。一貫して渥美・湖西型が主体を占めるが、第６・７型式期には尾張型、第７・８型式期には東濃型が少量流通するという。

美濃地方は、東部と中・北西部で様相が異なり、美濃東部では、第４～ 11 型式期を通じて東濃型山茶碗が主体を占め、尾張型は第３型式期に若干認められるのみである。中・北西部は、尾張型が第３～６型式期にかけて主体を占めるが、第７型式期以降はみられなくなる一方、東濃型は第６型式期から流通し第７・８型式期に急増、その後減少しながら第 11 型式期まで認められる。尾張型から東濃型へ山茶碗流通が移行する、尾張西部地域に類似する様相を示すという。

各地域の流通状況から、藤澤氏は地域内に山茶碗生産地を擁するか否かが流通状況を左右するとした。すなわち、生産地を擁する地域は基本的に生産している類型の山茶碗が主体を占め、尾張型と渥美・湖西型の生産地を含む三河西部では両類型が拮抗することから、原則的に地域内で生産された山茶碗は即その地域に流通したという。生産地を有さない尾張西部、美濃北・西部では尾張型と東濃型が競合し、やがて東濃型に淘汰される状況を示している。この現象は渥美・湖西型と尾張型が競合する伊勢南部、東遠型と渥美・湖西型が競合する駿河西部でも同様におこり、前者は尾張型、後者は渥美・湖西型によって淘汰されていくという構図が明らかになったのである。

また尾張型と東濃型の流通圏について、尾張型山茶碗の流通圏は、第３型式期は尾張･三河西部･美濃･伊勢地方に一定量流通し、第４型式期以降東濃型が主体となる美濃東部と、同じく第６型式期以降同類型が主体となる美濃北・西部以外の地域は第６型式期にかけて増加する傾向がみられるという。第６型式期には伊勢南部・遠江東部の臨海部にも大量に搬入され、尾張型の流通圏が一気に拡大するが、第７型式期には猿投窯・知多窯の衰退によって流通量が減少し当該期には美濃北・西部、第８型式期には伊勢南部や遠江東部、第９型式期には尾張西部や伊勢北部で相次いで流通がみられなくなり、第 10 型式期以降は尾張東部と三河西部に限定されるとしている。

東濃型の流通圏は、第４型式期は美濃東部に集中し狭域的な流通を示すが、生産量･流通量が増加し、第６型式期には美濃全域、第７型式期には尾張西部へと範囲を拡大しなが尾張型を駆逐していくという。生産のピークとなる第７・８型式期には尾張東部、三河西・東部、伊勢北部、近江東部、信濃南部などで量的には少ないが流通が確認される（藤澤 1994）。

この共同研究の成果を指標に、2000 年代には愛知県・岐阜県・静岡県における山茶碗流通についての研究が進められていく。小野木学氏は、行政区分に従い岐阜県全体を西濃・岐阜・中濃・東濃・飛騨の５地区に分け、県内の山茶碗の流通状況を明らかにしている（小野木 2003）。報告書では出土量が多い遺物を掲載する傾向があることから、10 個以上図化されている場合はその遺跡の中で多く出土しているものと捉え、流通量の目安としている。

これによると、山茶碗の出土遺跡数は第６・７型式期まで少量出土するが主要流通圏とはならない飛騨地域を除き、西濃地域で第５型式期、その他の地域で第６・７型式期が最多となり、いずれも８型式以降の遺跡数は減少傾向にある。流通量は第９型式期までは西濃・岐阜・中濃地域は遺跡数と比例し、前者では第５型式期、後二者では第７型式期がピークとなる。第８型式期以降は西濃地域で流通がほとんどみられなくなり、岐阜・中濃地域でも減少傾向にあるが、中濃地域では第 10・11 型式期に流通量が増加している。東濃地域では第３・４型式期、第８・９型式期の流通量がやや少ないが、その他の時期は同程度の流通量である。

小野木氏は以上の流通状況から、報告書で 10 個以上図化された遺跡の分布範囲を山茶碗の１次流通圏、図化されたものが９個以下の遺跡の分布範囲を２次流通圏とし、岐阜県内の山茶碗流通圏を設定している。出土した山茶碗類の産地から、第３・４型式期は西濃地域と岐阜・中濃地域の長良川流域が尾張型、中濃地域の木曽川流域・東濃地域が東濃型の主要流通圏となる。第５型式期には岐阜地域の木曽川流域が東濃型の主要流通圏に加わり、第６型式期には岐阜地域の長良川流域で尾張型・東濃型が競合するほか、中濃地域の長良川流域が東濃型の主要流通圏となる。第７型式期には西濃地域が山茶碗の第１次流通圏から外れるが、それ以外のすべての地域が東濃型の主要流通圏となる（小野木 2003）。

岡本直久氏は、猿投窯や知多（常滑）窯、瀬戸窯を擁する尾張地域の生産状況と流通について概観し、東海地方を中心とした消費遺跡における他地域製品との共伴関係について時期別に整理し、考察を加えている（岡本 2005）。

これによると第３・４型式期は、東濃型は美濃中東部と一部国境を超えて南まで流通する。尾張型は広く展開し、南西部を除く尾張全域・三河西部・美濃中西部・伊勢全域と伊賀の一部・近江までを流通範囲とする。これらの流通範囲は第６型式期まで継続してみられる。第７型式期は、東濃型は変化はみられないが、尾張型は伊勢北端から近江にかけて流通がみられなくなり、三河東部や遠江西部で分布がみられるようになる。第８型式期も東濃型の流通範囲は大差ないが、三河や伊勢において部分的に出土が確認される。尾張型の流通圏は尾張北東部から三河北西部、伊勢北中部にまとまった分布がみられるが、範囲は縮小傾向にある。第９～ 11 型式期は、東濃型の流通範囲は最後まで変化がみられないが、尾張型はさらに分布範囲が狭まり、最終的に生産地周辺のみとなるという（岡本 2005）。なお、岡本論文では流通範囲に主眼を置き、流通量については詳述していない。

また中野晴久氏は、三重県内の尾張型・渥美湖西型・東濃型の流通状況を明らかにした前川嘉宏氏の論文を範として、前出の岡本論文なども参考に愛知県下の伊勢湾周辺遺跡における主要３類型の出土状況について、時期別・類型別に底部が３分の１以上残存しているものを集計し、考察を加えている（前川 1994・中野 2007）。

これによると、知多半島の武豊町ウスガイト遺跡では第３～９型式期にかけて一貫して尾張型が主体を占め、第７型式期までは常滑窯・猿投窯産のものが大半で、瀬戸産のものは第７～９型式期にかけて少量認められる程度であるという。また、第５型式期にかけては渥美・湖西型も少数出土している。東濃型は第６型式期と第８型式期に１点ずつ確認されるのみである。また、知多市下内橋遺跡は第３～８型式期にかけて尾張型が主体を占める。第７型式期にかけては常滑窯・猿投窯産のものが搬入され、瀬戸窯産は第７・８型式期に一定量流通するが、第９型式期には全くみられなくなる。なお、東濃型は、第７型式期と第９型式期に１点ずつ確認されている。

東海市畑間遺跡では、第３～８型式期まで尾張型が主体を占め、第９型式期まで確認される。第７型式期までは常滑窯・猿投窯産のものが大半で、瀬戸窯産は第６～９型式期にかけて流通する。東濃型山茶碗は第８・９型式期に認められ、第９型式期は尾張型に代わって主体を占めている。

尾張平野部の名古屋市千音寺遺跡では第３～８型式期にかけて尾張型が主体を占め、第７型式期にかけては特に常滑窯・猿投窯産のものが大半である。第３・４型式期と第６型式期には渥美・湖西型も１点ずつ認められ、東濃型は第６～８型式のものが数点確認される程度である。三河東部の豊橋市橋良遺跡では、第３～８型式期にかけて一貫して渥美・湖西型が主体を占め、尾張型は客体的である。東濃型は第７型式期に少数出土するという（中野 2007）。

岡本智子氏・奥井智子氏は、関西における「非広域流通品」[註21]の流通状況及び共伴関係を整理し、滋賀県の琵琶湖東部地域においては山茶碗が主体的に出土する地域であると結論付けた（岡本・奥井 2005）。一方、藤本史子氏らは三重県・奈良県・滋賀県・京都府・大阪府における畿内系土器類と東海系土器・陶器類の共伴関係について、良好な一括資料を基に考察を加えている（藤本ほか 2015）。これによると、滋賀県内の山茶碗出土遺跡の中心は湖南地域にあるとし、さらに近江を含む畿内では山茶碗が出土するが、尾張型第３・４型式期のものが比較的安定してみられる以外は流通といえるほどの量ではないとしている。

竹谷充生氏は小野木氏の成果を基に、養老町内の中世前期の遺跡について尾張型山茶碗と東濃型山茶碗の出土状況を整理し、その様相を明らかにしている（竹谷 2007）。竹谷氏は、西濃地方に位置する養老町は、中世においては付近を流れる揖斐川が海岸部と内陸部をつなぐ重要な交通路であったとし、町内の中世遺跡で採集された資料を基に分析を行なった。これによると、山茶碗はほとんどの遺跡で第５型式期にピークを迎え、第６型式期にやや減少、第７型式期以降はほとんど確認できなくなるという。また、第３型式期から第７型式期までは尾張型が主体で東濃型は流通しておらず、第８型式期以降は尾張型が姿を消し東濃型が主体となるが流通量は少ないようだ。第８型式期以降は尾張型が姿を消し、東濃型のみがみられるようになるという点は小野木論文と相違ないが、養老町内では山茶碗の流通量が減少し始める時期が第７型式期と小野木論文より１型式分早まる結果となっている（竹谷 2007）。

また、藤澤氏は東海地方における中世恵那中津川窯製品の流通状況を整理・考察する上で、東濃型山茶碗との共伴関係についても触れている。これによると、北信地域・東信地域の遺跡では東濃型の出土はわずかで、中信地域・南信地域では多くの遺跡で東濃型を伴うことから、後二者は東濃型山茶碗の主要流通圏であるという（藤澤 2018）。さらに、美濃国内では飛騨国南端の大威徳寺跡、木曽谷南部の振田遺跡までが東濃型の主要流通圏であることを明らかにしている。

（２）流通拠点と流通経路についての研究

藤澤氏は東濃型山茶碗の流通について、生産地自体が内陸に位置していることに加え、伊勢地方での出土量が少量であることから、中世後期には活発化していたと考えられる木曽川による水運はほとんど使用されず、専ら陸路で流通したものであると推測している（藤澤 1994）。さらに、尾張地方の庄内川を挟んだ西側は東側より早い時期に東濃型が尾張型を駆逐することから、庄内川が山茶碗流通の上で障害となった可能性を指摘している。また、陸路による流通圏はせいぜい 30 ～ 40km が限度であるとし、近世瀬戸焼の近国売捌人の活動距離とほぼ一致すること、数日間の行商（振り売り）で十分往復可能な距離であること、地域内の生産動向がストレートに消費地に反映するという山茶碗の流通状況を踏まえ、生産者自身が山茶碗の運搬・販売に直接従事した可能性が高いとしている。

これに対し、小野木氏は岐阜県内の山茶碗流通について出土量や遺跡の立地から、木曽三川を利用した水運による集積地と、主要街道である東山道を利用した陸路の集積地・２次的集積地 (註 22) を想定し、そこから三つの経路を推定した（小野木 2003）。一つ目のルートは、可児市周辺から東山道を東へ向かい、恵那市周辺へ運ばれる陸路。二つ目のルートは可児市周辺から木曽川を下り、各務原市鵜沼付近から岐阜市へ至る水路と陸路の併用するものである。三つ目のルートは可児市周辺から美濃加茂市を北上して関・美濃市へ運ばれ、長良川を下って岐阜市へ至る陸路と水路の併用するものである。また、東濃型山茶碗の場合は出荷地から２次的集積地までの距離が約２日間で往復できる範囲内で、長良川流域と木曽川流域の間にほぼ限定されていたと推測している。さらに、美濃における東濃型と尾張型の分布圏の境は長良川流域に存在するとし、生産地と集荷地・２次的集荷地の位置から東濃型は陸路を主体に、尾張型は水路を主体に運ばれたという。

岡本直久氏は、尾張型の美濃地方への流通は陸路が想定され、近江分布状況から海路も使用されたものと考えられるが、第８型式期以降伊勢地方や木曽三川流域には流通するが春日井市や小牧市にはほとんど流通していない状況から、海から最も遠くに位置する瀬戸窯・藤岡窯の製品が伊勢湾岸まで運ばれたのち海路搬出されるルートを想定している（岡本 2005）。

また、岡本智子氏・奥井氏は関西への山茶碗搬入について、琵琶湖湖南地域でも湖東地域ほどではないが一定量山茶碗が確認されることから、東海道を通り京都方面へと向かうルートを主としていたものと推測している（岡本・奥井 2005）。

藤澤氏によれば、中世中津川窯の製品は中信地域の木曽谷を除き、神坂峠を越えて南信地域へ入り東山道を通って中信（松本平）地域へ至り、そこから北信地域・東信地域へそれぞれ北上・東進するというのが主要ルートであるとしているが、南信・中信地域では中津川製品と東濃型が共伴する場合が多くみられることから、これらが同一の流通経路で搬入された可能性が極めて高いとし、同時に流通していた可能性も指摘している（藤澤 2018）。また、美濃国内では飛騨国南端の大威徳寺跡、木曽谷南部の振田遺跡までが東濃型の主要流通圏であることを明らかにしている。また、渥美・湖西型が大量に出土した恵那市南端部の道下遺跡を除くと、東濃型が流通する以前には尾張型が搬入されており、13 世紀前葉には東濃地域、13 世紀中葉には中濃・西濃地域および尾張西部地域から尾張型山茶碗を駆逐し、木曽川・土岐川（庄内川）を障害としながら陸路で生産地から直送されたものとしている。

さて、ここまで東濃型山茶碗の流通状況及び流通経路についての先行研究を整理してきた。他の類型も含めて東海地方における山茶碗流通は、地域単位での状況把握が済んでいる段階で、岐阜県内に限っては小野木氏によって東濃型・尾張型の主要流通圏が設定されている。しかし、小野木氏の集計方法は報告書未掲載遺物の量が如何程かという問題が付き纏う上、東濃型山茶碗は愛知県や長野県においても主体的に流通している地域が認められることから、これらの地域を含めて流通圏を設定する必要がある。また、流通経路についても専ら陸路で運搬されたとする説、一部河川を利用したとする説などいくつかあり、これについては流通圏を設定した上で、小野木氏の挙げた集積地・２次的集積地を考慮しながら

検討する必要がある。

ここで注目されるのが、近年発掘調査担当者の努力により蓄積されつつある、遺跡出土の器種別・時期別の集計データである。器種別・時期別の集計データは、先行研究によりおおよその流通傾向が掴めたところから、さらに詳細な議論に踏み込む足がかりとなるもので、類型別・時期別の具体的な数値を知ることができるのである。多くは行政調査によって得られたデータであるため、多少地域的な偏りがあることは否めないが、本論では現在蓄積されている集計データを基に、東濃型山茶碗が中心ではあるが主要流通圏及び２次流通圏の設定を試み、時期別にその変遷を追うとともに流通拠点やその経路についての予察も行なっていく。

第２節　東濃型山茶碗の分布と流通状況

（１）山茶碗流通圏について

地産地消を基本とする山茶碗類は、東限が薩埵峠、北限は飛騨南端及び信濃の木曽谷南部あたり、近江国では山茶碗流通は認められるが主要な供膳具となる程ではないという状況から（足立 1982、藤澤 1994、岡本直久 2005、岡本・奥井 2005、藤澤 2018）、尾張全域・三河全域・美濃全域・飛騨南端部・信濃南部・伊勢・遠江が山茶碗を主たる供膳具とする範囲となろう。

このうち東濃型山茶碗は美濃を中心に尾張･飛騨南端･信濃南部にかけて主体的に流通している。また、時期・地域によって東濃型山茶碗とともに出土することが多い尾張型山茶碗は尾張・三河・美濃・伊勢を中心に流通している。東濃型山茶碗の流通状況を整理するにあたり、尾張型山茶碗の流通状況も併せてみていきたい。

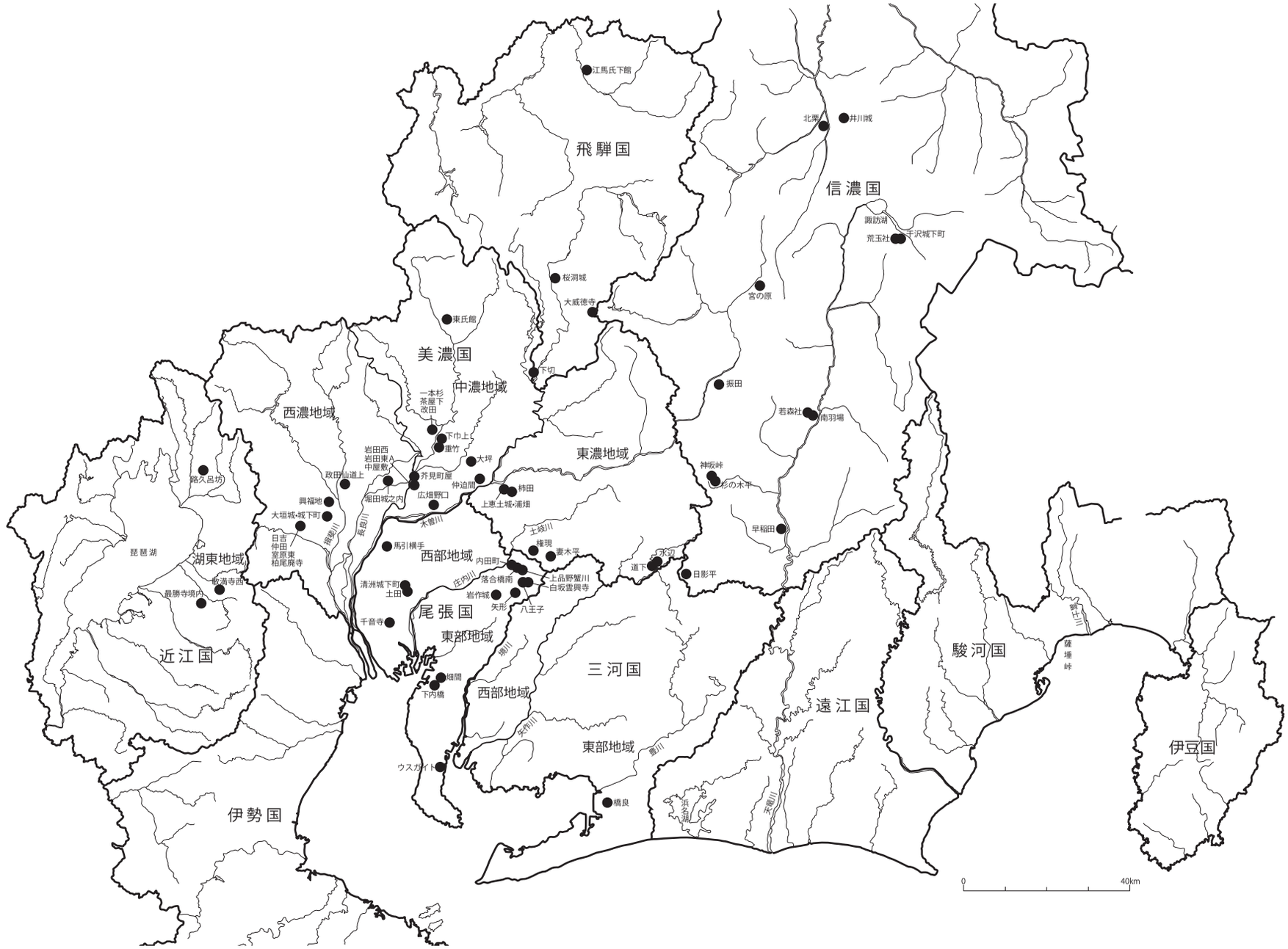
（２）地域別・時期別流通状況

愛知県の地域区分は藤澤氏・岡本氏に倣って尾張・三河地方を西部・東部に分割する。美濃地方の地域区分は、藤澤氏・岡本氏は美濃地方を西濃・中濃・東濃の３地域、小野木氏は西濃・岐阜・中濃・東濃の４地域に区分しているが、ここでは各務原市以外の岐阜地区までを西濃に含め、西を各務原市、東を美濃加茂市とした長良川と木曽川に挟まれた地域を中濃、これより東の地域を東濃とし、木曽川以南に位置し行政区割上は中濃地域に含まれる可児市は生産地を擁することを加味して東濃に含めることとする（第 33 図）。

①東濃地域（第 37 表①～⑥）

第３・４型式期は、土岐市の妻木平遺跡や可児市の柿田遺跡などで確認される[註 23]。妻木平遺跡では第３型式期に尾張型と東濃型が数的に拮抗し、第４型式期には尾張型が上回る。柿田遺跡では第３・４型式とも東濃型が尾張型を上回る。また、恵那市の道下遺跡では東濃型はほとんど認められないが、４型式期に渥美・湖西型が主体的に搬入されている。第５型式期は、妻木平遺跡と柿田遺跡で山茶碗の流通量が激増するが、いずれも尾張型が東濃型を上回ることはなく後者が主体で前者が客体的である。また、同じ可児市に立地する上恵土城跡・浦畑遺跡でも当該期に少量搬入され始めるようだが、東濃型がわずかに認められるのみである。道下遺跡は第４型式期に引き続き渥美・湖西型が主体的に認められるが、東濃型が増加し量的に拮抗している[註 24]。第６型式期は、妻木平遺跡では山茶碗の流通量が減少するが東濃型が主体で尾張型が一定量搬入される状況は変わらない。柿田遺跡では東濃型の流通量が増加し、尾張型が激減している。上恵土城・浦畑遺跡では本格的に山茶碗が流通するようになるが、尾張型は認められず東濃型のみが搬入されている。一方、道下遺跡では第５型式期に渥美・湖西型と東濃型が拮抗していた状況から一転し、再び前者が主体を占めるようになる。

第７型式期は、妻木平遺跡は山茶碗の流通量は第６型式期と大差なく、東濃型が主体を占める状況は変わらないが、尾張型の流通がほとんどみられなくなる。柿田遺跡は山茶碗の流通量が減少する以外は



第 33 図　主要中世遺跡分布図

妻木平遺跡とほぼ同じ様相を呈する。上恵土城跡・浦畑遺跡は引き続き東濃型のみが流通する。道下遺跡は第６型式期から一転して渥美・湖西型が全く認められなくなり東濃型が主体を占めるが、山茶碗の流通量自体は減少している。第８型式期は、妻木平遺跡・柿田遺跡・上恵土城跡・浦畑遺跡・道下遺跡のすべてで流通量が減少している。妻木平遺跡・柿田遺跡は主要時期から外れるが、両遺跡とも一定量搬入されているようだ。また、道下遺跡の近隣に位置する水辺遺跡で少量ではあるが東濃型の流通が確認される。第９型式期は、妻木平遺跡・道下遺跡・水辺遺跡では第８型式期と同量程度、柿田遺跡・上恵土城跡では減少し、浦畑遺跡ではほとんど確認されない。第 10 型式期は、妻木平遺跡・柿田遺跡・上恵土城跡・水辺遺跡では第９型式期と同量程度確認され、浦畑遺跡・道下遺跡では流通量が増加している。第 11 型式期は、妻木平遺跡では第 10 型式期と同量程度確認されるが、水辺遺跡ではほとんどみられなくなり、道下遺跡も当該期前半の流通量はごく僅かである。一方、柿田遺跡・上恵土城跡・浦畑遺跡では流通量が増加し、上恵土城跡・浦畑遺跡は当該期後半に流通量が減少し、道下遺跡では逆にやや増加している。

②中濃地域（第 37 表⑦～⑰）

第３・４型式期は、関市の下巾上遺跡、各務原市の広畑野口遺跡で少量流通しているがいずれも尾張型が主体となる。関市の岩田西遺跡や岐阜市の芥見町屋遺跡などでも尾張型が主体で東濃型はほとんど確認されない[註 25]。第５型式期は、関市の重竹遺跡・下巾上遺跡で東濃型が一定量流通するが、いずれも主体は尾張型である。広畑野口遺跡・岩田西遺跡・中屋敷遺跡では尾張型が主体で東濃型はほとんど搬入されない。芥見町屋遺跡では量は少ないが両者が同量程度出土している。一方、東濃地域に接する美濃加茂市に位置する仲迫間遺跡では東濃型が主体を占め、尾張型はほとんど認められない状況である。第６型式期は、下巾上遺跡・重竹遺跡では尾張型を占めていた状況から一転し、当該期には東濃型が優勢となり尾張型は少量認められる程度で、芥見町屋遺跡でも同様の状況である。仲迫間遺跡は第６型式期から第９型式期までを一括して集計しているため各時期の正確な点数は不明であるが、いずれにしろ東濃型が優位で尾張型がほとんど流通していないものと考えられる。岩田西遺跡は流通量は少ないが尾張型が優位で東濃型が一定量搬入されている。また、中屋敷遺跡も流通量は少ないが、こちらは東濃型が尾張型を上回るようだ。

第７型式期は、広畑野口遺跡・重竹遺跡・岩田西遺跡・岩田東Ａ遺跡・中屋敷遺跡・芥見屋敷の全てで東濃型が優位となり、尾張型はほとんど搬入されなくなる。また、当該期より山茶碗が流通する美濃加茂市の大坪遺跡でも東濃型のみが流通している。第８型式期は、第７型式期同様ほぼすべての遺跡で東濃型のみが流通しているようで、流通量も大きな変化はなさそうである。第９型式期も東濃型が独占的に流通しているが、重竹遺跡・中屋敷遺跡・芥見町屋遺跡で流通量が減少し、岩田西遺跡・岩田東遺跡では当該期の山茶碗は皆無である。第 10 型式期は、下巾上遺跡・重竹遺跡・中屋敷遺跡で若干増加傾向にあり。岩田西遺跡でも少量搬入されている。また、広畑野口遺跡では第 10・11 型式期として一括で集計されているが、その破片数は第９型式期の５点に対して 1088 点と大幅に増加している。一方、芥見町屋遺跡や仲迫間遺跡では減少傾向にある。第 11 型式期は、下巾上遺跡・重竹遺跡・岩田西遺跡・中屋敷遺跡・大坪遺跡で流通量が増加し、このうち下巾上遺跡・中屋敷遺跡では当該期後半に流通量減少する様子がみられる。岩田西遺跡は第 10 型式期と流通量に大きな変化はみられず、芥見町屋遺跡は当該期後半にかけて減少傾向にある。

③西濃地域（第 37 表⑱～㉑）

第３・４型式期は、第３型式期に本巣市の政田仙道上遺跡、大垣市の興福地遺跡及び大垣城・城下町遺跡で尾張型が、大垣城・城下町遺跡で東濃型と尾張型が確認されているが、いずれもごく僅かである。第４型式期には興福地遺跡・岐阜市の堀田城之内遺跡で尾張型一定量流通するようになり、政田仙道上

遺跡、大垣城・城下町遺跡でも尾張型が少量搬入されている。東濃型は大垣城・城下町遺跡で少量確認される程度で、ほとんど流通していない状況である。第５型式期は、堀田城之内遺跡・政田仙道上遺跡・興福地遺跡で尾張型の流通量が激増し、後二者は東濃型も少量出土している。大垣城・城下町遺跡でも尾張型が増加し東濃型が少量入り込んでいる、このほか、下呂市の東氏館跡にも尾張型のみが少量搬入されるようになる。第６型式期は、堀田城之内遺跡・興福地遺跡が廃絶し、政田仙道上遺跡、大垣城・城下町遺跡では尾張型が独占的に流通するがその量は減少傾向にある。また、東氏館跡では東濃型が優位となり尾張型が搬入されている状況である。

第７型式期は、政田仙道上遺跡で山茶碗がほとんどみられなくなり、大垣城・城下町遺跡でも当該期以降山茶碗流通は認められない。東氏館跡では尾張型がみれらなくなり東濃型が独占的に搬入されている。第８型式期は、政田仙道上遺跡・東氏館跡とも東濃型が独占的に流通しており、前者では尾張型がわずかに認められる。流通量はいずれも第７型式期より増加している。第９型式期は、政田仙道上遺跡・東氏館跡とも東濃型が独占状態にあり、前者には尾張型が若干認められるという状況は変わらないが、流通量については前者は増加、後者は減少傾向にある。第 10 型式期も第９型式期と大きな状況の変化はないが、流通量については東氏館跡はさらに減少、政田仙道上遺跡においては増加している。第 11 型式期は、東氏館跡において流通はほとんど認められず、政田仙道上遺跡でも当該期後半にかけて減少している。

④飛騨地域（第 37 表㉒・㉓）

第３・４型式期は、尾張型・東濃型ともほとんど流通しておらず、下呂市の下切遺跡で東濃型と尾張型がごくわずかに認められる程度である。第５型式期は、下切遺跡で東濃型と尾張型が拮抗し、同じ郡上市の大威徳寺跡では東濃型が独占的に流通し尾張型はほとんど認められない。第６型式期は、下切遺跡で東濃型が主体を占め尾張型が少量流通する状況にあり、大威徳寺跡は引き続き東濃型のみが認められる。

第７型式期は、下切遺跡・大威徳寺遺跡とも東濃型のみが流通し、当該地域では尾張型がほとんど流通していないようだ。第８型式期は、下切遺跡・大威徳寺跡とも第７型式期と大した変化はみられない。第９型式期は大威徳寺跡は第８型式期と変化はみられないが、下切遺跡で山茶碗が確認されなくなる。第 10 型式期は、大威徳寺跡の状況に変化はみられないが、下切遺跡では再び少量出土が確認される。第 11 型式期は、下切遺跡では山茶碗は認められず、大威徳寺跡では当該期前半には一定量搬入されるようだが、後半にはほとんど認められなくなる。

⑤尾張東部地域（第 37 表㉔～㊱）

第３・４型式期は、瀬戸市の上品野蟹川遺跡・落合橋南遺跡・内田町遺跡、東海市の畑間遺跡、知多市の下内橋遺跡、武豊町のウスガイト遺跡などで確認され、第３型式期はどの遺跡も尾張型が主体となる。第４型式期は、上品野蟹川遺跡と落合橋南遺跡・内田町遺跡・畑間遺跡・下内橋遺跡・ウスガイト遺跡で流通量が増加し、尾張型がほぼ独占的に搬入されているようだ。一方、内田町遺跡では尾張型が一定量流通するものの東濃型がこれを上回っている。第５型式期は、上品野蟹川遺跡・落合橋南遺跡・内田町遺跡・ウスガイト遺跡で山茶碗の流通量が増加するが、上品野蟹川遺跡では尾張型と量的に拮抗するほどの東濃型が出土している。落合橋南遺跡では依然尾張型が優勢であるが、東濃型の流通量も増加し量的な差は確実に小さくなっている。また、瀬戸市八王子遺跡でも搬入されるようになり、ここでも尾張型を主体に東濃型が少量確認される。内田町遺跡では第４型式期とほぼ同じ状況で、東濃型が主体を占め尾張型が一定量搬入されている状況で、当該期より山茶碗流通が確認される瀬戸市の矢形遺跡でも同様の傾向がみられる。ウスガイト遺跡・畑間遺跡・下内橋遺跡では尾張型のみが流通しており、東濃型は全く認められない。第６型式期は、落合橋南遺跡では引き続き尾張型が主体で東濃型が一定量

搬入されるが、上品野蟹川遺跡では再び尾張型が東濃型を上回り、これまで東濃型が主体となってきた内田町遺跡でも尾張型が優勢となる。八王子遺跡では引き続き尾張型を主体に東濃型が少量認められる。ウスガイト遺跡・畑間遺跡・下内橋遺跡では引き続き尾張型が独占的に搬入され、いずれも流通量は増加している。

第７型式期は、上品野蟹川遺跡・内田町遺跡・矢形遺跡・畑間遺跡で尾張型の流通量が増加し、前二者では東濃型が客体的に搬入される。落合橋南遺跡では、東濃型の流通量は第６型式期と同量程度確認されるものの尾張型が減少することで量的には拮抗している。八王子遺跡は流通量がやや減少するが、尾張型が主体で東濃型が少量搬入される状況に変化はみられない。下内橋遺跡は第６型式期と同量程度の尾張型が確認されるが、ウスガイト遺跡では流通量が減少する。第８型式期は、矢形遺跡・八王子遺跡・畑間遺跡・下内橋遺跡・ウスガイト遺跡では尾張型が独占的に流通しており、当該期より本格的に山茶碗が搬入される瀬戸市の白坂雲興寺遺跡でも同様の状況であるが、白坂雲興寺遺跡以外の遺跡では第７型式期と比較して流通量は減少している。落合橋南遺跡・内田町遺跡では東濃型が主体を占め尾張型が一定量搬入されている。第９型式期は、下内橋遺跡で山茶碗流通がみられなくなる。白坂雲興寺遺跡・矢形遺跡・八王子遺跡は引き続き尾張型が主体を占めるが、白坂雲興寺遺跡では東濃型の流通量が確実に増加し、逆に八王子遺跡では尾張型の流通量が急増している。また、上品野蟹川遺跡では尾張型の流通量が確実に減少しており、当該期には東濃型が主体を占めるものとみられる。また、端間遺跡では当該期の尾張型の出土量が３点であるのに対し、第９型式期から第 11 型式期にかけて東濃型が 52 点出土しており、少なくとも 15 世紀代には東濃型がある程度搬入される状況にあったようだ。第 10 型式期は、八王子遺跡を除くすべての遺跡で東濃型が独占的に流通し、尾張型は白坂雲興寺遺跡や落合橋南遺跡で少量確認される程度である。白坂雲興寺遺跡・落合橋南遺跡・内田町遺跡では流通量が増加している。第 11 型式期は、上品野蟹川遺跡・矢形遺跡では当該期前半に流通量が増加し、後半は減少している。落合橋南遺跡･白坂雲興寺遺跡は第 10 型式期から当該期後半にかけて流通量が減少している。内田町遺跡は当該期前半は一定量出土するが、後半のものは確認されていない。第 10 型式期で唯一尾張型が主体を占めていた八王子遺跡は、当該期に至って尾張型がみられなくなり、他の遺跡と同様東濃型が独占的に搬入されているようだ。

⑥尾張西部地域（第 37 表㊲～㊴）

第３・４型式期は、名古屋市の千音寺遺跡・清洲城下町遺跡などで確認される。千音寺遺跡は第３・４型式期に尾張型がまとまった量出土していることから、これらが独占的に搬入されるが、渥美・湖西型もわずかに認められる。第５型式期は、千音寺遺跡で流通量が減少、名古屋市の清洲城下町遺跡にも少量搬入されており、前者は尾張型のみ、後者は東濃型のみが確認される。第６型式期は、千音寺遺跡･清洲城下町遺跡とも流通量がやや減少し、前者では東濃型が、後者では尾張型がわずかに搬入されるようである。

第７型式期は、千音寺遺跡で尾張型が減少するが依然主体を占め、東濃型がわずかに認められる。清洲城下町遺跡では東濃型の流通量が増加し、尾張型はほとんどみられなくなる。一宮市の馬引横手遺跡では、尾張型はほとんど認められず東濃型が独占的に流通している。第８型式期は、千音寺遺跡では引き続き尾張型が主体を占めるが流通量はかなり少ない。清洲城下町遺跡・馬引横手遺跡は引き続き東濃型が独占的に流通し、後者では流通量が増加している。第９型式期は、千音寺遺跡で流通がみられなくなり、清洲城下町遺跡・馬引横手遺跡では第８型式期の状況と大きな変化はみられないが、後者は流通量が減少している。第 10 型式期は、馬引横手遺跡・清洲城下町遺跡とも第９型式期の状況と大きな変化はみられないが、前者では流通量がやや減少している。第 11 型式期は、馬引横手遺跡・清洲城下町遺跡とも東濃型のみが流通し、前者では当該期後半にかけて流通量が減少している。後者は当該期前半

第 37 表　産地別・時期別山茶碗類集計表　　※( ) 内は小碗・小皿の数値

①妻木平遺跡（東濃）　主要時期：12～13世紀　　報告書掲載分

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期		その他	時期不明	合計
東濃型	26(2)	34(8)	271(50)			55(15)	41(4)	17(1)	25(6)	19	25(1)	17(5)		53(26)	583(118)
尾張型	20(10)	94(26)	141(44)			23(5)	2							32(3)	312(8)
美濃須衛型	1	4(1)	11(1)												
渥美・湖西型			2(1)												2(1)
合計	47(12)	132(35)	425(96)			78(20)	43(4)	17(1)	25(6)	19	25(1)	17(5)		85(29)	897(127)

②柿田遺跡（東濃）　主要時期：12～13世紀中葉　　底部残存率

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型	38.2	617.4	2307.5			3221	769.1	208.3	163.9	170	208.8			7724.2
尾張型	5	219.9	532.6			32.3	1.8							791.5
合計	43.2	837.3	2840.1			3353.3	770.9	208.3	163.9	170	208.8			8515.7

③上恵土城跡(A･F区)（東濃）　主要時期：14～16世紀　　底部残存率

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期		その他	時期不明	合計
東濃型			2.5(1.9)			25.9(43.2)	104.2(143.4)	25.6(0.3)	15.4(1.1)	20.4(0.8)	37.9(0.5)	5.7(1.2)			273.6(192.4)
尾張型															
合計						25.9(43.2)	104.2(143.4)	25.6(0.3)	15.4(1.1)	20.4(0.8)	37.9(0.5)	5.7(1.2)			273.6(192.4)

④浦畑遺跡(B･C･D･E･H･G区)（東濃）　主要時期：14～16世紀　　底部残存率

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期		その他	時期不明	合計
東濃型			3.1(6.2)			114.5(88.2)	413.7(491.5)	59.3(0.5)	0.3	65.4(0.3)	179.2(1.4)	21(0.8)			856.5(582.7)
尾張型															
合計			3.1(6.2)			114.5(88.2)	413.7(491.5)	59.3(0.5)	0.3	65.4(0.3)	179.2(1.4)	21(0.8)			856.5(582.7)

⑤道下遺跡（東濃）　主要時期：12～16世紀　　接合前破片数

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期		その他	時期不明	合計
東濃型		1	39		33	29(16)	21(7)	4	4	14	2	8	5型式:(16)	401(8)	556(47)
渥美・湖西型		15(7)	75(28)			104(16)								361(7)	555(58)
渥美か尾張型						6								12	18
合計		16(7)	147(44)			139(32)	21(7)	4	4	14	2	8		774(15)	1,129(105)

⑥水辺遺跡（東濃）　主要時期：14～16世紀　　接合前破片数

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型								4(1)	7(4)	5			56	72(5)
尾張型														
合計								4(1)	7(4)	5			56	72(5)

⑦仲迫間遺跡（中濃）　主要時期：12世紀中葉～15世紀　　個体数

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型		1.4	11.42			24.55				12.67				50.07
尾張型		0.72	1.75			0.12								2.59
合計		2.12	13.17			24.67				12.67				52.66

⑧広畑野口遺跡（中濃）　主要時期：14・15世紀　　接合前破片数

	第３型式期	第４型式期		第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型		2		4			1	7	22(12)	5	1088(32)		5型式:3		1132(44)
尾張型		3	2	5											10
合計		5	2	9			1	7	22(12)	5	1088(32)		3		1142(44)

⑨一本杉・茶屋下・改田遺跡（中濃）　主要時期：14世紀後半～15世紀　　接合後破片数

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型		51						322						373
尾張型														
合計		51						322						373

⑩下巾上遺跡（中濃）　主要時期：13世紀後半～15世紀

口縁部個体数

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期		その他	時期不明	合計
東濃型	6.4	10	78.9			66	0.31	2.315	2.315	9.33	16.65	5.98	大窯１:0.62		198.2
尾張型	6.4	40.1	118.3			16.5							時期不明:0.29		181.5
合計	12.8	50.1	197.2			82.5	0.31	2.315	2.315	9.33	16.65	5.98	0.29		379.79

⑪大坪遺跡（中濃）　主要時期：15世紀

接合後破片数

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型							22(11)		13(37)		40			75(48)
尾張型														
合計							22(11)		13(37)		40			75(48)

⑫重竹遺跡（中濃）　主要時期：13世紀後半～15世紀

底部個体数

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型	6.345	8.51	74.92			66.07	74.4	63.16	24	32.48	122.93	7型式以降:41.65		331.62
尾張型	6.345	41.57	122.23			16.52								
合計	12.69	50.08	197.15			82.59	74.4		24	32.48	122.93	41.65		331.62

⑬岩田西遺跡（中濃）　主要時期：16世紀

接合後破片数

	第３型式期	第４型式期		第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期		その他	時期不明	合計
東濃型		3				7(2)	10(11)	12(20)	25(20)		8(12)	18(5)	14(1)	8～10型式:1(1) 8～11型式:(1)	1	99(73)
尾張型	1	8(11)	3	21(37)			25(25)	1								59(73)
美濃須衛型		(1)		2(1)											3	5(2)
合計	1	12(12)	3	30(40)			35(36)	13(20)	25(20)		8(12)	18(5)	14(1)	1(2)	4	163(148)

⑭岩田東Ａ遺跡（中濃）　主要時期：16・17世紀

接合後破片数

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期		第８型式期		第９型式期	第10型式期	第11型式期		その他	時期不明	合計
東濃型		1			5	1(2)	10(3)	1	9(1)				5				32(6)
尾張型		2	2														4
合計		3	7			1(2)	10(3)	1	9(1)				5				36(6)

⑮中屋敷遺跡（中濃）　主要時期：14～16世紀

接合後破片数

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期		第７型式期		第８型式期		第９型式期	第10型式期	第11型式期		その他	時期不明	合計
東濃型					5	7(3)		17(2)	13	11(1)	18	5(6)	45(2)	144(4)	25(1)	7～10型式:(15)	106(17)	396(51)
尾張型	2	2		8(1)	23	3												38(1)
合計	2	2	13(1)		23	10(3)		17(2)	13	11(1)	18	5(6)	45(2)	144(4)	25(1)	(15)	106(17)	434(52)

⑯芥見町屋遺跡（中濃）　主要時期：13世紀中葉～15世紀

接合後破片数

	第３型式期	第４型式期		第５a型式期		第５b型式期		第５c･d型式期	第６型式期		第７型式期		第８型式期		第９型式期		第10型式期	第11型式期		その他	時期不明	合計
東濃型					1	1	7(3)	67(13)	1	350(58)	184(3)	334(63)	34(3)	219(17)	3	174(5)	151(8)	16	8～10型式:1 10･11型式:(29)	(121)	1543(317)
尾張型		5(3)		8(2)				4(1)		1											13(3)
美濃須衛型	11(小碗3)																				11(3)
合計		5(3)	11(3)	17(5)				71(14)	1	351(58)	184(3)	334(63)	34(3)	219(17)	3	174(5)	151(8)	16	(29)	(121)	1567(323)

⑰東氏館跡（中濃）　主要時期：13～15世紀

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型						28	39	67	18	13	1			166
尾張型			11			8								28
合計			11			28	39	67	18	13	1			194

⑱堀田・城之内遺跡（西濃）　主要時期：12後～13世紀初

口縁部残存率

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型														
尾張型		24	208											232
合計		24	208											232

⑲政田仙道上遺跡（西濃）　主要時期：14・15世紀

接合後破片数

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型				1	2 2 1	1	2	25	20(12) 55(2)	107(3)	39 5	8～11型式:7		267(17)
尾張型	2 1	3(4)	57(10)		2	27(4)	4 1	2	21 3 1	6				130(18)
合計	2 1	3(4)	64(10)		3	28(4)	6 1	27	41(12) 58(2) 1	113(3)	39 5	7		397(35)

⑳興福地遺跡（西濃）　主要時期：12後半～13世紀初頭

接合後破片数

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型			2 21											23
尾張型	4(3) 3(1)	19(7) 3(1)	376(33)		1	3	3						1319	1711(81)
美濃須衛型		7	3										32	42
合計	4(3) 3(1)	26(7) 3(1)	402(33)		1	3	3						1351	1176(81)

㉑大垣城跡・城下町（西濃）　主要時期：15・16世紀

接合後破片数

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型	2(1) 2	5(1)	5				1	1		1	1 1(1)	6～11型式:(1) 7～11型式:(1)		14(5)
尾張型	2 1	8(3)	37(2)		1(2)	15(1)				(1)				64(9)
美濃須衛型	1													1
合計	4(1) 3	8(4) 1	42(2)		1(2)	15(1)	1	1		1(1)	1 1(1)	(2)		79(14)

㉒下切遺跡（飛騨）　主要時期：12～14世紀

接合後破片数

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型		2(1)		1(2)	14(7)	24	17(2)	13		6			538(31) 碗か皿240	615(42)+240
尾張型		2	14		(1)	13(1)							24(1) 碗か皿40	53(3)+40
合計		4(1)	15(2)		(1)	37(1)	17(2)	13		6			802(32)	668(45)+280

㉓大威徳寺跡Ｂ区（飛騨）　主要時期：13後半～15世紀

接合前破片数

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型			4(3)		9(2)	8(2)	12	17	16	19	16(4) 4	7～9型式:(3)	72(23)	177(37)
尾張型			1										1	2
合計			14(5)			8(2)	12	17	16	19	16(4) 4	(3)	73(23)	179(37)

㉔上品野蟹川遺跡（尾張東部）　主要時期：12～15世紀

接合後破片数

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型	9(2)		18(5)	20(5)	80(16)	63(18)	63(18)		419(88)	346(93)	417(129) 124(29)			1550(383)
尾張型		48(5)	105(58)			106(25)	427(35)	207(190	19		1			913(313)+9(2)
合計	9(2)	48(5)	223(84)			169(43)	490(53)	207(190	419(88) 19	346(93)	417(129) 125(29)			2472(698)

㉕矢形遺跡（尾張東部）　主要時期：12～15世紀

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型			82(23)			1(2)	1(1) (11)	3(1)	9 2(3)	3	28(5) 15(1)	6型式以前:58(1) 7～11型式:29		231(49)
尾張型		1 1	22(16)		2	33(16)	5 104(10)	543(79)	75 88(17)	14(3)	16(2)	6型式以前:28 7～11型式:364(2)		1296(145)
合計		1 1	104(39)		2	34(18)	6(1) 104(10)	543(90)	78(1) 97(17)	14(3)	18(5)	3 28(5) 15(1)	461(3)	1527(194)

㉖落合橋南遺跡Ⅰ（Ⅰ～Ⅴ層合計）（尾張東部）　主要時期：12～15世紀

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型			2	12	61	47(7)	44(2)	56(13)	96(8)	155(13)	114(13) 142(1)	5型式:(31)	844(183)	1573(271)
尾張型	25(3)	121(1)	171(44)			115(25)	52 281(78)	20	130(2)	11			1747(50)	2673(203)
合計	25(3)	121(1)	26(75)			162(32)	96(2) 281(78)	76(13)	226(10)	166(13)	114(13) 142(1)	5型式欄へ合算	2591(233)	4246(474)

㉗落合橋南遺跡Ⅱ（尾張東部）　主要時期：12～13世紀後半

口縁部破片数

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型		1	387(84)			116(42)						8型式以降:7(1)		510(127)
尾張型		(2)	451(136)			1068(280)						8型式以降:1		1520(416)
合計		1(2)	838(220)			1184(322)						8(1)		2030(543)

㉘内田町遺跡Ｂ区SD03（尾張東部）　主要時期：12～15世紀

	第３型式期	第４型式期		第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期		第８型式期		第９型式期	第10型式期		第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型	1	114(9)		1067(203)		134(13)	78(30)	89(40)	37	30(2)	9	10	44	49(5)	2(1)	5型式:2	777(154)	2443(457)
尾張型		76(2)	1	141(42)		57(11)	316(42)	489(132)	694(64)	53(2)						5型式:52(24)	1391(6)	3270(325)
合計	1	190(11)	1	1453(293)			394(72)	578(172)	731(64)	83(4)	9	10	44	49(5)	2(1)	5型式欄へ合算	2168(160)	5713(782)

㉙内田町遺跡Ｂ区SD01（尾張東部）　主要時期：12～15世紀

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期		第８型式期		第９型式期	第10型式期		第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型		4	43(15)		5(2)	5(5)	20(60)		31(30)	58(24)	76(5)	873(93)	32(8)			1361(21)	2508(263)
尾張型		8(2)	21(16)		9(2)	22(2)	16(7)	123(25)	15	1	1				5型式:9(8)	499	724(62)
合計																	

㉚八王子遺跡（尾張東部）　主要時期：14・15世紀

接合後破片数

	第３型式期		第４型式期		第５a型式期		第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期		第７型式期		第８型式期		第９型式期		第10型式期		第11型式期		その他	時期不明	合計
東濃型								5	(2)		2(1)	9	8(1)		12	7	13(4)	85(21)	19	30(1)	8～10型式:3		232(39)
尾張型	2	2	1	1	23(6)			4(1)	8(1)		12	77(10)	39(4)	284(13)	449(26)	41(1)	284(1)				5～9型式:1,7～9型式:187(1) 10型式以降:10(1),12型式:1	2(1)	1428(65)
合計	2	2	1	1	28(6)			4(1)	8(3)		14(1)	86(10)	47(5)	284(13)	461(26)	48(1)	297(5)	85(21)	19	30(1)	202(2)	2(1)	1660(104)

㉛白坂雲興寺遺跡（尾張東部）　主要時期：14・15世紀

口縁部残存率

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型								(8)	38	112(96)	17(11) 3		15	185(115)
尾張型							3(16)	331(73)	164(69)	17			1(5)	516(163)
合計														

㉜品野西遺跡（尾張東部）　主要時期：15世紀以降

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型										3	45 41(1)		51(5)	140(6)
尾張型														
合計										3	45 41(1)		51(5)	140(6)

㉝岩作城（主要遺構）（尾張東部）　主要時期：13後半～16世紀

接合後破片数

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期		第８型式期		第９型式期	第10型式期		第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型	11								56	116	26	38	144	60		467	918
尾張型	17						86	1174	166			51				7	1501
合計	28						86	1174	222	116	26	38	195	60		474	2419

㉞畑間遺跡（尾張東部）　主要時期：12～15世紀

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型								3	52					55
尾張型	79		51			96	193	58	3			瀬戸窯産:6型式11 7型式:64(内数)		480
湿美・湖西型	1													1
合計	80		51			96	193	61	3	52				536

㉟下内橋遺跡（尾張東部）　主要時期：12～13世紀

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型							1		1					2
尾張型	32		34			84	79	19				瀬戸窯産:6型式4 7型式19(内数)		99
合計	32		34			84	80	19	1					101

㊱ウスガイト遺跡（尾張東部）　主要時期：12～13世紀

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型						1			1					2
尾張型	187		389			865	274	19(瀬)	5(瀬)			瀬戸窯産:7型式4(内数)		1739
濃美・湖西型	15		7			5								27
合計	202		396			871	274	19(瀬)	5(瀬)	1				1768

㊲千音寺遺跡（尾張西部）　主要時期：12～13世紀

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型						1	1	1						3
尾張型	105		75			61	28	10				瀬戸窯産:6型式2 7型式1(内数)		279
濃美・湖西型	1					1								2
合計	106		75			63	29	11						284

㊳馬引横手遺跡（尾張西部）　主要時期：14中葉～15世紀　　接合後破片数

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型						3	74	250	144	102	98 23			694
尾張型					1			2						3
合計					1	3	74	252	144	102	98 23			697

㊴清洲城下町遺跡Ⅷ（尾張西部）　主要時期：15・16世紀　　接合後破片数

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型		4	10(3)		7(1)	3(6)	17(16)	11(4)	19(3)	25(1)	48 30(1)	6型式以前:5 7～9型式:63	(28)	242(63)
尾張型		3				6 2 1			(2)	(2)		7～9型式:(1)	5(1)	17(5)
合計		4 3	10(3)		7(1)	6 5(6) 1	17(16)	11(4)	19(3) (2)	27(3)	48 30(1)	68(1)	5(29)	259(68)

㊵杉の木平(A)遺跡（信濃南部）　主要時期：12世紀後半～15世紀前半　　底部破片数

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型		3	8(10)		8(13)	48(28)	30	21	11	14	1(5) 2(1)	7～9型式:(14)	7(11)	153(82)
尾張型		2(1)	7			1	3							13(1)
合計		5(1)	23(23)			49(28)	33	21	11	14	1(5) 2(1)	(14)	7(11)	166(83)

㊶日影平遺跡（信濃南部）　主要時期：12～13世紀　　接合後破片数

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型			2		3	9(2)	3			1				18(2)
濃美・湖西型			2											2
合計			7			9(2)	3			1				20(2)

㊷：橋良遺跡（三河東部）　主要時期：12～13世紀

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型							3		1					4
尾張型	3		2			14	11	3				瀬戸窯産:7型式1(内数)		33
濃美･湖西型	25		27			95	32	5						184
合計	28		29			109	46	8	1					221

㊸：荒玉社周辺遺跡（信濃中部）　主要時期：14・15世紀　　接合前破片数

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型							(1)	7	9	16(3)	6		35	73(4)
尾張型														
合計							(1)	7	9	16(3)	6		35	73(4)

㊹：東篠遺跡（信濃北部）　主要時期：12～13世紀　　接合前破片数

	第３型式期	第４型式期	第５a型式期	第５b型式期	第５c･d型式期	第６型式期	第７型式期	第８型式期	第９型式期	第10型式期	第11型式期	その他	時期不明	合計
東濃型			2		1	5(1)						5型式:(1)	33(8)	41(10)
尾張型														
合計			3(1)			5(1)						5型式欄へ合算	33(8)	41(10)

に流通量が増加し、後半にかけてはやや減少するが大きな変化はみられない。

⑦長野県南部地域（第 37 表㊶・㊷）

第４型式期には杉の木平（Ａ）遺跡で東濃型と尾張型がわずかに確認される[註26]。第５型式期には杉の木平（Ａ）遺跡に加え日影平遺跡でも流通が認められ、前者は東濃型が主体で尾張型が一定量、後者は東濃型が主体で渥美・湖西型が少量搬入されている。第６型式期は、杉の木平（Ａ）遺跡・日影平遺跡とも東濃型が独占的に流通している。第７型式期は両遺跡とも第６型式期と大きな変化はみられないが、流通量はやや減少傾向にある。第８型式期には日影平遺跡で山茶碗流通がみられなくなり、杉の木平（Ａ）遺跡では第 10 型式期まで東濃型山茶碗が一定量搬入されるが、第 11 型式期にはほとんどみられなくなる。

第３節　東濃型山茶碗の流通圏

ここまで各地域における山茶碗の流通状況を整理してきたが、本節では東濃型山茶碗の流通圏を設定し尾張型の主要流通圏と比較していく。流通圏については東濃型が独占的ないし主体的に流通する遺跡の分布範囲を主要流通圏とし、尾張型が主体を占め東濃型が客体的に搬入される遺跡及び東濃型のみが少量流通する遺跡の分布範囲を２次流通圏、前者は同時に尾張型の主要流通圏と捉えることとする。

（１）第３・４型式期（第 34 図上段）

当該期の東濃型は流通量が少なく、東濃地域のうち生産地周辺の狭い範囲を主要流通圏とし、中濃地域・西濃地域東部・尾張地域北部が２次流通圏に含まれる。対する尾張型は、尾張地域全域・三河地域西部・東濃地域（西部を除く）・中濃地域・西濃地域・伊勢北中部地域などの広い範囲を主要流通圏としている。

（２）第５型式期（第 34 図下段）

東濃型は流通量が増加し、主要流通圏も東濃地域全域と中濃地域の東端部・飛騨地域南端部・信濃地域南西部・尾張東部北東部へと拡大し、中濃地域・西濃地域東部・尾張地域北部が２次流通圏に含まれる。尾張型の主要流通圏は、尾張地域北東部を除く全域・三河地域西部、東端部を除く中濃地域・西濃地域・伊勢地域北中部となり、主要流通圏を拡大させる東濃型に対してその範囲を縮小させている。

（３）第６型式期（第 35 図上段）

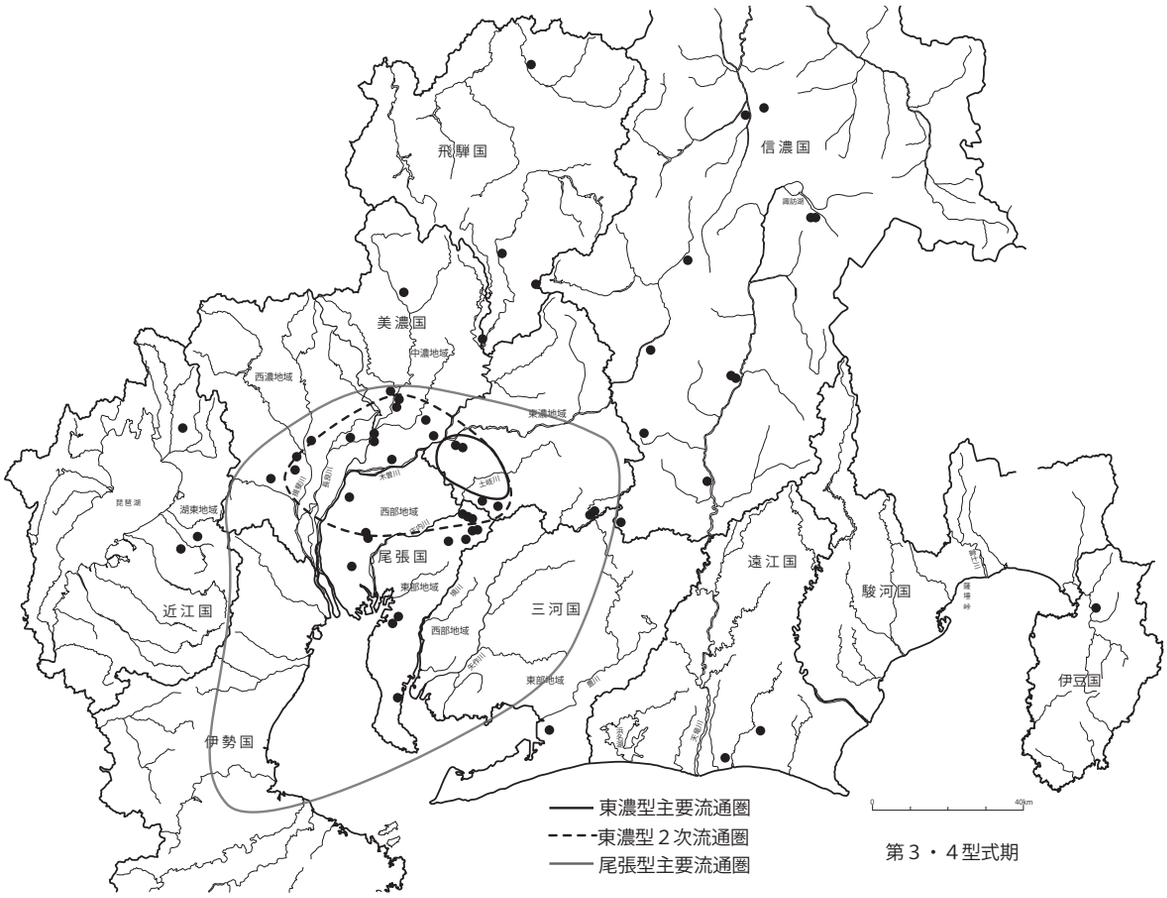
東濃型は、渥美・湖西型が主体となる南東端部を除く東濃地域全域と飛騨地域南端部・信濃南西端部は引き続き主要流通圏に含まれる。中濃地域においては北西方向に主要流通圏を拡大し、中濃地域西部・尾張北東部は２次流通圏に含まれる。尾張型は、尾張地域全域・三河地域西部・中濃地域西部・西濃地域・伊勢地域北中部を主要流通圏とし、尾張北東部において主要流通圏拡大している。

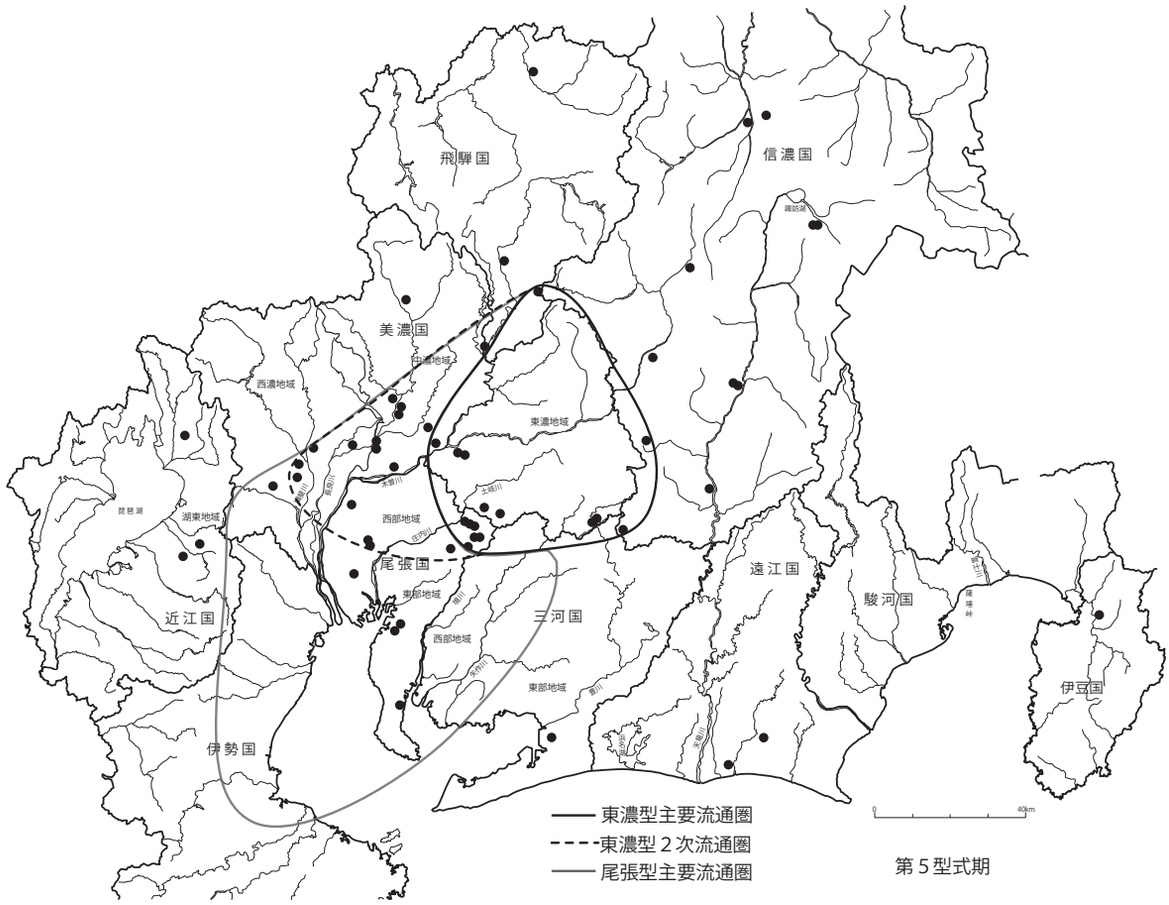
（４）第７型式期（第 35 図下段）

東濃型は、東濃地域全域・中濃地域全域・西濃地域東端部・飛騨地域南端部・信濃南西端部・尾張西部地域北部を主要流通圏としている。尾張型は、尾張東部地域・尾張西部地域南部・三河地域西部を主要流通圏とし、その範囲を大幅に縮小させる。

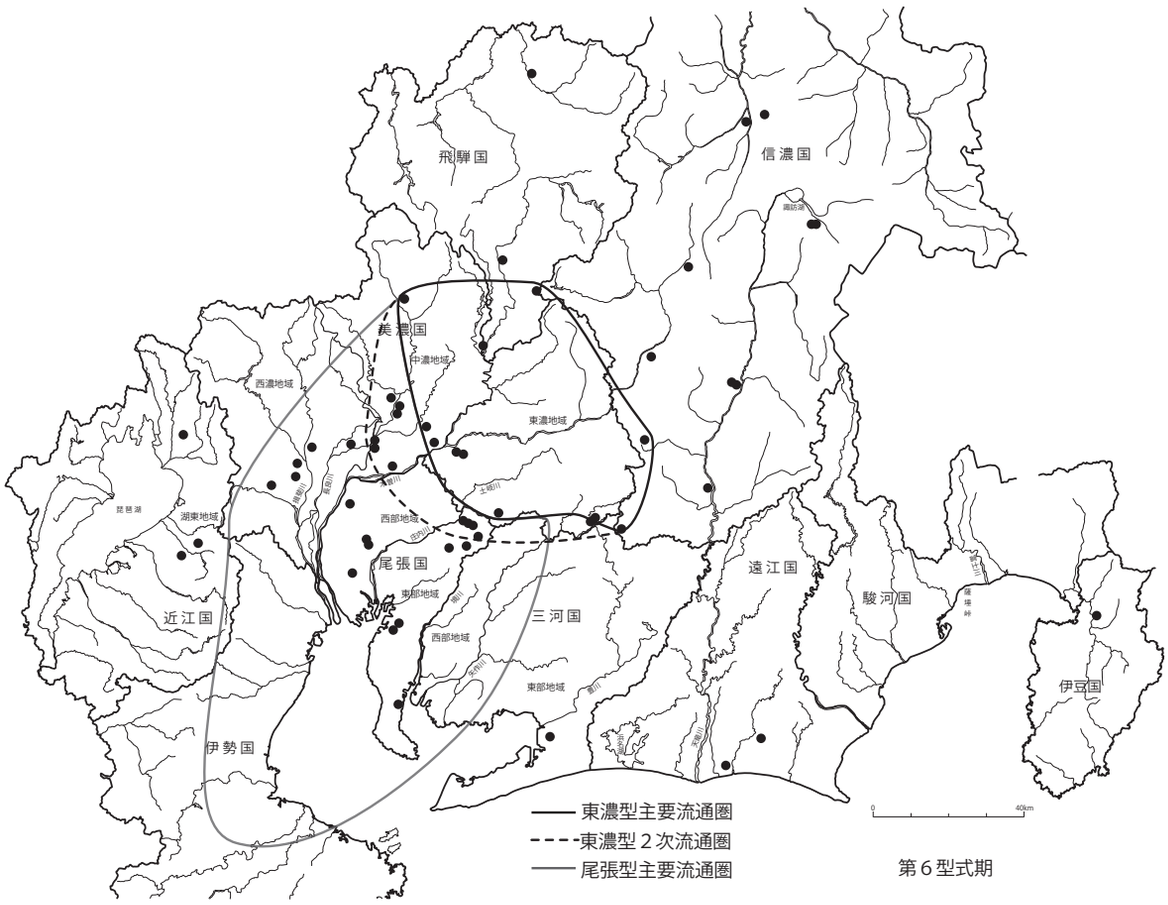
（５）第８型式期（第 36 図上段）

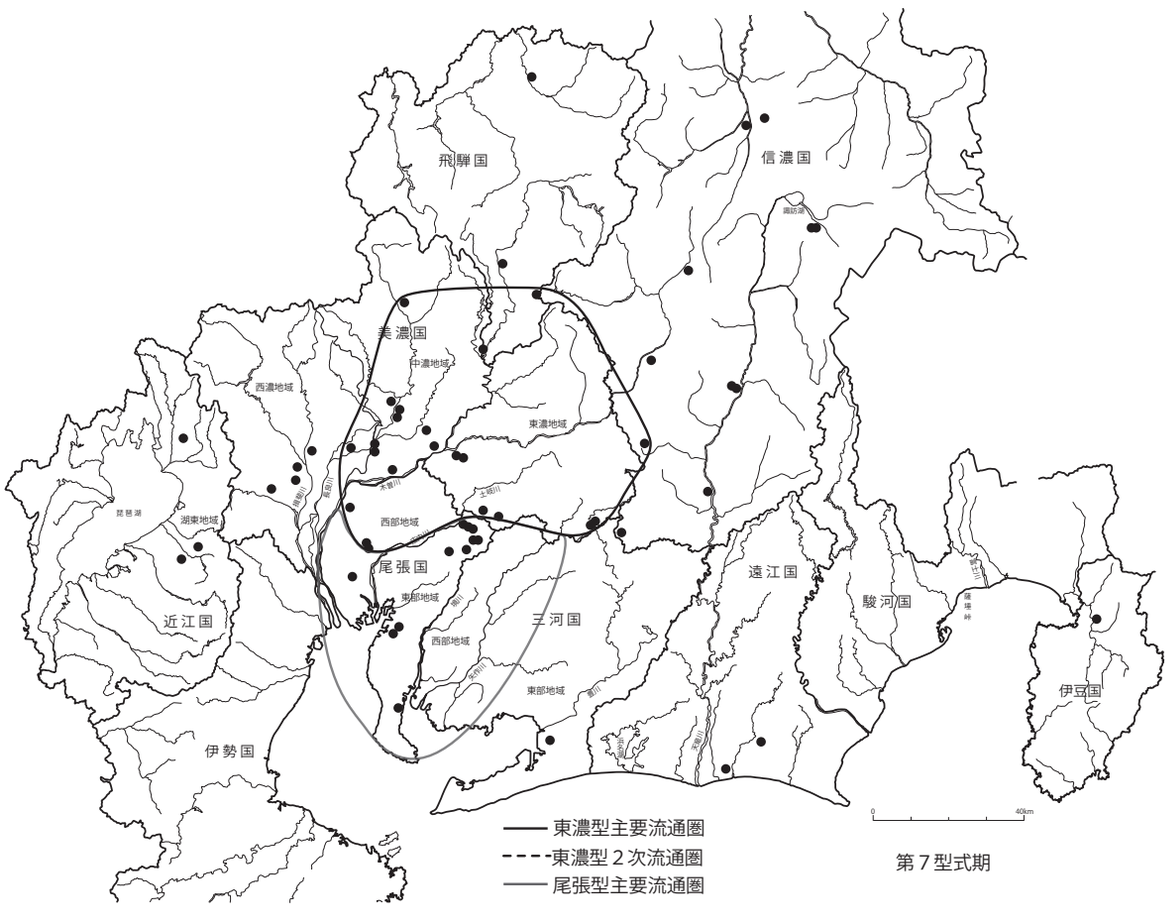
東濃型は、東濃地域全域・中濃地域全域・西濃地域東部・飛騨地域南端部・信濃地域南西端部・尾張地域北部を主要流通圏とし、西濃地域西部・尾張北東部が２次流通圏に含まれる。尾張型は、尾張地域南部と三河地域西部を主要流通圏とし、その範囲をさらに縮小させている。東濃型の主要流通圏は第７型式期と大きな変化はみられないが、尾張西部の北側地域に位置する遺跡では東濃型が独占的に流通しており、瀬戸窯を擁する瀬戸市に位置する遺跡でも、当該期には東濃型が主体となる遺跡が確実に存在する。



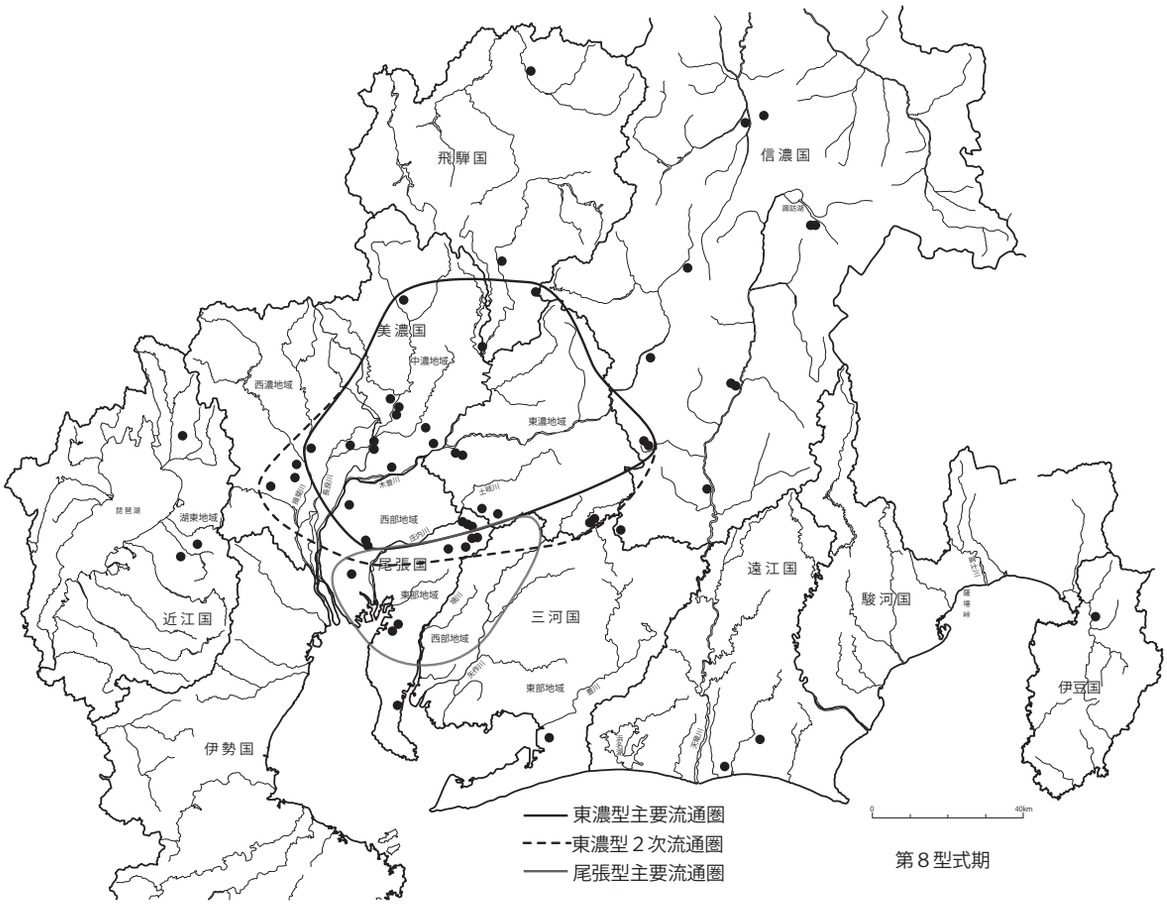


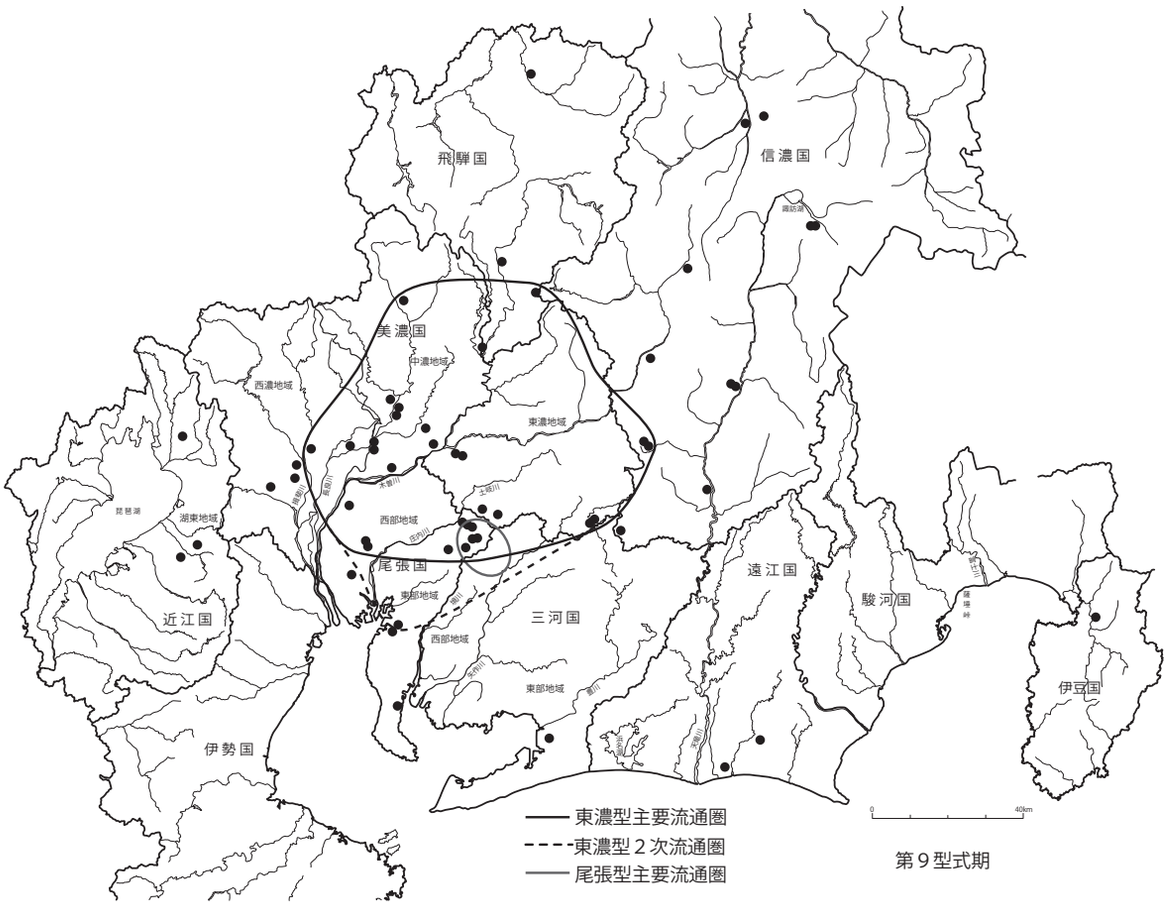
第 34 図　東濃型山茶碗流通圏想定図（1）



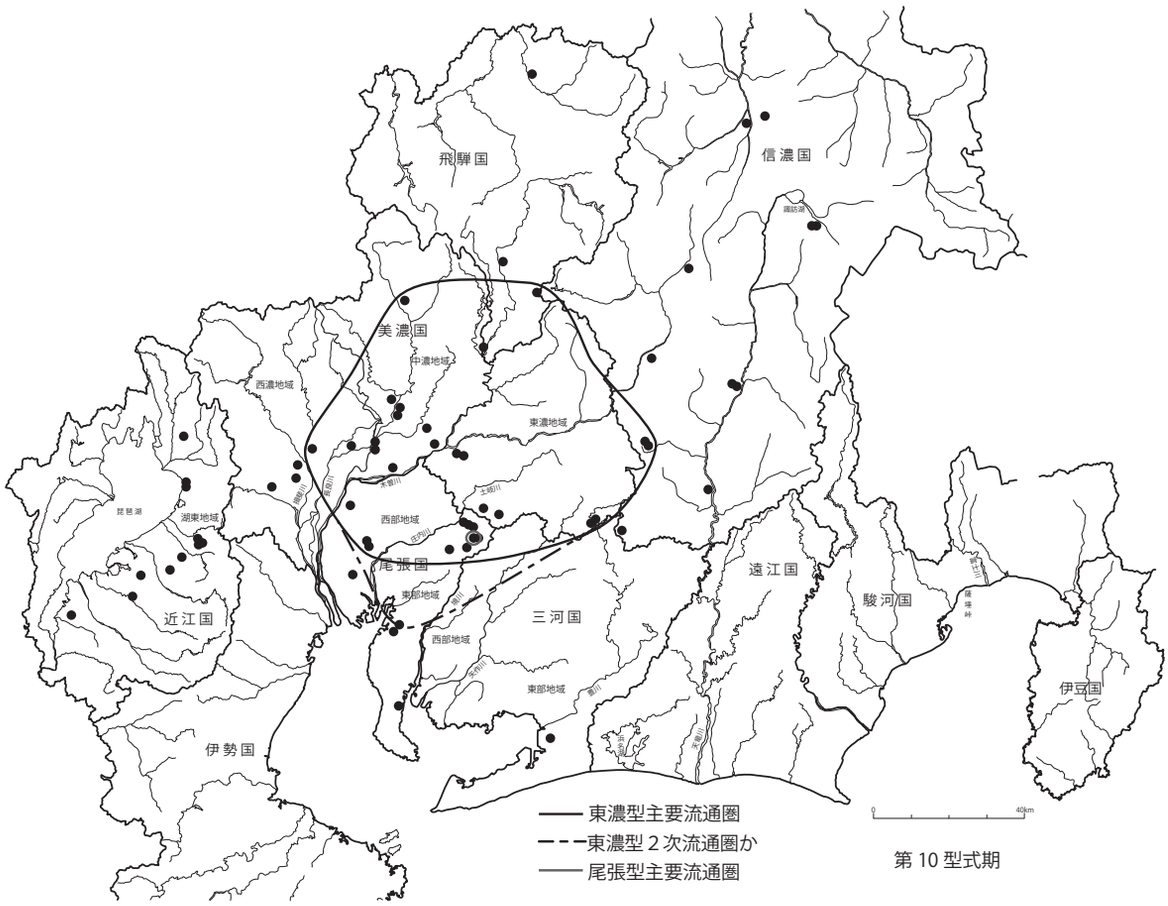


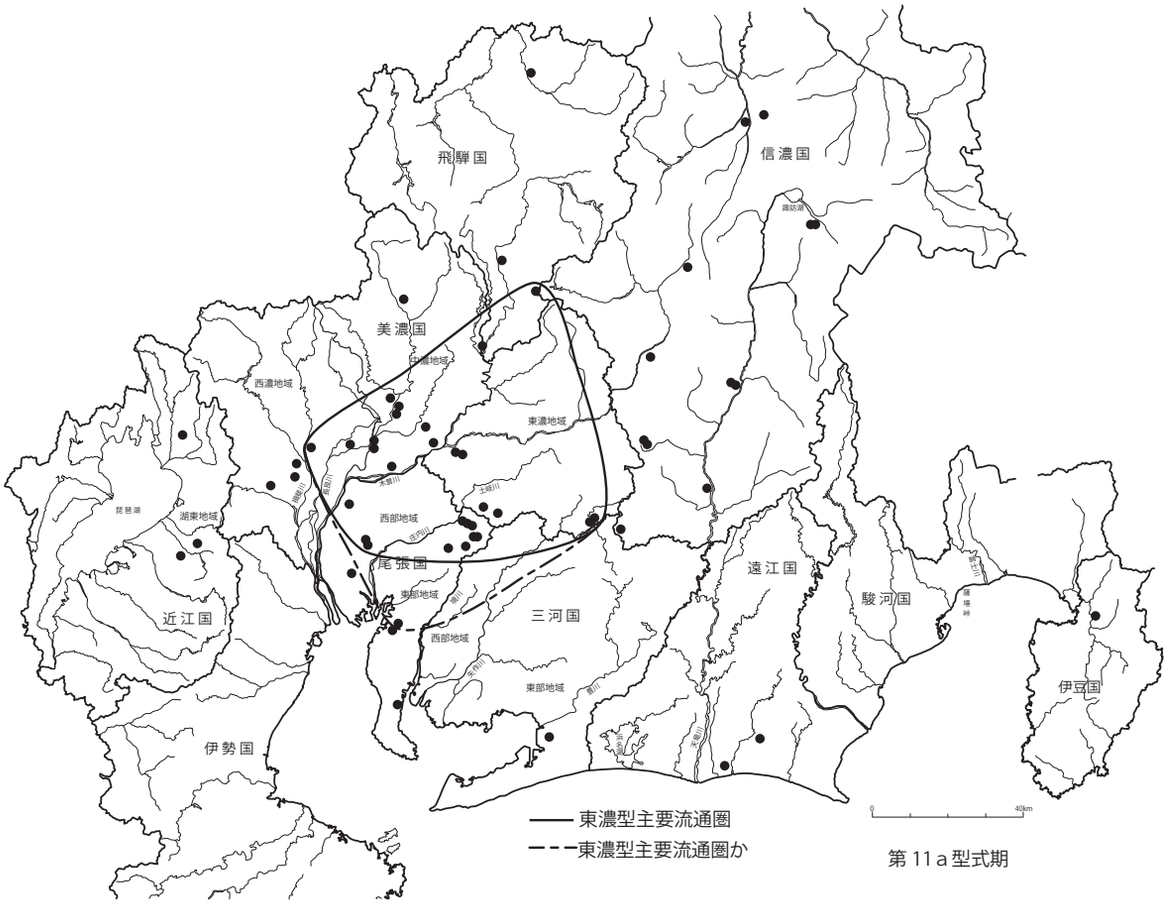
第 35 図　東濃型山茶碗流通圏想定図（2）



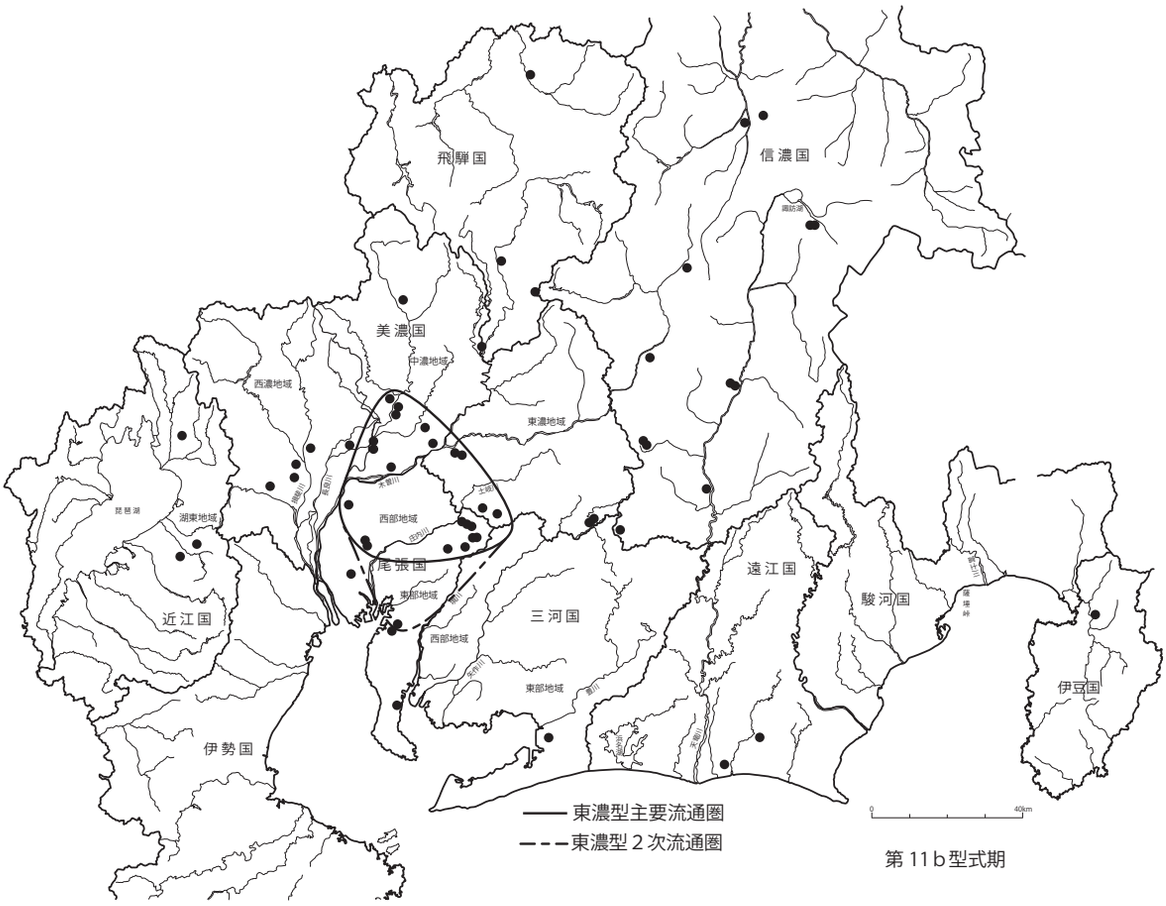


第 36 図　東濃型山茶碗流通圏想定図（3）





第 37 図　東濃型山茶碗流通圏想定図（4）



第 38 図　東濃型山茶碗流通圏想定図（５）

（６）第９型式期（第 36 図下段）

東濃型は、東濃地域全域・中濃地域全域・西濃地域東部・飛騨地域南端部・信濃地域南西端部・尾張北東部を主要流通圏とする。当該期の東濃型の主要流通圏に大きな変化はみられないが、尾張型は主要流通圏を大幅に縮小させ、生産地周辺のみとなっている。

（７）第 10 型式期（第 37 図上段）

東濃型は第９型式期と大きな変化はみられず、東濃地域全域・中濃地域全域・西濃地域東部・飛騨地域南端部・信濃地域南西端部・尾張北東部を主要流通圏とする。一方尾張型は八王子遺跡で主体的に認められるのみで、すべての遺跡で東濃型が独占的に流通している。

（８）第 11 型式期（第 37 図下段・第 38 図）

当該期の山茶碗は、第 11 ｂ型式期には供膳具としての機能を失っている可能性が高いことから、第 11 ａ型式期と区別して考察したい。第 11 ａ型式期の主要流通圏は中濃地域北西部と信濃地域南西端部が除外され、東濃地域全域・中濃地域南部・西濃地域東部・飛騨地域南端部・尾張地域北部となり、やや縮小傾向にあるもののある程度の範囲を保っている（第 37 図下段）。また、八王子遺跡でも尾張型が全く認められなくなることから、尾張型の主要流通圏は当該期には完全に失われるようだ。

第 11 ｂ型式期になると、東濃型の主要流通圏も大幅に縮小し、生産地である東濃地域西部のほか、中濃地域南部・尾張地域北部で主体的に流通しているが、全体の流通量は減少している（第 38 図）。

第４節　東濃型山茶碗の流通経路

東濃型山茶碗の流通経路については、専ら陸路を利用したとする藤澤氏の論と、陸路に加えて河川の水運を利用したとする小野木氏の論があるのは先に記したとおりであるが（藤澤 1994・小野木 2003）、東山道など主要街道や木曽三川の周辺に立地する遺跡の状況から、特に具体的な検証を行なっている小野木氏の流通ルートを中心に検証していく。

（１）東濃型流通圏内における各中世遺跡の立地と拠点的集落（第 39 図・第 38 ～ 43 表）

東山道周辺に立地する遺跡は、東濃地域では柿田遺跡・上恵土城跡・浦畑遺跡、中濃地域では仲迫間遺跡・広畑野口遺跡、西濃地域では政田仙道上遺跡・興福地遺跡・大垣城・城下町遺跡が挙げられる。また、岐阜市内で飛騨方面へ分岐する東山道飛騨支路周辺に立地する遺跡は、東濃地域では下切遺跡、中濃地域では芥見町屋遺跡・岩田西遺跡・岩田東Ａ遺跡・中屋敷遺跡が挙げられる。

中濃地域の重竹遺跡は、付近に白山信仰における聖地とされる神光寺が存在し、白山信仰の長瀧寺へ続く禅定道の玄関口とされ、中濃地域の交通・文化の中心地であったという（長谷川 2005）。周辺には下巾上遺跡が所在する。

川湊との関連が指摘される遺跡として中濃地域の広畑野口遺跡・芥見町屋遺跡・岩田西遺跡・岩田東Ａ遺跡・中屋敷遺跡、西濃地域の興福地遺跡・室原東遺跡が挙げられる。広畑野口遺跡は木曽川の鵜沼湊周辺に立地する。芥見町屋遺跡・岩田西遺跡・岩田東Ａ遺跡・中屋敷遺跡は先述のように長良川の水運との関係が指摘される。興福地遺跡と室原東遺跡は揖斐川沿いに立地し、室原東遺跡は伊勢湾から揖斐川を利用し不破郡へ向かう交通の要衝とされている（中島 2007）。飛騨地域の大威徳寺遺跡は美濃と飛騨を結ぶ南北街道周辺に立地している。また、愛知県一宮市の馬引横手遺跡は、木曽川支流の日光川沿いに立地し、「市町」が想定され、木曽川支流の日光川の水運によって発展したという（伊藤 1999）。

以上の遺跡のうち、交通の要衝に位置し山茶碗以外のかわらけや中国陶磁・古瀬戸などの比率が比較的高い遺跡、有力者の存在が指摘される遺跡、１㎡あたりの遺物出土量が多い遺跡などを拠点的集落[註27]として捉え、溶着資料や焼け割れた山茶碗・蓋などが出土する遺跡は生産地との直接的な関連が指摘されるものと考える。

①拠点的集落としての役割が想定される集落遺跡

柿田遺跡・顔戸南遺跡は中世前期に条里制集落が築かれ、中国陶磁や仏具が多く出土し、かわらけも少量ではあるが屋敷地の一角からまとまって出土していることから、有力者の存在が指摘されている（小野木 2000・2005）。

岩田西遺跡・岩田東Ａ遺跡・中屋敷遺跡は中世後期の居館・屋敷地・水田などが確認されており、古瀬戸や中国陶磁も比較的多くみられるほか、擬漢式鏡や儀礼用漆器などが出土している。このことから、有力な地域開発領主か神社関係者及び水田を経営した中小有力層の居住域と考えられている。長良川を挟んだ対岸には「古津」という地名が存在することからこの周辺が東山道飛騨支路の分岐点であり、東山道の陸運と長良川の水運がこれらの有力者によって管理されていた可能性が指摘されている（近藤 2013）。

また、近隣の遺跡である芥見町屋遺跡は、長良川の中州に立地し物流・旅客輸送の拠点とされており（三輪 2012）、１㎡あたりの遺物出土量が 8.2 点と他の遺跡より多く、中国陶磁も 83 点とやや多く出土している。

重竹遺跡は、先述のように長瀧寺へ至る禅定道の重要な拠点であることに加え、鎌倉末期には刀鍛冶が増え鍛治屋敷が築かれることなどから、中濃地域の交通・文化の中心地とされている（長谷川 2005）。また、重竹遺跡の近隣には下巾上遺跡が所在し、付近に白髭神社が存在すること、まとまった

量のかわらけや朱塗りの山茶碗が出土することなどから宗教的な性質をもつ集落と想定されている（小野木 1995）。

また、養老町の室原東遺跡では表面採集でありながら確認された山茶碗は 1300 点にのぼり、硯なども採集されることから有力者の存在が指摘されている（中島 2007）。

これらの遺跡は交通の要衝に位置していることに加え、有力者の存在が指摘されるか、通常の中世遺跡より中国陶磁などの出土比率が高いなどの要素を備えていることから、人や物が集まる拠点的集落の条件を満たすものと考えられる。

②生産地との関わりが想定される集落遺跡

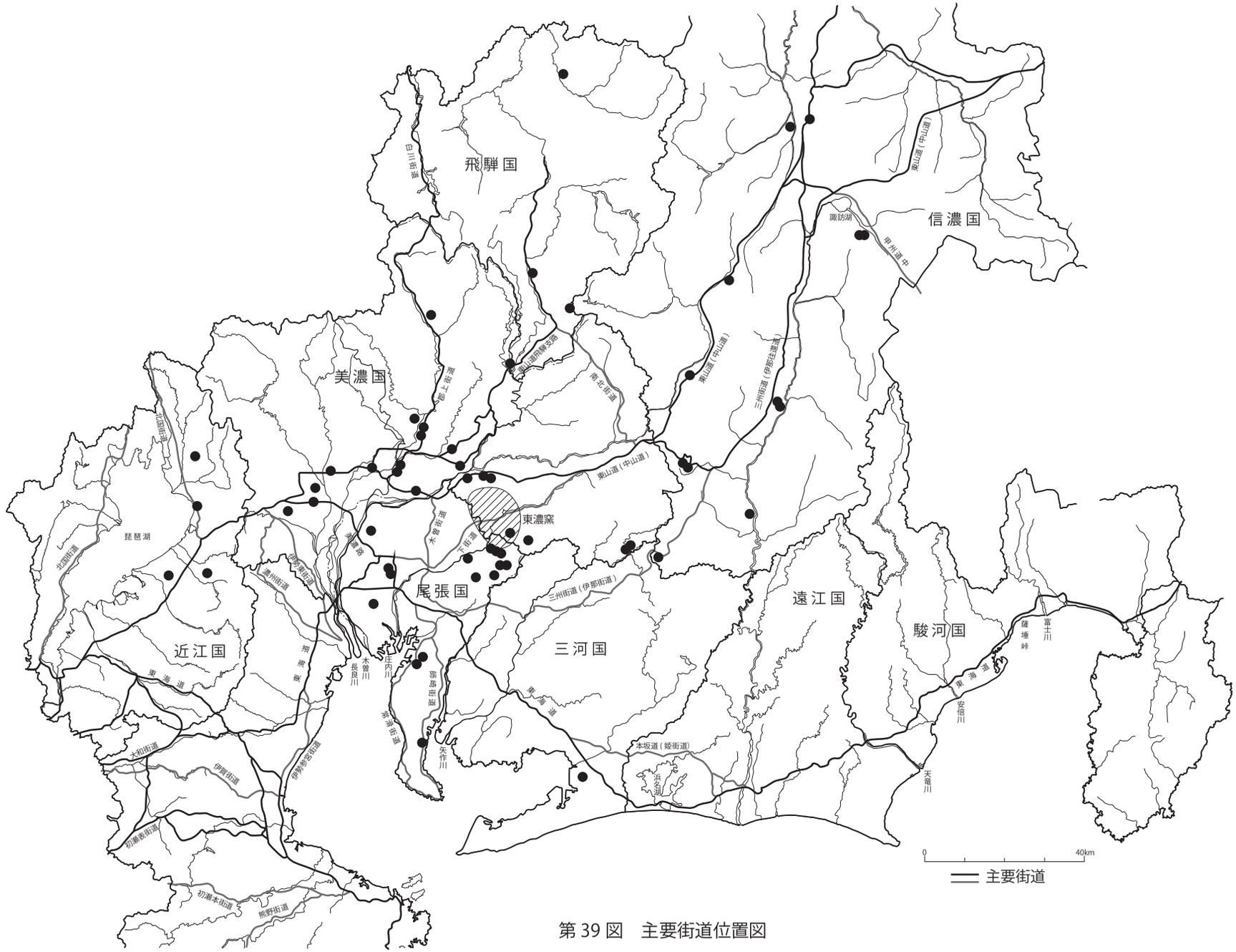
東濃地域の柿田遺跡や浦畑遺跡、中濃地域の重竹遺跡では山茶碗の蓋や第９型式期までの無高台碗[註28]が出土しており、柿田遺跡では冷め割れや降灰などの不良品や尾張型小皿の溶着資料が出土している。山茶碗の蓋や無高台碗は生産地周辺の東濃地域の野中遺跡・喜多町東遺跡・妻木平遺跡で、冷め割れや降灰などの不良品は野中遺跡で確認されており、これらは基本的に生産地周辺の遺跡にしか流通しないものと考えられる。したがって、東濃窯の周辺に立地する妻木平遺跡・柿田遺跡・重竹遺跡は生産地と直接関わりのあるものと判断でき、特に柿田遺跡では生産者が直接製品を搬入し選別作業を行った可能性が高い（小野木 2003・柴垣 2008）。なお、尾張型の主要流通圏に含まれる西濃地域の室原東遺跡では焼台が溶着した常滑窯産の甕が採集されており、常滑窯との直接的な関わりが指摘されている（中島 2007）。

（２）東濃型山茶碗の流通経路

岐阜県内の東山道周辺に立地するほとんどの遺跡で東濃型が出土している。製品は東濃窯から出荷され、生産地との関係が窺われる柿田遺跡・顔戸南遺跡が分布する可児市北西部付近から東山道に乗り、道中で消費されながら近江地方や信濃地方など東西方向に流通したものとみられる。また、飛騨方面については、岩田西遺跡・岩田東Ａ遺跡・中屋敷遺跡・芥見町屋遺跡周辺で東山道から分岐する東山道飛騨支路が利用されたものであると考えられる[註29]。また、中濃地域の重竹遺跡・下巾上遺跡付近には鎌倉時代から利用され始めたとされる郡上街道が郡上方面に向かって北上している（角川 1980）。東氏館もこの街道沿いに位置しており、東山道から郡上街道に入り北上したものとみて良いだろう[註30]。

なお、第６型式期まで尾張型の主要流通圏に含まれる西濃地域と伊勢地域では、第７型式期に尾張型の生産地が瀬戸窯へ移るタイミングで山茶碗の流通がみられなくなる。このことから、これらの地域には基本的に猿投窯・常滑窯の製品が伊勢湾や揖斐川の水運によってもたらされたものと想定される。

小野木氏が経路②とした、可児市周辺から木曽川を下り各務原市鵜沼付近から岐阜市へ至るルートは、藤澤氏の指摘通り（藤澤 1994）、木曽川の水運を利用していたとすれば尾張西部地域や伊勢地域・西濃地域にもっと搬入されても良さそうだが、伊勢地域・西濃地域にはほとんど流通しておらず尾張西部地域でも第６型式期までの流通量は少ない。木曽川の水運は東濃型山茶碗の主たる流通経路として利用された可能性は低いといえる。また経路③とした、可児市周辺から美濃加茂市を北上して関・美濃市へ運ばれ、長良川を下って岐阜市へ至るルートは、先述の郡上街道が長良川と沿うように北上していることから、どちらを利用したかは判断がつかない。しかし、木曽川と同様に下流の伊勢地域や尾張西部地域にほとんど搬入されていないことを鑑みれば、長良川の水運が主たる流通経路として利用されたとは考えにくく、東濃型山茶碗は東山道を主要なルートとして専ら陸路で運搬されたことは疑いようがない[註31]。



第 39 図　主要街道位置図

第 38 表　遺跡別器種組成表（1）

遺跡名		東濃地域										
		野中遺跡第5次	喜多町東第4次	喜多町東第5次	平田	妻木平	柿田	顔戸南	上恵土城	浦畑	道下	水辺
土器類	かわらけ	0	877	0	0	2	964	ロクロ144	325.2	666.2	0	0
	鍋釜類	0	0	0	0	伊勢鍋12,内耳鍋2	伊勢鍋含119	伊勢鍋2,内耳鍋3,羽釜2	0	0	羽釜1	羽釜2
	その他	0	奈良火鉢1	0	0	0	0	瓦質火舎あり	0	0	0	0
	小計	0	877	0	0	16	1083	151	991.4	666.2	1	2
山茶碗類	東濃型	6616	2184	507	359	701	7724.2	碗:5368,小碗:10	430	1429.2	603	77
	尾張型	あり	2	0	109	400	791.5	小皿:1201	0	0	0	0
	その他	0	0	山茶碗1817	0	美濃須衛碗類19 渥美碗類3	美濃須衛あり	0	0	0	渥美613	0
	小計	6616	2186	2328	468	1142	8761.7	6579	430	1429.2	1247	79
その他中世美濃国産製品		四耳壺C類	0	0		東濃1,美濃須衛1	0	0	0	0	0	0
片口鉢Ⅰ類		東濃・尾張あり	尾張あり	東濃2,尾張2	尾張あり	東濃2,尾張17	246	鉢23	あり	あり	渥美11,尾張7,中津川13	渥美1,中津川1
古瀬戸	擂鉢	あり	あり	0	あり	あり	あり	45	あり	あり	12	3
	古瀬戸	142	195	15	71	124	351	245	69.7	297.6	34	15
	その他						0		内耳鍋・仏餉具あり	内耳鍋・仏餉具あり		
	小計	142	195	15	71	124	351	290	69.7	297.6	46	18
焼締壺甕類	常滑系	31	13	2		25	50	甕7	23.3	39.5	42	7
	その他	0	0	0		0	0	0	0	0	渥美68	0
	小計	31	14	2		27	50	7	23.3	39.5	110	7
中国陶磁		1	1	2	11	28	181	56	あり	あり	17	0
合計		6791	3273	2347	550	1437	10426.7	7054	1,839.6	2432.5	1409	103
備考		陶丸・山茶碗蓋	山茶碗蓋・無高台碗	陶丸・無高台碗		山茶碗蓋・匣鉢・陶丸	山茶碗蓋・無高台碗・入子・墨書土器多数	墨書土器多数		山茶碗蓋・無高台碗		
調査面積(㎡)		940	200	135	1,000	6,026	51,812	5,000	1,685	6,225		
1㎡あたりの出土量		7.6	16.2	17.4	0.6	0.2	0.2	1.4	1.1	0.4		
カウント		接合後	接合後	接合後	接合後	最小個体数	口縁部破片	口縁部破片数	山茶碗:底部残存率 他:口縁部残存率	山茶碗:底部残存率 他:口縁部残存率	接合前	
性格		集落	集落	集落	集落	集落	集落	集落	城館・集落	集落	集落	
主要時期		13～15世紀	15世紀	14～15世紀	13・14世紀	12～15世紀	12～15世紀	12～13前半	14～16世紀	13～16世紀	12～16世紀	
近接する街道・河川		大原川 (土岐川支流)	大原川 (土岐川支流)	大原川 (土岐川支流)	土岐川	妻木川 (土岐川支流)	東山道(中山道) 可児川(木曽川支流)	東山道(中山道) 可児川(木曽川支流)	東山道 木曽川	東山道 木曽川		
典拠		山内2003	山内2006	山内2006	山内1997	中嶌・森2018	小野木ほか2005	小野木ほか2000	鵜飼ほか2006	鵜飼ほか2006	実見データ	実見データ

第 39 表　遺跡別器種組成表（2）

遺跡名		中濃地域										
		広畑野口	岩田西	岩田東Ａ	中屋敷	芥見町屋	牧野小山	一本杉・茶屋下・改田	重竹(B地点)	下巾上(遺構出土分)	野笹遺跡	八龍B地区
土器類	かわらけ	259	31	260	788	2,258	ロクロ1.4,手づくね8.8	58	6803	232	1105	29
	鍋釜類	28	0	0	0	0	0	0	0	28	16	0
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	287	31	260	788	2258	9.2	58	6803	260	1121	29
山茶碗類	東濃型	1180	170	38	447	2208	469.1	12・13世紀:東・尾51 14・15世紀:東322	18175 美濃須衛産碗含む	932	23730	162
	尾張型	10	132	12	39	24				0		
	その他	0	美濃須衛6	0	0	美濃須衛15	0	0		0	0	0
	小計	1201	317	50	514	2283	469.1	371	18175	932	23730	162
その他中世美濃国産製品		0	0	0	0	0	0	0	美濃須衛産四耳壺・水注・広口瓶・甕あり	0	0	0
片口鉢Ⅰ類		11+鉢4	尾張9	0	尾張28	東濃2,尾張34	3	尾張あり	東濃・尾張あり	擂鉢含む54	あり	東濃・尾張あり
古瀬戸	擂鉢	あり	10	1	67	47	0	0	265	あり	あり	0
	古瀬戸	404	73	4	263	471.7	44.7	18	1167	153	中近世3905	陶器58
	その他	仏餉具・内耳鍋あり							内耳鍋・仏餉具あり			
	小計	404	83	5	330	518.7	44.7	18	1432	153	3905	58
焼締壺甕類	常滑系	6	6	0	31	310	3.2	5	787	213	あり	0
	その他	0	0	0	0	0	0	0	信楽44	信楽42	0	0
	小計	6	6	0	31	310	3.2	5	831	255	あり	0
中国陶磁		5	131	4	19	83	1.1	4	294	6	あり	磁器:11
合計		2030	586	324	1675	5585.8	531.3	456	27535	1660	28756	260
備考									無高台碗・入子			墨書山茶碗
調査面積(㎡)		4,237	14,067	2,148	898	681.54	490	2,000	12,900	2,200	7,500	1,100
1㎡あたりの出土量		0.5	0.04	0.2	0.5	0.1	0.9	0.2	2.1	1.3	0.3	0.2
カウント		接合前	接合後	接合後	接合後	接合後	口縁部残存率	破片数	接合後	口縁部破片数	破片数	破片数
性格		集落	集落・水田	集落	集落	集落	集落	散布地	集落	集落	集落	集落
主要時期		14・15世紀	16・17世紀	16世紀	14～17世紀	13～15世紀	15世紀	14・15世紀	12～15世紀	14・15世紀	12～15世紀	12後半～13世紀初
近接する街道・河川		木曽川(鵜沼湊)	東山道飛騨支路・長良川	東山道飛騨支路・長良川	東山道飛騨支路・長良川	長良川(中州上)	木曽川・飛騨川	長良川	長良川	長良川	木曽川	木曽川
典拠		近藤2010	近藤・小林2013	近藤・北村2011	小野木2011	三輪2012	近藤・野々田2012	近藤2004	長谷川ほか2005	小野木1995	千藤2000	西村1993

第 40 表　遺跡別器種組成表（3）

遺跡名		西濃地域										飛騨地域		
		政田仙道上	興福地	大垣城・城下町	南整理遺跡	日吉	室原東	仲田	下笠	柏尾廃寺	鷲巣東	下切	桜洞城	江馬下館
土器類	かわらけ	6974	164	近世含む347	423.8	土師器62	土師器60	土師器162	土師器56	土師器12	土師器4	4	土師器1418	1969
	鍋釜類	206	伊勢型鍋136	伊勢型鍋・羽釜14	3.4							0		0
	その他	0	0	0	瓦質土器2.8	0	0	0	0	0	0	0	0	瓦質製品195
	小計	7180	300	361	429.8	62	60	162	56	12	4	4	1418	2164
山茶碗類	東濃型	284	284	24	6.6	434	1300	134	18	110	43	811	10	18
	尾張型	148	147	73	297.5							118	0	7
	その他	0	濃須衛片口小瓶1	美濃須衛1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	437	440	101	304.1	434	1300	134	18	0	43	937	10	25
その他中世美濃国産製品		0	0	0	0	0	0	0	0	美濃須衛壺あり	0	0	0	0
片口鉢Ⅰ類		尾張5	尾張7,美濃須衛1	尾張3	7	0	0	0	0	あり	0	尾張8	中津川1	0
古瀬戸	擂鉢				3.2	0	0	0	0	あり	0	5	69	142
	古瀬戸	23	9	18	48.5	26	10	0	7	439	0	22		753
	その他													
	小計	23	9	18	51.7	26	10	0	7	439	0	27	69	895
焼締壺甕類	常滑系	甕352,片口鉢5	15	甕22,片口鉢1	壺甕:12.3,鉢:3.75	瓷器系陶器:24	甕・片口鉢Ⅱ類あり	瓷器系陶器:6	瓷器系陶器:3	瓷器系陶器:607	0	17	12	常滑か越前23
														珠洲甕303
	その他	0	0	0	0	0	瓷器系陶器:84	0	0	0	0	珠洲系:1,信楽:1	中津川6	珠洲片口鉢120
														八尾83
	小計	357	15	23	16.05	24	84	6	3	607	0	19	18	409
中国陶磁		52	中世陶器42	133	30.3	2	9	1	0	15	0	14	109	302
合計		8049	1628	636	839.25	548	1463	310	84	1183	47	1009	1625	3915
備考							焼台溶着資料あり							
調査面積(㎡)		2478.7	583	317	2,900	採集	採集	採集	採集	採集	採集	3,170		
1㎡あたりの出土量		3.2	2.8	2.0	0.3	−	−	−	−	−	−	0.3		
カウント		接合後	接合後	接合後	口縁部残存率	破片数	破片数	破片数	破片数	破片数	破片数	接合後	破片数	破片数
性格		集落	集落	城館	集落	集落	集落	集落	集落	寺院	集落	集落	城館	城館
主要時期		14・15世紀	12・13世紀	15・16世紀	12～15世紀	12世紀	12・13世紀初	12後半～13世紀	12・13世紀前	12・13世紀前	12・13世紀前	13世紀	15・16世紀	13～16世紀
近接する街道・河川		東山道・揖斐川	東山道・揖斐川	東山道・揖斐川	東山道(中山道)	揖斐川	揖斐川	揖斐川	揖斐川	揖斐川	揖斐川	東山道飛騨支路 飛騨川		
典拠		佐竹2019	近藤2015	三輪・加中2018	三輪ほか2000	中島・竹谷2007	中島・竹谷2007	中島・竹谷2007	中島・竹谷2007	中島・竹谷2007	中島・竹谷2007	三島2014	馬場2014	大平2010

第41表　遺跡別器種組成表（4）

遺跡名		尾張東部地域										
		松河戸	天白元屋敷(主要遺構)	矢形遺跡	八王子	内田町	落合橋南Ⅰ(Ⅰ～Ⅴ層)	落合橋南Ⅱ	白坂雲興寺	上品野蟹川	上品野蟹川Ⅱ	岩作城
土器類	土師器碗皿	14		0	0	ロクロ50,手づくね17 碗3,不明202			0		ロクロ11,手づくね3	377
	鍋釜類	伊勢鍋24	土師質土器688 (16世紀含む)	中近世1	0	389	中世土師器96	中世土師器148	0	中近世土器69	南伊勢系鍋3 内彎型羽釜3 鍋・釜13 半球形内耳鍋6	南伊勢系鍋7
	その他	0	0	0	0	瓦器鍋5,瓦器羽釜3,瓦器4	0	0	0	0	瓦器5	0
	小計	38	688	1	0	673	96	148	0	69	44	384
山茶碗類	東濃型	485	774	357	271	4712	1848	638	918	3426	416	3426
	尾張型			1450	1493	3804	2876	1938	1501	3095	486	3095
	その他	0		0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	485	774	1829	1764	8587	4759	2634	2458	6521	902	6560
片口鉢Ⅰ類		尾張あり	あり	尾張22	尾張80	東濃15,尾張56	尾張35	尾張58	39	尾張12	尾張4	39
古瀬戸	擂鉢	0	あり	2	85	2	99	あり	あり	1679	135	あり
	古瀬戸	あり	大窯・登窯含む813	147	1852	218	1525	270	421	2636	599	604
	その他			0	内耳鍋48,仏餉具3,釜7	内耳鍋2	仏餉具1,鍋142		内耳鍋2	仏餉具4	内耳鍋あり	
	小計	あり	813	149	1995	220	1624	270	421	4315	734	604
焼締壺甕類	常滑系	あり	34	甕7	甕21,三筋壺2,羽釜1	15	0	45	0	0	5	0
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計		34	7	24	15	0	45	0	0	5	0
中国陶磁		0	13	2	0	24	17	37	0	12	3	2
合計		1046	2288	1988	3765	9590	6496	3192	2879	10929	1692	7550
備考							入子・陶丸	陶丸・常滑有耳壺				
調査面積(㎡)		65,306	11,298.25	393	5,700	7,200	670	250	250	5700	400	1800
1㎡あたりの出土量		0.02	0.2	5.1	1.5	1.3	9.7	12.8	11.6	2.0	4.2	4.2
カウント		破片数？	接合前	接合後	接合後	接合後	接合後	接合後	接合後	接合後	接合後	接合後
性格		集落・水田	集落	集落	集落	集落	集落	集落	集落	集落	集落	城館
主要時期		14世紀後半～16世紀	14世紀中葉～15世紀中葉	12～14世紀	14・15世紀	12～14世紀	12～15世紀	12・13世紀	13～15世紀	12～15世紀	12～15世紀	16世紀
近接する街道・河川		庄内川	庄内川	矢田川(庄内川支流)	矢田川(庄内川支流)	水野川(庄内川支流)	水野川(庄内川支流)	水野川(庄内川支流)	赤津川(矢田川支流)	水野川(庄内川支流)	水野川(庄内川支流)	矢田川
典拠		赤塚・服部1994	岩瀬・鷲崎ほか2016	岡本・松田2005	武部ほか2003	岡本・佐野・河合2002	松澤1997	河合1998	金子・青木1993	岡本・佐野1998	金子1999	武部2000

第 42 表　遺跡別器種組成表（5）

遺跡名		尾張西部地域				
		田所	馬引横手	毛受	清洲城下町Ⅷ(主要遺構)	土田Ⅱ
土器類	かわらけ	土師器3938	702	749	手づくね650 ロクロ982	70
	鍋釜類		663	418	391	198
	その他	0	0	0	0	0
	小計	3938	1365	1167	2023	268
山茶碗類	東濃型	929	3417	1733	811	3188
	尾張型	2446	0	大半が東濃	0	0
	その他	0	0	0	0	0
	小計	3375	3417	1733	811	3188
片口鉢Ⅰ類		尾張あり	350	4	Ⅱ類含む31	138
古瀬戸	擂鉢	0	あり	8	274	40
	古瀬戸	28	568	26	大窯含む275	152
	その他					
	小計	28	568	34	549	192
焼締壺甕類	常滑系	89	614	0	甕116	甕366,釜72
	その他	0	0	0	0	0
	小計	89	614	0	116	438
中国陶磁		296	15	0	20	26
合計		7698	12661	2938	3550	4250
備考						
調査面積(㎡)		24,272	7,489	5,561	7,660	1,215
1㎡あたりの出土量		0.3	1.7	0.5	0.5	3.5
カウント		破片数	接合前	接合前	接合後	総破片数
性格		集落	集落	集落	集落・城下町	集落
主要時期		12世紀後半～13世紀後葉	13世紀後半～15世紀	13世紀前半～16世紀中頃	13世紀前半～14世紀前半	14世紀後半～15世紀前半
近接する街道・河川		木曽川	日光川(木曽川支流)	日光川(木曽川支流)	五条川(庄内川支流)	五条川(庄内川支流)
典拠		小澤ほか1997	伊藤ほか1999	飴谷1999	宮腰・鈴木2002	城ケ谷1991

第 43 表　信濃南部の山茶碗類・片口鉢・壺甕類流通状況（藤澤 2018 より作成）

遺跡名		南信地域							中信			
		下伊那			上伊那		諏訪		松本		木曽	
		神坂峠	早稲田	日影平	南羽場	若森社Ⅱ	干沢城下町	荒玉社	北栗	井川城	宮の原	振田
山茶碗類	東濃型	68	4	20	8	34	34	77	41(東濃主体)	20	19	37
	尾張型		0	0	0	1	0	0		0	0	0
	その他	0	0	渥美湖西2	0	1	0	0	0	1	0	0
	小計	68	4	22	8	36	34	77	41	21	19	37
片口鉢	中津川	157	中津川・常滑25	4	14	38	中津川・常滑123	261	98(中津川主体)	4	31	6
	常滑	0		1	0	13		15		9		
	瀬戸	0	0	1	3	0	0	5	0	0	0	0
	その他不明	0	0	0	2	3	0	0	0	0	0	0
	小計	157	25	6	19	54	123	281	98	13	31	6
焼締壺甕類	常滑	10	中津川・常滑25	6	14	57	中津川・常滑174	432	251	5	63	3
	中津川	45		8	9	44		664		6		
	渥美	0	0	1	0	0	0	4	0	0	0	0
	その他不明	0	0	0	7	2	0	兼山含む12	0	0	0	0
	小計	55	25	15	30	103	174	1112	251	11	63	3
計		280	47	43	57	193	331	1470	390	45	113	46

第５節　小形壺瓶類の出土分布と流通経路

中世美濃国産の初期四耳壺を中心とした小型壺瓶類については拙稿にてその流通状況を整理している（山本 2014）。ここで、各類型の四耳壺の流通状況について簡単にまとめておく。

（１）美濃国産初期四耳壺の類型別流通状況（第 40 図・第 44 表）

東濃窯東部で生産されたＡ系統は、長野県の埴科郡坂城町の観音平経塚、和歌山県伊都郡高野山町の高野山奥之院で確認される。

美濃須衛窯から東濃窯西部で生産されたＢ類は最も流通量が多く、このうちＢ１類（美濃須衛型 / 第５ａ型式併行期）は、新潟県北蒲原郡笹神村の華報寺、愛知県一宮市の法圓寺中世墓・中島中世墓、岐阜県揖斐郡揖斐川町の白樫遺跡・長柄堀田地内の堀田城之内遺跡、三重県菰野町の杉谷中世墓、滋賀県蒲

第 44 表　美濃国産小形壺瓶類出土地名表（山本 2014 に加筆）

Ａ類

番号	遺跡名	性格	所在地	原典	型式	備考
1	観音平経塚	経塚・墓	長野県埴科郡坂城町坂城観音平	若林1999　図266の１	Ａ	三筋文
2	高野山奥の院	寺・墓	和歌山県伊都郡高野山町	図版１の２	Ａ	頸部・片部に沈線
3	桜堂	経塚・墓	岐阜県瑞浪市土岐町笹山			

Ｂ類

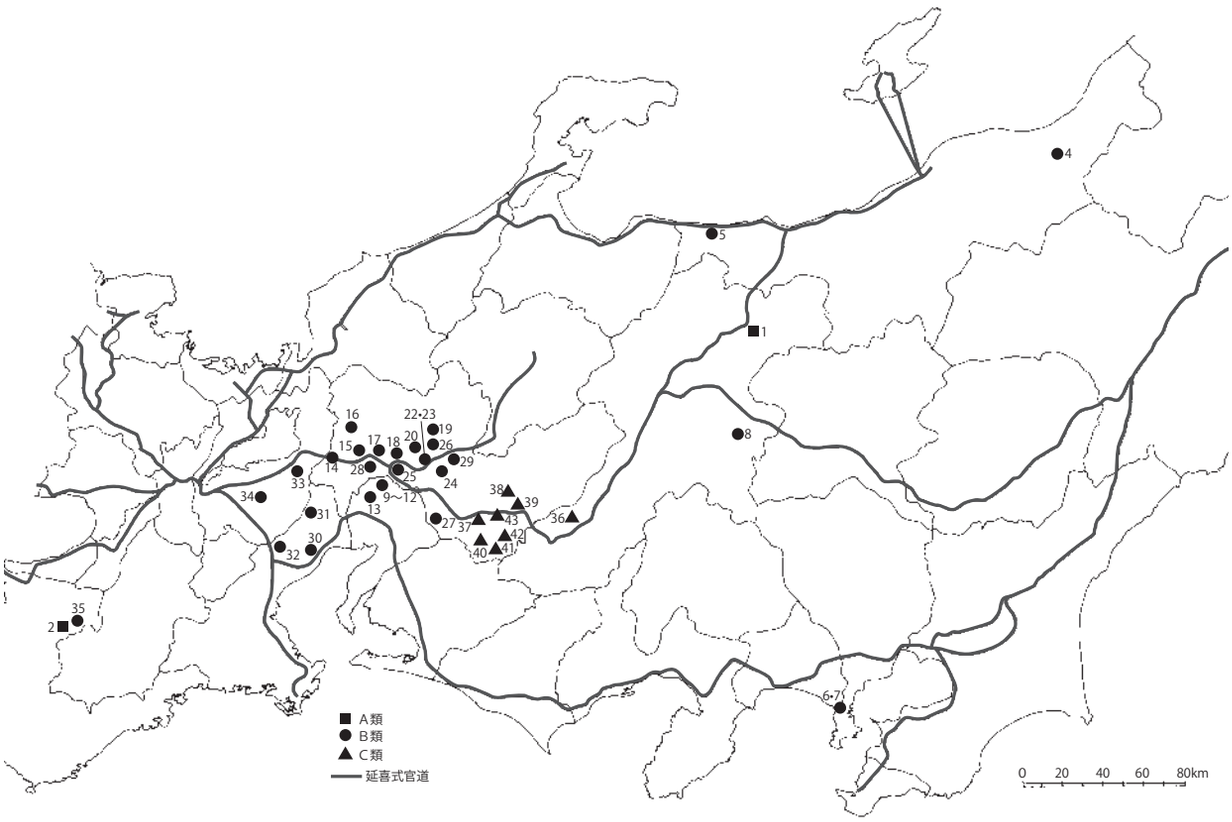
番号	遺跡名	性格	所在地	原典・原典図番号	型式	備考
4	華報寺(経沢墓)		新潟県浦原郡笹神村出湯	中川ほか1959　第３図８	Ｂ１	美濃須衛
5	山岸遺跡	集落	新潟県糸魚川市	文化庁2011　Ｐ54	Ｂ３	東濃　頸部付け根に沈線
6	若宮大路周辺遺跡No.242	都市	神奈川県鎌倉市小町1-83・9・27	早見芸術学園1993　P60・071		
7	若宮大路周辺遺跡	都市	〃　一丁目106番地１	若宮大路周辺遺跡群発掘調査団	Ｂ２	
8	地家遺跡	集落・墓	長野県佐久市大沢地家			美濃須衛
9	法圓寺中世墓遺跡	墓	愛知県一宮市大和町馬引	土本1995　58	Ｂ１	美濃須衛
10			〃	〃　15		
11			〃	〃　23		美濃須衛
12			〃	〃　261	Ｂ３かＢ４	東濃
13	中島中世墓	墓	愛知県一宮市大字中島字東木戸北切	一宮市1973　第71図６	Ｂ１	
14	野上		岐阜県不破郡関ケ原町野上			
15	花岡山		岐阜県大垣市赤坂町	檜崎ほか1977　図版９-12		
16	白樫		岐阜県揖斐郡揖斐川町		Ｂ１	
17	桑山		岐阜県岐阜市	土山1987	Ｂ２	
18	下城田寺中世墓	墓	岐阜県岐阜市下城田寺	岐阜市1996　第８図106		
19	大野		岐阜県武儀郡洞戸村大野	吉田1981　第４図52	Ｂ２	
20	恵利寺中世墳墓	寺・墓	岐阜県武儀郡武芸川町跡部705番地	吉田1975　図版１－１	Ｂ２	
21	重竹Ａ遺跡		岐阜県関市下有知	関市1979　第40図20		
22		集石遺構		関市1981　第27図106		
23	重竹遺跡	集落	〃	小野木2005　図228の271		
24	裏山(蜂屋)		岐阜県美濃加茂市蜂屋町下西	吉田1980　図８－１		
25	野笹遺跡	集落	岐阜県美濃加茂市野笹２丁目	千藤2000　第89図346	Ｂ２	美濃須衛
26	長福寺遺跡		岐阜県美濃市横越字長福寺			
27	池田不動	墓	岐阜県多治見市池田町			
28	堀田城ノ内遺跡	集落	岐阜県長柄堀田地内	小野木1997　第82図1029	Ｂ１	美濃須衛か
29	針田遺跡	集落	岐阜県美濃加茂市下米田町大字西脇字針田	堀ほか2001　第108図714	Ｂ２	美濃須衛
30	垂坂出女房塚墳墓	墓	三重県四日市市	四日市市1993　図338の11	Ｂ２	
31	杉谷中世墓	墓	三重県三重郡菰野町杉谷	古江1965	Ｂ１	美濃須衛
32	浦ノ山中世墓	墓	三重県鈴鹿郡関町萩原字浦ノ山	清水1994　第20図４	Ｂ２	美濃須衛
33	高野山奥の院	寺・墓	和歌山県伊都郡高野山町	石田ほか1975　第24図９	Ｂ１	美濃須衛
34	敏満寺遺跡石仏谷墓跡	墓	滋賀県犬上郡多賀町大字敏満寺字青龍山	多賀町2005　図42の78		
35	大谷遺跡	墓	滋賀県浦生郡日野町大谷	平出1983　第15図	Ｂ１	美濃須衛

Ｃ類

番号	遺跡名	性格	所在地	原典	型式	備考
36	上ノ平遺跡	墓	長野県下伊那郡高森町	今村1996　第16図31		中津川か
37	桜堂	経塚・墓	岐阜県瑞浪市土岐町笹山			
38	太田		岐阜県恵那市中野方町太田	伊藤1991　第６図１		
39	西芳寺中世墓		岐阜県恵那市坂下町			中津川
40	飯高五輪墓地	墓				東濃・土岐か
41	大正寺跡	寺・墓？	岐阜県恵那市上手向			東濃　施釉有
42	大円寺	寺・墓？	岐阜県恵那市岩村町			東濃か
43	若宮墳墓	墓	岐阜県恵那市長島町中野	三宅ほか　1991　第３図１		東濃か

東濃・産地不明

遺跡名	性格	所在地	原典	型式	備考
南蛇井増光寺遺跡Ｃ区	墓	群馬県富岡市南蛇井字増光寺			
殿村・東照寺址遺跡	寺・墓	長野県諏訪郡下諏訪町高木	下諏訪町1990　第79図１		板耳
流人塚	墓	長野県長野市綿内町	千野1993　図７の１		水注　東濃か　無釉
清泰地遺跡	寺・墓	愛知県北設楽郡稲武町桑原字下清泰寺	稲武町1999　図３(14)		
法圓寺中世墓遺跡	墓	愛知県一宮市大和町馬引	土本1995　79		
中道西	墓	愛知県一宮市多加木字中道西310-11	一宮市1973　第53図30		産地不明　板耳
虎渓山１号古墳	墓	岐阜県多治見市弁天町４丁目２番地			瓶子
桜堂	経塚・墓	岐阜県瑞浪市土岐町笹山			
白雲山	寺・墓	岐阜県郡上郡大和町剣字矢田平			水注
道場遺跡		岐阜県恵那市中野方			壺　中津川
愛宕中世墓郡	墓	三重県桑名郡多度町	多度町2002　図194の12		壺　美濃須衛
上田部遺跡	集落	大阪府高槻市			水注(東濃)



第 40 図　美濃国産小形壺瓶類出土遺跡分布図（山本 2014 を加筆・修正）

生郡日野町の大谷遺跡、和歌山県の高野山奥之院で確認される。

Ｂ２類（美濃須衛型 / 第５ｃ型式併行期）は、神奈川県鎌倉市の若宮大路周辺遺跡、岐阜県岐阜市の桑山遺跡・武儀郡洞戸村の大野遺跡・武儀郡武芸川町の恵利寺中世墓・美濃加茂市の野笹遺跡・針田遺跡、三重県四日市市の垂坂出女房塚墳墓、鈴鹿郡関町の浦ノ山中世墓で確認される。また、口縁部が確認できないが、美濃須衛窯で生産されたＢ１・Ｂ２類は、神奈川県鎌倉市の若宮大路周辺遺跡 No.242 遺跡、愛知県の法圓寺中世墓、岐阜県不破郡関ケ原町の野上遺跡、大垣市の花岡山遺跡、岐阜市の下城田寺中世墓、関市の重竹Ａ遺跡・重竹遺跡、美濃加茂市の裏山遺跡・長福寺遺跡、多治見市の池田不動遺跡、滋賀県犬神郡の敏満寺石仏谷墓跡で確認される。東濃窯北西部で生産されたＢ３類・Ｂ４類は、新潟県糸魚川市の山岸遺跡、法圓寺中世墓で確認される。

東濃窯東部と恵那中津川窯で生産されたＣ系統は、その特徴が古瀬戸前期の四耳壺と類似していることからその判別が困難で、美濃国産であると認識されている例が少ない。そのうち東濃窯産とみられるものは、岐阜県の桜堂遺跡、恵那市の太田遺跡・飯高五輪墓地・大正寺跡・大円寺跡・若宮墳墓で、中津川窯産とみられるものは、長野県下伊那郡高森町の上ノ平遺跡や中津川市坂下の西芳寺中世墓で確認される。

Ｄ系統に至っては古瀬戸と同一の技法で制作されているため胎土の違いでしか見分ける方法がない。そのため、現在古瀬戸前期様式として報告されているものの中から抽出することは困難である。また、その他の四耳壺についても、生産量が少なく、その特徴を定義付けることすら困難な状況である。これらの生産動向などを明らかにするには、今後の調査を待つしかないだろう。

（２）美濃国産初期四耳壺の流通経路

Ａ類は、出土例は少ないが遠隔地で出土している。観音平経塚は東山道沿いに位置しており、高野山奥之院は京都の貴族の多くが墓を築いたとされるため、東山道を通って一度京都に入ってから高野山奥之院に運び込まれ、埋納された可能性も考えられる。

Ｂ１類・Ｂ２類は、比較的生産地に近い東海地方に分布が集中するが、新潟県の華報寺や和歌山県の高野山では飛び石のような形で出土している。主に陸路を使用したものと思われるが、東山道からは若干距離のある遺跡からも確認される。また、鎌倉は陸路から外れ、局所的に分布がみられるため、常滑窯・渥美窯・瀬戸窯などの東海産製品と共に海路で渡った可能性が指摘できよう。これは、同時期に四耳壺生産がみられる古瀬戸前Ｉｂ期の四耳壺が海路で運ばれていることからも裏付けられる。なお、東濃窯産のＢ３類・Ｂ４類は現在確認される消費地資料が少なく、現在は法圓寺中世墓・山岸遺跡・南蛇井遺跡で確認されるのみであるが、新潟県・群馬県で出土していることから長野県内の東山道を北上、東進して運ばれたものと考えたい。

Ｃ類は、基本的に生産地である東濃地域及び信濃南部地域で確認されることから、遠隔地流通であるＡ・Ｂ類に対し比較的狭域に流通していたものと考えられる。Ｄ類・その他の四耳壺については出土事例がほぼ皆無であるため詳細は不明である。しかし、生産量がＣ類よりさらに小規模で作りも拙いことから、遠隔地に向けて生産したものとは考えにくい。

第６節　流通の担い手について

最後に、東濃型山茶碗を中心とした製品の流通の担い手について触れておきたい。東濃型山茶碗の主要流通圏の範囲は、生産地の中心である多治見市から直線距離で測ると最も遠方となるのは飛騨南端部で 60km 程度、信濃南西部で 50km 程度となる。先に紹介した藤澤氏の論を参考にすれば、おそらく２～３日あれば生産地から辿り着けるものと考えられる。

ただ、飛騨南端部については桜洞城や江馬氏下館跡などで中国陶磁が多数搬入されていることから、中濃地域の岩田東Ａ遺跡・岩田西遺跡・中屋敷遺跡や芥見町屋遺跡などの拠点的集落までの運搬を東濃窯の山茶碗工人が担い、そこからは中国陶磁などとともに別の担い手によって東山道飛騨支路を北上して運ばれたという可能性も考えられる。また、桜洞城や信濃南西部の神坂峠や日影平（Ａ）遺跡では中津川窯製品が出土していることから、東山道を東進し中津川窯周辺までを東濃窯の山茶碗工人が、そこから先の流通は中津川窯の工人が担い飛騨方面へ北上、あるいは信濃方面へ北東進したとも考えられる。

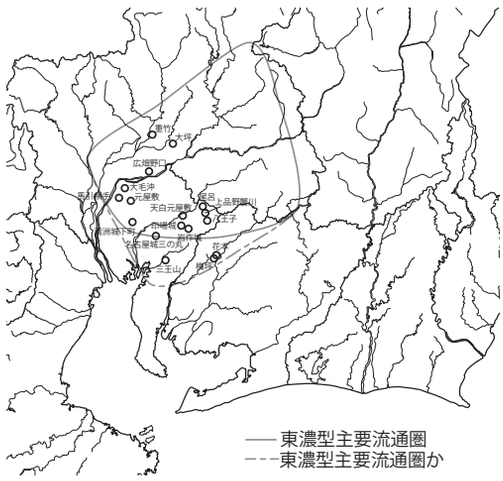
この場合、山茶碗工人の移動範囲は直線距離ではあるが 40km 以内に十分収まるものであり、工人の振り売りを想定し陸路による流通圏をせいぜい 30 ～ 40km とする藤澤氏の仮説が充分通用するのである。また小形壺瓶類の流通についても、在地に流通するＣ系統は山茶碗工人によって運ばれることは疑いようもないが、遠隔地に流通するＡ・Ｂ系統も東山道沿いのいずれかの拠点的集落までは山茶碗工人、そこから先はそれぞれ別の担い手によって流通していった可能性が高い。

ところで、古瀬戸系施釉陶器窯で生産された後Ⅳ期の古瀬戸製品はどうであろうか。とはいえ、古瀬戸製品は基本的に全国流通するものであるから、ここでは在地向け製品である仏餉具・内耳鍋・釜の流通状況を第 11 ａ型式期の主要流通圏と比較してみたい（註 32）。まず仏餉具の出土分布をみると、美濃地方においては山茶碗の主要流通圏内に収まってはいるが、尾張・三河地方においては新城市や知多半島にも運ばれている（第 41 図）。一方、内耳鍋・釜の出土分布をみると、両者とも山茶碗の主要流通圏に収まっている（第 42 図）。

第 41 図　古瀬戸後Ⅳ期古段階仏餉具出土遺跡

山茶碗は在地向けの供膳具であり、第 11 a 型式期の東濃型の主要流通圏内に含まれる中濃地域の岩田西遺跡や中屋敷遺跡・芥見町屋遺跡では、第 11 a 型式期の山茶碗が多く出土する一方で後Ⅳ期古段階の古瀬戸製品も多く出土していることも注目される（近藤ほか 2013・小野木 2011・三輪 2012）。古瀬戸の内耳鍋・釜の出土分布が山茶碗主要流通圏内収まるという状況も併せると、これらの流通は山茶碗とともに東濃窯の工人が担った可能性が高い。

なお、余談であるが藤澤氏は山茶碗の代替品とされていた平碗の流通圏と、山茶碗の流通圏が全く異なっていることから両者の需要層には厳密な重層関係が存在した可能性を指摘し、山茶碗の代替する供膳具として木製品の存在を挙げている（藤澤 1990）。今回採り上げた中世遺跡のうち、平碗と山茶碗の出土量が比較可能なものをみてみると、ほとんどが東濃型山茶碗優勢か、山茶碗は搬入されるが平碗は流通していない遺跡で、山茶碗の出土量に反比例して平碗の流通量が増加するような遺跡は全く認められない（第 45 表）。これは平碗が山茶碗の代替品にはなり得ないとする藤澤氏の論の裏付けとなろう。



第 42 図　古瀬戸後Ⅳ期古段階内耳鍋出土遺跡

第 43 図　古瀬戸後Ⅳ期古段階釜出土遺跡

第 45 表　古瀬戸後期平碗及び東濃型山茶碗時期別集計表

遺跡名	器種	時期・出土点数				
岩田西	山茶碗	10型式期			11型式期	
		8			18	14
	平碗	後Ⅰ期	後Ⅱ期	後Ⅲ期	後Ⅳ期古	後Ⅳ期新
		0	0	0	4	0
芥見町屋	山茶碗	10型式期			11型式期	
		174			151	16
	平碗	後Ⅰ期	後Ⅱ期	後Ⅲ期	後Ⅳ期古	後Ⅳ期新
		2	5	11	17	2
内田町	山茶碗	10型式期			11型式期	
		873			32	0
	平碗	後Ⅰ期	後Ⅱ期	後Ⅲ期	後Ⅳ期古	後Ⅳ期新
		4		0	0	0
岩作城	山茶碗	10型式期			11型式期	
		38			144	60
	平碗	後Ⅰ期	後Ⅱ期	後Ⅲ期	後Ⅳ期古	後Ⅳ期新
		0	0	0	0	0
中屋敷	山茶碗	10型式期			11型式期	
		45			144	25
	平碗	後Ⅰ期	後Ⅱ期	後Ⅲ期	後Ⅳ期古	後Ⅳ期新
		1	1	1	11	2
政田仙道上	山茶碗	10型式期			11型式期	
		107			39	5
	平碗	後Ⅰ期	後Ⅱ期	後Ⅲ期	後Ⅳ期古	後Ⅳ期新
		2	6	3	6	10
白坂雲興寺	山茶碗	10型式期			11型式期	
		112			17	3
	平碗	後Ⅰ期	後Ⅱ期	後Ⅲ期	後Ⅳ期古	後Ⅳ期新
		1	24	1	9	42

第６章　中世東濃窯の成立と展開

本章では、まず中世東濃窯の段階設定を行い、東濃型山茶碗工人の性格について整理した上で、東濃窯と同じく中世を通じて窯業生産を行った瀬戸窯・常滑窯のあり方と比較しその実態に迫るとともに、中世東濃窯の成立と廃絶、15 世紀末に成立する瀬戸美濃大窯との関係についても触れていく。

第１節　生産と流通の諸段階

中世東濃窯の生産・流通については大きく六つの段階を設定できる。

（１）第１段階（12 世紀初頭～中葉）

第１段階は、成立期である第３・４型式期である。可児市南西地区で中世窯が発生すると、第４ａ型式期には同地区と可児市南西地区の一部に広がりをみせ、第４ｂ型式には多治見市北西部にも南進する。碗と小碗がセットで生産され、窯体構造はいずれも窯体は分炎柱背後に水平部分をもつＡ類が主体である。なお、窯体構造の平面形は「紡錘形」と「寸胴形」に大別され、前者が主体を占める。

主要流通圏は生産地周辺の東濃地域西部に限られ、同時期に主要流通圏が尾張・三河西部・東濃・中濃・西濃・伊勢北中部と広範囲へ展開する尾張型に対してかなり狭い範囲である。

（２）第２段階（12 世紀後葉～ 13 世紀前葉）

第２段階は、生産規模が拡大し一部の窯で小形壺瓶類の生産が行われる第５・６型式期である。第５ａ型式期に入ると小碗が高台を失い小皿化し、小形壺瓶類の生産が開始されるなど生産上の画期を迎える。窯体構造は前段階にみられたＡ類から分炎柱背後の水平部が消失し緩傾斜となるＢ類へと変化する。また、窯の分布は前段階に引き続き拡散傾向にあったが、第５ｂ型式期には一気に広がりをみせるなど分布推移の上で画期を迎える。第５ｃ・ｄ型式期の山茶碗類の生産・窯体構造・分布状況に大きな変化は認められないが、第６型式期においては高田・小名田地区で窯跡の分布が増加し、また、遺構面においては窯体は第５型式期と比べて小型のものが現れ始めるほか、作業場遺構を伴うものも認められる。

この段階に行われる小形壺瓶類の生産については、第５ａ型式期に明和・住吉地区でＡ系統の生産が開始されると、続く第５ｂ型式期には東濃窯の技術によるＡ系統の生産が丸石地区に移る。第５ｃ型式期には丸石地区や大洞・土岐口地区でＡ系統に加え新たに古瀬戸の模倣であるＣ系統の生産が行われる。第５ｄ型式期にはＡ系統の生産がみられなくなり、土岐口・大洞地区、明和・住吉地区でＣ系統の生産行われるほか、多治見市北西地区の一部や北小木地区では美濃須衛窯から工人移動による直接の技術導入を受けてＢ系統の生産が開始される。第６型式期は、北小木地区では瀬戸窯から工人移動による直接の技術導入によってＤ類の生産が確認され、これに影響を受けて無釉を原則としていたＢ系統にも灰釉がハケ塗りされるようになる。

東濃型の主要流通圏は、前段階生産地周辺のみであったが、この段階で土岐川以北地域を中心に窯跡が増加し分布範囲が拡大すると、主要流通圏も東濃全域とその周辺の中濃東部・尾張北東部・信濃南西端部へと大幅に拡大し、小形壺瓶類も在地及び遠隔地に流通する。

（３）第３段階（13 世紀中葉）

第３段階は、生産のピークを迎える第７型式期である。窯体の規模が安定し、半数以上の窯跡に作業場遺構が伴うようになり山茶碗類の生産体制が整うようだ。山茶碗焼成窯の専用蓋が登場する一方で、前段階に認められた小形壺瓶類の生産がほとんどみられなくなり、山茶碗類の生産に専念するようになる。窯数は急増し、分布は土岐川以北の北小木地区、明和・住吉地区、土岐川以南の大畑・下半田川地区に集中するなど、遺構面・分布状況での画期を迎える。

当該期の主要流通圏は南西方向に拡大し、中濃地域全域と尾張西部地域の北部が含まれるようになる。

土岐川以南に生産拠点が設けられた背景には、これらの地域の需要が挙げられよう。なお、西濃地域の大半と伊勢地域は尾張型の流通が撤退することで山茶碗の流通がほとんどみられなくなる。

（４）第４段階（13 世紀後葉～ 14 世紀前葉）

第４段階は、山茶碗が退化しはじめ窯数が減少する第８・９型式期である。前段階から窯跡の分布範囲に大きな変化はみられないが、土岐川以北地域と土岐川以南地域の窯数は、第８型式期はほぼ同数、第９型式期にははじめて土岐川以南地域が上回り、これ以降は当該地域が生産の主体となる。窯体構造においては第８型式期に普遍的に昇炎壁構造をもつＧ類が登場し、平面形は第８型式期には「紡錘形」・「寸胴形」に加えて「倒卵形」が北小木地区及び大畑・下半田川地区で生まれ、「寸胴形」については第８型式にはほとんどみられなくなる。

また、東濃型の主要流通圏にも大きな変化はみられないが尾張型の生産地周辺地域で確実に流通量を増加させていく。第９型式期には東濃型が主体となる遺跡も認められるようになり、尾張型の生産地周辺でも尾張型から東濃型へと徐々に山茶碗が切り替わっていく段階である。

（５）第５段階（14 世紀中葉～ 15 世紀中葉）

第５段階は、北小木地区・多治見市北西地区など旧可児郡域にあたる地域でほとんど窯がみられなくなり、旧土岐郡域である土岐川以南を中心に以北の高田・小名田地区と明和・住吉地区で生産が行われる第 10 ａ～ 11 ａ型式期である。第 10 ｂ型式期には碗２類の生産量が増加し、第 11 ａ型式期には碗１類の生産を停止する。窯体構造はＧ類が主体で「倒卵形」の平面形を基本とするほか、半地上式や燃焼室が石組みとなるものなどもみられるようになる。

また、第 11 ａ型式期には土岐口・大洞地区を中心に高田・小名田地区にも古瀬戸工人によって古瀬戸系施釉陶器窯が築かれる。窯跡の分布状況や生産内容からこの段階では両者に技術的な交流はみられないが、東町１・２号窯跡で搬入品とみられる古瀬戸後Ⅳ期古段階の古瀬戸製品が確認されていることから、工人達は交流をもっていた可能性が高い。

主要流通圏は第 10 型式期には範囲をやや縮小させるが、圏内のほとんどの中世遺跡で東濃型が独占的に流通するようになる。第 11 ａ型式期には瀬戸窯で尾張型の生産が終了すると同時に主要流通圏が消失し、尾張型の生産地周辺もすべて東濃型の主要流通圏となる。また、古瀬戸系施釉陶器窯で生産された後Ⅳ期古段階の古瀬戸製品のうち、在地向けの内耳鍋・釜に限って山茶碗工人がその流通を担うようになった可能性が高い。

（６）第６段階（15 世紀後葉）

第６段階は、碗の内面調整にコテが使用されず意図的に凹凸が形成されるようになり、口縁端部も内側に屈曲することから明らかに供膳具としての機能を失う第 11 ｂ型式期である。碗・小皿の色調も灰白色から青灰色へ変化し、器高が低くなることで碗というより皿の形状に近くなり、灯明皿化する。小皿の生産量も減少し、既に碗と皿のセット関係が崩れていることからもこれらが供膳具として意識されていないことがわかる。窯数もわずか５窯跡が確認されるのみで、衰退の一途をたどっている。山茶碗が供膳具としての機能を失い、生産規模も縮小すると同時に主要流通圏も大きく縮小する。これまで主要流通圏に含まれていた東濃地域の大半が流通圏外となり、生産地周辺である東濃地域南西部・中濃地域南部・尾張地域北部を中心に流通する程度となる。そして、当該期をもって東濃型山茶碗専焼窯は廃絶する。

第２節　中世東濃窯の成立

中世東濃窯は 12 世紀初頭に可児市南西地区で成立し、多治見市北西地区や明和・住吉地区に散見される灰釉末期の西坂期に比定される窯跡とは分布域を異にしている（第 49 図）。また、灰釉陶器生産と山茶碗生産の連続性は現在のところ確認されていない。

灰釉陶器末期の百代寺期（第２型式期）及び初期山茶碗の第３型式期の窯は瀬戸窯・猿投窯・尾北窯に分布している。瀬戸窯と猿投窯の状況について簡単にまとめると、瀬戸窯では百代寺期の窯は豊田市西端部・瀬戸市幡山区南部を中心に分布し、第３型式期になると幡山区南部をはじめ守山区東部から尾張旭市にかけて広く展開し、続く第４型式期以降にはさらに分布範囲を拡大させるという（第 44 ～ 48 図・第 46 ～ 48 表、藤澤 2007）。

猿投窯は、百代寺期の窯は東山地区に１基確認されるのみで、第３型式期になると窯数が急増、東山地区全域に窯が集中して築かれるほか、鳴海市郡北端に数基、岩崎地区と黒笹地区に１基ずつ確認されている。第４型式基には東山地区で窯数が半減するものの分布の中心地には変わりなく、鳴海支群では前代窯跡を囲むように分布がみられる。また、折戸・黒笹・井ヶ谷地区、有松支群でも生産が始まる（藤澤 2007）。

春日井市・小牧市に分布し古代須恵器・灰釉陶器生産の一翼を担う窯業地である尾北窯では、７基の中世窯が確認されている。篠岡 25 号窯は第３型式期、同 80 号窯跡は第３型式期から第４型式期古段階に比定されている。また、篠岡 28・29・79・83・93 号窯はいずれも 12 世紀代と推定されているが、13 世紀以降の窯跡は認められず尾北窯は廃絶してしまう。

中世東濃窯の成立には他の窯業地からの工人移動の可能性が存在することは先に触れたとおりであるが、移動距離から考えて上記の３窯業地が候補として挙げられるだろう。これらを比較すると、猿投窯と瀬戸窯は第４型式以降も途切れることなく窯業生産が続いていくのに対し、尾北窯は 12 世紀いっぱいで生産を停止している。翻って東濃窯の状況をみると、末期の灰釉陶器窯は多治見市北西地区や明和・住吉地区に分布し、第３型式期後半の窯跡は可児市南西地区に位置する。第４型式期以降はそこから南下・東進しながら分布範囲を拡大していくのである。

また、猿投窯の第３型式に比定されるＨ－Ｇ－ 55 号窯やＨ－Ｇ－ 79 号窯の碗・小碗は、やや低い三角高台をもち、体部は全体に弱い丸みを帯びる（第 50 図）。口縁部の外反度はやや強く、端部は丸く収められる。高台端部に籾殻痕は認められない。また、口径に対して器高が低いものが多く、全体的に扁平な形状である。

尾北窯の第３型式期に比定される篠岡 80 号窯の初期山茶碗・小碗は、径が狭く高い三角高台をもち、体部下方にゆるい丸みをもって開く。口縁部は弱く外反し端部は丸く収められる。高台端部には籾殻痕は認められない。口径に対してやや器高が高く、全体的に深い形状である。

これに対しほうの木窯跡で第３型式期後半とした山茶碗・小碗は、猿投窯の山茶碗類より篠岡窯のものとの親和性が高く、両者を型式的に前後関係に置いた際の型式変化はスムーズである。

第３型式期の尾北窯・東濃窯で窯体構造が明らかになっている窯は篠岡 80 号窯のみで、それも煙道部は流失しているため遺構面から検討を加えることは現段階では不可能といえるが、分布状況や山茶碗類の形状から考えると、中世東濃窯の成立には尾北窯の工人が関与した可能性は非常に高く、中世東濃窯の成立・盛行に反するように尾北窯は衰退・廃絶したものと考えられる。

第 46 表　中世猿投窯時期別窯跡数 (藤澤 2007 より転載)

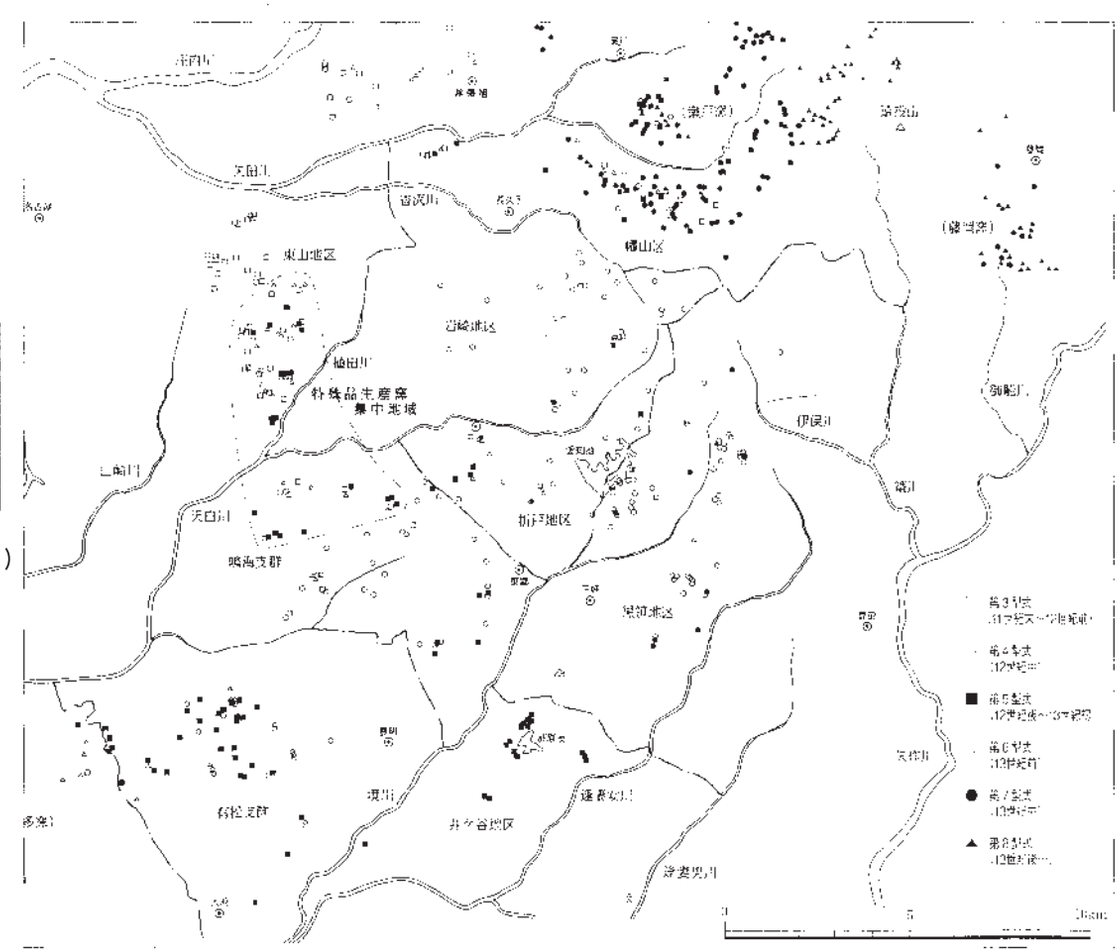
	東山	岩崎	鳴海		折戸	黒笹	井ヶ谷	計
			鳴海	有松				
第3型式	49	1	7	0	0	1	0	58
第4型式	23	0	8	8	4	12	4	59
第5型式	11	2	14	39	4	1	16	87
第6型式	0	34	31	14	12	51	0	142
第7型式	0	0	0	0	0	8	0	8
第8型式	0	0	0	0	0	1	0	1
不明	19	24	14	26	20	13	1	117
計	102	61	74	87	40	87	21	472

第 47 表　中世瀬戸窯窖窯数 (藤澤 2007 より転載)

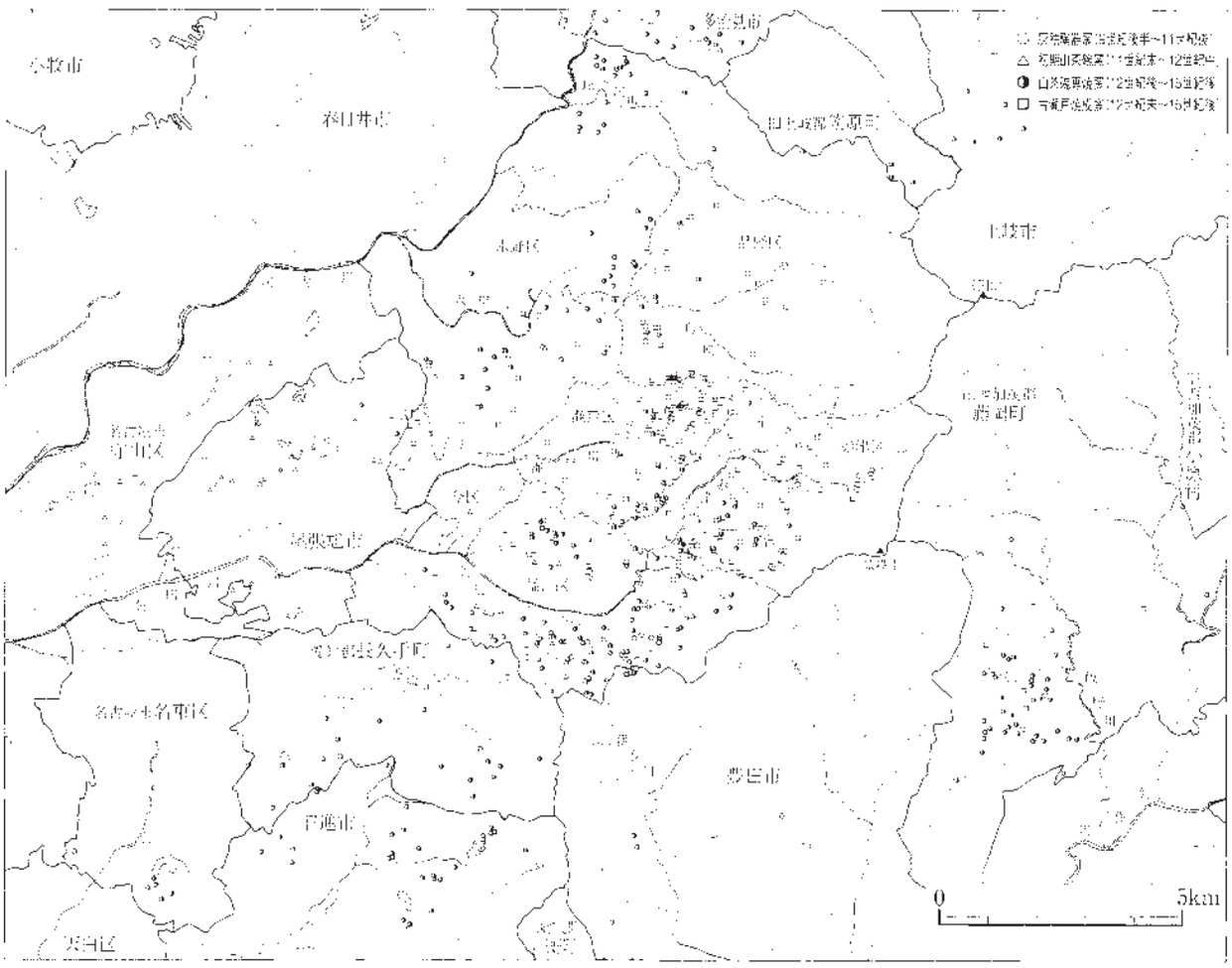
	幡山	瀬戸	赤津	今	水野	品野	守山	尾張旭	豊田	長久手	計
灰釉陶器窯	13	0	0	0	0	0	1	1	4	0	19
猿投山茶碗窯	13	0	0	5	5	0	16	18	1	0	58
尾張型専焼窯	75	15	21	0	32	7	0	5	3	2	160
東濃型専焼窯	0	0	0	0	4	21	0	0	0	0	25
古瀬戸焼成窯	35	85	76	5	14	25	0	4	0	1	245
不明	3	9	13	0	0	6	0	1	0	0	32
計	139	109	110	10	55	59	17	29	8	3	539

第 48 表　中世瀬戸窯灰釉陶器・山茶碗窯操業基数 (藤澤 2007 より転載)

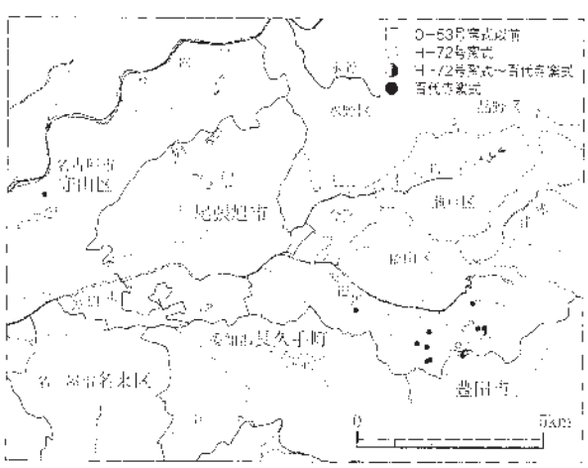
	東濃型					尾張型					計
	幡山	守山	尾張旭	水野	品野	幡山	瀬戸	赤津	水野	品野	
0-53窯式	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2
第1型式	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
第2型式	11	1	0	0	0	0	0	0	0	0	12
第3型式	6	6	7	3	0	0	0	0	0	0	22
第4型式	10	5	11	8	0	0	0	0	0	0	34
第5型式	19	0	1	9	0	0	0	0	0	0	29
第6型式	0	0	0	0	1	14	3	0	14	7	39
第7型式	0	0	0	0	8	72	64	22	19	10	195
第8型式	0	0	0	0	10	31	50	30	13	5	139
第9型式	0	0	0	0	2	4	10	50	12	5	83
第10型式	0	0	0	0	0	11	9	25	0	3	38
第11型式	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
計	52	12	20	20	22	122	136	127	58	30	599



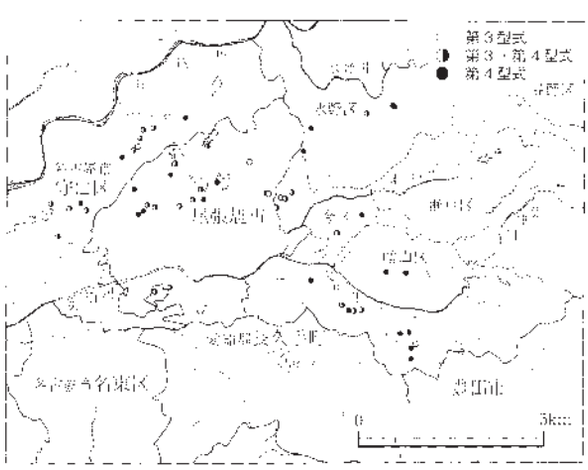
第 44 図　中世猿投窯周辺窖窯分布図（藤澤 2007 より転載）



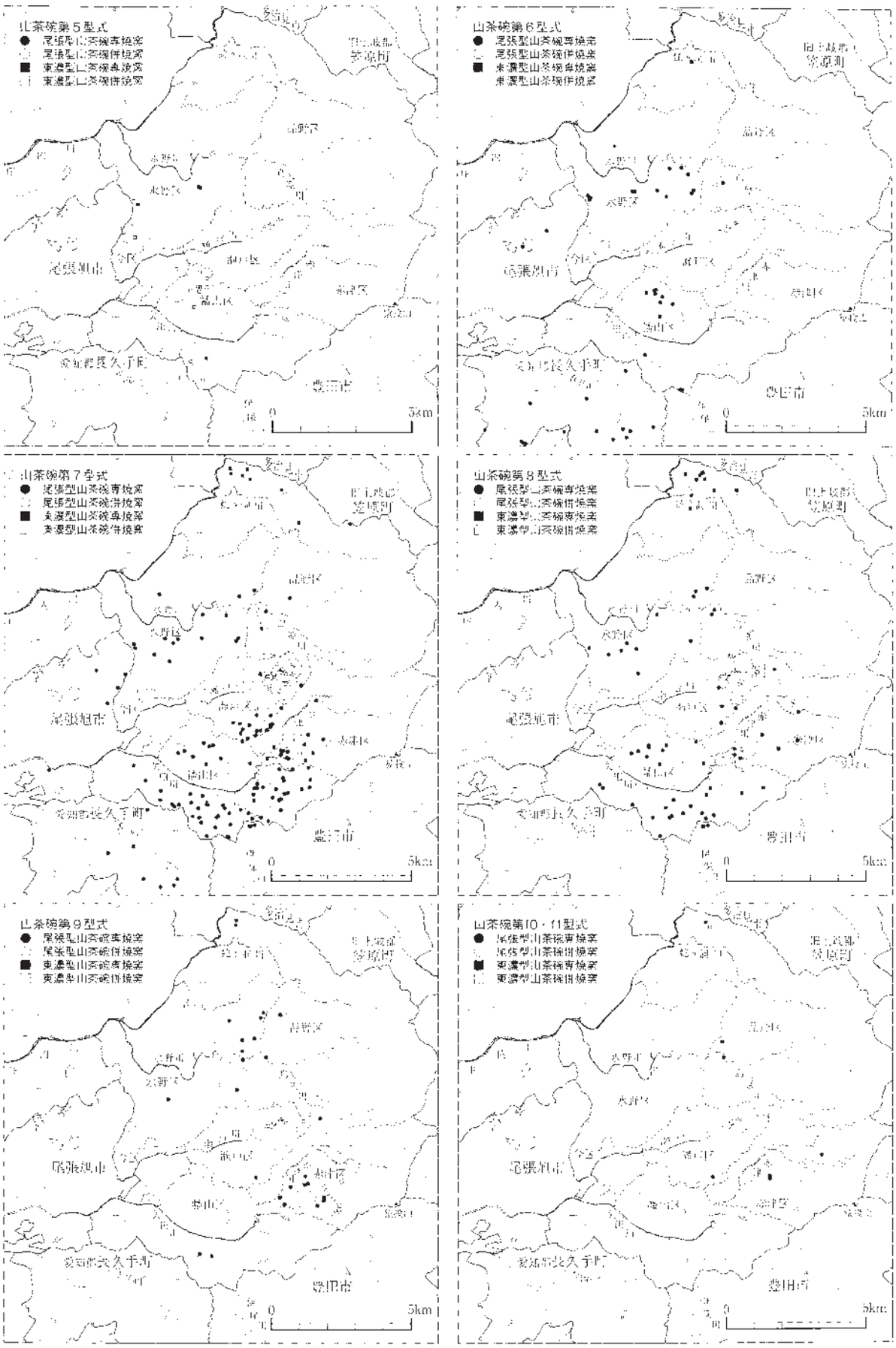
第 45 図瀬戸窯周辺の窖窯分布図（藤澤 2007 より転載）



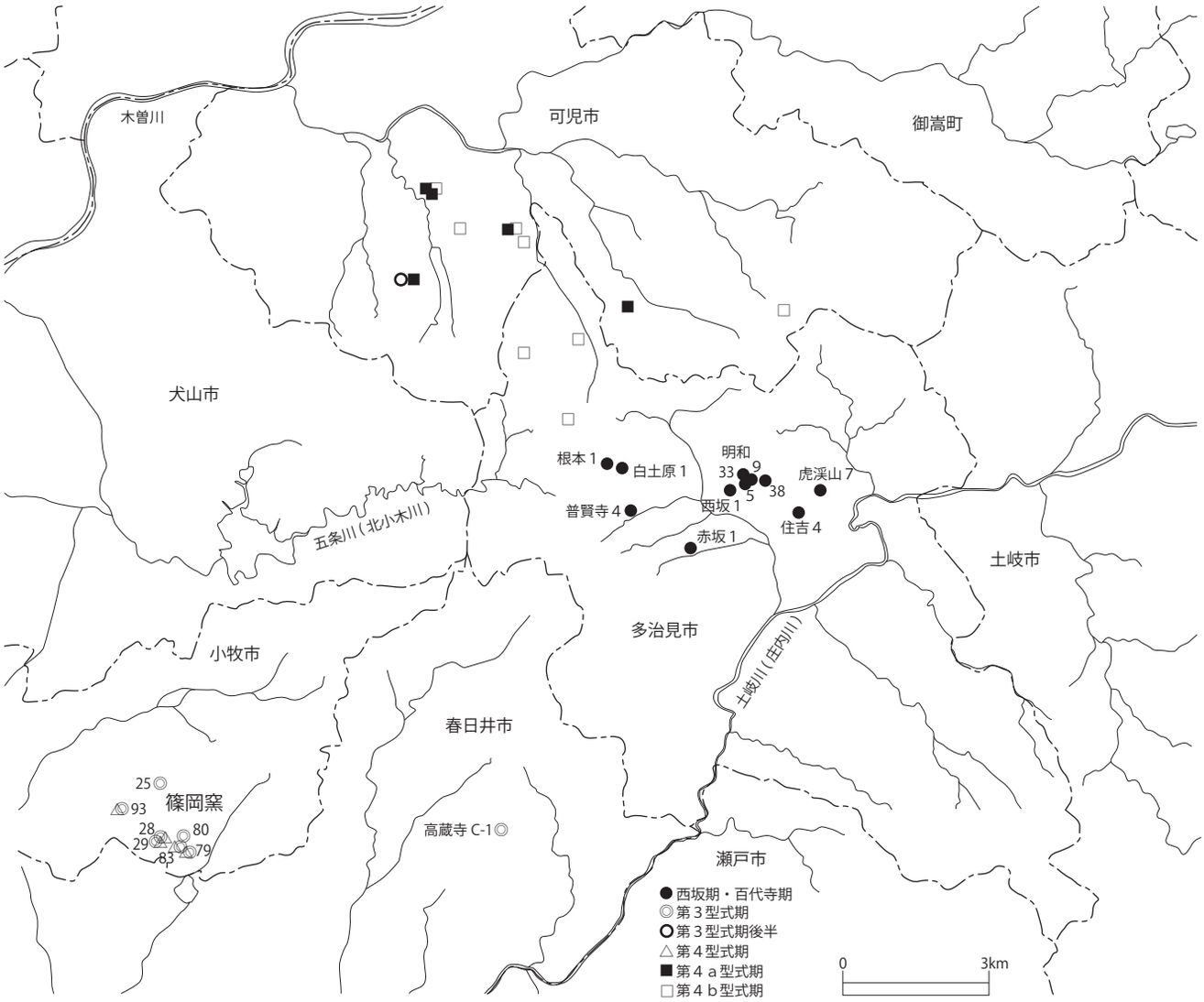
第 46 図　瀬戸窯灰釉陶器窯分布図
（藤澤 2007 より転載）



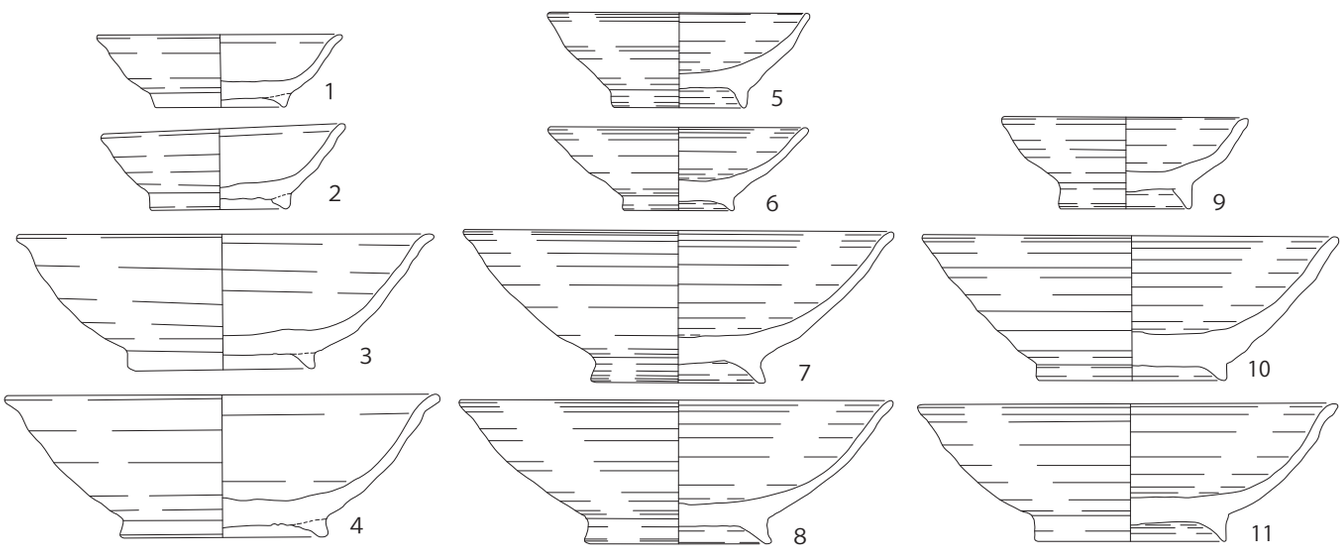
第 47 図　瀬戸窯初期山茶碗窯分布図
（藤澤 2007 より転載）



第 48 図　瀬戸窯山茶碗焼成窯分布図（藤澤 2007 より転載）



第 49 図　西坂期及び第３型式期の窯跡分布図（斎藤ほか 1983 より作成）



1～4：H-G-55 号窯出土碗・小碗（斎藤 1988 よりトレース）
5～8：篠岡 80 号窯出土碗・小碗　9～11：ほうの木窯出土碗・小碗

第 50 図　H−G−55 号窯・篠岡 80 号窯・ほうの木窯出土の山茶碗・小碗

第３節　中世東濃窯と大窯

12 世紀初頭に成立し、約 400 年に亘って窯業生産を継続してきた中世東濃窯は、15 世紀後葉をもって廃絶し、直後の 15 世紀末には瀬戸窯で新たな窯炉である大窯が成立する。これまで折に触れ 15 世紀中葉以降の古瀬戸工人と山茶碗工人の関係性について紹介してきたが、最後に東濃型山茶碗工人のその後と大窯の成立についてまとめていきたい。

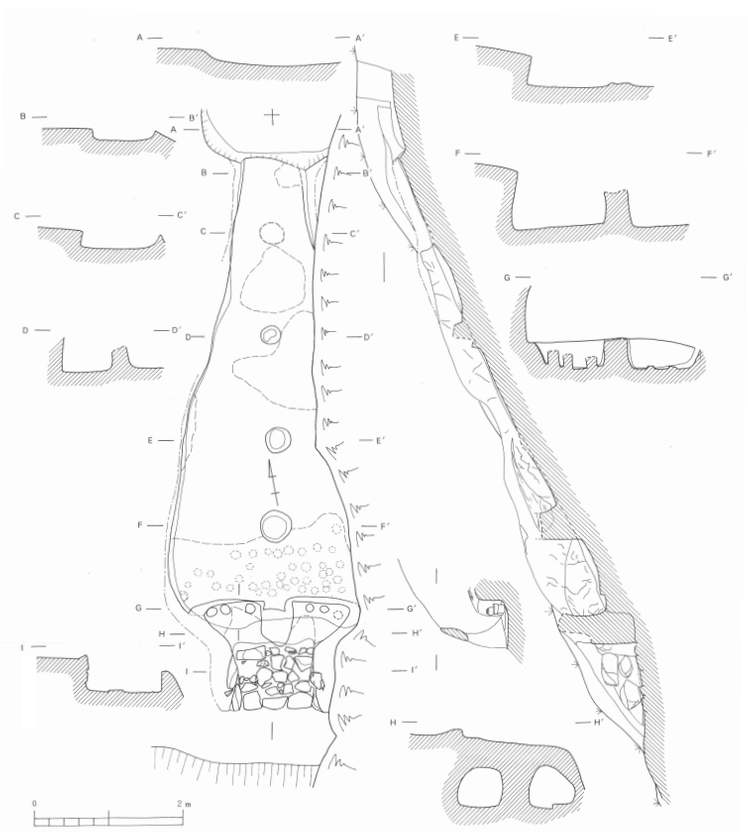
13 世紀中葉以降は専ら山茶碗類の生産に勤しんでいた東濃窯において、15 世紀中葉に瀬戸窯から古瀬戸工人が移動し古瀬戸系施釉陶器窯を築くこと、当該期の東濃型山茶碗工人との間に直接的な技術交流はみられないが東町１・２号窯跡で搬入品とみられる古瀬戸製品が出土していること、古瀬戸製品のうち在地向けの内耳鍋・釜については山茶碗工人が流通を担った可能性があることから、両者の間に何かしらの交流があったと想定できることはこれまでに指摘されている。15 世紀中葉以降の東濃型山茶碗工人と古瀬戸工人と 15 世紀末に誕生する大窯の関連性は、窯体構造・焼成器種・窯の立地などの面から探ることができよう。

15 世紀末に成立する瀬戸美濃大窯は、①焼成室の床面が地上とほぼ同じ高さになり、側壁・天井・出入れ口が地上に築かれる、②燃焼室の床面及び側壁が石組みになる、③燃焼室上方から焼成室下方にかけて床面幅が左右に大きく拡張する、④分炎柱の両脇に小分炎柱が一定間隔で築かれ、分炎柱両側の天井がメガネ状に垂れ下がる障壁をもつ、⑤分炎柱・小分炎柱と焼成室の境に昇炎壁が築かれる。⑥焼成室の中軸ライン上に天井支柱が築かれる、という六つの特徴をもっている（第 51 図、伊藤 1989・藤澤 2007）。

このうち、⑤の昇炎壁は東濃型山茶碗窯のＦ類やＧ類に共通する特徴であるほか、東町１号窯の焼成室最前部左側付近で被熱した礫が数個検出されており、出し入れ口の構築に使用された可能性が指摘されていることから、山茶碗窯の最末期には窯が地上化しつつあり、製品の出し入れも窯体側面から行われていた可能性が指摘できる。一方、③と⑥については古瀬戸後Ⅳ期古段階の下石西山窯や藤岡窯の五釜窯跡、後Ⅳ期新段階の瀬戸窯昔田３号窯などで認められる。このように、15 世紀後半には東濃型山茶碗窯、古瀬戸焼成窯それぞれに大窯の要素をもった改良が加えられるようになる。

また、大窯は一つの窯炉と複数の工房址で形成されており、複数の工人集団によって共同経営が行われているようだが、このような遺構配置は古瀬戸後Ⅳ期古段階の下石西山窯跡でも確認されている（近藤ほか 2004）。

さらに、後Ⅳ期新段階で瀬戸窯へ帰還した際の窯は集落周辺に築かれ、第 11 ｂ型式期の東濃型山茶碗窯のなかに



第 51 図　小金山窯窯体構造実測図（藤澤 1986 より転載）

も集落周辺に立地する窯が認められ、この特徴は大窯にも共通している。

大窯の主な製品は、茶道具である天目茶碗・供膳具である全面施釉の皿類・調理具である擂鉢の３器種で、古瀬戸製品のほとんどが姿を消す。また、窯体の地上化に成功したことで古瀬戸生産では天目茶碗など限られた器種に使用されてきた匣鉢が多用されるようになること、主要器種が全面施釉であること、焼成に匣鉢が利用されること、窯の立地条件などから大窯の施釉陶器生産者の前身が古瀬戸工人であることは明白である。

ただし、大窯の基本構造は 15 世紀中葉以降の古瀬戸焼成窯と東濃型山茶碗窯それぞれの特徴を併せもっていること、後Ⅳ期新段階の古瀬戸製品と大窯の生産器種の中に第 11 ｂ型式期及びこれに続く形態の無釉の灯明皿が確実に認められること、古瀬戸系施釉陶器窯の構築段階で複数の工人集団による共同経営が行われていたことなどから、山茶碗工人の集団が古瀬戸後Ⅳ期新段階ないし大窯成立段階で施釉陶器生産のなかに吸収され、さらには大窯の成立に関わった可能性が高い。第 11 ｂ型式期に供膳具の需要が山茶碗以外に求められたことで灯明皿の生産へ切り替わるものの、おそらく供膳具ほどの需要が得られず、彼らが窯業生産を継続させるには施釉陶器生産のなかに取り込まれるほかなかったものと推測される。

第４節　中世東濃窯の経営形態

山茶碗工人の性格については、「半農半工」とする城ケ谷和広氏と、「非農業民」とする藤澤氏とこれを前提とした山内氏の論がある。これらの論を踏まえて東濃型山茶碗工人の性格について目を向けていく。

（１）山茶碗工人の性格についての諸説

城ケ谷和広氏は、東濃型山茶碗を生産した小田妻窯跡群の工人集団について、窯の立地がそこまで密でないことから、広い丘陵を一つのグループが燃料などに制約されながら点々と移動していたものとしている（城ケ谷 1991）。また、作業場遺構の規模から工人の人数はあまり多くなく、工人達は基本的に近くの平野部に住んで農耕を行い、農閑期になるとロクロを持参して窯業生産に従事した「半農半工」と想定し、小名田窯跡群や近辺にある分散的な山茶碗窯はいずれも同様の形態で営まれたものとした。また、生産遺跡の周辺から単独で、あるいは窖窯の一部を再利用して炭焼窯が築かれること、考古地磁気の測定結果が窯跡と同時期であることが多いこと、東濃窯では前庭部に付属する形で構築されている例がみられることから、陶器生産者が窯焚きの合間ないし前後に炭焼きを行なったものと推測している。

一方藤澤氏は、尾張型山茶碗の分布域が尾張国の山田郡・愛智郡・知多郡の枠を越え三河国まで及んでいること、山茶碗は在地向けの日常雑器で領主層が恒常的に職能集団として掌握する必要性が全く認められないこと、猿投窯の山茶碗窯は特殊品生産が行われなくなる 13 世紀前葉以降広域的に拡散する傾向がみられることなどから、尾張型山茶碗の生産に対する特定の管掌者の存在を否定している。藤澤氏によれば、中世前期の山茶碗生産者は領主層から「職人」としての身分を保証されたとは考えにくく、山茶碗が年貢等になったとも考えられないことから、「山茶碗生産者の実体は、荘園公領制的収取体制の枠外に置かれ、領主層から身分的な保証を受けることの少なかった「非農業民」という位置付けが、現時点では最も適切であると思われる。」という（藤澤 1995a）。また、工人達が基本的に近くの平野部に住んで農耕を行うとした城ケ谷氏に対し、生産遺跡の周辺に生活遺構の検出例は皆無であることから、陶器生産者は離れた地点に生活拠点をもっていたと推測している。

山内氏は山茶碗生産者を藤澤氏のいう「非農業民」と想定した場合、北小木地区の工人集団は特定の管掌者をもたなかったからこそ生産活動に対する強い規制や排除を受けることもあったとし、その結果急峻な山地に生産拠点を限定し続けざるを得ない状況に置かれたものと推測している（山内 2008）。山

内氏はこのような生産活動を排除ないし規制した「干渉者」として、夢窓疎石によって旧可児郡長瀬山に創建された永保寺の存在を挙げ、正和２年（1313 年）の創建以降、永徳３年（1382）と寛正２年（1461）の中世文書に土岐川以北の長瀬郷・野中村・高田郷・小名田（於奈田）村、土岐川以南の多治見郷などの土地が山野等と併せて次々寄進されたという記録に注目している。山内氏はこれらの記録と 14 世紀以降の土岐川以北地域での窯跡の減少及び以南地域での激増と永保寺の寺領拡大と経営形態を関連させ、東濃窯には特定の「管掌者」は存在しないが、永保寺が山茶碗工人の保護や生産向上に全く関心を寄せない「干渉者」であった可能性を指摘している。

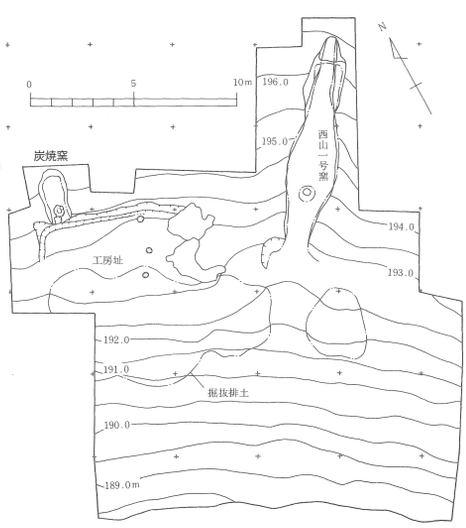
（２）東濃型山茶碗工人の性格

東濃型山茶碗工人は、第２段階で一部において小形壺瓶類が生産される以外は一貫して日常雑器である山茶碗類の生産に従事していること、山茶碗窯のほとんどが土岐砂礫層・土岐陶土層上あるいはその周辺に分布し当時の荘園配置とは無関係であることから、領主層から身分的な補償を受けないとする藤澤氏の論には説得力がある。

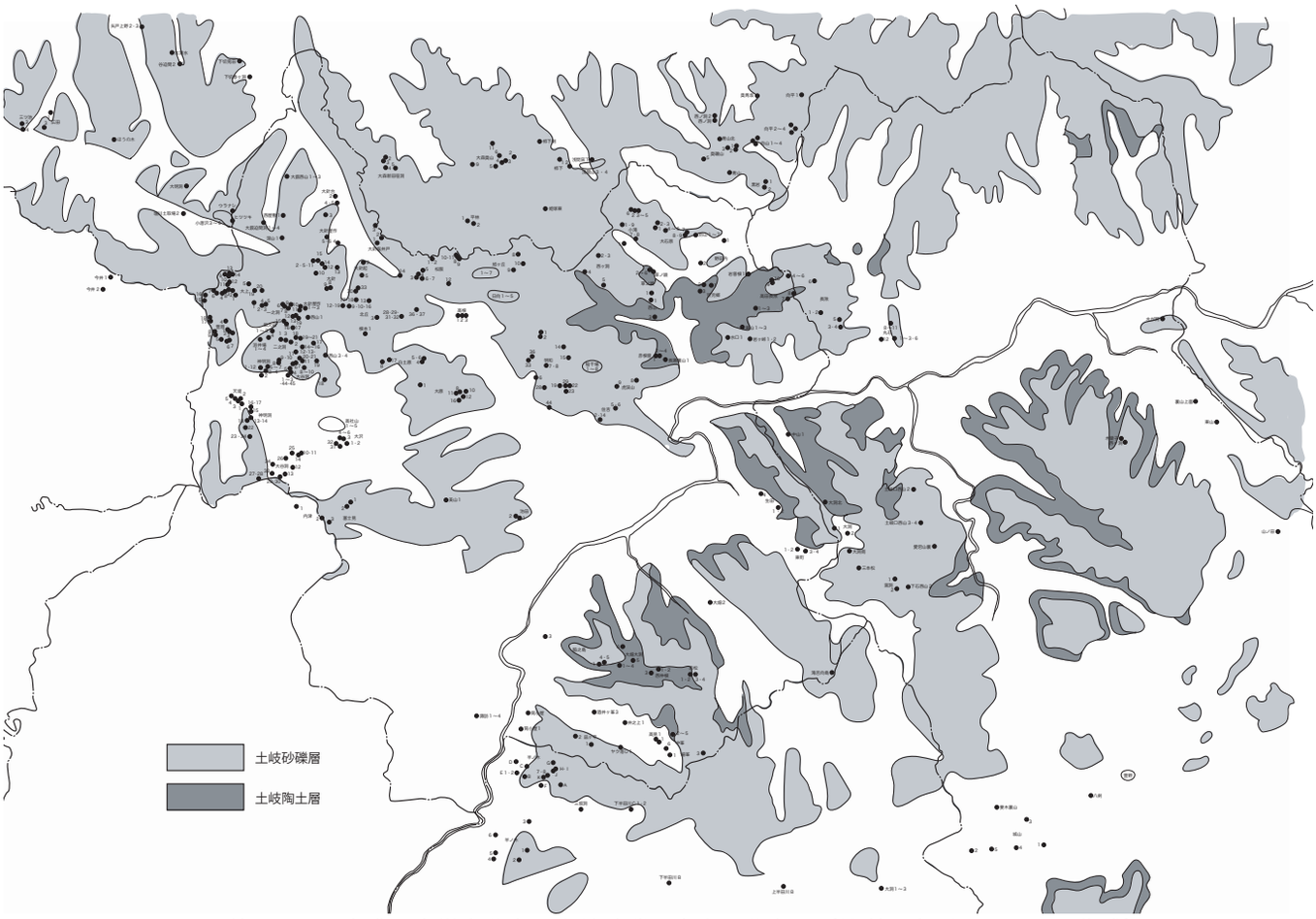
実際、東濃窯では第１段階から第６段階を通して山茶碗専焼窯の分布範囲は土岐砂礫層や土岐陶土層の分布域と一致しており、窯跡の分布も荘園の配置と全く関係なく推移している。この状況から、山茶碗生産に関しては各荘園所有者などの有力者層の存在に左右されたとは考えられない(第 54 図)。また、14 世紀以降は永保寺を「干渉者」とする山内氏の説のように土地の寄進によって制限を受けた可能性も考えられるが、土岐川以北ではその後窯数を減少させながらも長瀬郷を含む明和・住吉地区や小名田村を含む高田・小名田地区で山茶碗生産は継続している。これに加えて第４段階以降の東濃型山茶碗の流通状況を考えると、窯跡が土岐川以南地域へ集中するのは尾張型山茶碗の主要流通圏への流通強化が主な目的であったと捉える方が自然である。

また山茶碗類は日常雑器であるが故に、彼らを瀬戸窯の施釉陶器生産者のような専門の職人集団であるとは考えにくいうえ、有力層の需要に応え全国的に展開する古瀬戸製品に対して在地住民を顧客とする山茶碗は、その生産だけで生計を立てられたとは考えにくい。かわらけのように消耗品としての性質も併せ持っていれば別かもしれないが、窯炉を使用して高温で焼成された陶器はなまじ耐久度が高いため、消耗品として扱われた可能性も低いだろう。

となれば、第４ａ型式期から第 11 ａ型式期にかけて籾殻を使用していることからも、城ケ谷氏のいう「半農半工」という可能性は充分考えられる。また、同氏も指摘するように山茶碗の窯跡では遺跡の範囲内にしばしば炭焼窯が築かれることがあり、北小木大上４号窯跡や小名田西ヶ洞１号窯跡では前庭部ないし工房跡と炭焼窯が密着する形で構築される事例もみられる（第 52 図、若尾 1991)。こうした状況から、東濃窯では工人集団によって農業のほか、窯焚きの合間に暖をとるのみならず炭焼き業も兼業していた可能性も考慮しておきたい。



第 52 図　小名田西山１号窯跡遺構配置図
（若尾 1991 より転載）

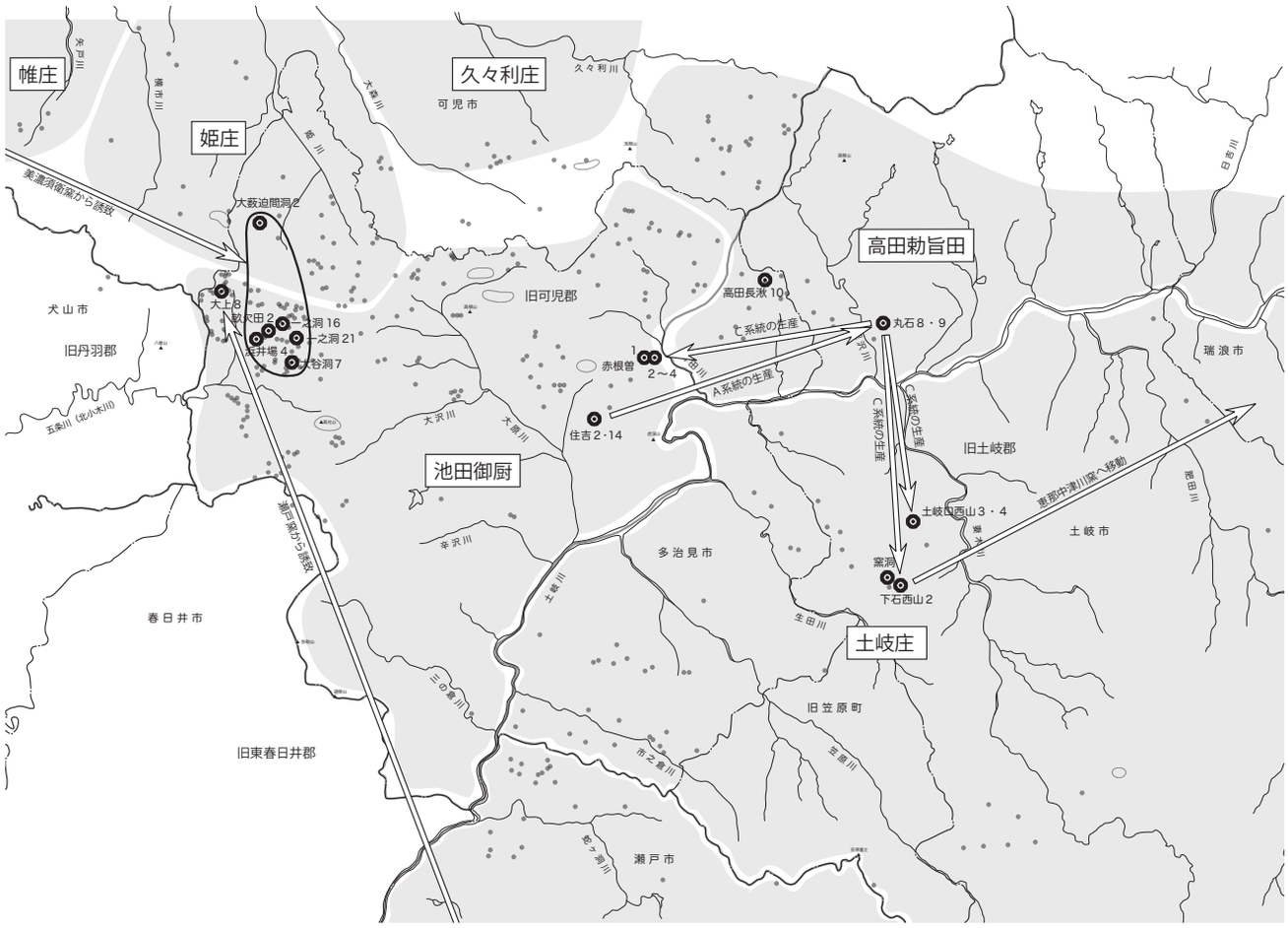


第 53 図　東濃の中世窯分布と土岐砂礫・陶土層分布図（地質調査所 1991 より作成）

（３）小形壺瓶類の生産背景

東濃型山茶碗工人が「非農業民」であったとして、第２段階に生産された日常雑器とは異なる性質をもつ小形壺瓶類についてはどうであろうか。多治見市北西地区でＢ・Ｄ系統、明和・住吉地区と丸石地区、土岐口・大洞地区でＡ・Ｃ系統の小形壺瓶類の生産が行われる。『多治見市史 通史編上』や『土岐市史一』によれば、浜井場３号窯や畝欠田２号窯・一之洞 16 号窯・北小木大上８号窯などが所在する多治見市北西地区や、住吉２・14 号窯・赤根曽窯が所在する明和・住吉地区は伊勢神宮領である池田御厨の範囲であったと考えられている（第 53 図、田口ほか 1980・田中ほか 1970）。また、多治見市北西地区北部の大薮町に所在する大薮迫間洞２号窯は、同市北丘町周辺から可児市南西地区の下切・谷迫間などにかけてを範囲とする姫庄に含まれるが、残念ながら史料がほとんどなく領主は不明であるという。土岐市泉町に所在する丸石地区の丸石８・９号窯は、多治見市高田町地内より土岐市の久尻・大富・河合・定林寺、瑞浪市の山野内・戸狩・月吉にかけてを範囲とする臨川寺領高田勅旨田のなかに位置している。東濃窯における土岐川以南地域は、美濃国内に限ってはすべて土岐氏領である土岐庄に含まれ、土岐口・大洞地区の土岐口西山３・４号窯や下石西山２号窯などはこれに属する。

最も生産量の多い四耳壺を中心に状況を整理していくと、第５ａ型式期に登場する四耳壺Ａ１類は池田御厨内の住吉２・14 号窯跡で登場する。第５ｂ型式期には高田勅旨田内の丸石８・９号窯に四耳壺生産が移り、Ａ２類が生産される。第５ｃ型式期には丸石８号窯で四耳壺Ｃ類の祖形とみられる胴部に灰釉が刷毛塗りされたＣ０類が登場し、土岐庄に含まれる土岐口西山３・４号窯では四耳壺Ａ２類に後出するとみれらるＡ３類が確認され、旧土岐郡側ではこの時期に四耳壺生産が土岐川以南に進出している。続く第５ｄ型式期には池田御厨内の赤根曽窯、土岐庄内の土岐口西山３・４号窯と下石西山２号窯で全面施釉の四耳壺Ｃ１類が確認され、旧土岐郡側では土岐川以南を中心に以北でも四耳壺生産が継続



第 54 図　中世の荘園配置と小形壺瓶類併焼窯位置図（田中ほか 1970・田口ほか 1980 より作成）

される。一方、可児郡側ではこの時期に初めて四耳壺Ｂ３類が登場し、大薮迫間洞２号窯、畝欠田２号窯・浜井場３号窯・一之洞 16 号窯で四耳壺Ｂ３類の生産が行われる。大薮迫間洞２号窯以外は池田御厨に位置しており、大薮迫間洞２号窯は姫庄に属するがこれらの窯に近い位置に立地している。第６型式には、土岐郡側の土岐川以北ではほとんど四耳壺生産が行われなくなり、土岐庄の下石西山２号窯において四耳壺Ｃ２類が確認されるのみである(註33)。可児郡側では池田御厨内の浜井場３号窯で四耳壺Ｂ４類、北小木大上８号窯で四耳壺Ｄ類の生産が行われる。

東濃窯で最初に登場する第５ａ型式期の四耳壺Ａ１類の窯は池田御厨内に位置し、続く第５ｂ型式期には高田勅旨田に移動して四耳壺Ａ２類を生産することから、これらは池田御厨ないし高田勅旨田の関係者の需要を受けて生産されたものとみられる。同じ遠隔地で流通するＢ類は、生産するほとんどの窯が池田御厨内に存在することから、第５ｄ型式期に池田御厨の関係者などによって美濃須衛窯から工人が誘致されたものと推測される。彼らは続いて第６型式期に瀬戸窯から工人を誘致し四耳壺Ｄ類の生産にあたらせ、この影響を受けて全面施釉の四耳壺Ｂ４類が登場する。

また、第５ｄ型式期の赤根曽窯では「大一」・「大二」の押印や竹管文が施される四耳壺が出土し、伊勢神宮へ納められた可能性が指摘されている(註34)。池田御厨・高田勅旨田の関係者の需要による四耳壺Ａ・Ｂ類はいずれも土岐川以北で生産されており、同地域で唯一四耳壺Ｃ１類の生産を行っていること、東濃窯の小形壺瓶類において唯一押印や竹管文が施されることなどから、赤根曽窯の小形壺瓶類は池田御厨、引いては伊勢神宮関係者に向けて生産されたも可能性が高い。これに対し、土岐庄内で生産された四耳壺Ｃ類は基本的に土岐氏など在地有力者の需要に応えたものと考えられ、東濃地域周辺にしか流通していないことからも裏付けられる。なお、出土数がわずかで消費遺跡でも確認されていないため詳しいことはわからないが、第５ｃ型式期に土岐川以南の土岐庄へ移って生産される四耳壺Ａ３類も

在地向けに生産された可能性が考えられる。

以上から、東濃型山茶碗の工人は領主層からの管掌・干渉をほとんど受けず、荘園配置に関係なく原料や消費地の需要などによって移動しながら窯業生産を行なったいたものと考えられる。ただし、第２段階においては有力層の需要に応えて池田御厨・高田勅旨田・土岐庄の範囲内でＡ・Ｃ系統の生産を行うほか、池田御厨の西部では山茶碗窯の中に美濃須衛窯・瀬戸窯の工人を誘致し生産に当たらせている。また、これ以外にも小名田小滝９号窯で「文永三年」銘をもつ蓋、永保寺庫裡跡で「正和二年」銘をもつ東濃窯産の鉢、浜井場１号窯炭焼窯で「十二月十八日」の刻文をもつ山茶碗、第８・９型式期に比定される浜井場２号窯跡で「大深」の刻文をもつ山茶碗が出土している。これらは明らかに漢字を使用する層の人物によって施されたもので、東濃型山茶碗工人は基本的に有力者層の影響は受けていないものの、全く無関係・無関心であったわけでもなく、必要に応じて製品の注文などが行われていた様子が垣間みられる。

第５節　東海の中世窯における東濃窯の性格

第１節で述べた通り、中世東濃窯の生産・流通は大きく６段階に分かれる。ここでは設定した各段階に沿って、美濃国内の窯業地の動向を概観しつつ瀬戸窯・常滑窯の状況と比較し、東濃窯の担った役割について考察する。なお、瀬戸窯・常滑窯の状況については藤澤氏・中野氏の論考を参考にする（藤澤 1995b・2007・2018、中野 2012・2013）。

（１）第１段階（12 世紀初頭から中葉）

第１段階である第３・４型式期は、東濃窯・瀬戸窯・常滑窯・猿投窯など主要な窯業地で中世窯が成立する時期である。東濃窯は成立期で窯数・生産量とも少なく主要流通圏も生産地周辺に限られる段階であるのに対し、瀬戸窯では 11 世紀末に古代灰釉陶器窯に連続する形で中世窯が成立し、東濃型山茶碗の生産を行う。第３型式期には 20 基以上の窯が築かれ第４型式期にかけて増加していることから、この段階の東濃型山茶碗生産の中心は瀬戸窯が担っていたようだ。また、穴田南１号窯では第４型式期に古瀬戸草創期の四耳壺生産が確認される。

また、尾張型山茶碗は第３型式期には猿投窯で主体的に生産されており、この時点で窯数はすでに 58 基にのぼる。さらに第４型式期には常滑（知多）窯でも生産が本格化することで、東濃型をはるかに凌駕する量の山茶碗が生産されていたものと考えられ、主要流通圏も愛知県西部・岐阜県南部・三重県北中部という広範囲に亘っている。

これらの状況から、山茶碗生産の成立期である第１段階において尾張型山茶碗の生産は猿投窯・常滑窯、東濃型山茶碗の生産は瀬戸窯を中心に行われ、東濃窯においては生産が本格化する前の萌芽期として位置付けられる。

（２）第２段階（12 世紀後葉から 13 世紀前葉）

第２段階である第５・６型式期は、瀬戸窯では第５型式期に古瀬戸前期様式が確立し、第６型式期に猿投窯の尾張型山茶碗工人が拡散し瀬戸窯へ移動し古瀬戸工人との共同経営の体制が整えられる。また、常滑窯でも大形壺甕類の生産をほぼ独占するようになるなど、東海地方の中世窯にとって第５型式期から第６型式期にかけては大きな転換期となっている。

瀬戸窯は、第５型式期前半は東濃型山茶碗と東濃窯の四耳壺Ａ類と同様に無釉で三筋文をもつ紐耳の四耳壺など草創期の古瀬戸製品を併焼している。第５型式期後半には古瀬戸前期様式が成立し、無文で全面施釉の四耳壺・水注・瓶子など前Ⅰ期の製品と東濃型山茶碗を併焼している。第６型式期（古瀬戸前Ⅱ期）には猿投窯の拡散に伴い尾張型山茶碗の工人が瀬戸窯に流入することで、尾張型の工人と古瀬

戸工人の共同経営が始まるという大きな画期を迎える。当該期の共同経営は、尾張型を焼成する合間に施釉陶器を生産するという尾張型山茶碗を主体とするものであったようだ。また窯の分布については、前Ⅰ期の古瀬戸焼成窯は幡山区に集中しているが、前Ⅱ期には瀬戸区・水野区・品野区などへ拡散していく。

常滑窯は、５型式期（第６型式期前半）には大形壺甕類をほぼ独占的に生産するようになる。また、山間部の需要を満たすため大形壺甕類の生産拠点を築こうと、常滑３型式期（第５型式期前半）には恵那中津川窯の永田５号窯へ、常滑４・５型式期（第５型式期後半から第６型式期前半）には可児市兼山窯の古城山窯へ工人を送り込んでいる。永田５号窯と古城山窯跡はいずれも短期間のうちに生産を終了するが、常滑６ａ型式期（第６型式期後半）には再び恵那中津川窯へ工人を派遣し、ここでは大形壺甕類と片口鉢Ⅰ類を主体に東濃型山茶碗を少量生産している。

一方、東濃窯は生産規模が一気に拡大し第５型式期には東濃型山茶碗生産の中心地となっていき、これに伴って主要流通圏も拡大、前段階に沿岸部に近い猿投窯・常滑窯から尾張型が搬入されていた東濃地域をはじめとする山間部に流通するようになるが、瀬戸窯や猿投窯・常滑窯のように第５段階と第６段階の間に目立った変化は認められない。東濃型山茶碗生産が管掌者に左右されないことは先に触れたとおりだが、尾張型山茶碗のように国を跨いだ大きな移動がみられないことからも尾張国内の窯業生産とは異なったあり方だったように考えられる。

（３）第３段階（13 世紀中葉）

第３段階である第７型式期は、猿投窯・常滑窯をはじめ渥美・湖西窯、東遠諸窯などで山茶碗生産が衰退し、常滑窯では山茶碗生産を放棄し大形壺甕類と片口鉢Ⅱ類の生産に専念する段階である。

瀬戸窯では、前段階に拡散していた古瀬戸焼成窯が前Ⅲ期（第７型式期後半）以降に再び馬ヶ城地区へ集中するようになるが[註35]、この動きと当該期に東濃窯で小形壺瓶類の生産がみられなくなるのは無関係とは考えにくく、古瀬戸の生産技術がより厳正に管理されるようになったことが隣接する東濃窯にまで影響を及ぼしたものと考えられる。また、尾張型山茶碗の生産拠点が内陸の瀬戸窯・藤岡窯へ移り精力的に生産が行われる一方で、猿投窯・常滑窯で山茶碗の生産が終了するのに影響を受け、尾張西部や伊勢北中部・西濃地域などに流通がみられなくなり主要流通圏は大幅に縮小する。

また、常滑窯６ｂ型式期（第７型式期）には山茶碗生産を放棄し、大形壺甕類と片口鉢Ⅱ類の生産に専念するようになる。

東濃窯は山茶碗類の生産に専念し窯数も増加、分布範囲も東濃窯の全域に拡大し、最盛期を迎える段階で、尾張型山茶碗の主要流通圏縮小に伴い尾張西部地域などへの流通を補う目的で土岐川以南に生産拠点を築いたものと考えられる。

（４）第４段階（13 世紀後葉から 14 世紀前葉）

第４段階である第８・９型式期は、瀬戸窯で古瀬戸中期様式が成立し、尾張型山茶碗との生産体制に変化がみられる。瀬戸窯では第８型式期に古瀬戸中期様式が成立すると、一つの窯炉で尾張型山茶碗を焼成する合間に古瀬戸製品を焼成していた前段階に対し、古瀬戸焼成窯のなかに尾張型山茶碗窯が築かれるようになり、古瀬戸工人が主体の経営形態へと変化する。これにより尾張型山茶碗の生産規模は縮小し、その影響は生産地周辺に縮小する主要流通圏にも反映されている。

東濃窯は窯数及び生産量が減少し、第９型式期には土岐川以北地域と以南地域の窯数が逆転する段階である。主要流通圏は前段階とほぼ同じ範囲を維持しながら、尾張型山茶碗生産が縮小するのを補うように瀬戸市域などで流通量を増加させている。第９型式期に土岐川以北と以南の窯跡数が逆転するのは、第８型式期に引き続き尾張型山茶碗の主要流通圏外となった地域における山茶碗の需要を東濃窯が満たすための動きであったと考えられる。

（5）第5段階（14世紀中葉から15世紀中葉）

第5段階である第10～11 a型式期は、瀬戸窯で古瀬戸後期様式が成立し、古瀬戸専焼窯が登場する段階である。瀬戸窯では第10型式期に古瀬戸後期様式が成立すると、再び尾張型山茶碗工人との経営形態に変化が生じ、古瀬戸製品を焼成する合間に尾張型山茶碗が生産されるという体制をとるようになる。尾張型山茶碗の生産は古瀬戸生産に取り込まれることでさらに規模を縮小し、瀬戸窯では第10型式期を最後に尾張型山茶碗の生産はみられなくなる。

東濃窯では第10 b型式期に碗Ⅱ類の生産量が増加し第11 a型式期には碗Ⅰ類が姿を消す段階である。主要流通圏は第10型式期は前段階と大きな変化はみられず、第11 a型式期には中濃地域北部が主要流通圏から外れ、ややその範囲を縮小するがこの段階ではある程度の範囲を保っている。また、尾張型山茶碗の生産規模縮小に伴い第11型式期にはこの主要流通圏が消失することで、瀬戸市周辺の需要も東濃窯が補う。

また、第11 a型式期に東濃窯で生産が行われる後Ⅳ期古段階の古瀬戸製品のうち、在地向けの器種である内耳鍋と釜については東濃型山茶碗工人がその流通を担うようになったと考えられる。

（6）第6段階（15世紀後葉）

前段階に東濃窯へ移動してきた古瀬戸工人が再び瀬戸窯の瀬戸村や上水野村・上品野村に帰還する段階である。古瀬戸工人達は、帰還後はそれまで窯を築いていた山中ではなく集落周辺に築くようになるという立地上での大きな画期がみられ、上記の村落で連続して瀬戸美濃大窯が築かれる。

東濃窯は、山茶碗の役割を供膳具から灯明皿へ変質させ、主要流通圏も生産地である東濃地域南西部に加え中濃地域南部・尾張地域北部という狭い範囲に縮小する段階である。この変化は東海地方における主な供膳具が山茶碗から別のものに切り替わったことを意味し、東濃型山茶碗工人は灯明皿の生産に切り替えることで窯業生産の継続を図ったものとみられる。しかし、当然ながら灯明皿の需要は供膳具であった山茶碗と比べて少なかったものと考えられ、生産地周辺と中濃・尾張北部地域にかけての狭い範囲へ流通するのみとなる。

以上、各段階における主要な窯業地と東濃窯の状況を整理してきた。第1段階の山茶碗生産は東濃型が瀬戸窯、尾張型が猿投窯・常滑窯を中心に行われており、東濃窯は生産規模はかなり小さかったようだ。第2段階には東濃窯の生産規模が一気に拡大し、東濃型山茶碗生産の中心地となる。また、この段階で尾張国内の窯業生産は転換期を迎え、瀬戸窯では古瀬戸前期様式が成立し、尾張型山茶碗工人が猿投窯から瀬戸窯へ流入し両者が共同経営を行うようになり、常滑窯では大形壺甕類の生産をほぼ独占するようになる。

第3段階に入ると東濃窯は山茶碗類の生産に専念し、尾張型山茶碗の生産拠点は完全に内陸部の瀬戸窯・藤岡窯に移るが、この影響で流通が滞る尾張西部地域などには東濃型が搬入されるようになるなど、この時期から尾張型山茶碗と東濃型山茶碗の生産状況が連動しているようである。第4段階以降も尾張型山茶碗の生産規模が縮小するにつれ、それを補う形で東濃型山茶碗の生産が行われている。

また、第9型式期後半から第10型式期（14世紀中葉から15世紀中葉）にかけて尾張国で施釉陶器生産が瀬戸窯、大形壺甕類や片口鉢Ⅱ類の生産が常滑窯に集約されていく。これに対し、山茶碗生産は瀬戸窯・藤岡窯で尾張型が少量みられるが、その中心は東濃窯が担うようになるため、ある意味山茶碗生産も東濃窯に集約されていくとみることもできる。ただし、山茶碗はあくまで日常雑器であり、管掌者をもち全国規模の需要に応える性質をもつ瀬戸窯や常滑窯のように意図的に生産がコントロールされているとは考えられず、瀬戸窯・常滑窯が山茶碗より施釉陶器や大形壺甕類の生産を優先することで不足した山茶碗を東濃窯が補っていたと考えるのが現実的である。日常雑器である山茶碗類を主要製品とした東濃窯は、在地の需要に応え続けた地域密着型の性質をもつ窯業地であると言えよう。

おわりに

ここまで中世東濃窯の動向を明らかにしてきた。最後に、筆者の力不足により手が及ばなかった点について今後の課題として記していきたい。

本論は『中世東濃窯の研究』と題し、中世東濃窯を中心に論を展開してきた。本来であれば東濃窯が属する美濃国内の美濃須衛窯・恵那中津川窯・兼山窯・大久手窯・上平窯・才坂窯の状況を網羅した上で、尾張国の窯業生産と対比しながら美濃国内における窯業生産の動向を明らかにしなければならなかったが、筆者の理解力不足・要領の悪さにより東濃窯の実態を明らかにしたところで時間切れとなってしまった。

本論では山茶碗流通圏内における流通状況を把握するに留まってしまったが、東濃型山茶碗は京都や鎌倉をはじめ山茶碗流通圏外にも運ばれていっている。これを仮に３次流通圏とした場合、出土した遺跡の性格や共伴遺物などを参考に山茶碗流通圏外においてどのような需要の元で流通したのかを明らかにする必要がある。

また、山茶碗類と同じ供膳具の役割をもつ製品として土師器の皿が挙げられる。本論では山茶碗の生産・流通の動向を探ることで手一杯になってしまったが、鍋釜類も含めた中世土師器と中世陶器の流通を比較することで、東海地方における供膳具の使用状況を整理し、消費者による供膳具の選択が中世土師器・中世陶器にどのような影響を与えたのかを明らかにする必要があるだろう。

さらに、近年では発掘調査報告書のなかで遺跡出土の陶磁器類について産地別・器種別・時期別の集計を行なわれるようになってきており、本論でもそれらを軸に流通に関する考察を行ってきた。しかし、出土量が多いほど集計に時間がかかること、産地・時期を判断するのにある程度の専門知識を必要とすることなどが災いし、ある程度の傾向が得られる程度にデータが揃っている地域もあれば、おおよその傾向しか把握できず産地別・器種別・時期別のはっきりとした出土量が全く不明な地域もあり、情報量にかなりムラがある状況を前提として考察を進めてきた。本来であれば集計表が作成されていない主要中世遺跡について資料調査に赴き、情報量の偏りを出来得る限り解消した上で流通論を語らなければならないところであるが、先に述べたように集計には非常に手間や時間がかかり、年単位で調査を行うことになることが予想される。したがって本論では既存データを基として流通に関する考察を行ってきたが、筆者を含む研究者や調査担当者が地道に集計データを積み重ねていくことで明確に各地域の状況が把握できるようになれば、より詳細な議論をすることが可能となるだろう。

本論文を執筆するにあたり多くの方のご助力をいただいた。特に指導教官である愛知学院大学の藤澤良祐教授をはじめ、同大非常勤講師の中野晴久先生には根気強くご指導・ご鞭撻いただき、非常に多くの有意義なご助言を賜わりましたことについて、末筆となりましたが皆様に感謝の意を表します。

－付記－

去る８月３日、コロナ禍のなか行われた口頭試問では、主査の藤澤良祐先生をはじめ、副査の福島金治教授、長井兼治准教授、梶原義実准教授（名古屋大学文学部）から様々な質疑と的確な助言を頂戴しました。この度2020年９月17日付けで博士（文学）の学位取得が叶いましたが、口頭試問では自分の至らない部分が浮き彫りになったという自覚もあり、今後も慢心することなく誠実に研究を続けていきたいと思います。

註

註１：白瓷とは、『日本後紀』や『小右記』などの古文献にみられる名称で、後者では尾張から白瓷を貢献させるといった内容がみられることから猿投窯の灰釉陶器を指す言葉であるとされ、灰釉陶器の系譜である山茶碗は白瓷系陶器と呼称された。しかし、無釉の陶器に対しても使用されることがあり、まれに白磁を指す事例もみられることから、現在では元からあった「灰釉陶器」、「山茶碗」の名称で統一されつつある。

註２：胎土や施釉の有無などから山茶碗の分類を行った先駆者として赤塚幹也氏が知られる（赤塚 1935・1957 a・1957b・1969）。赤塚氏は灰釉陶器と山茶碗類を同一の系統と捉え、その形状や施釉の有無、胎土などから上手（前期）・中手（中期）・下手（後期）の三段階に分け、それぞれをさらに上級・中級・下級の三段階に細分し、上手から時代が下るほど形状も品質も精から粗へ変わるとした。なお、中手中級から下手下級の段階が山茶碗類にあたる。

註３：赤塚氏によると、中手中級には均質胎土の「均質手山茶碗」が蔓延するとし、従来の系統から変遷する粗胎土の「荒肌手山茶碗」と区別している（赤塚 1969）。

註４：藤澤氏は、瀬戸市の広久手Ｃ－１・Ｃ－３号窯の出土遺物の中に、灰釉陶器の椀とは系統が異なる山茶碗の祖形となる灰釉山茶碗の存在を指摘し、これらを山茶碗の第１・２型式、無釉となる段階を第３型式以降とした（藤澤 1982）。田口編年などとの対比も行なっており、第３型式から第４型式前半が西坂期、第４型式後半が浅間窯下期、第５型式前半が丸石期、第５型式後半から第６型式前半が窯洞期、第６型式後半から第８型式が白土原期、第９型式から第 10 型式が大洞東期に併行するものとしている。また、山茶碗を粗肌手・均質手に大別する赤塚氏の分類（赤塚 1969）を参考に、常滑窯・渥美窯など東海地方南部で生産される南部系山茶碗（粗肌手）と、瀬戸窯・東濃窯など東海地方北部で生産される北部系（均質手）山茶碗に大別している。

註５：資料数が少なく実態が明らかではないとしながら、全面施釉で刻文は施されず、口縁部が短く玉縁状になる赤根曽窯出土の四耳壺を基準としている（藤澤 1993）。

註６：通常の小皿より一回り大きいものは第７型式期に比定される多治見市の高田長湫 10 号窯などでも確認されているが、一部の窯での限定的な生産であるため今回は型式設定を行わなかった。

註７：唯一、赤根曽窯の四耳壺においては「大一」「大二」などの押印や竹管文が施される。

註８：Ｃ４類は外面全面ではなく肩部にのみ灰釉がハケ塗りされる。

註９：多治見市と土岐市の境に所在する高田長湫 10 号窯跡は、近年発掘調査が行われ第７型式期に操業していたことが明らかとなった。報告書が未刊行であるため詳述は避けるが、同窯の灰原からはＣ系統の水注が出土しており、現時点で最も新しい型式のものである。

註 10：「プレ大窯」は、大洞東期以降に現れる窖窯から美濃大窯へと変化する過渡期の窯を指すもので、楢崎彰一氏によって定義されたものである（若尾 1983）。

註 11：ただし、各窯で出土した山茶碗類の法量を比較すると、５号窯、４号窯、３号窯、６号窯の順、粗製化の点でみれば３号窯、５号窯、４号窯、６号窯の順となり６号窯が最終操業であること以外は窯体と製品の変化に矛盾がみられるとしている（若尾 1987）。

註 12：明和期以降の窯体構造については前出の論考と同様の内容であるため割愛する。

註 13：田口氏はダンパーについて木芯に粘土を貼り付けた棒状のものを横並びに数本立てたもので、焼成中に上げ下げするものではなく点火時より順次落としたか、焼成前にセットしたものと推測している（田口 1986）。

註 14：この点についてはすでに田口氏によって既に指摘されている（田口 1981）。また、岩下英治氏は床面下施設について、この構造をもつ窯の分布が多治見市北西部に集中することから、当該周辺のみにおいて確認される同時多発的なものとして捉えている。また、ほぼ同時期に猿投窯や知多窯でも類例がみられるとして、その関係性についても言及している（岩下 1999）。

註 15：城ケ谷和広氏は、工房の出現期について、おおよそ 13 世紀後葉から 14 世紀以降にみられる場合が多

いとし、工房には必ずしもロクロピットを伴わない点について、ロクロの軸を花崗岩の野岩や切石に穴を開けて据える例や、重い木を使用するという宮石宗弘氏による民俗事例から、このような場合は遺構として残らない可能性を指摘している（城ケ谷 1992）。また、山内氏は工房・作業場を一括して「作業場遺構」とし、Ａ～Ｃ型に大別している。東濃窯では、等高線に沿って斜面を細長く削平し平坦面を築く地山削平型の作業場遺構であるＡ型遺構が主体的に認められ、、排土の土盛りのみで平坦面を築く盛り土整地型の作業場遺構であるＢ型遺構はＡ型遺構の定型化以前にみられるのみであるという。定型化したＡ型遺構とは、床面積が 25㎡程度の平坦面に排水溝と粘土集積面を伴っており、ロクロピットが検出される例もある。白土原期に出現し、明和期に完成される定型化したＡ型遺構は、その規模や形状の整一性、ほぼ例外なくみられる粘土堆積面の存在から工房として機能していたものとして認識されるという（山内 1996）。

註 16：北小木古窯跡群第２次調査で確認されている窯数を時期別にみると、浅間窯下期・丸石期がそれぞれ１基ずつ、窯洞期が４基、窯洞期から白土原期が７基、白土原期が 11 基、明和期が２基、大畑大洞期が６基報告されている。

註 17：松阪９号窯や奥山５号窯のように床面の最大幅が焼成室後方に位置するものもみられるが、これらは「紡錘形」の範疇に含めることとする。

註 18：1990 年の論文では考察を加えるための前提作業として、猿投窯・知多窯・瀬戸窯・猿投窯の山茶碗編年、渥美・湖西窯と幸田窯の山茶碗編年をそれぞれ対比し、併行関係を求めている（藤澤 1990a）。

註 19：愛知・岐阜県下の流通状況や流通経路については 1990 年の論文ですでにまとめられている（藤澤 1990a）。

註 20：なお、伊勢北部では東濃型山茶碗は第７・８型式期にごく少量認められる程度で、遠江・駿河地方は流通圏外とされている。

註 21：本来、数カ国単位程度の狭域にしか流通しない畿内系瓦器椀・吉備系土師器椀・北部九州系瓦器椀・山茶碗などの総称として橋本久和氏によって提言された呼称（橋本 2004）。

註 22：伊藤裕偉氏は生産地と直接的関与のある場を「集荷地（遺跡）」、集荷地からの搬送先となる市庭などを「２次的集積地（遺跡）」とし、これらを総じて「集散地遺跡」と表現しており、小野木氏もこれに従って流通経路についての考察を加えている。伊藤氏は「集積地」として三重県安濃津遺跡を例に挙げ、SD176 から出土した山茶碗の大半が未使用品であったことから当遺跡で土器の選別作業が行われたものとしている。

註 23：初期山茶碗が生産される第３・４型式期は、藤澤氏・岡本氏がすでに指摘しているが当該期の東濃型と尾張型の山茶碗は判別しにくいものが多く、近年では一括して東濃型とする見方がある（岡本 2005）。

註 24：美濃市に所在する一本杉・茶屋下・改田遺跡で出土した山茶碗類は中世前半（12・13 世紀）と後半（14・15 世紀）に分けて集計され、中世前半には東濃型・尾張型が確認されるが中世後半には東濃型のみとなるという（近藤 2004）。

註 25：芥見町屋遺跡では当該期に東濃型は認められないが、近隣の岩田西遺跡・岩田東Ａ遺跡・中屋敷遺跡では東濃型が確認されている（三輪 2012）。

註 26：信濃南部地域の流通状況については藤澤氏が作成した集計表を基にしている（藤澤 2018）。

註 27：しかし、本稿で採り上げた遺跡では、溶着資料や山茶碗の蓋など生産地との関係を窺わせる資料が少量出土するのみで、安濃津遺跡のような出土状況を示す遺跡は認められない。したがって、ここでは「集積地」という用語は使用せず、生産地との関連を窺わせる拠点的集落と表現するに留めたい。また、「２次的集積地」についても「集積地」の存在が曖昧な状況であるため、こちらも「拠点的集落」としておく。

註 28：報告書の実測図をみる限り第５型式期のものが多い。

註 29：なお、飛騨南端の大威徳寺跡は中津川と飛騨を結ぶ近世の南北街道付近に位置しており、同街道が整備される以前の中世段階で人の往来があった可能性も考えられる。

註 30：東濃型山茶碗は福井県勝山市の白山平泉寺でも確認されており、郡上街道を経由して北上していったものと考えられる。

註 31：なお、鎌倉市の今小路西遺跡では尾張型と古瀬戸製品とともに東濃型山茶碗も第６・７型式期を中心に

一定量搬入されており、鎌倉方面には古瀬戸製品・尾張型山茶碗とともに海路で運ばれた可能性が考えられる（宗臺 1996）。
註 32：古瀬戸の内耳鍋・釜について「在地向け少量生産」と性格付け、中期後半（14 世紀後半）以降、生産内容と流通対象を次第に変えつつあった瀬戸窯が、煮炊形態の新たな潮流と在地の動向を敏感に察知し採り入れたひとつの形であったとしている（金子 1996）。
註 33：ただし、土岐川以北の高田勅旨田内に位置し、近年発掘調査が行われた第 7 型式期に比定される長湫 10 号窯でC系統の水注が出土しているため、当該期も引き続き当該地で小形壺瓶類の生産が残っていた可能性も十分考えられるが、詳細は発掘調査報告書の刊行を待たねばならない。
註 34：神宮の標示あるいは供祭物に「大」や「太」の文字が使用され、「太」「太一」は内下宮の御用、「大一」「大二」は宮司家ないし造宮役人の印として用いられたという（多治見市 1980）。このことから、神宮の宮司か造宮役人が御厨内の赤根曽窯へ四耳壺などを発注した可能性が指摘されている。
註 35：宝治合戦後に得宗政権によって施釉陶器生産が掌握された可能性が指摘されている（藤澤 1995a）。

主要参考文献

赤塚幹也 1935「陶器製作史概説〔一〕」『陶器講座六』雄山閣
赤塚幹也 1957a「山茶碗」『世界陶磁全集２』河出書房
赤塚幹也 1957b「鎌倉・室町の瀬戸」『世界陶磁全集２』河出書房
赤塚幹也 1969「第二篇 灰釉無釉の陶器山茶碗」『瀬戸市史 陶磁史篇一』瀬戸市史編纂委員会
網野善彦ほか 1969『岐阜県史 通史編・中世』岐阜県史編纂委員会
田中静夫ほか 1970 年『土岐市史一』土岐市史編纂委員会
田口昭二 1973『美濃古窯の灰釉陶器と山茶椀の編年』岐阜県多治見市立精華小学校
田口昭二 1976「白瓷と白瓷系陶器」『美濃の古陶』光琳社出版
田口昭二・古川庄作 1976「多治見地区」『美濃の古陶』光琳社出版
楢崎彰一 1976「美濃古陶の流れ」『美濃の古陶』光琳社出版
中島勝国・佐藤鋤平・続木 正ほか 1978『可児市谷迫間２号古窯発掘調査報告書』可児市教育員会
田口昭二ほか 1980『多治見市 通史編上』多治見市史編纂委員会
角川 1980『日本地名大辞典 21 岐阜県』日本地名大辞典編纂委員会
楢崎彰一 1981「第６章　総括」『北丘』多治見市教育委員会
足立順司 1982「中世陶器生産と消費・序説－東海地方東部地域の場合－」『東笠子 (HK) 第 27 地点遺跡発掘調査報告書』湖西市教委員会
竹内理三ほか 1982『日本歴史地図 原始・古代編 (下)』柏書房
藤澤良祐 1982「瀬戸古窯址群Ⅰ」『研究紀要Ⅰ』瀬戸市歴史民俗資料館
齋藤孝正ほか 1983『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）』愛知県教育委員会
田口昭二 1983 a「美濃窯における白瓷と山茶椀」『館報Ⅱ』美濃陶磁歴史館
田口昭二 1983 b『美濃焼』考古学ライブラリー 17　ニュー・サイエンス社
田口昭二・若尾正成 1983『大畑大洞古窯跡群 (脇之島２号窯) 発掘調査報告書』多治見市教育委員会
平凡社 1983 年『三重県の地名』
田口昭二・若尾正成 1985『小名田西ヶ洞１号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会
若尾正成 1985『大原窯跡群発掘調査報告書』多治見市教育委員会
田口昭二・若尾正成ほか 1985『小名田西ヶ洞２号・３号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会
長瀬治義・大沢勇雄 1985『大森奥山古窯跡群』可児市教育委員会
長瀬治義 1985『下切兎田古窯』可児市教育委員会
藤澤良祐 1986『研究紀要 Ⅴ』瀬戸市歴史民俗資料館
赤塚次郎ほか 1987『土田遺跡』（財）愛知県文化財保護センター
田口昭二 1987「美濃窯の山茶椀研究と編年」『マージナル No. 7』愛知考古学談話会

若尾正成 1987a「白瓷から白瓷系陶器への転換期について」『美濃の古陶 会報 No. 1』美濃古窯研究会
若尾正成 1987b「第Ⅶ章 総括」『国道 248 号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』多治見市教育委員会
若尾正成 1987c「第Ⅴ章 考察とまとめ」『小名田古窯跡群発掘調査報告書』多治見市教育委員会
若尾正成ほか 1987『小名田古窯跡群発掘調査報告書』多治見市教育委員会
若尾正成 1988「第 4 章 結語」『小名田可児郷窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会
伊藤嘉章 1989「瀬戸・美濃大窯の窯体構造－その変遷と意義－」『美濃の古陶 No. 3』美濃古窯研究会
平凡社 1989 年『岐阜県の地名』
松井一明 1989「静岡県内灰釉陶器窯の流通についての予察」『静岡県の窯業遺跡』静岡県教委員会
若尾正成・山内伸浩 1989『大薮迫間洞古窯跡群発掘調査報告書』多治見市教育委員会
若尾正成・山内伸浩 1989『富士見 1 号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会
網野善彦・石井進ほか 1990『日本荘園史 5 東北・関東・東海地方の荘園』吉川弘文館
田口昭二 1990「第Ⅺ章 総括」『明和古窯跡群発掘調査報告書』多治見市教育委員会
田口昭二・若尾正成ほか 1990『明和古窯跡群発掘調査報告書』多治見市教育委員会
藤澤良祐 1990a「山茶碗と中世集落」『尾呂』瀬戸市埋蔵文化財センター
藤澤良祐 1990b「半ノ木古窯跡群の変遷」『尾呂』瀬戸市教育委員会
藤澤良祐 1990c「第 4 章 第 1 節 半ノ木 E 窯跡」『尾呂』瀬戸市教育委員会
藤澤良祐 1990d「東海地方における窯業生産の転換期について」『土器からみた中世社会の成立』シンポジウム実行委員会
若尾正成 1990「第 9 章 白瓷・白瓷系陶器編年における一考察」『明和古窯跡群発掘調査報告書』多治見市教育委員会
若尾正成 1990『大針塩井戸 2 号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会
田口昭二・山内伸浩 1991『北小木古窯跡群発掘調査報告書』岐阜県多治見市教育委員会
小澤一弘ほか 1992『朝日西遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
横山住雄 1992 年『美濃の土岐・斎藤氏』濃尾歴史研究所
岡本直久 1993「消費地から見た山茶碗－遺構内共伴遺物による各生産地編年対比－」『研究紀要 第 1 輯』(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター
金子健一 1993「第 6 章 結語」『下半田川 C 窯跡発掘調査報告書』(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター
金子健一・青木 修 1993『白坂雲興寺遺跡』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
西村勝広 1993『八龍遺跡 B 地区発掘調査報告書』各務原市埋蔵文化財調査センター
藤澤良祐 1993「13. 生産技術の交流と展開」『東海の中世窯』(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター
山内伸浩 1993a「第 8 章 総括」『小名田小滝古窯跡群発掘調査報告書』多治見市教育委員会
山内伸浩 1993b「第 9 章 美濃窯山茶碗編年に関する一考察」『小名田小滝古窯跡群発掘調査報告書』多治見市教育委員会
山内伸浩 1993c「第 6 章 まとめ」『明和 36 号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会
各務光洋・小野木 学・藁科哲男 1994『陰地遺跡』（財）岐阜県文化財保護センター
長瀬治義 1994『矢戸上野 2 ・ 3 号窯』可児市教育委員会
長瀬治義 1994『下切香ヶ洞古窯』可児市教育委員会
前川嘉宏 1994「三重県における山茶碗の出土状況」『研究紀要 第 3 号』三重県埋蔵文化財センター
藤澤良祐 1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要 第 3 号』三重県埋蔵文化財センター
小野木 学・藤田英博ほか 1995『下巾上遺跡』（財）岐阜県文化財保護センター
田口昭二・山内伸浩 1995『大畑西仲根 3 号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会
藤澤良祐 1995a「瀬戸古窯址群Ⅲ－古瀬戸前期様式の編年－」『研究紀要　第 3 輯』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
藤澤良祐 1995b「土に生きる「職人」－東海の山茶碗生産について－」『境界と鄙に生きる人々』新人物往来社
桃井 勝・山内伸浩 1995『北小木大谷洞 31・32 号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会

山内伸浩ほか　1995『大針塩井戸１号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会
尾野善裕 1996「東海地方の尾張地域を中心とした中世の土器･陶磁器蘇生について」『中近世土器の基礎研究XI』日本中世土器研究会
恩田裕之・高木洋ほか 1996『堀田・城之内遺跡』岐阜市遺跡調査会
金子健一 1996「古瀬戸の鍋・釜とその周辺－土器内耳鍋出現前夜の様相－」『鍋と釜そのデザイン』第４回 東海考古学フォーラム 尾張大会実行委員会
宗臺富貴子 1996「鎌倉・今小路西遺跡（御成小学校内）の瀬戸窯製品について－古瀬戸前期から後期までの出土様相－」『研究紀要 第４輯』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
田口昭二・山内伸浩 1996『多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書』多治見市教育委員会
岡本直久・青木 修・佐野 元 1997『品野西遺跡』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
後藤健一 1997「競合の構造－渥美・湖西中世窯の軌跡－」『倉田芳郎先生古希記念　生産の考古学』同成社
田口昭二・山内伸浩ほか 1997『大針台４・５号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会
山内伸浩ほか 1997『小名田窯下古窯跡群発掘調査報告書』多治見市教育委員会
武部真木ほか 1997『大毛池田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
藤澤良祐 1997「中世瀬戸窯の動態」『研究紀要 第５輯』(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター
松澤和人 1997『落合橋南遺跡Ⅰ』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
光谷拓実ほか 1997『曽根八千町遺跡』大垣市教育委員会
山内伸浩・田口昭二ほか 1997『小名田窯下古窯跡群発掘調査報告書』多治見市教育委員会
山内伸浩・桃井 勝 1997『平田遺跡』多治見市教育委員会
山内伸浩 1997「付論・12 世紀中葉の美濃窯山茶碗について」『大針台４・５号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会
岡本直久・佐野 元 1998『上品野蟹川遺跡』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
加藤泰治・山内伸浩 1998『平田遺跡Ⅱ』多治見市教育委員会
河合君近 1998『落合橋南遺跡Ⅱ』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
佐野 元　1998「菱野丘陵窯跡群（上)」『研究紀要　第６輯』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
飴屋 一 1999『毛受遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
伊藤太佳彦 1999『馬引横手遺跡』（財）愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
田口昭二・岩下英治ほか 1999『高田窯跡群発掘調査報告書』多治見市教育委員会
松澤和人 1999「菱野丘陵窯跡群（中)」『研究紀要　第７輯』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
村瀬泰啓 1999『諸洞遺跡・大坪遺跡』（財）岐阜県教育財団文化財保護センター
小野木 学・千藤克彦ほか 2000『顔戸南遺跡』（財）岐阜県文化財保護センター
佐野 元 2000「第５章　菱野丘陵窯跡群の変遷」『研究紀要　第８輯』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
武部真木ほか 2000『岩作城跡・能見城跡』（財）愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
平凡社 2000『静岡県の地名』
松澤和人・佐野 元 2000「菱野丘陵窯跡群（下)」『研究紀要　第８輯』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
伊藤裕偉 2001「中世における集散地遺跡の分析」『考古学ジャーナル 10』ニュー・サイエンス社
河野典夫・山内伸浩ほか 2001『野中遺跡発掘調査報告（第１・２次)』多治見市教育委員会
田口昭二・山内伸浩ほか 2001『北小木古窯跡群第２次発掘調査報告書』多治見市教育委員会
堀 正人・小塩康真 2001『針田遺跡・東坪之内遺跡・田中浦遺跡』（財）岐阜県文化財保護センター
前川 要 2001「中世集落における都市性について」『考古学ジャーナル 10』ニュー・サイエンス社
山内伸浩・田口昭二・小木曽郁夫 2001『多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』多治見市教育委員会
山内伸浩 2001「第９章 総括」『北小木古窯跡群第２次発掘調査報告書』多治見市教育委員会
岡本直久・佐野 元・河合君近 2002『内田町遺跡』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
島田崇正 2002『半布里遺跡』富加町教育委員会
平凡社 2002『愛知県の地名』
宮腰健司・鈴木正貴ほか 2002『清洲城下町遺跡Ⅷ』愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター

山内伸浩・加藤康治ほか　2002『多治見市詳細遺跡地図』多治見市教育委員会
岩下英治・山内伸浩 2003『多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』多治見市教育委員会
小野木　学 2003「岐阜県における山茶碗の分布と流通」『美濃の考古学 第６号』
河野典夫・岩井立弥ほか 2003『野中遺跡発掘調査報告（第３次）』多治見市教育委員会
河野典夫・岩井立弥 2003『平田遺跡発掘調査報告（第４次）』多治見市教育委員会
近藤真人ほか 2003『窯洞１号窯跡発掘調査報告書』土岐市教育委員会
武部真木ほか 2003『八王子遺跡』（財）愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
澤村雄一郎・藤岡比呂志 2003『丸石古窯跡群』岐阜県教育文化財団
中嶌 茂 2003『土岐市遺跡詳細分布調査報告書』土岐市教育委員会　（財）土岐市埋蔵文化財センター
林 順一・近藤真人 2003『窯洞１号窯跡発掘調査報告書』岐阜県土岐市教育委員会
河合 修 2004「山茶碗流通の諸相－遠江・駿河・伊豆における出土数量からみた試論－」『中世土器の基礎研究ⅩⅧ』日本中世土器研究会
近藤正枝 2004『一本杉・茶屋下・改田遺跡、栗坪遺跡』（財）岐阜県教育財団文化財保護センター
近藤真人・茶谷 満 2004『下石西山窯跡発掘調査報告書』岐阜県土岐市教育委員会・土岐市埋蔵文化財センター
藤澤良祐 2004「古瀬戸系施釉陶器窯の成立過程」『下石西山窯跡発掘調査報告書』岐阜県土岐市教育委員会・土岐市埋蔵文化財センター
山内伸浩 2004 a「美濃 (東濃) 窯の山茶碗」『東海地方山茶碗研究の現在と課題』静岡大学
山内伸浩 2004 b『野中遺跡発掘調査報告（第４次）』多治見市教育委員会
岡本直久・松田 繁 2005『矢形遺跡』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
岡本直久 2005 a「尾張地域の山茶碗」『中近世土器の基礎研究ⅩⅨ 中世須恵器と山茶碗－編年と暦年代の再検討－』
岡本直久 2005 b「山茶碗編年の現状について」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 資料集』同シンポジウム実行委員会
長谷川幸志・小野木 学ほか 2005『重竹遺跡・上西田遺跡・洞雲戸遺跡』（財）岐阜県教育財団文化財保護センター
藤澤良祐 2005「瀬戸系（施釉陶器生産技術の伝播）」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 発表要旨集』同シンポジウム実行委員会
三浦徹大・藤岡比呂志 2005『土岐口西山３・４号古窯跡』岐阜県教育文化財団
溝口彰啓 2005「山茶碗－遠江・駿河・伊豆における生産・流通・消費－」『中世の伊豆・駿河・遠江－出土遺物が語る社会』高志書院
山内伸浩 2005『喜多町西遺跡発掘調査報告書（第４次）』多治見市教育委員会
小野木 学・藤岡比呂志ほか 2006『上恵土城跡・浦畑遺跡』（財）岐阜県教育財団文化財保護センター
河野典夫・小木曽郁夫・各務嘉洋 2006『平田遺跡発掘調査報告（第５次）』多治見市教育委員会
山内伸浩・小木曽郁夫 2006『野中遺跡発掘調査報告書（第５次）』多治見市教育委員会
山内伸浩・小木曽郁夫・各務嘉洋 2006『喜多町東遺跡発掘調査報告書（第４次）』多治見市教育委員会
竹谷充夫 2007「第３章 考察 養老町における中世遺跡の様相」『養老町遺跡詳細分布調査報告書』養老町教育委員会
中島和哉 2007 a「第２章 分布調査の成果」『養老町遺跡詳細分布調査報告書』養老町教育委員会
中島和哉 2007 b「第３章 考察　遺跡の消長にみる養老町の歴史」『養老町遺跡詳細分布調査報告書』養老町教育委員会
藤澤良祐 2007「第１章 総論」『愛知県史 別編窯業２ 中世・近世瀬戸系』愛知県史編さん委員会
山内伸浩 2007「第４章 総括」『永保寺庫裡跡発掘調査報告書』多治見市教育委員会
柴垣勇夫 2008「６ 東海地方における山茶碗の流通」『中世山茶碗と瓦器碗・その流通と背景を探る』「中世土器・陶器における生産技術及び編年に関する全国的研究と流通様相の年代的解明」班
藤澤良祐 2008「古瀬戸前期様式の編年」『中世瀬戸窯の研究』高志書院
山内伸浩・各務嘉洋 2008『多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』多治見市教育委員会
山内伸浩 2008「東濃窯における灰釉陶器・山茶碗生産の一様相　－窯の分布とその変遷からの視点－」『日本

考古学協会 2008 年度愛知大会研究発表資料集』同実行委員会
河合君近 2009『紺屋田Ａ窯跡』（財）瀬戸市文化振興財団
大平愛子 2010『史跡江馬氏城館跡下館跡地区整備工事報告書』飛騨市教育委員会
近藤正枝・三島 誠 2010『広畑野口遺跡』（財）岐阜県教育財団文化財保護センター
中野晴久 2010「伊勢湾沿岸の中世遺跡における山茶碗の様相について」『伊勢灣考古 21』
山内伸浩 2010『野中遺跡発掘調査報告（第６次）』多治見市教育委員会
小野木 学 2011『中屋敷遺跡・中屋敷古墳』岐阜県文化財保護センター
近藤正枝・北村昌弘 2011『岩田東Ａ遺跡』岐阜県文化財保護センター
朝田公年ほか 2012『岩田東Ａ・岩田西遺跡』（公財）岐阜市教育文化振興財団
三輪晃三 2012『芥見町屋遺跡』岐阜県文化財保護センター
山内伸浩・各務嘉洋 2012『多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書Ｖ』多治見市教育委員会
山内伸浩 2012「第７章 総括」『北丘 30 号窯・大針起４号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会
近藤正枝・小林郁夫 2013『岩田西遺跡』岐阜県文化財保護センター
中嶌　茂　2013『丸石１～３号窯跡・穴弘法１・２号窯跡等出土遺物整理報告書』土岐市教育委員会
各務嘉洋 2014『細峯３号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会
長江真和 2014『柿田遺跡 (道の駅地点)・ほうの木古窯跡』可児市教育委員会
馬場伸一郎 2014『桜洞城跡発掘調査報告書』下呂市教育委員会
三島 誠 2014『下切遺跡』岐阜県文化財保護センター
山本智子 2014「美濃国における初期四耳壺生産についての一考察」『陶説　第 733 号』日本陶磁協会
笠井慎吾 2015『北方京水遺跡』岐阜県文化財保護センター
河合君近 2015「瀬戸窯における古瀬戸前期の東濃型山茶碗生産　－その現状と課題－」『研究紀要　第 19 輯』（公財）瀬戸市文化振興財団
近藤正枝 2015『興福地遺跡』岐阜県文化財保護センター
山内伸浩 2015『多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ』多治見市教育委員会
山本智子 2015「美濃国産山茶碗編年の現状と暦年代」『第 34 回中世土器研究会 中世土器研究中軸資料の再検討』中世土器研究会
岩井立弥・山内伸浩　2016『住吉古窯跡群発掘調査報告書』多治見市教育委員会
鷺坂有吾・岩瀬大輔・杉山敬亮ほか 2016『天白元屋敷遺跡 平成 26 年度・第７次発掘調査報告書』(株) 二友組
鈴木正貴 2017「特論 第１節 土器と陶磁器の流通」『愛知県史 資料編５ 考古５ 鎌倉～江戸』愛知県詩篇さん委員会
山本智子 2017「初期四耳壺生産の成立過程－東濃型山茶碗第５型式期に関して－」『文研会紀要　第 28 号』愛知学院大学大学院文研会
加中雅章・三輪晃三 2018『大垣城跡・城下町』岐阜県埋蔵文化財センター
澤井計宏 2018『中山１号窯跡発掘調査報告書』土岐市教育委員会・（公財）土岐市文化振興事業団
武部真木 2018「消費地の陶磁器－尾張地域の消費地遺跡から－」『中世窯の生産と流通』（財）愛知県埋蔵文化財センター
中嶌 茂・森まどか 2018『平成 23 ～ 27 年度妻木平遺跡試掘確認調査報告書』土岐市教育委員会・（公財）土岐史文化振興事業団
藤澤良祐 2018「東海地方における中世窯の消長－中世前半代の様相を中心に－」『東海窯業史研究論集１』東海窯業史研究会
藤澤良祐 2018「中世窯の生産と流通－恵那中津川窯を中心に－」『中世窯の生産と流通』(財) 愛知県埋蔵文化財センター
山本智子 2018「中世美濃須衛窯編年の再検討」『文研会紀要　第 29 号』愛知学院大学文研会
佐竹正憲 2019『政田仙道上遺跡』岐阜県文化財保護センター
山本智子 2019「東海地方における山茶碗の流通状況」『中近世陶磁器の考古学 第 10 巻』雄山閣